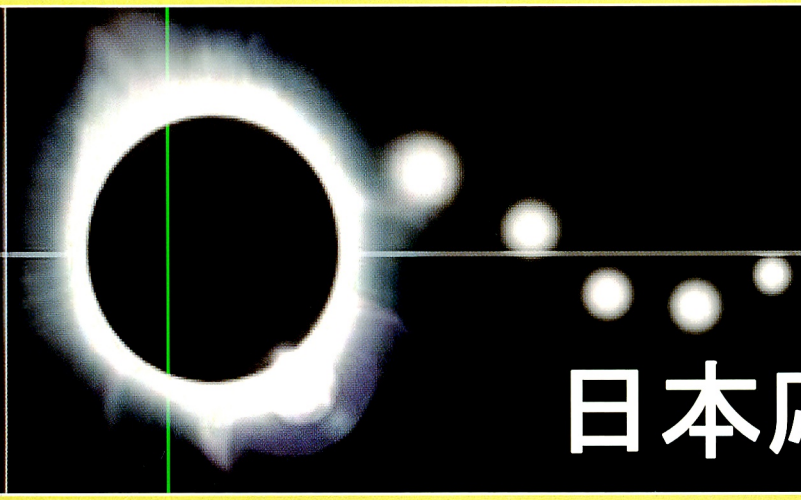


第76回大会発表論文集

2009年 9月12日—13日

日本応用心理学会

九州大学
KYUSHU UNIVERSITY

日本応用心理学会　第76回大会
発表論文集

大会テーマ

「医療における応用心理学の可能性」

2009年9月12日～13日

九州大学

目　　次

特別講演・研修会・シンポジウム・ワークショップ

特別講演 1 …… 1
9 月 12 日（土）13：10～14：20　コラボ I　2 階　視聴覚ホール
「医療におけるスピリチュアルケア」
講演者　池口　惠觀（高野山真言宗伝燈大阿闍梨・大僧正、
烏帽子山最福寺法主、医学博士）
司会者　川本　利恵子（九州大学）

特別講演 2 …… 3
9 月 13 日（日）12：50～14：00　コラボ I　2 階　視聴覚ホール
「医療における行動療法―アドヒアレンス（患者行動）改善のために」
講演者　足達　淑子（あだち健康行動学研究所所長）
司会者　樗木　晶子（九州大学）

大会企画シンポジウム …… 5
9 月 12 日（土）14：30～16：30　コラボ I　2 階　視聴覚ホール
「健康を支援する応用心理学」
企画・司会　　川本　利恵子（九州大学）
金山　正子（福岡大学）
話題提供者　　田中　真介（京都大学）
新小田　春美（九州大学）
井上　孝代（明治学院大学）

大会企画ワークショップ 1 …… 7
9 月 13 日（日）12：50～14：50　コラボ I　1 階　共同セミナー室
「実践教育（臨地実習）における学生への心理的サポート」
企　画　者　　森田　敏子（熊本大学医学部保健学科）
話題提供者　　松永　保子（信州大学医学部保健学科）
多久島　寛孝（熊本保健科学大学）

大会企画ワークショップ 2 …… 8
9 月 13 日（日）14：20～15：50　コラボ I　2 階　視聴覚ホール
「医療現場とリスクマネジメント」
企　画　者　　中尾　久子（九州大学医学部保健学科）
話題提供者　　松下　由美子（山梨県立大学看護学部）
安藤　詳子（名古屋大学医学部保健学科）

自主企画ワークショップ 1・・・

学会研修会 A・・・

口頭発表　第1日　9月12日（土）

口頭発表1　看護・一般（コラボI共同セミナー室）　9:30～10:50

座長　米村敬子
林田りか

12看-01	高齢者のし忘れ防止に関する検討―展望的記憶に着目して―	○蓮花　のぞみ 権藤　恭之	（大阪大学大学院人間科学研究科） （大阪大学大学院人間科学研究科）	17
12看-02	小児看護における看護師の共感疲労体験の分析	○米村　敬子	（熊本保健科学大学保健科学部看護学科）	18
12看-03	健康な子どもと健康障害をもつ子どものイメージ調査	○林田　りか 中　淑子	（長崎県立大学シーボルト校） （純真短期大学）	19
12看-04	心理学教育の課題と解決策―福祉・臨床系学生にみる心理学基礎知識の偏倚―	○長塚　康弘	（新潟心理学研究所）	20

口頭発表　第 1 日　9 月 12 日（土）

口頭発表 2　産業・職業・交通（コラボ II 大セミナー室）　9 : 30〜11 : 30

座長　篠原一光
蓮花一己

12産-05	指差喚呼における最適な動作・発生方法の検討	○篠原　一光 木村　貴彦 森本　克彦 久保田　敏裕	（大阪大学大学院人間科学研究科） （大阪大学大学院人間科学研究科） （西日本旅客鉄道(株)安全研究所） （西日本旅客鉄道(株)安全研究所）	21
12産-06	「パーソナルエラーズ・ワーク」についての考察―個人における失敗防止のシステム開発―	○川浪　淑子	（ニュー心理プロダクト）	22
12産-07	安心感を与える自動車運転の定量化―同乗者に与える安心感と他の道路ユーザーに与える安心感―	○中井　宏 臼井　伸之介	（大阪大学大学院人間科学研究科/日本学術振興会） （大阪大学大学院人間科学研究科）	23
12産-08	リスクテイキング行動尺度の作成 (1)―項目の選定と信頼性・妥当性の検証―	○森泉　慎吾 臼井　伸之介	（大阪大学大学院人間科学研究科） （大阪大学大学院人間科学研究科）	24
12産-09	work engagement と職業性ストレスおよび働く目的との関連	○小畑　周介 森下　高治	（帝塚山大学学生相談室） （帝塚山大学大学院人文科学研究科）	25
12産-10	コーチング法による高齢ドライバー教育の有効性研究	○蓮花　一己 向井　希広 太田　博雄	（帝塚山大学心理福祉学部） （中央大学心理学部） （東北工業大学ライフデザイン学部）	26

口頭発表　第 2 日　9 月 13 日（日）

口頭発表 3　社会・文化（コラボ I 共同セミナー室）　9 : 30～11 : 30

座長　柿本敏克
森脇保彦

13社-11	集団間関係研究の道具としての仮想世界ゲーム	○柿本　敏克 細野　文雄	（群馬大学社会情報学部） （群馬大学社会情報学部）	27
13社-12	大学生の違反抵抗感測定ツールの作成—Implicit Association Test を用いて—	○安達　悠子 臼井　伸之介	（大阪大学大学院人間科学研究科） （日本学術振興会）	28
13社-13	柔道の応用心理学的研究（柔道に対するイメージ調査の検討⑨）—都立 S 特別支援学校の生徒を対象として—	○森脇　保彦 中島　たけし 飯田　顕男 藤田　主一 橋本　昇 徳安　秀正	（国士舘大学） （国士舘大学） （国士舘大学） （日本体育大学） （東京有明医療大学） （東京有明医療大学）	29
13社-14	「柔道の応用心理学的研究」（柔道のイメージ調査の検討⑨）—2008 年国際障がい者武道円卓会議事例研究—	中島　たけし 森脇　保彦 飯田　顕男 藤田　主一 橋本　昇 ○徳安　秀正	（国士舘大学） （国士舘大学） （国士舘大学） （日本体育大学） （東京有明医療大学） （東京有明医療大学）	30
13社-15	大学生を対象とした障害者に対する許容度について	○豊村　和真	（北星学園大学社会福祉学部）	31
13社-16	性同一性障害者の自意識—性別適合手術前の Male-to-female および Female-to-male を対象とした質問紙調査—	○長坂　晟 伊藤　武彦	（明治学院大学大学院心理学研究科） （和光大学現代人間学部）	32

口頭発表　第 2 日　9 月 13 日（日）

口頭発表 4　認知・人格・臨床（コラボ II 大セミナー室）　9 : 30〜11 : 30

座長　赤川　力
中地展生

13認-17	言語連想検査と PAC 分析を用いたコンプレックスの検討―個人別態度構造の分析におけるコンプレックス語の研究―	○赤川　力	（長崎県スクールカウンセラー）	33
13認-18	視覚トラッキング課題に対する持続的報知音の影響	○武市　尚大 上田　真由子 臼井　伸之介	（大阪大学大学院人間科学研究科） （西日本旅客鉄道株式会社安全研究所） （大阪大学大学院人間科学研究科）	34
13認-19	不登校児の親グループにおけるファシリテーター研究―ファシリテーター関係認知尺度作成に向けて―	○中地　展生	（帝塚山大学心のケアセンター）	35
13認-20	大学生の親密性におけるコーピング選択とコーピング過程の研究	○中川　拓也 森下　高治	（帝塚山大学大学院人文科学研究科） （帝塚山大学心理福祉学部）	36
13認-21	在職者のストレスに関する研究―地方自治体職員を対象にして―	○高田　誠己 森下　高治 鹿野　麗子	（帝塚山大学大学院人文科学研究科） （帝塚山大学大学院人文科学研究科/帝塚山大学心理福祉学部） （帝塚山大学大学院人文科学研究科）	37
13認-22	デートレイプの判断基準における性差の検討―強要エピソードに対する反応パターンに注目して―	○北風　菜穂子 伊藤　武彦 井上　孝代	（明治学院大学大学院心理学研究科） （和光大学） （明治学院大学）	38

口頭発表　第2日　9月13日（日）

口頭発表5　検査・測定（コラボI学生セミナー室）　9:30〜11:10

座長　竹内由則
菅原博嗣

13検-23	文章完成法テスト数量化の試み (2)	○澤田　正康	((株)ニコンシステム)	39
		玉井　寛	(福島学院大学)	
		近岡　恵子	(キャリアダイナミックス研究所)	
		三浦　公一	(キャリアダイナミックス研究所)	
13検-24	筆者識別の正答率と書字運動情報の検討	○関　陽子	(科学警察研究所)	40
13検-25	注意配分検査による疲労評価について	○竹内　由則	(航空医学実験隊)	41
		荒毛　将史	(航空医学実験隊)	
13検-26	釜ヶ崎におけるホームレスの人々のストレスレベル—Trauma Screening Questionnaire の結果を中心に—	○金子　潤	(常磐大学大学院人間科学研究科/常磐大学国際被害者学研究所)	42
		津田　葵	(常磐大学大学院人間科学研究科/常磐大学国際被害者学研究所)	
		Gerd Ferdinand Kirchhoff	(常磐大学大学院人間科学研究科/常磐大学国際被害者学研究所)	
13検-27	筆跡の特徴マッピングに基づく筆者識別に関する研究 II	○菅原　博嗣	(愛知県警察本部刑事部科学捜査研究所)	43
		若原　克文	(愛知県警察本部刑事部科学捜査研究所)	
		三井　利幸	(数値解析研究所)	

ポスター発表　9月12日（土）

ポスター発表 1 （コラボII 1階コミュニティーホール） 14:00〜17:30

在席責任時間　奇数番号　15:10〜16:10　偶数番号　16:10〜17:10

看護

12P-01 対面方向が表情の解読に与える影響—メッセージ送信者自身による解読結果— ○宮島　直子（北海道大学大学院保健科学研究院） 45

12P-02 高齢者うつ予防プログラム実施による抑うつ感情と心理的QOLの変化—抑うつ傾向の改善が認められた78歳女性の事例— ○奥井　良子（神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科） 46

12P-03 「人間関係論」の授業で実施したロールレタリングによる看護学生の学び ○關戸　啓子（徳島大学医学部保健学科） 47

12P-04 医療従事者の自己表現とバーンアウトとの関連 ○川口　智子（帝塚山大学大学院人文科学研究科）
森下　高治（帝塚山大学大学院人文科学研究科/帝塚山大学心理福祉学部） 48

産業・職業・交通

12P-05 就職活動に関する不安の研究 ○濱　保久（北星学園大学文学部　心理・応用コミュニケーション学科） 49

12P-06 心理会計—耐久性商品と非耐久性商品の支払いの比較(1)— ○蜂屋　真（流通科学大学サービス産業学部） 50

12P-07 プラント従業員の繁忙感影響要因の分析—職種間の差異について— ○余村　朋樹（労働科学研究所）
藤掛　和広（労働科学研究所）
落合　信寿（労働科学研究所）
奥村　隆志（労働科学研究所）
施　桂栄（労働科学研究所/関東学院大学）
彦野　賢（原子力安全システム研究所）
伊藤　典幸（労働科学研究所/関東学院大学）
細田　聡（労働科学研究所/関東学院大学） 51

ポスター発表1

12P-08	運転者のシートベルト着用行動を説明する要因―商業施設における調査結果から―	○岡村　和子 藤田　悟郎 小菅　律	（科学警察研究所交通科学部） （科学警察研究所交通科学部） （科学警察研究所交通科学部）	52
12P-09	安全に対する受注者責任の範囲とは―受注者に対するヒアリングを中心とした現状調査―	○藤掛　和広 余村　朋樹 奥村　隆志 落合　信寿 施　桂栄 細田　聡 井上　枝一郎	（労働科学研究所） （労働科学研究所） （労働科学研究所） （労働科学研究所） （労働科学研究所/関東学院大学） （労働科学研究所/関東学院大学） （労働科学研究所/関東学院大学）	53
12P-10	オフィス用パーティションのプライバシー保護効果について―感覚時間による実験的検討―	○尾入　正哲	（中京大学心理学部応用心理学領域）	54

社会・文化

12P-11	青年期における重要な他者への自己開示と健康なパーソナリティーの関係について	○松原　詩緒	（立正大学心理学部臨床心理学科）	55
12P-12	韓国青少年を取り巻く成育環境の変化―韓国の新聞報道を手掛かりとして―	○小川　隆章	（環太平洋大学次世代教育学部）	56
12P-13	想像されたヒト免疫不全ウィルス感染後の自己イメージ尺度の作成	○飯田　敏晴 伊藤　武彦 井上　孝代	（明治学院大学大学院心理学研究科/国立国際医療センター戸山病院第一専門外来部） （和光大学現代人間学部） （明治学院大学心理学部）	57
12P-14	自己意識の日本と韓国の国際比較研究	○山田　竜平 金　成恩 荻野　七重 齊藤　勇	（立正大学大学院心理学研究科） （EKOS 韓国語教室） （白梅学園短期大学心理学科） （立正大学心理学部）	58
12P-15	自己意識、自己評価、セルフモニタリングの関連についての日本と韓国の国際比較研究	○齊藤　勇 山田　竜平 金　成恩 荻野　七重	（立正大学心理学部） （立正大学大学院心理学研究科） （EKOS 韓国語教室） （白梅学園短期大学心理学科）	59
12P-16	セルフモニタリングの日本と韓国の国際比較研究	○荻野　七重 齊藤　勇 山田　竜平 金　成恩	（白梅学園大学子ども学部子ども学科） （立正大学心理学部） （立正大学大学院心理学研究科） （EKOS 韓国語教室）	60

介護・福祉

12P-17 地域在住高齢者における筋力向上トレーニングの心理面改善効果と血中ビタミンの関係 ○長尾 史英（飯田女子短期大学幼児教育学科） 川俣 幸一（飯田女子短期大学家政学科） 61

検査・測定

12P-18 自己意識の年齢による変化 (2)—SCT（文章完成法テスト）の応用— ○桜井 裕子（相模女子大学） 横山 泉（文化女子大学） 玉井 寛（福島学院大学） 三浦 公一（東京国際・キャリアダイナミックス研究所） 62

矯正・非行・犯罪

12P-19 若年層の防犯方略レベルと性格特性 ○本多 明生（いわき明星大学人文学部） 山入端 津由（沖縄国際大学総合文化学部） 63

12P-20 眼球運動を指標とした注意の定位に関する研究 ○小野 洋平（駒澤大学人文科学研究科） 石岡 綾香（駒澤大学人文科学研究科） 谷口 泰富（駒澤大学文学部） 64

認知・感情・人格

12P-21 疲労の影響によるエラー後の補償の違い ○櫻井 美由紀（東北大学大学院情報科学研究科） 岩崎 祥一（東北大学大学院情報科学研究科） 65

12P-22 向上心尺度作成の試み ○田中 道弘（埼玉学園大学） 66

12P-23 首尾一貫感覚 (SOC) と自己主張性の関連について—P-F スタディ分析より— ○銅直 優子（流通科学大学サービス産業学部医療福祉サービス学科） 67

12P-24 「血液型性格学」は信頼できるか（第 26 報）I—能見俊賢追悼・藤田紘一郎の新構想— ○大村 政男（日本大学） 藤田 主一（日本体育大学） 浮谷 秀一（東京富士大学） 68

12P-25 「血液型性格学」は信頼できるか（第 26 報）II—藤田紘一郎のチェックリストをチェックする— ○浮谷 秀一（東京富士大学） 大村 政男（日本大学） 藤田 主一（日本体育大学） 69

ポスター発表 1

12P-26	「血液型性格学」は信頼できるか（第 26 報）III—血液型（体質型）と食物の摂取との関連—	○藤田　主一 大村　政男 浮谷　秀一	（日本体育大学） （日本大学） （東京富士大学）	70

発達・教育

12P-27	大学生のリジリエンスの差異による心理特性—統合的-HTP･SCT・リジリエンス尺度—	○橋本　泰子	（桜美林大学）	71
12P-28	中学生の「いじめ」被害の性差に関する報告	○三島　浩路	（中部大学現代教育学部）	72
12P-29	年齢による化粧行動と自意識	○八田　武俊 八田　純子	（岐阜医療科学大学保健科学部） （愛知学院大学心身科学部）	73
12P-30	遊びを用いたグループ活動による凝集性の変化—保育士の視点から—	○福本　敏宏 大久保　純一郎	（帝塚山大学大学院人文科学研究科） （帝塚山大学大学院人文科学研究科/帝塚山大学）	74
12P-31	障がい者を兄弟にもつ健常児のこころ—様々な体験や感情の共有で形成される兄弟関係—	○中村　歩	（帝塚山大学大学院人文科学研究科）	75
12P-32	企業選択に見られる大学生の職業観 (5)—特に、1998 年調査結果と 2008 年調査結果との比較—	○和田　美知子	（城西短期大学ビジネス総合学科）	76
12P-33	日米の児童の異文化理解を深めるための方法—日本文化を取り入れた非言語的コミュニケーションを促す活動を通して—	○中田　栄	（上智大学）	77

臨床・相談

12P-34	自律訓練法の習得に伴うイメージの変化—PAC 分析を用いて—	○政本　香 長谷　綾子 林　幹也	（松山東雲女子大学人文科学部） （松山東雲女子大学人文科学部） （明星大学人文学部）	78

12P-35 動的家族画 (KFD) にみられるきょうだい数と学校適応感との関連について ○橋本 秀美 (追手門学院大学心理学部) 三島 浩路 (中部大学現代教育学部) 79

12P-36 認知症理解についての一考察 ○林 潔 (白梅学園短期大学) 80

12P-37 「ありがとう療法」の試み―夫婦関係修復における事例研究― ○木村 たき子 (日本子ども家庭総合研究所) 81

12P-38 対人恐怖心性と TEG の関連 ○嶋田 佳織 (関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科) 82

一般・原理・その他

12P-39 マズローの自己実現概念の再考 ○三島 重顕 (九州国際大学経済学部) 83

12P-40 重さ知覚機構解明のための実験環境構築の試み ○川合 悟 (帝塚山大学心理福祉学部心理学科) 84

12P-41 McGregor リーダーシップ論の初期的形成に関する覚書 ○村田 晋也 (九州大学大学院経済学府博士後期課程) 85

ポスター発表　9月13日（日）

ポスター発表 2 （コラボII 1階コミュニティーホール） 14：00～17：30

在席責任時間　奇数番号　14：50～15：50　偶数番号　15：50～16：50

看護

13P-01　心理学研究における偏見とスティグマとステレオタイプの用語の棲み分け―米国心理学会の PsychNet による分析―　○伊藤　武彦（和光大学）　飯田　敏晴（明治学院大学大学院）　86

13P-02　看護業務における残業時間と CFSI 応答パターン　○越河　六郎（松蔭大学）　藤井　亀（芝浦工業大学）　87

13P-03　看護学生がイメージする患者の日常生活動作と危険　○西土　泉（埼玉医科大学短期大学看護学科）　所　ミヨ子（埼玉医科大学短期大学看護学科）　宮﨑　素子（埼玉医科大学短期大学看護学科）　今野　葉月（埼玉医科大学短期大学看護学科）　蒲生　澄美子（埼玉医科大学短期大学看護学科）　関口　恵子（埼玉医科大学短期大学看護学科）　佐野　薫（埼玉医科大学短期大学看護学科）　88

13P-04　実習直前に感じる不安感への介入―学生の不安と教員の介入―　○吉田　一子（日本赤十字九州国際看護大学看護学部）　深堀　美紀子（広島国際大学看護学部）　山本　勝則（札幌市立大学看護学部）　89

産業・職業・交通

13P-05　暗示的表現による商品推論の傾向(2)―ゼロ表示による推論と購買への影響―　○花尾　由香里（東京富士大学経営学部）　岡村　一成（東京富士大学経営学部）　90

13P-06　信号交差点における横断歩道外横断と他の歩行者行動特性の関連性　○小澤　弘希（帝塚山大学人文科学研究科臨床社会心理学専攻）　蓮花　一己（帝塚山大学人文科学研究科臨床社会心理学専攻/帝塚山大学心理福祉学部）　91

13P-07	建設作業の災害類型に影響を及ぼす発生要因の抽出―判別分析による検討―	○落合　信寿 細田　聡 余村　朋樹 奥村　隆志 藤掛　和広 施　桂栄 井上　枝一郎	（財団法人労働科学研究所） （財団法人労働科学研究所/関東学院大学文学部） （財団法人労働科学研究所） （財団法人労働科学研究所） （財団法人労働科学研究所） （財団法人労働科学研究所/関東学院大学人間環境学部） （財団法人労働科学研究所/関東学院大学人間環境学部）	92
13P-08	勤務条件による予期的時間評価の変動	○星　薫 大柳　昭裕 越河　六郎	（放送大学教養学部） （常盤台病院） （松蔭大学）	93
13P-09	変革型リーダーシップの有効性に関する職種間の差異について	○神谷　恵利子	（立正大学大学院心理学研究科）	94
13P-10	工事現場における近道・省略行動の発生要因に関する質的検討	○松本　友一郎 臼井　伸之介	（大阪大学大学院人間科学研究科） （大阪大学大学院人間科学研究科）	95

社会・文化

13P-11	自己評価の日本と韓国の国際比較研究	○金　成恩 荻野　七重 齊藤　勇 山田　竜平	（EKOS 韓国語教室） （白梅学園短期大学心理学科） （立正大学心理学部） （立正大学大学院心理学研究科）	96
13P-12	なぜ電車内での化粧を不快に思うのか―自己呈示の意図性の推測からの検討―	○谷口　淳一	（帝塚山大学心理福祉学部）	97
13P-13	マレーシア人留学生による日本人の人間関係スキーマ	○内藤　哲雄	（信州大学人文学部）	98
13P-14	大学生における自己超越傾向と自己受容が主観的幸福感に及ぼす影響	○赤嶺　直子 井上　孝代	（明治学院大学大学院心理学研究科） （明治学院大学）	99
13P-15	依存性研究の現在―日本における愛情的依存・利用主義的依存・服従的依存の関係と構造について―	○鈴木　ゆみ 井上　孝代	（明治学院大学大学院） （明治学院大学）	100

ポスター発表 2

13P-16 大学生の心の専門家への援助要請意図規定要因の検討―スティグマに焦点を当てて― ○山本 茉樹（国立国際医療センター戸山病院第一専門外来部） 101
飯田 敏晴（国立国際医療センター戸山病院第一専門外来部/明治学院大学心理学部）
井上 孝代（明治学院大学心理学部）

13P-17 「慰安婦」問題とレイプ神話との関連―男女の比較に焦点を当てて― ○中野 真希（明治学院大学大学院心理学研究科） 102
伊藤 武彦（和光大学）
井上 孝代（明治学院大学）

介護・福祉

13P-18 白杖を用いた対象の硬さ知覚―指先と白杖による硬さ知覚その 2・押す方法― ○布川 清彦（東京国際大学人間社会学部） 103

検査・測定

13P-19 MSC（創造的構え）テスト改訂の試み (13)―因子分析による質問項目の識別度 3― ○寺澤 美彦（日本福祉教育専） 104
久米 稔（適合性評価研究所）
成田 猛（秋田看護福祉大学）
高野 隆一（ノースアジア大学）
伊賀 憲子（文化女子大学）
内藤 美智子（松本短期大学）

矯正・非行・犯罪

13P-20 振り込め詐欺の社会心理学――時的マインド・コントロールの検討― ○西田 公昭（静岡県立大学看護学部） 105
秋山 学（神戸学院大学人文学部）

13P-21 公共交通機関における犯罪不安の検討―基礎的検討を中心として― ○松田 睦代（関西国際大学大学院人間行動学研究科） 106
桐生 正幸（関西国際大学人間科学部）

認知・感情・人格

13P-22 主観的幸福度と仕事の取り組み姿勢 ○事崎 由佳（北陸先端科学技術大学院大学） 107

13P-23 警告表示の認知的評価について ○法理 樹里（立正大学大学院心理学研究科） 108
山田 健太（(株) 電脳交通安全研究所）
山村 豊（立正大学心理学部）
山下 富美代（立正大学大学院心理学研究科）

13P-24	パーソナリティ特性語に対する選択反応時間―選択反応時間によるパーソナリティ因子抽出の可能性について―	○松田　浩平 佐藤　恵美	（文京学院大学） （東京富士大学）	109
13P-25	特性語に対する反応時間と向性、情緒安定性得点との関連性	○佐藤　恵美 松田　浩平	（東京富士大学） （文京学院大学）	110
13P-26	歩行時の時間・距離の予想と評価に関する基礎研究(3)―実際の直線経路を用いた時間と距離の評価に対する予想の効果について―	○白井　清太郎 折原　茂樹	（国士舘大学大学院人文科学研究科） （国士舘大学文学部）	111
13P-27	誤情報によるイメージの修正―訂正情報による修正の程度とパーソナリティの関係について―	○大貴　絵莉 内藤　哲雄	（関西大学大学院社会学研究科） （信州大学人文学部）	112

発達・教育

13P-28	「親性準備性」獲得への関連要因―個人の特性、生活背景および愛着スタイルとの関連について―	○先間　真奈美	（帝塚山大学大学院人文科学研究科臨床社会心理学専攻臨床心理専修）	113
13P-29	青年期におけるきょうだい関係と精神的健康について	○桜井　良之 神澤　創	（帝塚山大学大学院人文科学研究科） （帝塚山大学大学院人文科学研究科/帝塚山大学心理福祉学部）	114
13P-30	教職課程の履修動機に関する研究―体育専攻学生の場合―	○鈴木　悠介 藤田　主一	（日本体育大学体育学部） （日本体育大学体育学部）	115
13P-31	中学生の家庭ストレスと学校ストレスが学校適応感に及ぼす影響について	○遠藤　嵩仁 井上　孝代	（明治学院大学大学院心理学研究科） （明治学院大学心理学部）	116
13P-32	大学生における重要な他者とその情緒的サポート認知の関連性―DLT (Doll Location Test) によって確認された親密な他者の存在を踏まえて―	○山崎　創 井上　孝代	（明治学院大学大学院心理学研究科） （明治学院大学）	117

ポスター発表 2

13P-33	青年期の子どもから捉えた家族の凝集性―中学生、高校生、そして大学生を対象として―	○平田　裕美 横道　友理子 淵上　恭江 竹内　宣江 柴田　美貴 上岡　美紀 山田　智世 小川　由希子 田崎　雅子 杉山　里美	（女子栄養大学栄養学部） （女子栄養大学栄養学部実践栄養学科） （女子栄養大学栄養学部保健栄養学科栄養科学専攻） （女子栄養大学栄養学部実践栄養学科） （女子栄養大学栄養学部実践栄養学科） （女子栄養大学栄養学部保健栄養学科保健養護専攻） （女子栄養大学栄養学部保健栄養学科保健養護専攻） （女子栄養大学栄養学部保健栄養学科保健養護専攻） （女子栄養大学栄養学部保健栄養学科保健養護専攻） （女子栄養大学栄養学部保健栄養学科保健養護専攻）	118
13P-34	働く母親が考える「養育への負の効果」―高校生の子どもから捉えた養育行動に着目し―	○平田　裕美	（女子栄養大学栄養学部）	119

臨床・相談

13P-35	家族機能認知が大学生の精神的健康に与える影響	○安原　久美子	（帝塚山大学大学院人文科学研究科）	120
13P-36	大学生の抑うつ傾向と抑うつスキーマとの関連	○八田　ほなみ	（帝塚山大学大学院人文科学研究科）	121
13P-37	主観的ウェルビーイングの測度に関する研究 (3)	○角野　善司	（高崎健康福祉大学健康福祉学部社会福祉学科）	122
13P-38	介護実習生における実習前後の抑うつ度の変化―SDS と DAS を用いて―	○西澤　和佳 美濃　哲郎	（帝塚山大学大学院人文科学研究科） （関西福祉科学大学）	123

一般・原理・その他

13P-39 昭和期戦前の禅心理学研究の対象とアプローチ ○加藤 博己 (駒澤大学文学部) 124

13P-40 ペット飼育と孤独感の類型との関係―ペットへの好意・愛着の観点から― ○芦村 和美 (帝塚山大学大学院人文科学研究科) 125

13P-41 イルカ映像によるストレス減少効果―心理指標と生理指標を用いて― ○平田 小百合 (帝塚山大学大学院人文科学研究科臨床社会心理学専攻)
宮川 治樹 (帝塚山大学心理福祉学部) 126

特　別　講　演

【特別講演1】9月12日(土)13:10～14:20 コラボⅠ 2階 視聴覚ホール

【医療におけるスピリチュアルケア】

池口惠觀
高野山真言宗伝燈大阿闍梨・大僧正、烏帽子山最福寺法主、医学博士

私はここ20年間、各地の大学医学部で非常勤講師として、仏教からみた生命倫理、医療倫理を講義しています。その間、「脳死による臓器移植に関する日本人の意識調査」により、山口大学から医学博士号もいただいております。

仏教者が医学部で講義をすることに違和感をお持ちになる方もおられますが、もともと仏教と医療は切っても切れない関係にありました。仏教と医療が縁遠いものになったのは、近代に入り西洋の医療が入ってきたことと、仏教が檀家制度にあぐらをかき“葬式仏教”と化してからのことです。

仏教の根本思想の１つに「諸行無常」があります。『平家物語』の冒頭の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」でも有名な言葉ですが、これは人間をはじめすべての生命は、いのちに限りがあるという無常観を表しています。また、仏教から出た「四苦八苦」という言葉の「四苦」は、「生老病死」すなわち「生まれること・老いること・病気になること・死ぬこと」という、４つの人間の根源的な苦しみを表しています。

祇園精舎は、古代インドの資産家がお釈迦さまのために造った仏教の道場ですが、そこには今で言うホスピスのような施設が併設されていました。年老いて病気になり、死を迎えようとしている終末期の人たちは、祇園精舎のホスピスで、僧侶の法話を聴いたり、読経の声を聴きながら、苦しみから癒され、従容と死に赴いたのです。祇園精舎では死者が出ると、鐘が鳴らされました。だからこそ、祇園精舎の鐘の音は、人間のいのちには限りがあるという「諸行無常」の響きがしたのです。

仏教にはさまざまな宗派がありますが、お釈迦さま以来、仏教が連綿と説いてきたのは、衆生が「四苦」をはじめとする現世の根源的な苦しみを受け入れ、乗り越えるにはどうすべきか、ということです。仏教者はそれを説くことによって、衆生に救いと癒しを与えるのが、最大の務めでありました。また、ある時期までは、実際に仏教者が医療の重要な部分を担っていました。

最先端技術を採り入れながら、医療が目覚ましい進化を遂げる現代において、それと並行する形で、スピリチュアルケアが医療・介護の重要な分野として認識されるに至っています。私はそれは、仏教が改めて医療・介護のある部分を担うことであり、医学・医療と仏教の融合が求められているのだと受け取っています。

仏教に、「生老病死」という人間の根源的な苦しみを癒し、救う教えがあるということは、仏教者がスピリチュアルケアの分野で果たす役割があるということであり、ひいてはスピリチュアルケアに従事する人には、仏教的な心が欠かせないということです。

スピリチュアルケアに生かす仏教の心とは何か。仏教の教えはスピリチュアルケアに多くの示唆を与えてくれます。その具体例は本講演で触れるつもりですが、ここでは、その代表例を１つだけ挙げておきます。私は真言密教の行者です。真言密教の始祖である弘法大師空海は、「即身成仏」ということを説いています。即身成仏とは、この身のまま仏さまに成ることができる、という意味です。普通、人間は死んで仏さまになるわけですが、

空海は「この身それ自体が仏さまである」と説いたのです。

「山川草木悉皆成仏（さんせんそうもくしつかいじょうぶつ）」、人間はもちろん、動物も植物も、山や川の大自然も、すべて仏さまの子であり、仏さまの光を持っている、だからこの身のまま仏さまになることができる。空海はそう説いているのです。

空海の教えを敷衍すれば、人間はもともと仏さまの光を持っているのだから、仏さまの教えに基づいて、世のため人のために全身全霊で生きれば、内なる仏さまの光がますます輝いて、その人は仏さまそのものに成ることができる、ということになります。

スピリチュアルケアに従事する人に根源的に求められるのは、その「即身成仏」を体現しようとする心です。スピリチュアルケアを受ける人が、ケアをしてくれる人に仏さまを見、感じることができたら、どれほど癒され、救われることでしょう。それによって心身が活性化し、医療効果も向上するのではないでしょうか。

いずれにしても、「医療におけるスピリチュアルケア」とは、医療と仏教の新たな融合だと、私は確信しています。

【講師紹介】

略歴

昭和３０年　　県立志布志高等学校卒業
昭和３４年　　高野山大学文学部密教学科卒業

役職など

兵庫医科大学　客員教授、岡山大学医学部　客員教授、京都府立大学客員教授、山口大学医学部　広島大学医学部　金沢大学医学部　広島大学医学部　久留米大学医学部　弘前大学医学部　大分大学医学部　鳥取大学医学部　産業医科大学－－非常勤講師

高野山真言宗宗機顧問、日本補完・代替医療学会理事　、日本予防医学会相談役、平成医療倫理研究会代表理事、２１世紀高野山医療フォーラム理事、ロシア連邦ハバロフスク医科大学客員教授・名誉医学博士、フィリピン大学客員講師、ロシア連邦アカデミー東洋学研究所顧問・客員教授･名誉歴史博士、学校法人　高野山学園理事、九州三十六不動霊場会会長、学校法人最福学園理事長、財団法人日本レジャースポーツ振興協会理事、NPO アジア地域戦没者慰霊協会名誉総裁、鹿児島アマチュアボクシング連盟副会長、西日本学生相撲連盟顧問、百人会会主、鹿児島ロータリークラブシニア会員、財団法人メディポリス医学研究財団理事

【特別講演2】9月13日(日)12:50～14:00 コラボI 2階 視聴覚ホール

【医療における行動療法—アドヒアレンス（患者行動）改善のために】

足達淑子（あだちよしこ） あだち健康行動学研究所所長

例えば日常診療において、患者さんに理解して欲しいこと、実行して欲しいことはどんなことだろうか。慢性疾患の通院であれば、薬の処方どおりの服用、予約どおりの来院は当然として、細かな生活上の留意事項が、個々にあげられるだろう。行動療法では、それらの一つ一つを具体的な行動（習慣）とみなし、それが生じやすいように環境条件を整えていく。問題行動に対しては、その行動が生じている状況の観察から仮説をたて、解決のために患者さんは何をしたら良いかを具体的に提案する。

演者は肥満、高脂血症や糖尿病などの生活習慣病予防や健康増進、親訓練やトレス養育スキルの形成、睡眠習慣改善などにおいて行動療法の効果を確認してきたが、日常の精神科臨床はもちろん、対人関係の持ち方から仕事の進め方、掃除などの家事や、忘れ物防止などまで広範に役立つことを実感している。

本講演では、行動療法の基本原理を概観し、その職種と疾患(問題)を越えた有用性を、自験例を交えながら示すことで、医療における行動療法の応用を展望したいと思う。

参考図書

足達淑子編著. ライフスタイル療法 I (3 版), 医歯薬出版, 東京, 2006.
足達淑子. 行動変容をサポートする保健指導バイタルポイント. 医歯薬出版, 東京 2007.
足達淑子. 行動変容のための面接レッスン-行動カウンセリングの実践. 医歯薬出版, 東京, 2008.

【講師 紹介】

略歴

昭和 50 年	東京医科歯科大学医学部卒業 医師国家試験合格
	東京都衛生局総務部採用 東京医科歯科大学、都立病院で精神医学と感染症の臨床研修
昭和 54 年	福岡市衛生局採用、保健所で衛生行政に従事
昭和 56 年	九州大学神経精神医学教室で、行動療法の保健活動への適応を研究
平成 11 年	福岡市を退職し「あだち健康行動学研究所」を開設
平成 13-16 年	広島国際大学人間環境学部臨床心理学科教授
平成 16-19 年	久留米大学文学部客員教授

賞

「肥満に対する行動療法の効果とその予測因子」で行動療法学会内山記念賞

「成人病予防における行動医学の応用と有用性」で大同生命医学研究学術賞、
厚生大臣賞、朝日新聞厚生事業団賞

学位、学会等

医学博士 精神保健指定医 精神科専門医 日本医師会認定産業医

日本行動療法学会／日本行動医学会 編集委員、日本健康支援学会　理事/編集委員

日本病態栄養学会 評議員、日本予防医学協会 学術担当理事

日本糖尿病療養指導士認定機構 広報委員

著（編）書・訳書

『行動変容のための面接レッスン』『行動変容をサポートする保健指導パイタルポイント』『ライフスタイル療法Ⅰ』『ライフスタイル療法Ⅱ 肥満の行動療法』『栄養指導のための行動療法入門』『糖尿病セルフケアガイド(ADA)』『応用栄養学』（以上医歯薬出版）『栄養教育論（丸山千寿子 足達淑子 武見ゆかり編)』(南江堂)『肥満の食事カウンセリング』『女性の禁煙プログラム』（以上 女子栄養大学）　『ライフスタイルを見直す減量指導』『99%成功するダイエット』『体重コントロール指導プログラム 指導者用マニュアル』『体重コントロールセルフヘルプガイド』（以上 法研）

『セルフダイエット１００のヒント』　（保健同人社）

『後悔せずに食べる本』（アリス・カッツ）『１歳半からの子育て』『行動医学の臨床　（ピース＆ワーデル)』『セルフ減量マニュアル』（以上 二瓶社）

『変えたいことは何ですか』『ぐっすり眠る』　（以上 健康行動出版 ）

分担執筆および訳

『行動医学の実際』（山上敏子編署）『行動療法事典』（ベラック、ハーセン）

『神経症の行動療法』（ウオルピ）『現代のエスプリ特集ー行動療法』『健康心理学』『行動科学』『快の行動科学』朝倉書店 など

大会企画シンポジウム

【大会企画シンポジウム】9月12日(土)14:30～16:30 コラボⅠ 2階 視聴覚ホール

【健康を支援する応用心理学】

企画・司会者：川本利恵子（九州大学）、金山正子（福岡大学）
話題提供者：田中真介（京都大学）、新小田春美（九州大学）、井上孝代（明治学院大学）

企画の趣旨：社会の変化は医療分野に様々な問題をもたらしている。そこで、田中先生には健康に影響を与える医療被害、たとえば新型インフルエンザへの対応とワクチン予防接種被害などの問題、新小田先生には夜型社会がもたらす生活習慣の変化が乳幼児の睡眠や成長発達へ与える影響などの医療分野での様々な問題から問題提起を、井上先生には健康問題支援の方法や人材育成を目指し循環型教育システムを導入された心理支援の教育方法から話題提起をいただき、医療分野での応用心理学の可能性について検討する。

１．医療被害に対する応用心理学の意義と役割（田中真介）

国連総会では、1979 年に「健康宣言」が採択された。2009 年はその 30 年目にあたる。わが国でも、「すべての人びとに健康を（Health for All)」をテーマに、健康権・発達権をあらゆる人びとに保障しようとするさまざまな取組みがなされてきた。

しかし一方で、医療過誤・医療事故によって、健康に被害を受け、死亡したり後遺症に苦しむ事例が少なくない。全国の病院で医療事故の発生件数は増加し続けている。例えば京都大学附属病院でのインシデント･アクシデントレポートは毎月 200 件以上にのぼっている。医療現場の危機的な状況の改善が急務である。

医療被害の原因としては、手術ミス、薬剤の投与過誤、医師の誤診や看護師の対応の誤りなどが指摘されている。しかし、医師や看護師の過失が直接の原因とされる場合にも、医療政策の誤りや利益優先の病院経営によって、医療現場の労働条件が改善されないままに、医師や看護師に過労を強いてミスを生じさせている条件と背景があることが見逃せない。産業心理学・社会心理学からのアプローチも期待される。

また、被害が大規模で長期にわたる社会的な医療被害事件も続発している。例えば、サリドマイド事件（睡眠剤サリドマイドによる奇形多発)、筋短縮症（解熱剤の注射の濫用)、スモン事件（整腸剤キノホルムによる視力障害・下肢麻痺)、薬害エイズ事件、薬害肝炎事件などである。さらに第二次世界大戦後、ジフテリアや MMR（麻疹・おたふくかぜ・風疹）などの予防接種による健康被害が多発しており、ワクチンによって被害を受けた人たちにどのような援助を行うか、感染症に対して人間はどう対応すべきかについて、関連諸分野の連携による基礎研究と実践研究が求められている。

田中からは、（１）新型インフルエンザなどの感染症への対応の問題点、及び、（２）戦後のワクチン行政による副作用被害事件に焦点をあてて、日本政府の医療行政・薬事行政の根底にある生命軽視の歴史と構造を検証する。その上で、（３）医療被害に典型的に示されてきた「基本的健康権」保障問題において、応用心理学がどのような重要な意義と役割をもっているかについて問題提起し、すべての人びとの健康を守り育てる学問のあり方について期待と展望を述べる。

２．子どもの遅寝による心身発達への危惧と、睡眠行動変容「眠育」に向けた取り組みの紹介
（新小田春美）

厚生労働省の調査によると睡眠に関連する問題は5人に1人が持っているといわれ、ここ数年の短時間睡眠化は世界一という。子どもも例外でないことから、脳の発達に対する睡眠不足の影響が心配されている。子どもの遅寝傾向は良い生活習慣が獲得できないばかりか、睡眠覚醒の概日リズムが確立されにくく、免疫系、内分泌系への悪影響など、子どもの健全育成にとって非常に憂慮すべき状況である。心身発達への影響は、落ち込み、イライラ、キレる、怒り出すなどよくあると答えた人ほど夜型化しているという報告もあり、今後前方視的な観察が必要である。

そこで、乳幼児健診に来所した子どもの睡眠の実態と養育者、特に両親の睡眠習慣を併せて調査し、心身発達の影響とその介入法の検討をめざした厚生労働科学研究助成による“こころの健康科学事業、班調査“ Child Sleep Cohort Project（ChiSCoP：チャイスコップ）を平成１９年度にスタートさせた。生活習慣の１つである睡眠の実態を睡眠日誌で観察し、子どもたちの成長発達との関連や両親の生活行動について分析中である。どの程度心身発達への影響を与えるのかは、長期的フォローが必要であるので、２年間の継続したかかわりの範囲内で、睡眠習慣と養育者の睡眠に対する認識の変化や子どもたちの生活習慣の取り組みの実態を紹介する。子ども達の行動変容を目指した認知行動的な接近（教育）法の検討を目指し、質的・量的分析結果を元に「眠育」の大切さを伝えたい。

３．社会に求められる「心理支援力」のある人材育成を目指して（井上孝代）

現代社会では、少子高齢化・社会生活環境の急激な変化などにより日常生活のストレスが増加し、地域・学校・職場などにおけるこころの問題は拡大の一途をたどっている。インターネットなどの急速な普及に伴う膨大な情報があふれる一方、人と人との心理的つながりの希薄化が度々指摘されている。人の精神的健康度が低下している今日、自己の精神的健康を維持し、同時に周囲の人々を心理的に支援していく力が強く求められているといえる。

このような現代的ニーズに応え明治学院大学心理学部では、「こころを探り、人を支える」という学部教育理念のもと、この数年にわたって学部一丸となり「心理支援力：心理学教育の新スタンダード－コミュニティ資源を活用した体験活動および循環型教育システムの導入と評価」の教育プログラムに取り組んできた。幸いにも 2008 年度文部科学省教育 GP に選定された。これは心理学の基礎・臨床・特別支援教育領域を総合的に学修することを通して、共感性、対人関係スキル、ストレスマネジメントなどの心理支援力を修得させる構造化された必修プログラム「心理支援論」を基幹とする教育プログラムである。授業とともに特徴的に以下のことにも取り組んでいる。（１）「体験活動サポート室」を通したコミュニティ資源の活用、（２）循環型教育システム、および参加型エンパワメント評価の導入、（３）大学・学生とコミュニティをつなぐ「白金こころ塾」の開講、（４）コミュニティの心理支援システムの構築、の４点である。

このプログラムを通して、社会のいかなる場面や状況においても適切に対応でき、支援を求めている人に共感的に関わって問題解決を図ることのできる心理支援力のある人材の養成を目指している。この試みは、「心理学の研究が社会の具体的な問題解決に資することを目指す」という応用心理学の具体的な教育方法の一つといえよう。

大会企画ワークショップ

実践教育（臨地実習）における学生への心理的サポート

企画者：森田 敏子[1)] 話題提供者：松永 保子[2)] 多久島寛孝[3)]
([1)]熊本大学医学部保健学科 [2)]信州大学医学部保健学科 [3)]熊本保健科学大学)

Key Words：実践教育（臨地実習），看護学生，不安，心理的サポート，アクシデント

【企画趣旨】 （森田敏子）

看護師を育成する看護教育の体系は，理論（座学）と実践（臨地実習）で構成されている。看護職という専門家を育てる職業人養成教育である看護教育において，臨地実習は他の職業人養成教育には類をみない学習方略や学習時間の長さ，臨場感あふれる学習環境（実際に治療や看護が行われる場）での学びとなる。当然ながら，講義で学んだ基礎理論や学内実習で身につけてきた知識や技術あるいは態度を総動員して患者と家族，あるいは職に向き合い，患者に適した看護を提供することが要求される。このことは，看護学生にとっては新奇なる環境での即時性を求められることを示し，過度の緊張を強いられることになることは否めない。そこで，看護学生の臨地実習における心理的サポートが必要かつ不可欠となる。本ワークショップでは，応用心理学的な見地から議論し，教育的な示唆が得られることを期待したい。

【ワークショップ概要】

1．先行研究および教育実践からの検討

看護学生の初回基礎看護学実習に対する心理は，非常に不安がある（16.5%），不安がある（48.1%），どちらともいえない(27.8%)，あまり不安はない（6.3%），全く不安がない（1.3%）であり，不安の理由やその内容は，初めての実習，不安と期待，目標の達成，迷惑や邪魔にならないかなどが挙げられている[1)]。このことから，実習前に実習をイメージできるオリエンテーションや目標達成に向けた適切な支援の重要性が示唆されている[1)]。実習開始前の不安要因は，自分の知識，技術，記録物，患者との関係，看護過程の展開，指導者との関係などであり，ストレス認知評価では，「影響性の評価」「コミットメント」「コントロール可能性」があり，コーピングでは，「他者からの援助を求める」という方略を使用する程度が高い傾向にある[2)]。実習におけるストレスの経時的変化は，実習前日に学生の主観的客観的ストレスが高く，経時的に低下していくこと，実習の達成感が低い学生は，実習を有害，脅威と認識していることなどから，実習直前のストレスコントロールが必要なことが示唆されている[3)]。

森田は臨地実習開始直前の学生の心理的サポートのために，「Where are you?」[4)]を使って学生が抱く不安や心配は何か，それはなぜか，どのような準備をすれば良いかを意識化し，実習開始直前の心理的サポートを行うようにしている。また，看護学生から看護師への手紙，看護師から学生への手紙という形でお互いの気持ちを確認しあうロールレタリングという方法を用いて心理的サポートを行っている。ここでは，臨地実習開始前の心理的サポートについて考察する。

2．臨地実習インシデントおよびアクシデントレポートからの検討（松永保子）

看護学教育における臨地実習は，学生にとって大きな比重を占めるものであり，学生は，期待，緊張，不安とともに臨地実習へ臨む。実習の進行とともに学生の緊張，不安が薄れるとしても，インシデントやアクシデントに繋がるような出来事が起こる可能性が低くなるわけではない。もしインシデントあるいはアクシデントを起こしたとしたら，その後の学生の落胆，失望は大きく，教員は物理的な事後処理のみならず，学生の心理的サポートをしなければならない。

今回，臨地実習で学生が関係したインシデントあるいはアクシデント後の学生への心理的サポートについて考察する。

3．自己教育力，対人関係の技能からの検討（多久島寛孝）

学生の自己教育力には，自己学習する能力や自尊感情が大きく関わっている[5)]。自尊感情は，自己の目標や課題とも関連しており，自尊感情の高低が自己教育力に大きな影響を持つ。すなわち，自己教育力を高めていくには学生の心理的安定が欠かせないことであり，実習指導者や教員の関わりが重要となる。一方，学生が臨地実習に抱く不満には，実習指導者や教員との関係性の中で生じているものも少なくない。

以上のことにより，自己教育力や対人関係の技能（コミュニケーション能力）といった観点から検討したい。さらに，実習開始後の学生相談室や保健室の利用状況から学生のメンタルヘルスについての課題を提示し，学生への心理的サポートのあり方について考察する。

4．討議

上記のことを話題として提供し，実践教育（臨地実習）における看護学生の心理的サポートについて討議していく。

文献

1）近藤裕子ほか：看護学生の初回基礎看護学実習に対する不安―学生の記述内容の分析―，日本看護学教育学会，第17回学術集会，p. 116，2007.
2）掛屋純子ほか：学生が持つストレス・コーピングの傾向―臨地実習前の実態調査，日本看護学教育学会，第18回学術集会，p. 191，2008.
3）高島尚美ほか：成人看護学臨地実習における看護学生のストレス反応，日本看護学教育学会，第18回学術集会，p. 190，2008.
4）田村由美ほか：リフレクションを行うために必須なスキル開発，Quality Nursing，8(5)，p.51-57，2002.
5）多久島寛孝ほか：自己教育力に影響をおよぼす要因の分析，保健科学研究誌3，49-60.2006.

【大会企画ワークショップ2】9月13日(日)14:20～15:50 コラボⅠ 2階 視聴覚ホール

「医療現場とリスクマネジメント」

企画者：中尾久子[1)] 話題提供者：松下由美子[2)] 安藤詳子[3)]
([1)] 九州大学医学部保健学科 [2)]山梨県立大学看護学部 [3)] 名古屋大学医学部保健学科)
Key Words：医療現場、リスクマネジメント、看護師、医療安全、臨床試験

【企画趣旨】 (中尾久子)

医療の場では日常的に病める患者に対して様々な治療や処置が行われているが、同時にリスクも発生しており、そのマネジメントは医療の場のみならず、社会的にも関心事となっている。近年、科学の発展は常に新しい医療技術を生み出している。その知識は最終的に人を対象とした試験を通して確認されるため、患者へのリスクを伴う臨床試験が欠かせない。本ワークショップでは、当該領域に造詣が深い松下由美子氏と安藤詳子氏を講師にお迎えする。日常的医療、先進的医療に生じる様々なリスクに関して、その背景、主要な因子と関連性、医療チームとしてのリスクマネジメントの組織的取組みと課題についてお話いただき、現状と課題について議論する機会としたい。

【ワークショップ概要】

1．医療安全－看護師の安全確認行為－（松下由美子）

1999年の「手術患者取り違え事故」以降、わが国の医療安全対策は画期的な進歩を遂げている。しかし、看護職者の注意力に頼った安全対策は依然として続いており、このような環境下で重大事故を起こした看護師は、「基本的な安全確認行為」を怠ったとして有罪判決を受けるという図式がある。裁判での判断根拠としては、看護のテキストなどに記載されている看護業務手順などが「看護水準」として採用される。そこで「基本的な安全確認行為」とは何か、どういった場面で実施されているのか、あるいは実施されていないのかを実証的研究によって明らかにする必要があると考えた。看護処置室・病室を再現した準実験の結果、

多重・割り込み課題などの負荷が加わらない平素の業務下でも、「安全確認行為」の多くは半数以下の実施率であった。これに、多重・割り込み課題などの負荷が加わるとさらに実施率が低下し、アクシデントが多発した。そこで、本実験の結果を素材として、看護師の安全確認行為をより確実にするための今後の研究の進展について検討したい。

2．医療倫理－臨床試験の現場から－ (安藤詳子)

難治がんに対する臨床試験において、特に初回治療例では、効果や副作用に関する経験的なデータがなく、ハイリスクであることは極まりない。一方、既存の治療法では治癒を望めない難治がん患者は、新しい治療法に自分の命を賭け、その臨床試験に対する患者と家族の期待は高まる。その現場において、医師と看護師は、臨床試験プロトコールに関する勉強会に始まり、実際の進行手順の作成、適応例の判定、その結果と方針に関するインフォームド・コンセントを実施し、看護計画を綿密に準備する。最大に安全性を確保し、臨床試験で狙う効果の達成を目指す。その時々における患者の身体的・精神的状態によって治療の方向性が検討されていく。しかし、そこで患者に著しい苦痛が生じる場合、治療継続に対する患者の意思決定上の葛藤は深刻である。ここにもう一つのリスクが存在する。この倫理的な問題を捉えて対処していくためには、正に患者と家族の微妙な心理をキャッチできる臨床的センスが問われると言えよう。脳神経外科領域における初回遺伝子治療例を通して考察する。

3．討議

上記のことを話題として提供し、医療現場におけるリスクマネジメントについて討議していく。

自主企画ワークショップ

【自主企画ワークショップ1】9月12日（土） 13:10～15:10 コラボⅠ 1階 共同セミナー室

自然美や芸術が受け手の心理に及ぼす影響

企画・司会： 木村 友昭 （MOA健康科学センター）
話題提供者： 玉井 寛 （福島学院大学）
松本 洸 （日本大学芸術学部）
岩城 達也 （広島国際大学）
森岡 尚夫 （玉川会・金沢クリニック）
指定討論者： 伊波 和恵 （東京富士大学）
山岡 淳 （日本大学）

キーワード：芸術心理学、芸術療法、心理測定、癒し

【企画の趣旨】

自然や芸術作品を見た（聴いた、読んだ、触れた）とき、受け手は情動を引き起こす。たとえば、美しい、楽しい、快い、癒される、リラックスする、悲しい、感傷的、怖い、驚き、好き・嫌い、などである。これらの情動は、一時的短期的効果を生ずるだけでなく、治療や健康増進に応用され、さらには人格変容を惹起させる可能性もある。教育、医療・福祉、芸術産業、旅行・休養、矯正などに対し、自然美や芸術の効果を応用するため、理論解明の基礎的アプローチとプログラム開発の応用的アプローチが考えられる。そのために、心理学の各分野、たとえば、認知、生理、教育、発達、臨床、社会、人格などの心理学領域との学際的な協調と交流が必要と思われる。自然美や芸術の効果をどのように計測し、評価するのかという課題もある。本ワークショップでは、それぞれの話題提供者から、ご自身のこれまでの体験と成果を踏まえて、リサーチ・クエスチョン、仮説、および今後のビジョンを提案させていただき、参加者と意見交換し、今後の研究の展開と各現場への応用に寄与したい。

【話題提供】

◇芸術心理学の歴史と概要（玉井 寛：福島学院大学）

近代の芸術心理学の歴史を考える上で欠かせない心理学者は、ヴィゴツキーに始まり現代のガードナーに至っている。ヴィゴツキーはアリストテレスの「カタルシス」の批判的検討を経て、カタルシスはマイナス感情の排出でなく新しい価値の創出であり、芸術の情動と想像の結合にその意義を見出した。その後、バーラインやアルムハイムによる芸術作品がもたらす快感情やゲシュタルト心理学の理論を背景に視覚芸術の分野にと広げた。現在は、ガードナーが掲げた多重知能理論をベースに、わが国の第一人者である子安増生は「知能のヘプタ・ヘクサゴン・モデル」として、知能を七つに分けて提示している。現在の主流は、心の働きのモジュールとして芸術的知能をとらえた観点で芸術心理学の新しい研究の方向性を探っている点を概説する。

◇芸術に対する癒しの尺度化（松本 洸：日本大学芸術学部）

芸術作品に対する心的影響の一つに、「癒し」と応える人は多い。筆者の研究の中に、文章完成法で、「芸術は私を～」という問いをした調査がある。その回答からは「癒し」よりは「楽しく」、「豊かに」といった能動性を喚起する言葉が多くみられる。これも広い意味での「癒し」と考え、「癒し」の心理尺度化を作成してみた。「癒し」の連想語から因子を抽出し、これを30項目の尺度調査票に仕上げた。「癒し」を＜和＞、＜極＞、＜浄＞、＜潤＞、＜弾＞、＜空＞の６尺度で測定できるようにした。これを芸術作品あるいは自然空間等に対して調査をしてみた。「静寂な居間」、「浜辺」では＜浄＞、＜潤＞、＜空＞が高い得点になる。「小川と鳥声」、「美ら海水族館」もそれに近いパターンをとり、自然からの心的反応パターンといえ、これに近い音楽がエンヤの癒し音楽にも見られる。このパターンに＜潤＞を極度に低くすると宗教的癒しになることもわかる。芸術は、分野や種類が多様なので、さまざまなパターンがつくられる。

◇音楽の感情反応と生理計測（岩城達也：広島国際大学）

音楽は娯楽として親しまれているばかりでなく、時には深い感動を引き起こしたり、強いメッセージを投げかけたりする。これらは音楽がヒトに感情体験をもたらすことに起因すると考えられるが、なぜ音楽が感情を喚起させるのかは良く分かっていない。またこの時生じる感情が普段体験する喜怒哀楽などの感情と同質かどうかもまだよく分かっていない。こうした感情反応に限らず、音楽のような刺激の効果を調べる研究では、刺激要素が複雑で時空間的にゲシュタルトを形成するために刺激と反応の関係を単純に特定することができない。さらに、音楽刺激以外の媒介変数、特に聴取者の好み、音楽能力、感情状態などが関与することで反応パタンが大きく変化する。今回の話題提供ではこうした問題点を述べると共に、心理生理学的アプローチ方法を紹介し、これまで検討してきた音楽聴取に伴う覚醒水準の変化、特に時間的変化について、脳波等の生理計測結果から発表する。

◇芸術療法の導入と効果の測定（森岡尚夫：玉川会・金沢クリニック）

当クリニックでは、芸術療法や自然環境を活かした健康プログラムを実施している。今回、その効果を明らかにするため、外来患者に芸術療法（お花・美術書鑑賞・茶の湯）を行い、その前後で、POMS(気分プロフィール検査)を実施した。結果をストレスの高い群、低い群に分けて分析したが、両群において緊張－不安、抑うつ、怒り－敵意、疲労、混乱が有意に下がり、活気が高まった。ストレスの高い群には不安や緊張の緩和になり、ストレスの低い群には心の安定、癒しの効果が得られたのではないかと考える。また、入院患者に対して、自然環境を活かした健康プログラム（園芸、自然散策ネイチャーゲーム、足湯等）を実施し、その前後でPOMSを実施した。結果、芸術療法同様の効果が見られた。これらから、芸術療法や自然環境を活かした健康プログラムなど、芸術や自然に触れることで、短期的には癒し、リラックス効果があることが分かった。さらに、こうした活動は、長期的に見て治療、健康増進につながると考えられる。

（きむら ともあき・たまい ひろし・まつもと こう・いわき たつや・ もりおか ひさお・いなみ かずえ・やまおか きよし）

教育現場におけるアドベンチャーカウンセリングの実際

○小西 浩嗣　植田 有香　澤田 幸嗣　西野 昌美
帝塚山大学 心理福祉学部 心理学科
キーワード：アドベンチャー教育、グループカウンセリング、体験学習

【企画の主旨】

近年、コミュニケーション不全が原因で人間関係がうまくつくれない、人と上手に関われない大学生が増加している。かつて、子どもたちは遊びを通しての冒険をしてきたし、人とのつきあい方や信頼・やさしさ・協力など、心を育てるベースとなるものを自然と学んでいた。しかし現代においては、幼少時代の野外や自然の中での体験、あるいは集団での遊びの機会が激減、それが遠因となってコミュニケーション能力や対人関係能力の欠如、社会不適応の大学生を多く生み出していると考えられている(谷島，2005)。こういった社会の変化やさまざまな心の問題の解決に有効な手法の一つがアドベンチャー教育である(眞崎・丹後，2004)。冒険的な要素を多様な活動を通して体験し、グループや対人関係の中で起こる感情や思考、取り組み方などに焦点をあて、個人とグループの成長を図ることを目指している。帝塚山大学では、このアドベンチャー教育の一つであるアドベンチャーカウンセリングを授業カリキュラムに導入し、個人の発達促進、対人コミュニケーション力を育む実践を展開してきた。また、大学における授業カリキュラムに留まらず、様々な教育現場における取り組みも行ってきた。

そこで、このワークショップでは、理論を交えながら大学での取り組みや学外での事例を紹介した後、後半では実際のプログラム体験を行う。そしてワークショップ参加者の皆様からも、今後の教育現場での適応や、実践的アプローチなどについて議論、検討していきたい。

【話題提供】

1. アドベンチャーカウンセリングの背景と手法

アドベンチャーカウンセリングはアドベンチャー教育の 1 つであるプロジェクトアドベンチャー(Project Adventure：以下、PA)をベースとしたトレーニング手法の一つである。

実際には、ファシリテーターと呼ばれる支援者が、心理学やカウンセリングの手法を適用し、グループとメンバーを支援する。さまざまなアクティビティをグループで体験しながら、個人とグループが関係を築いていき、徐々にチャレンジレベルを上げていく。最初はゲーム的、遊びの要素を取り入れて人とかかわる楽しさに気づき、グループでの協力や信頼を重ね、自分と仲間を信じることから次のステップへ。課題解決、信頼関係構築の活動を経て、ロープや木、ワイヤー等で作られた専用の施設「ロープスコース」を使ったロー&ハイエレメントチャレンジでは、大きな達成感、協力、信頼など貴重な感情や体験が得られるのである。冒険だからこそ、安全に生きるためのマインドやスキルが身につき、他者と生き抜くことの重要性に気がつくというのがアドベンチャーカウンセリングのコンセプトである。成功体験ができるようにプランニングされたさまざまな活動を通じて肯定的な心理状態や自尊感情を高める。このためには、①ゴールが明確であること、②自分が求めていること、③達成方法が明確であること、④目標が高過ぎず、低過ぎず、挑戦していることが自覚できることが重要である(Lewin,K,1944)。ゴールを設定し、それに向かって深く関わるほど、他人に責任を転嫁したり、途中でリタイヤする可能性は低くなる。過去(の失敗)にこだわるより、現在や未来(の成功)に注目するようになるのである。

アドベンチャーカウンセリングの適応分野は広範であり、国内では、学校教育(授業カリキュラムへの導入)、地域における青少年教育指導育成、企業研修、メンタルヘルス面・医療機関対象の研修、スポーツチームの強化などを挙げている。また、アドベンチャー教育発祥のアメリカでもアドベンチャープログラムによるカウンセリングの応用として、学校分野でのカウンセリングプログラム、病院や療養施設等医療機関での治療プログラム、さらには罪を犯した青少年更生プログラム等、様々な分野において導入されている。

ここでは主にアドベンチャーカウンセリングの理論や効果などの概要について、教育的観点からを考慮しながら紹介していく。

2. 帝塚山大学での実践

帝塚山大学では、地域社会と連携した心のケア・生活サポート教育の中核として創設された心理福祉学部心理学科において、従来の臨床心理学における「悩みの解決」、「自己発見」、「自己成長のための支援」という働きに加え、より強固な心の生成を求める必要からアドベンチャー教育の一つであるアドベンチャーカウンセリングの専用コースを建設、基礎演習(1 年次)、アドベンチャーカウンセリングⅠ・Ⅱ(2 年次演習)、アドベンチャーカウンセリングⅢ(3 年次演習)をカリキュラムに系統的に配置した。また、アドベンチャーカウンセリング研修会やワークショップも定期的に実施し地域での人間関係づくりプログラムのニーズ収集を積み重ねた。

ここでは授業カリキュラムを中心とする大学教育場面におけるアドベンチャーカウンセリングの実践および研究事例を紹介し、学生の意識および行動変容について考察する。

3. 学外での実践事例

アドベンチャーカウンセリングは教育・心理・福祉にかかわるスタッフ研修やスポーツクラブのチームビルディング、不登校支援スタッフ研修など、大学以外のさまざまな教育場面においても実践を行っている。その中でも、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代 GP)」に採択された「‘心のケアとサポート’人材養成と自立支援－地域の活性化と安心・安全な社会の創造のための実践的教育」の取り組みとして、小学校における「アドベンチャーカウンセリングを用いた集団的心理教育」の実践事例について紹介することにより、教育現場への適応や試案を検討する材料として提供したい。

4. アクティビティ体験

アドベンチャーカウンセリングの理論や実践事例などを踏まえた上で、参加者と共にアドベンチャーカウンセリングのアクティビティ体験を通して今後の教育現場への適応や試案、将来展望などについて議論を深めていきたい。

（こにしひろつぐ・うえだゆか・
さわだこうじ・にしのまさみ）

【自主企画ワークショップ3】9月13日（日） 9:40～11:40 コラボⅠ 2階 視聴覚ホール

自主ワークショップ

「血液型による性格判断を信じる人がなぜ多いのだろうか」part II

企画・司会

東京富士大学　浮谷　秀一

話題提供者

大阪大学　大坊　郁夫

日本大学国際関係学部　伊坂　裕子

日本体育大学　藤田　主一

日本大学　大村　政男

指定討論者

立正大学　斉藤　勇

東京富士大学　岡村　一成

このワークショップは，昨年度の第 75 回大会（横浜国立大学）に続く第 2 弾です。血液型による性格判断が当たっているか否かという議論ではなく，血液型による性格判断を信じる人がなぜ多いのかを前回以上に掘り下げることが目的です。

まず、社会心理学の立場から、「はやる」という社会現象を血液型に話題を絞らない一般論的な解説を大坊郁夫氏にお願いしました。その社会現象の解説をベースとして、血液型について話題を展開していきたいと考えています。

伊坂裕子氏には、血液型の話題を中心に、人がなぜ特定のことを信じるようになるのかということを一般論的な観点も踏まえてお話しいただきます。

藤田主一氏には、血液型と性格との関連性について、肯定的・否定的なデータが積み上げられ統計的な数値に基づいた議論されてきたことを踏まえて、わが国の大衆は統計的で科学的な説得よりも，感覚的で経験的な実感を尊重しているということについてお話していただきます。

大村政男氏には、日本で血液型と人間の気質・性格との関連を強調する文化がはぐくまれた下記のような理由を昨年より一歩突っ込んだお話をしていただきます。

(1)島国的環境で生活している単一民族らしい人間集団の人間観

(2)血族・血縁・血判・合血などという血の文化の伝統

(3)封建社会の四民制度の残滓

(4)古川竹二の血液型気質相関説を面白可笑しく改編した能見正比古の筆力とマスメディアの活躍

(5)若者，特に若い女性の深層に存在しているロマンチシズム

ただし、現在テレビで血液型に関連した話題を取り上げることが封印されているという観点についても突き詰める必要があると思われます。

齊藤勇氏と岡村一成氏には、話題提供者のお話を踏まえて、血液型による性格判断について独自のお考えを披露していただく予定です。

【自主企画ワークショップ4】9月13日(日)15:00～17:00 コラボII 2階 大セミナー室

暴力に晒される人々—隠された被害者を支えるために—

企画者　井上孝代（明治学院大学）・鈴木ゆみ（明治学院大学大学院・児童養護施設まつば園）
話題提供者　榊原佐和子（明治学院大学大学院）・北風菜穂子（明治学院大学大学院）・鈴木ゆみ
指定討論者　（交渉中）

【問題と目的】

夫婦や恋人間の暴力（DV・デートレイプ）などのミクロで個人的な暴力から，戦争や地域間紛争などのマクロで集団的な暴力，そして目に見えない構造的な暴力まで，現代世界は暴力で満ち溢れている。日本においては，90年代以降DVや児童虐待が社会問題化したように，これまで可視化されなかった暴力は多いと思われる。身体的・心理的・性的暴力による被害者の傷つきを理解し，心理的に支援していくだけではなく，隠された人々を可視化すること，被害者の置かれた状況を理解し社会に向けて啓発していくことも心理学者の重要な役割であろう。

本シンポジウムでは，各フィールドから，領域固有の問題について報告してもらい，さらに指定討論者を交えて，属性（国籍，性別）や暴力の種類（ハラスメント・デートレイプ・拷問）を超えて，被害者の傷つきとその回復を支えるための支援について総合的に検討したい。

【話題提供1．　ハラスメントの対策　榊原佐和子】

職場でのハラスメント（いじめや嫌がらせ）が近年一般に知られるようになってきている。国家や集団が合法性を装って継続的に行う全ての反人権的・反倫理的・差別的な暴力を「構造的暴力」というが，ハラスメントの被害者もまたその隠された被害者であるといえよう。職場でのセクシュアルハラスメントは、労働者の個人としての尊厳を不当に傷つける社会的に許されない行為であるとともに、労働者の能力の有効な発揮を妨げ、また、企業にとっても職場秩序や業務を阻害し、社会的評価に影響を与える問題である。男女雇用機会均等法においては、職場におけるセクシュアルハラスメント対策について、雇用管理上必要な9項目の措置を講ずることが事業主に義務付けられている（厚生労働省,2009)。また，パワーハラスメントも問題になりつつある。2007年に日本で初めて，パワーハラスメントによる自殺が労災と認められ，労災認定の判断基準である「心理的負荷による精神障害等に係る業務上外の判断指針」が2009年4月に10年ぶりに改定された。このように、制度として整備されてきているものの実際にはまだまだ問題は多い。現場での実際の心理士の対応を含め、ハラスメントの問題点と支援について探っていく。

【話題提供2.　デートレイプの予防　北風菜穂子】

男女間における暴力は、社会の中での権力と支配の関係として長い間存在してきた。日本では2001年にDV防止法が制定・施行され、現在までに二度の改正を経て、親密な男女間での暴力が広く一般に認識されるようになった。

しかし現在でも、とりわけ性暴力については表面化しない隠された暴力である。内閣府の調査(2006)によれば、望まない性行為の強要を経験した成人女性は全体の7.2%であり、配偶者や交際相手などの親密な関係に発生した被害が27.6%と最も多くなっている。交際相手からの性暴力はデートレイプと呼ばれるが、「強引に性行為をされることを女性は望んでいる」などのレイプ神話（Burt, 1980）によって、その行為が正当化されやすいことや、暴力であるという判断がなされないことも多い(岩崎, 2003)。被害者は傷つき、自分を責めることも多く、それ以降の親密な関係に甚大な影響を与える。デートレイプが生じるメカニズムや被害者の心理について十分に理解することが必要である。

当日は、レイプ神話支持態度やデートレイプが暴力であるという判断に関する研究結果を示し、デートレイプの予防にはどのような心理学的介入が有効であるのかについて考えたい。

【話題提供3.　拷問被害者の支援　鈴木ゆみ】

拷問（英torture，独Folter)。言葉にすることさえ憚られるこのような行為は，決して遠い国で起きているわけでも，過ぎ去った過去のことでもない。現在拷問は，121ヶ国以上で行われており，世界の難民人口のおよそ5－35%が拷問被害者であるとされる。一方，難民認定者が極端に少ない日本では（年間数名から多くても数十名)，難民の精神的ストレスの深刻さを指摘する研究や（市川，1998)，彼らの置かれた過酷な状況（入国管理局の外国人収容施設への拘束，場合によっては危険な出身国に送還されてしまうなど）が次第に明らかにされつつあるものの取り組みの遅れと関心の低さは否めない。

また，刑務所や警察の代用監獄中の拷問が人権団体から指摘されるなど（アムネスティ・インターナショナル編，2001)，難民申請者である外国人や犯罪被疑者などのパワーレスな状態に追いやられた人々を可視化し，支援していくことも必要である。国境を超えて，人やモノ，情報が自由に行き来する時代，また一見平和にみえる日本社会の中にも，拷問（暴力）によって苦しんでいる人々が大勢いるのである。

当日は，ドイツ・ベルリンにおける拷問被害者治療センターでの実践の紹介と日本での拷問被害者の実態の報告，これからの支援の可能性について考えてみたい。

（いのうえたかよ・すずきゆみ・さかきばらさわこ・きたかぜなほこ）

学会企画委員会企画
第 8 回 研 修 会

【学会研修会A】9月12日(土)15:20～16:50 コラボⅠ 1階 共同セミナー室

応用心理学研究における統計処理の諸問題

— 心理学の不安 —

講師 大村政男（日本大学名誉教授）
司会 藤田主一（日本体育大学）

【大村政男先生プロフィール】

＜学歴と職歴＞

1925年 10月 東京新宿生まれ。
1943年 3月 日本大学第二中学校(現在の日大ニ中・二高)卒業。
1943年 4月 日本大学予科文科（世田谷桜上水）入学。
1945年 4月 日本大学法文学部文学科心理学専攻入学。
1945年 5月 召集令（いわゆる赤紙）がきて、東部19部隊（戦車隊）に入営。
1945年 8月 神奈川県厚木飛行場付近で終戦を迎える。部隊解散。
1945年 9月 大学に復学する。
1948年 3月 卒業（卒業論文：「人格の適応性に関する心理学的研究」指導：渡辺徹）。
1948年 4月 大学院（旧制）に入学（旧制の大学院は前期・後期、修士・博士の区別なし）
1949年 4月 法務府技官（現在の法務技官）として東京少年鑑別所勤務。非行少年の鑑別診断、心理治療に従事。
1951年 4月 日本大学助手。文学部心理学科に勤務。
1955年 4月 専任講師（のちの文理学部勤務）。
1958年 7月 助教授。
1968年 4月 教授（なんと10年かかった）。'72年、テキサス大学、カリフォルニア大学ドミンガス校に研究出張（6ヵ月間）。
1972年 4月 大学院分科委員会委員（いわゆる大学院教授）。
1982年 3月 「顕現性不安の構造に関する研究」で文学博士（日本大学2589号）。
1995年 10月 満70歳で定年退職。大学院非常勤講師（80歳まで）。
1995年 11月 日本大学名誉教授。

＜他大学への出講＞

二松学舎大学、川村学園女子大学、文京女子大学（現：文京学院大学、富士短期大学、広島大学、北海道医療大学、鹿児島大学、関西学院大学、山梨大学（順不同）。

＜主要著書＞

新訂・心理検査の理論と実際（共著）1985 駿河台出版社
異常性の世界 1972 ぎょうせい
血液型と性格 1990 福村出版
心理学概論 1992 日本大学通信教育部
新訂 血液型と性格 1998 福村出版

＜学会関係＞

日本応用心理学会名誉会員
日本心理学会名誉会員
日本パーソナリティ心理学会（旧日本性格心理学会）名誉会員

2001年9月、日本性格心理学会第10回大会において「シラノ・ド・ベルジュラックはどんな性格だったのか」（第2報）実在のシラノとロスタンが描いたシラノの性格分析」で「優秀大会発表賞」を受ける。

＜資格関係＞

日本心理学会 認定心理士32号
日本応用心理学会 応用心理士14号

＜所属団体＞

オーケープロダクション（旧大橋巨泉事務所）所属
日本エッセイストクラブ会員
㈱日本病院会通信教育部非常勤講師

＜勲記＞

平成18年5月11日、瑞宝中綬章（旧勲三等瑞宝章）を受ける。

【研修の要旨】

Ⅰ 1987年（昭和62年）3月17日、東京の港区六本木の日本学術会議で、「人間理解の交差点」というメインテーマのもとに大きなシンポジウムが開催された（企画者：学習院大学 永田良昭教授）。私はそのサヴテーマ「心理学における基礎と応用」で大いにしゃべりまくった。その主旨は、心理学は基礎の前に応用があったということである。

基礎の芽生えは1879年のヴントの実験心理学の建設にある。このときから心理学は「科学」になったが、大切なものを失ってしまった。個人差へのセンスを失ってしまったのである。

ヴントのところで助手みたいな仕事をしていたアメリカ人の J.マッキン・キャテルは、ヴントが反古のように棄てた法則外れのデータを拾い集めていた。ヴントは「まったくアメリカ的だよ」と吐き出すように言ったという有名な話がある。

現代の心理学は、記述統計学の時代から推測統計学の時代に入り、タイガー手動計算器からコンピュータの時代に入り、ますますマニュアル化してきてしまった。これでいいのだろうか。もう一度、かつてのセンスを取りもどす必要があると思う。

Ⅱ 観天望気から天気予報へ、そしてお天気情報へ。常識の株から理論（科学）の枝が誕生し、やがてそれが別の株になっていく。

Ⅲ 心理学の不安（その1） 1994年3月（性格心2－1）に発表された尾見康博・川野健治の指摘。

Ⅳ 心理学の不安（その2） 1994年9月（日心59回）長谷川芳典の指摘。

Ⅴ 心理学の不安（その3） 2000年9月（応心67回）坂野登の指摘。

Ⅵ これからどう考えていけばよいのだろうか。もうカムバックできないのであろうか。

職業的災害救助者の惨事ストレス対策

田之内厚三（麻布大学生命・環境科学部）

【研修内容】災害において精神的ストレスを受けるのは被災者のみではない。それを目撃した人やその救援活動に携わる人たち（消防職員、自衛隊員、警察官、医療関係者、災害ボランティア、報道関係者）の精神的ストレスも深刻なものとなる。そして、必ずしも規模の大きな災害だけが悲惨であり、ショックが大きいとは限らない。同僚の負傷や殉職、子供の社会死、衆人環視のなかでの救出活動などによっても抑うつ感、罪責の念、もどかしさ、無力感、自己嫌悪に襲われ、長期のストレスとなって蓄積されていく。一方、人命救助を職業とする者にとって必要不可欠とされていた精神論は、いまも根強く残っているために、日常業務でのストレスや個人的な感情、災害や事故現場での隊員が受ける悲惨な体験等については相変わらず口が重い。職業的災害救助者は一般の人と異なり、災害現場で辛い思いをしたり、恐怖を味わったりしても、上司や同僚の助けを求めることなく、自分自身で乗り越えてきた。死体を見て気持ちが悪くなったり、臭いをかいで吐き気がしたりしても、それはどちらかといえば「弱さ」「恥」ととらえられやすく、周りにはあまり大きな声でいえなかった。さらには、職業的救助者独特のプロ意識や社会からの期待等もあって、これらのプレッシャーが一般の組織と異なって、円滑な会話、交流を妨げていると考えられる。たとえば、筆者は長年、惨事ストレス対策におけるデフュージング研修に携わっているが、現場で隊員がどのようなものを見たり、聞いたりしたのか、そのときの状況や隊員自身の行動、感情、思考を具体的に再現させようとしても、それに対する悔しさや怖れなど、グチや弱音をなかなか話そうとはしない。本音を聞くことができない。他の隊員のいるなかで自分のネガティブな感情を表現することに抵抗があるようだ。まさに、この点こそが、いまの消防組織の持つ大きな問題点の１つではないかと考えている。

そこで本研修では、惨事ストレス対策を進める上で、なぜ発言が抑制されるのか、その要因を検討してみることで、いかに彼らが不合理な思い込みの思考にとらわれているかを説明してみたい。職務の完全遂行、幹部らの期待の増加、自他共に認める「あるべき救助者」の理想像等に過剰適応しようとすることが不合理なヒーロー感を形成し、日常業務のストレスをさらに蓄積させ、肥大化させていると考えられる。この意味で、デフュージングやデブリーフィングの実施だけでなく、事前教育(啓発教育)も含めた総合的な惨事ストレスマネジメントの構築が今後の課題となってくる。職業的災害救助者が自分のなかから湧き起こってくる職務上の否定的感情を口にすることは、けっして恥ずべきことではない。むしろ、グチをこぼし、弱音を吐くことは、その個人にとっても、所属するチームにとっても、精神的浄化装置として機能し、組織全体の健全化、活性化に貢献するものである、というまったく新しい認知の枠組みを自己の知識体系のなかに組み込むことが事前教育の大きな狙いである。加えて、大量退職・採用による急激な世代交代と再任用制度による職員の高年齢化という、ベテラン職員と若年層職員の二極化が進むなかで、技術力の低下を招くことなく、ベテラン職員の技術や経験を若い世代に引き継いでいくためにも、両者の相互理解を深める事前教育はきわめて重要である。これまで職業的救助者が抱いていた強さや勇敢さに関する不合理で過大な思い込みを払拭し、従来の考え方とはまったく異なった自主的で合理的な風を各人の心のなかに吹き込むことができれば、ベテラン職員と若い世代が思っていることを自由に話し合えるような新しい組織風土が生まれてくる。そうなれば、部下は古い精神論にとらわれることなく、率直な気持ちを上司にぶつけることができ、世代間の円滑な意思疎通が期待できる。

【講師略歴】日本大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程満期中退。専門は社会心理学、環境心理学。日本応用心理学会常任理事。横浜市消防局アドバイザーを経て、現在は、東京消防庁をはじめ神奈川、埼玉の消防職員の人事業務管理、惨事ストレス教育に携わっている。平成11年には東京消防庁より消防行政協力賞、平成18年には埼玉県消防学校より感謝状を授与される。

【本研修に関する編著書・論文等】●『ガイド社会心理学』編著、北樹出版、2006年●『惨事ストレス対策の手引き』監修、横浜市消防局、2004年●なぜ消防士は強くなければならないのか―人的機能を強化するための啓発教育―. 消防研修(特集：教育・研修技法) 第84号、135-147（2008年9月）●職業的災害救助者の惨事ストレス調査―消防職員を対象として―. 麻布大学雑誌、第11・12巻、21-32（2005年）●災害ストレスと心のケア. 月刊『ほのお』7-10、全国消防協会（2001年12月）●「隠れた被災者」の心のケア. 月刊『東京消防』14-15、東京消防協会（2001年4月）

学会主催　研修セミナー

【セミナー】9月12日(土)9:30～11:30 コラボⅠ 2階 視聴覚ホール

日本応用心理学会主催　　研修セミナー

あなたの研究が『応用心理学研究』に掲載されます！！

― 論文投稿のABC―

司会　(駒澤大学　　谷口　泰富)

1　「ちょっと待って！あなたの研究には重大な問題が？」
　<論文の投稿と倫理>　　(日本体育大学　　藤田　主一)

2　「ルールは守ろう！」
2－1　〈『応用心理学研究』への投稿に関しての注意〉　　(国士舘大学　　所　正文)
2－2　〈実践研究論文〉の投稿と問題点　　(京都大学　　田中　真介)

3　あなたの論文はここが拙い！
　〈論文審査における採択と不採択の分かれ道〉　　(大阪大学　　大坊　郁夫)

4　「応用心理学研究」への挑戦！
　<あなたの研究を投稿してみなさい>　(明治学院大学　　井上　孝代)

研究発表(口頭発表)

高齢者のし忘れ防止に関する検討

― 展望的記憶に着目して ―

○蓮花　のぞみ[1)]　権藤　恭之[1)]
([1)] 大阪大学大学院人間科学研究科)

キーワード：し忘れ，展望的記憶，記憶方略，高齢者，自己評価

【目的】

し忘れは，展望的記憶 (Prospective Memory : 以下略 PM) という「将来のある特定の時点に意図した行為を想起することを目的とした記憶」の失敗と捉えられている。記憶方略は内的方略（場所法，頭文字想起法など）と外的方略（手帳，カレンダーなど）という 2 つに分類することが多かった (Intons-Peterson & Fournier, 1986 ; 楠見 1988)。しかし，展望的記憶にのみ焦点を当てた尺度がなかったため，展望的記憶方略に焦点を絞った記憶方略尺度が開発された。その結果，外的方略に関して，手帳などの利用といった「passive トリガー」及び，時計のアラームの利用といった「active トリガー」の 2 つの側面から捉えられることが示された（出口他，2001 ; 出口，2002 ; 遠山，2003 ; 2005)。高齢者の展望的記憶には，記憶方略が重要な役割を担っていると述べられているが，高齢者における外的方略の違いに着目した展望的記憶方略の検討は行われていない。

本研究では，高齢者がどのようにし忘れを防止しているのかを明らかにするために，第一に高齢者における記憶方略の利用の実態について明らかにする。第二に，展望的記憶方略の利用頻度に強く影響を及ぼす要因を検討する。展望的記憶の失敗の自己評価やメタ記憶，さらに日常生活の特性や性格特性を含めて検討した。

【方法】

1. **調査時期**　2008 年 7 月～2009 年 1 月
2. **調査参加者**近畿圏内の高齢者大学在校生及び卒業生，シルバー人材センター登録者，地域住民の，男性 1348 名・女性 904 名・不明 21 名，合計 2273 名（平均年齢 68.57±SD5.54，レンジ 50-90 歳)。
3. **質問紙の構成**

3-1. **基本属性**：年齢・性別・教育年数・居住形態・脳卒中の有無・外出頻度・健康度自己評価

3-2. **展望的記憶方略**：内的方略，passive トリガー，active トリガーの利用頻度（遠山，2005)。15 項目 5 件法。

3-3. **展望的・回想的記憶質問紙**：PRMQ (Smith, Dalla Sala, & Logie, 2000) の日本語版。長期と短期，手がかりの有無の 2 水準で物忘れ・し忘れ頻度を測定。16 項目 5 件法。

3-4. **生活環境負荷尺度**：日常生活の忙しさ・ルーティーンを測定する MPED (Martin & Park, 2003) の日本語版。

3-5. **視覚・聴覚困難度**：Vision impairment (Strawbridge, Wallhagen & Shema, 2007) 及び Hearing loss (Wallhagen et al., 2004)の日本語版，各 3 項目 4 件法。

3-6. **WHO-5 精神的健康状態表**：世界保健機構の簡易的な精神的健康指標(Awata et al., 2002)，5 項目 6 件法。

3-7. **NEO Five Factor Inventory 短縮版 30 項目**：NEO-FFI 短縮版（下仲・中里・権藤・高山，1999）から作成された性格特性，30 項目 5 件法。

3-8. **多次元式完全主義認知尺度**：Hewitt & Flett (2004)の MPCI の日本語版（小堀・丹野，2004）の 1 因子である社会規定的完全主義者，15 項目 7 件法。

3-9. **メタ記憶質問紙**：河野（1999）の記憶能力の自己評価及び知識を測定するための 5 因子，19 項目 4 件法。

【結果】

第一に，展望的記憶方略の種類による違いを検討するために，展望的記憶方略の下位尺度の種類に関して 1 要因分散分析を行った（Figure 1)。その結果，全ての方略の間で有意差があった（$F(1.926,4006.889)=4445.088$, $p<.001$)。passive トリガーの利用は最も多く，次いで内的方略，最後に active トリガーはあまり利用されていないことが明らかになった（$p<.001$)。

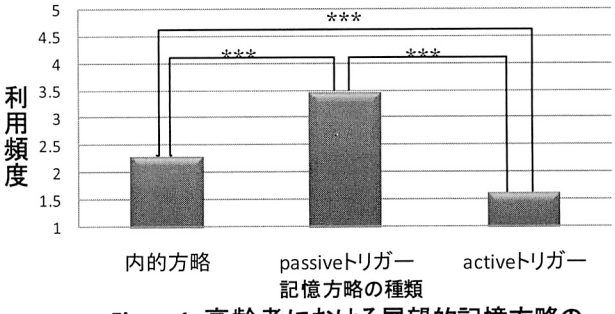


Figure1 高齢者における展望的記憶方略の利用頻度結果

第二に，展望的記憶方略の下位尺度を従属変数，その他の変数を説明変数として，ステップワイズ法による階層的重回帰分析を行った。その結果，内的方略に影響する要因として，同居の有無，教育年数，忙しさ，WHO-5，視覚，記憶に対する不安，課題特性の認知，PM 長期，完全主義，開放性，誠実性が示された。passive トリガーに影響する要因として，忙しさ，ルーティーン，WHO-5，記憶愁訴，想起の失敗経験，記憶に対する不安，課題特性の認知，PM 手がかり無し，誠実性が示された。active トリガーに影響する要因として，忙しさ，ルーティーン，記憶に対する不安，記憶に対する積極性，PM 長期が示された。以上より，忙しい生活，記憶に対する不安，し忘れ頻度は，全ての記憶方略へ影響を及ぼすことが示された。

【考察】

高齢者の用いる外的方略は，passive トリガーが多く，active トリガーはほとんど使われていないことがわかった。手帳などに書き込むだけでは想起は促されないため，記入や確認といった行動をしなければ，し忘れる可能性がある。高齢者はアラームをほとんど利用していないため，適切な時間に想起するためには，メタ記憶の働きやモニタリング行動によって失敗を減少させている可能性がある。また，内的方略の利用の特徴としては，心理状態や性格特性の影響を受けていることが示された。さらに教育年数や課題特性の認知，認知機能と関連の強い視覚困難度が影響を及ぼしていることから，認知機能が影響している可能性が示唆された。また，外的方略の利用には日常生活の特性が影響を及ぼしていた。特に，手帳などの利用には自身の記憶に対する捉え方が反映されていた。一方，アラームなどの利用には，記憶や新しい物事に対して積極的に取りこむ傾向が影響していた。このように，外的方略を区別した上で高齢者のし忘れ防止のための記憶方略について明らかにした点で意義があると考える。

（れんげ　のぞみ・ごんどう　やすゆき）

小児看護における看護師の共感疲労体験の分析

○米村敬子[1)]
([1)] 熊本保健科学大学　保健科学部　看護学科)
キーワード：小児看護,感情,共感疲労

【研究の目的】 対人援助職者が職務を遂行する中で,対象との相互関係を構築するうえで「共感」は重要な命題である.対象への高い共感的理解がケアの前提となるのだが,時にそれは援助する側に感情的疲弊や心的外傷をもたらす場合がある.その現象は二次的外傷性ストレスあるいは共感疲労という言葉で表現され,バーンアウトとの関連も示唆されることから近年注目が高まってきている.FigleyとStamはケアにかかわる多くの職業において,子どものトラウマに対峙する場合のストレスは特に大きいものだと述べている.本研究は,小児を対象としている臨床の看護師が体験した共感疲労の構造とプロセスを分析することを目的とする.

【方法】

1.調査対象者：小児単独の病床単位をもつ総合病院の2施設（いずれも50床弱）の看護師のうち,協力の申し出があった12名を対象とした.（平均年齢35.6歳　小児看護の経験年数の平均5.6年,全員が女性である）2.調査方法：質問紙を用いた半構成的面接法.質問の内容は(1)個人属性(2)これまでに「かかわるのがつらい」と感じた事例についての口述(3)他者からのサポート状況,の聞き取りを行い,さらに心的外傷の尺度としてIES-R(出来事インパクト尺度 2002,飛鳥井）を使用し本人による記入を依頼した.3.データの分析方法:才木によるグラウンデッドセオリーアプローチの手法に従い口述の内容について文章ごとに切片化し類似したものを集めラベル名をつけた.それらをカテゴリーにまとめてカテゴリー名をつけた後,カテゴリー間の関係について「状況」「行為/相互行為」「帰結」に整理した.(以下ラベル名を＜＞,カテゴリー名を《　》で示す)その上でIES-R得点との関連,サポートの状況について考察した.4.倫理的配慮:研究の主旨を看護部に説明し,病棟責任者を通して任意での面接調査を文書で依頼した.調査対象者に倫理的配慮について説明したうえで,文書による同意を得た.

【結果】

共感疲労に至る構造とプロセスについて,事例の一部を表1に示す.子どもや母親の「状況」に対しての「行為/相互行為」では,＜そばにいてあげたい＞＜親密さ＞＜愛情のこもったケア＞＜子どもを受け止めようという思い＞など,子どもと家族（母親）への庇護的感情がラベル名として抽出された.

表1 共感疲労の構造とプロセス

	状況	行為・相互行為	帰結
A	《子どもの状況》 ＜気管切開・褥たさり＞ ＜両親が付き添えない＞ ＜子どもの不安感＞	《ケアの不全感》 ＜コミュニケーション困難によるケアの不全感＞ ＜業務の困難さ＞ ＜そばにいてあげたい気持ち＞ ＜低い達成感＞	《切迫した感情》 ＜切迫した感情＞ ＜感情の表出＞ 《低い自己評価》 ＜感情の後ろめたさ＞ ＜他者から低い評価を受けるのではないかというおそれ＞
B	《子どもの状況》 ＜家族の面会がない＞ ＜予後が悪く退院は不可能＞	《子どもとの親密さ》 ＜「病院の子ども」という親密さ＞ ＜愛情のこもったケア＞	《離別のつらさ》 ＜子どもの死のつらさ＞ ＜離別のつらさ＞ ＜喪失感＞
C	《子どもの状況》 ＜周囲に嘘をつく＞ ＜暴力的で、興奮がちである＞ ＜反省と暴言をくり返す＞ 《看護師への攻撃的な行動》 ＜看護師の言を絞める＞ ＜看護師の身体の欠点を罵る＞ ＜看護師が独身であることをさげすむ＞ 《子どもの看護師に対する苛立ち》 ＜看護師に対する苛立ち＞ ＜謝りたくてもできない、と話す＞	《子どもとのコミュニケーション不全》 《子どもを受け止めたいという思い》 ＜子どもへの許容的態度＞ 《子どもの客観的分析》 ＜子どもの病状（行動）の客観的分析＞ ＜もっと子どもは守られるべきではなかったかという思い＞	《看護師の心的外傷》 ＜身体的苦痛と恐怖＞ ＜身体的侵襲をうけた衝撃＞ ＜罵られたことに対しての衝撃・悲嘆＞ ＜子どもからうけた苦痛＞

また,12例のIER-S得点はRANGE 1～32 平均7.6点であり,カットオフポイントである25点を超えたものは1例であった.また,他者からの介入についてのカテゴリー名を効果的介入・非効果的介入に整理し表2に示した.

表2 他者からのサポートの構成要素

	カテゴリー名	ラベル名	件数
効果的介入	《チームの連携》	＜チームでのかかわり＞	4
		＜感情の共有＞	3
		＜問題の共有＞	2
		＜業務の連絡調整＞	1
	《上司の支持的な介入》	＜感情の支持＞	4
		＜業務の調整＞	1
	《主治医との連携》	＜感情の共有＞	1
		＜主治医の苅藤への理解＞	1
		＜主治医との連携＞	1
	《同僚からの支え》	＜感情の支持＞	3
		＜同僚からの助言＞	2
非効果的介入	《共有する場の少なさ》	＜共有する場の少なさ＞	1
	《上司からの無理解》	＜上司とのコミュニケーション不全	1
		＜上司への不信＞	1

【考察】

語られた内容から看護師と対象の関係に注目すると,小児を看護の対象としている場合,子どもは病者であると同時に一人の子どもとして庇護されるべき存在であるということを看護師が認識していることがうかがわれる.単に患児の予後が良くないことや重症であることのみでなく,未成熟で守り育まれるべき存在であるにもかかわらずそれが阻害されている状況に看護師の感情が強く関連している.この子どもに対する情緒的な反応が共感疲労に対する脆弱性であると考える.調査対象となった看護師は経験年数や病院の規模からみていずれも経験は豊富で専門性においても熟練しているといえるが,感情にまきこまれるという体験に対しては脆弱であるといえる.

今回の調査で多くの看護師が低いIER-S得点を示したことは,事例を経験した時の衝撃はあるものの何らかの回復過程をとり深刻な心的外傷には至っていないと考える.他者からのサポートについてのカテゴリーには《チームでのかかわり》《上司の支持的な介入》があげられ,他者からの感情の支持・共有を受けることによって共感疲労からの回復が図られている.また,看護師が対象に感情移入したりそのことで疲弊したりすることは望ましくないという認識があり,共感疲労に陥った看護師に低い自己評価を与える場合があることがわかった.しかし武井が述べるように,対象から向けられる感情にまき込まれることはむしろ自然な現象であり,それが援助の前提である人間関係をかたちづくる根幹である.したがってこの共感することで疲弊したり心的外傷を負うという事象を看護職者が肯定的に認知したうえでメンタルヘルス向上のためのアプローチを考える必要がある.

【引用文献】

B.H.Stamm,小西聖子ら訳(2003)「二次的外傷性ストレス－臨床家,研究者教育者のためのセルフケアの問題」誠信書房
田尾雅夫,久保真人(1996)「バーンアウトの理論と実際」誠信書房
武井麻子(2001)「感情と看護－人とのかかわりを職業とすることの意味」医学書院

（よねむら　けいこ）

健康な子どもと健康障害をもつ子どものイメージ調査

○林田　りか[1)]　中　淑子[2)]
([1)] 長崎県立大学シーボルト校　[2)] 純真短期大学)
キーワード：学生、看護師、子どものイメージ

【研究目的】

子ども観とは、子どもを本来どのようなものだと考えているのか、子どもたちをどのようにみて、どのようなイメージを描いているのかといったような、人々が子どもに対して抱いている常識的な観念をいう。これまでは、子どもたちは無邪気で純粋無垢な存在であり、大人とは明確な一線を画するものであった。今回対象とする学生のほとんどが昭和 60 年代生まれであり、自らの子ども時代を少産少子時代に過ごした年代である。そのため、現代の学生は、子どもとの接触の機会が少なく、さらに子どもを取り巻く社会的環境の変化から子どもへのイメージが抽象的になり、子どもとの接触経験が少ないほど否定的に捉えられてきているのではないかと考えられる。

本研究では、小児看護学実習を終えた看護学科の 4 年生と病棟で患児と過ごすことの多い看護師と子どものイメージの違いや、どのような存在として子どもを捉えているか、その捉え方に影響を与える因子があるのかということを検討したので報告する。

【研究対象および方法】

対象は長崎県内の S 大学の看護学科の学生 60 名、長崎県内の A 病院の看護師 140 名の研究協力が得られた計 200 名である。調査期間は平成 19 年 7 月～10 月。学生に対する調査は学科長の許可を得て実施し、看護師に対する調査は看護部長の許可を得て、各病棟へ調査票を配布してもらい調査を実施した。どちらも回収は、設置した調査票回収ボックスにて回収した。

調査内容は、学生と看護師に関する属性および子どものイメージと社会的スキルである。子どものイメージ測定は、中嶋らが開発した質問票を活用した。質問票は 45 項目からなり、「とてもそう思う（1 点)」～「とてもそう思わない（4 点)」の 4 段階評定とし得点化した。点数が低いほど、子どもへのイメージを肯定的に捉えている。社会的スキルの測定は、菊池が開発した菊池の社会的スキル尺度（KiSS-18）を用いた。KiSS-18 は、1. 初歩的スキル、2. 高度のスキル、3. 感情処理のスキル、4. 攻撃に変わるスキル、5. ストレスを処理するスキル、6. 計画のスキルの 6 つの下位尺度からなり、18 の質問項目から構成されている。「いつもできない（1 点)」～「いつもできる（5 点)」の 5 段階評定であり、得点が高いほど社会的スキルが高いとした。

倫理的配慮として、回収した調査票は研究以外で使用しないこと、調査票は無記名とし個人が特定されないようにすること、調査によって不利益が生じないこと、調査票は研究終了後に破棄することを明記した。分析方法は、一元配置分散分析および因子分析にて検討し、さらに抽出された因子と社会的スキルの 6 つの下位尺度の相関係数をもとめた。データ解析には、統計パッケージ SPSS11.0J を使用した。

【結果および考察】

調査票の回収率は、学生 58 名（回収率 96.7%）であり、看護師は 133 名（回収率 95.0%）であった。そのうち、有効回答が得られたのは学生 53 名（91.4%）看護師 114 名（85.7%）であった。

1．対象者の属性

学生の年齢は、ほぼ 20 代前半であり、看護師の年齢は、「20 代」42.1%、「30 代」26.3%、「40 代」27.1%、「50 代」4.4% であり約半数を 20 代が占めていた。看護師の勤務年数の割合としては、「1 年未満」5.3%、「5 年未満」31.6%、「10 年未満」13.2%、「10 年以上」50.0%であった。「子どもは好きですか」という問いでは、「好き」が 70.8%、「嫌い」が 2.4%、「どちらでもない」が 26.9%であった。

2、子どものイメージについて

1）学生と看護師のイメージ構造の比較

（1）健康な子どものイメージ

健康な子どものイメージについて、学生と看護師を対象に因子分析を行った結果、6 つの因子を抽出した。学生の第 1 因子は「**両価感情因子**」、第 2 因子は「**遊び因子**」、第 3 因子は「**特性因子**」、第 4 因子は「**生命力因子**」、第 5 因子は「**利己的因子**」、第 6 因子は「**要援助因子**」と命名した。看護師の第 1 因子は「**好意的特徴因子**」、第 2 因子は「**両価感情因子**」、第 3 因子は「**自己中心的因子**」、第 4 因子は「**無邪気因子**」、第 5 因子は「**両親の存在因子**」、第 6 因子は「**要援助因子**」と命名した。

（2）健康障害を持った子どものイメージ

健康障害を持った子どものイメージの因子分析を行った結果、それぞれ 6 つの因子を抽出した。学生の第 1 因子は「**両価感情因子**」、第 2 因子は「**無邪気因子**」、第 3 因子は「**個人差因子**」、第 4 因子は「**行動特性因子**」、第 5 因子は「**自己中心的因子**」、第 6 因子は「**存在因子**」と命名した。看護師の第 1 因子は「**好意的特徴因子**」、第 2 因子は「**接触因子**」、第 3 因子は「**自己中心的因子**」、第 4 因子は「**お利口因子**」、第 5 因子は「**要援助因子**」、第 6 因子は「**両親の存在因子**」と命名した。

3、社会的スキルについて

1）社会的スキルの比較

学生と看護師の社会的スキルには明らかな差は見られなかった。対象学生は 4 年生であり、大学生活やアルバイトなどの経験から差がなかったのではないかと考える。

2）社会的スキルと子どものイメージの相関関係について

健康な子どものイメージにおいて学生では、『初歩的スキル』と「両価感情因子」においてやや強い負の相関がみられ、健康障害を持った子どものイメージにおいては、『初歩的スキル』および『高度のスキル』と「両価感情因子」の間にやや強い負の相関がみられた。看護師では、『攻撃に変わるスキル』と「接触因子」にやや強い負の相関がみられた。『初歩的スキル』、『高度のスキル』、『攻撃に変わるスキル』の高い人ほど子どもをありのまま受け入れる傾向があると示唆された。

（はやしだ　りか・なか　よしこ）

心理学教育の課題と解決策

—福祉・臨床系学生にみる心理学基礎知識の偏倚 —

長塚康弘
(新潟心理学研究所)

キーワード：心理学教育、基礎知識不足、偏倚解決策

目的　心理学の教育・研究のあり方をめぐる論議が多い。たとえば最近4年間の日本心理学会論文集から関連発表題目を抽出するとおよそ次の通りである。

69回(05) well beeing を目指す社会心理学;心理臨床の「基礎」を求めて；聴覚心理学研究の基礎と応用；大学心理学教育への挑戦;「入門心理学」教育を語る;犯罪不安研究の応用。

70 回(06) 宗教心理学的研究の社会寄与；心理学教育を考える;医療における心理学の役割;老年心理学の基礎と応用;入門心理学-役に立つ授業。

71回(07) 心理学教育と社会・資格との接点-心理学教育に何が求められているか；心理学と神経科学との研究協力；認知行動療法とエビデンスに基づく臨床；心理学者の社会的役割を；大学教育の改革。

72 回(08) 学部における心理学教育の質的向上；心理臨床の基礎；心理学教育を考える；心理学教育改革等。

この傾向は十数年前から見られており（長塚、1997)、今夏の東北心理学会63回大会でもｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ企画がみられる。

本研究の目的は、福祉心理・臨床心理系学生の基礎心理学的知識の習得に偏りがあるのではないかとの想定を検討することである。長塚は福祉・臨床心理学系大学で4年次学生の応用心理学(選択科目)を担当している。年度当初には基礎心理学講義を2回行い、応用心理学への導入としている。

方法　第1回講義（54人出席）に「心理学の基礎的知識しらべ」として7項目について説明させた。回答時間は20分。

1. 心理学の創設年、2. 心理学の創始者、3. 精神物理学、4. 精神分析、5. 条件の統制、6. 観察、7. B=f(P,E)

回答用紙の返却を希望した学生（4人）には記名させた。

結果　各回答内容を記述のまま項目毎に示す（同じ回答があった場合には回答の後に回答者数を記す)。回答毎に「;」。

1. 心理学の創設年 150年前位；18世紀；19世紀3人；1800年代3人;19世紀後半;150～200年前;1678年:1897年；15世紀；100年前2人；300年前；1600年頃；1800年代；1950年代；1930年代；1950年；1860年；1840年代；1850年；1986年；19世紀頃4人；1900年代9人。

2. 心理学の創始者フロイト21人、ﾕﾝｸ5人 ｴﾘｸｿﾝ4人、ﾛｼﾞｬｰｽ3人、ｶﾝﾄ、ﾌﾞﾛｲﾗｰ、ﾚｳﾞｨﾝ、ｹﾞｼｭﾀﾙﾄ、ｳﾞﾝﾄ。

3　精神物理学 ユングが発見5人；刺激によって起こる反応など精神と身体の対応の関係；エリクソン2人；物理的環境から精神衛生について考える学問；ロジャース2人；刺激によって起こる反応など精神と身体の対応の関係；物理的環境から精神衛生について考える学問；クレッチマー

4. 精神分析　フロイドが行った心理学療法25人；エリクソンが築いた理論；統合失調症；精神状態を分析する；ﾋｽﾃﾘｰ症状を起こす患者の治療としてﾌﾛｲﾄﾞが創った；ｸﾚｯﾁﾏｰによって研究された；抑圧された感情、無意識などに焦点をあてて分析する；心理査定等で対象の内面を深く知る2人、心理状態の変化を見る；精神状態を知る；内田クレペリン；ロジャース2人；ユング2人。

5. 条件の統制　実験等を行う時対象になる人及びものの個体差が結果に反映されないようにすること；条件づけ；条件を限定すること；実験の再現性；実験室と実際の社会環境は異なるので様々な要素を整える必要がある；測定する時に条件を統一しなければならない；実験を行う上で、環境や道具などの条件を同じにすること；様々な条件が与えられた時人々は統制される；実験で被験者の条件を整えること；ﾗﾝﾀﾞﾑｻﾝﾌﾟﾘﾝｸﾞ;実験で全く条件を持たない群と条件を持った幾つかに分ける；正確な実験結果を得るために条件を揃えること；実験に関係のない要素を切り捨てるためのもの；実験において正確な結果を得るために各被験者への情報提供環境などを統一する；測りたい要因以外の条件を統制すること；実験の条件を一定にしたり、何も操作しない群を作る；正確な実験結果を得るために条件を整えること；実験である条件を加える場合に、それを加えないものを用意して比較できるようにする；証明したい要素以外の条件を等しくする；古典的条件づけ；パブロフの犬；統制群；条件の統制を行わないと実験結果が正しく出ない；妥当性；フロイド；防衛機制。

6.観察　観察学習4人；見て考察すること；自分が関わる（参加型）と関わらない（非参加型）観察がある5人；こどもの遊びに一緒に参加するのが前者、見てるだけが後者；実験者が被験者に働きかけるものと、距離をおいて観察のみを行う方法がある、行動を見ることでｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞの問題等を把握する；被験者の行動、動作を見ることにより、その人の心理面をうかがう；面接などでクライエントの言葉以外の手振りや視線、態度も判断の重要な要素とする；様々な現象を調べる際、実験のように手を加えたり介入をせずにそのままの条件で物事をはかる、被験者がどのような心理に基づいて行動しているかをみること；実験者が被験者の行動を見ることで仮説証明をする。分析などのために被験者を見て記録などすること；ﾌﾞﾙｰﾅｰ；乳幼児を対象にして行うものがある、親との愛着度を測るため個室で初め2人にし、親だけ途中退室させ、子どもの様子を観察する。

7. B=f(P,E) 統計についての用語。他に回答者なし。

考察　「回答なし」(いわゆる白紙答案)が過半数だった。「心理学創設年」を1879年と記した者はなかった。「心理学の創始者」をフロイトとした者が最多でヴントは1人、「精神物理学」についても回答者少数で、ﾌｪﾋﾅｰの名前はなかった。挙げられた名前がほとんど全て臨床心理学者である。福祉・臨床系大学であるから当該領域の教育に力点が置かれるのは当然としても、偏倚が大きすぎると思われる。「条件の統制」と「観察」には回答が多かったが不十分さが目立つた。「B=f(P,E)」では「学んだことも聞いた記憶もありません」という驚くべき回答者が数人あった。

筆者は今田(1996)の「徹底した広範囲にわたる基礎訓練なしには、･･･実際的問題への効果的応用は決してありえない」「目に見える資格を与えることに急で扇の要をしっかりと押さえることを怠れば必ずや将来に大きな問題を残すことになる」という所論に学ぶ者である。同氏の「心理学で常識的なこと」を学ばせることが今後必要な解決策の一つであろう。

引用文献

今田　寛 1996 心理学専門家の養成について：基礎心理学の立場から 心理学評論 39, 5-20.

長塚康弘 1997 真の「応用研究」とはなにか—応用心理学おける2つのアプローチ—日本心理学会61回大会論文集,25

(ながつか やすひろ)

指差喚呼における最適な動作・発声方法の検討

○篠原一光[1)]　木村貴彦[1)注1)]　森本克彦[2)注2)]　久保田敏裕[2)]
([1)] 大阪大学大学院人間科学研究科　[2)]西日本旅客鉄道(株)安全研究所)
キーワード：指差喚呼　確認　記憶　視覚的注意

【研究の目的】 本研究は、鉄道事業を始め国内の様々な産業場面で用いられている指差喚呼の効果について、特に指差動作や喚呼発声の大きさの効果について調べることを目的としている。先行研究（芳賀ほか,1996; 篠原ほか,2009）では指差喚呼実施が確認を確実にする上で有効であることが確認されてきたが、一方で頻繁で大きく行わなければならない指差喚呼がかえって作業者の負担となるという指摘もある。もし指差喚呼の動作や発声を小さくしてもその効果に影響がないのであれば、動作や発声を小さくすることが作業者の負担軽減策の１つとして取り得ると言える。

【方法】 実験参加者として、運転士としての乗務経験を 3 年以上持っている西日本旅客鉄道社員の男性 30 名(平均年齢 26.4 歳)が参加した。

指差喚呼方法としては、動作と喚呼発声の大きさの組み合わせにより、「大・大」「大・無」「小・小」「小・無」「無・大」「無・小」「無・無」の 7 種類が用いられた。

実験では 1 つのセッションは 80 試行で構成され、セッション毎に指差喚呼方法が指定された。試行では最初に、画面右側または左側に喚呼標と信号（進行・赤・注意・減速・警戒のいずれか）が提示され、実験参加者は指差喚呼を行い信号を記銘した。その後信号が消去され、画面中央部でランダムに移動する円形のターゲットを、右手のジョイスティック操作により操作して追従する課題を 7～15sec の間遂行した（トラッキング課題）。また、このターゲットは時々アルファベットに変化し、実験参加者は変化検出時に左手で対応するボタンを押して反応するよう求められた（トラッキング対象変化検出課題）。次に画面右側または左側に灰色の長方形が提示され、実験参加者は最初に見た信号現示が何であったかを想起し、左手で信号に対応するボタンをできるだけ速くかつ正確に押して反応するように求められた（信号想起課題）。

また、自覚疲労と負荷の評価のため、身体各部位の疲労と負荷の程度を 5 段階で主観的に評定する尺度への回答を、実験セッションの前後で実施した。

【結果】信号想起課題の反応時間(Fig.1)について、指差喚呼条件と信号種類を実験参加者内要因とする 2 要因分散分析を行ったところ、信号種類の主効果が有意であり($F(4,116)=13.18$, $p<.01$)、赤、および進行での反応時間が警戒、注意、減速に比べ有意に短くなっていた。交互作用も有意であり($F(24,708)=1.58$, $p<.05$)、単純主効果分析により、各指差喚呼条件における信号種類の効果が「大・大」で有意でないことが示された($F(4,117)=1.87$,$p>.05$)。

信号想起課題のエラー率(Fig.2)について、反応時間と同様の分析を行ったところ、指差喚呼の主効果が有意であり($F(4,116)=3.51$, $p<.05$)、「大・無」「無・無」「小・無」でのエラー率が他の条件に比べ有意に高いことが示された。これは、喚呼を行えば、その大きさにかかわらずエラー発生が抑制されることを示す結果である。また信号種類の主効果も有意であり($F(6,174)=10.64$, $p<.01$)、赤と注意・警戒の間の差が有意であった。交互作用は有意ではなかった($F(24,696)=.97$)。

【考察】以上の結果より、指差喚呼によって信号内容の想起を伴う反応は速くなるとは言えないが、喚呼により信号の想起失敗が抑制されると考えられる。すなわち、記憶に関連する信号想起に対しては、小さな発声による喚呼であってもエラー防止効果があるということである。なお、信号種類において見られる反応時間やエラー率の違いの原因については反応キーの押しやすさ等の実験要因が考えられる。

視覚的注意定位を必要とするが記憶は重要ではない課題を用いた先行研究(篠原ら,2009)では、喚呼よりも指差の効果が顕著に見られたが、記憶課題を用いている本実験では指差に比べて喚呼の方がエラーに対してより強く影響することが示された。このことは、指差と喚呼がそれぞれ視覚的注意、記憶過程に対して影響することを示唆するものである。

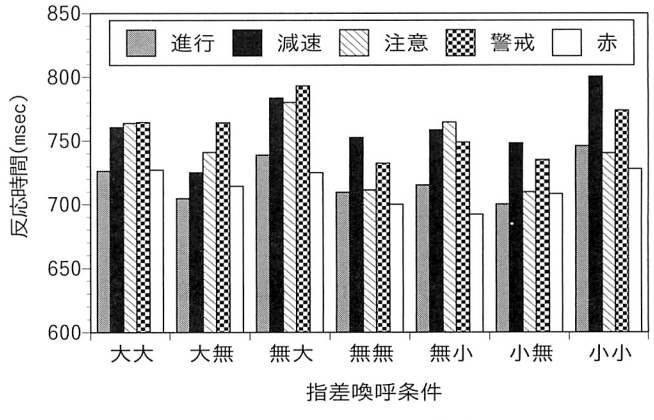


Fig.1. 信号想起課題の反応時間

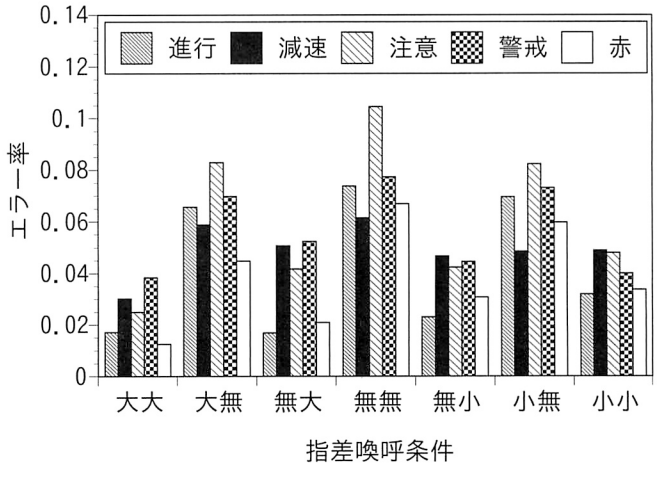


Fig.2. 信号想起課題のエラー率

【引用文献】
篠原一光・森本克彦・久保田敏裕　2009　指差喚呼が視覚的注意の定位に及ぼす影響　人間工学 45 54-57
芳賀繁・赤塚肇・白戸宏明　1996　「指差呼称」のエラー防止効果の室内実験による検証　産業・組織心理学研究　9 107-114
（しのはらかずみつ・きむらたかひこ・もりもとかつひこ・くぼたとしひろ）

*注 1：現所属：関西福祉科学大学健康福祉学部
*注 2：現所属：近畿日本鉄道株式会社

「パーソナルエラーズ・ワーク」についての考察

― 個人における失敗防止のシステム開発 ―

川 浪 淑 子
（ニュー心理プロダクト）

キーワード：パーソナルエラーズ、 失敗分析、 失敗日記

【研究の目的】 人はさまざまな失敗をする。他愛無いものもあるが、大きな事故に繋がり、人生を狂わせたり、周りに甚大な被害を及ぼすものもある。失敗防止の対策が必要であり、これまでも各職場で、その業務内容に合った対策がとられてきた。しかし、それでも事故は起こり続けている。

そこで、今回私は視点を変え、個人に焦点を絞って対策を立ててみた。一個人の全生活における失敗を調査し、その傾向や特徴を把握する。それに基づいてその個人専用の対策案を作り、実践していけば、失敗は防止できるのではないかと考えた。個人の失敗防止ができれば、職場での事故の減少も期待できる。

本研究の目的は個人における失敗防止の一連の方法、システムを開発することである。

「パーソナルエラーズ・ワーク」とは、2006年に筆者がそのシステムにつけた名称である。

【方法】 対象－ 児童から成人まで

第一段階 データ収集

被験者（個人）に以下の要領で失敗日記をつけてもらう。

①失敗のあった日の日付 ②曜日 ③時間 ④天候 ⑤体調 ⑥心理状態 ⑦失敗内容 ⑧感想

期間：1クールを30日とし、1クール以上実施

条件 公的、私的、失敗の大小を問わず全部記録すること。

第二段階 データ分析

被験者と実験者（以下サポータとする）の共同作業となる。被験者が自分のデータ処理に係わることで、自分を客観的に見つめていくことになる。分析は形式分析（数量的）と内容分析とを行う。

・形式分析 日記を整理用紙に記入する。

形式分析整理用紙 表-1

日数	日付	曜日	天気	勤務状況	体調	心理	時間 1	2	3	4	5	概要
1	1/3	日	晴	日勤	○	○	① 11:00	② 日没	③ 23:30			①愛猫が行方知れず ②血を刺す ③ アパート内を探す
2	4	月										
3	5	火	晴	日勤	×	×	⑦ 少々					④寒波で10℃を割る
4	6	水	雨	準夜	⑧	○	⑧ 夜					⑤ 近所の老夫婦で呼ぶ．
5	7	木										
6	8	金	曇	日勤	○	×	⑥ 心配	⑨ 心配	⑫ 夕食			⑥ ボルテAIの電池切れ ⑦ 部に傷を見つける ⑧ アパート、カドねこにかまれる
7	9	土										
8	10	日										

数量的チェックポイント

①失敗総件数 ②総件数／総日数 ③失敗のあった日数と総日数との比率 ④失敗の無かった日数と総日数との比率 ⑤同日内の最多件数 ⑥各曜日ごとの失敗発生率（以下失敗率という）⑦最多曜日 ⑧最少曜日 ⑨天候 晴れ、曇り、雨、雪のそれぞれの日々の失敗率 ⑩体調―良好、普通、不調のそれぞれの日々の失敗率 ⑪心理状態―良好、普通、不調のそれぞれの日々の失敗率 ⑫時間帯―午前、午後、夕食後から就寝までの失敗率

・内容分析 失敗内容を概略化し記入する。右側の空欄に同じ失敗を拾い、まとめていく。次に同類のものを一括りにしてカテゴライズする。個々の失敗に共通している根本的特性を把握する。例えば「確認不足」とか「不注意」によるものというように。

第三段階 防止策を立案 失敗日記再開

分析結果に基づいて対策を立てる。分析直後であると被験者はこの段階の初期では心理的動揺を示す。治まってから、被験者中心で防止案を立案していく。サポータは立案しやすい状況をつくるよう心がける。

立案後、即日から実践に入るが、失敗日記を再びつけてもらう。期間は1クールである。

第四段階 二度目のデータ分析 防止対策前後の比較

第二段階での分析と同様に処理し、各項目について比較検討を行う。やはり共同作業となる。改善が見られた場合は、そのまま続行し習慣化を図るが、ワークは終結となる。改善が捗々しくない場合は対策案の見直しを図る。（この段階は2009年にシステムの有効性を客観的に把握し、かつ被験者の改善効果を確実なものにするために追加したものである。現時点では適用者はいない。）

【結果】

2006年10月～2009年5月まで、成人7人を対象として実施。

実 施 概 要 表―2

被験者No.	1	2	3	4	5	6	7
記録日数	51	42	41	32	32	84	12
失敗率(%)	37	28	113	50	75	99	

（6名が看護師、1名が医療事務。No．7は事故で中止）

ケース紹介例(最多内容と対策)

No.1「確認不足」-しつこいと思われてもいいと割り切って確認する。

No.5 「忘れ」、「不注意」-後見癖をつける。

・失敗多発曜日が各人にあるようである（6人中5人）

・天候も各人によって失敗率が異なり、晴れの日が少ないとは限らないようである。雨の日は皆無と言う者もいた。

・体調不調の日より心理状態不調の日の方が失敗率が高い。

・「忘れ」「不注意」「確認不足」が全体の三大要因であった。

【考察】 ①今回の6名は職業柄か強い関心を示し苦労なく遂行しえたが、このシステムが向かない人々もいることもわかった。②日記記録開始一週間後に心理的変化が起こり始める頃だと考え、「どうですか」と声がけをした。これが安心感を与え、意欲を増すのに役立ったようである。③分析の後期と対策立案の前期では被験者の心理的動揺が起こる。結果についての驚き、当惑、気付かなかった自分との対面、過去への振り返りなど。カウンセリング的場面を呈する。サポータは立案を急がせず暖かく見守るのがよいと思った。④立案は被験者中心に行うが、サポータは実現可能な無理のない案であるように配慮する。 ⑤6名の被験者は「やってみて良かった。自分がよく分かった。気をつければよい点がハッキリしたので気が楽になった」などと述べている。今後新しく加味した［第4段階比較］までを実施し、より確実な防止とシステムの完成を図りたい。

【参考文献】 畑村陽太郎 2005「失敗学のすすめ」
畑村陽太郎 2006「だから失敗は起こる」

（かわなみしゅくこ）

安心感を与える自動車運転の定量化

— 同乗者に与える安心感と他の道路ユーザーに与える安心感 —

○中井　宏[1),2)]　臼井　伸之介[1)]
([1)]大阪大学大学院人間科学研究科　[2)]日本学術振興会)

キーワード：安心・運転技能・ドライブレコーダー・指導員評価

【背景】近年、「安全」や「安心」に対する世間の関心が高まっている。一般的に「安全」という言葉は、事故や災害が起こらないという現実の状態を表現するときに、「安心」という言葉は事故や災害についての不安や心配がないという心の状態を表現するときに使われ、両者は必ずしも連動しないとされる(中谷内, 2006)。ここで我が国の交通事情に目を向けた場合、2008年中の交通事故死者数は5155人となり(警察庁, 2009)、第八次交通安全基本計画の目標である死者数5500人以下を2年前倒しで実現するなど、諸研究が安全性向上に寄与してきたと言える。しかし安心という面からの研究は非常に少ない。そこで本研究では、同乗者及び他の道路ユーザーに与える安心を導く要素について、教習所指導員による技能評価及びドライブレコーダーのデータを用いて定量化を試みた。

【方法】月の輪自動車教習所(滋賀県大津市)周辺の公道および場内コースにおいて、ドライブレコーダー一式(あきば商会製 MU-04RD、および小型カメラ 4 台)を搭載した教習車(Honda 製 civic、1660cc、AT)を用いた実験を実施した。走行コースや実験手続き等の詳細は中井・臼井・谷川・藤井(2009)の通りである。なお、参加者は32名の一般男性ドライバーであり、平均年齢は32.5歳(SD = 7.4, 19－50歳)、平均経験年数は13.3年(SD = 8.2, 1－33年)、年間走行距離平均は7997km(SD = 4941, 0－20000km/yr)であった。

指導員が同乗した上で約25分のコースを走行する間、1秒間隔で3軸方向の加速度、GPS情報を利用した速度が記録された。小型カメラは前景、速度計、ドライバーの頭部の様子、足元の様子を撮影した。走行終了後、同乗した指導員は8場面23項目(中井他(2009))について5段階の技能評価を行った。この評価基準は道交法に則って作成し、点数が高いほど運転パフォーマンスが優れていることを示す。また同時に、運転が同乗者及び他の道路ユーザーに与える安心感についても 5 段階で評価を依頼した。ただしこちらは厳密な採点基準を設けておらず、指導員の主観評価である。なお本研究に参加した指導員は、約30年の経験を有する2名であった。

分析には、2 種の安心感評価を従属変数、指導員による技能評価とドライブレコーダーに記録された行動指標を独立変数とし、重回帰分析(ステップワイズ法による変数投入)を行った。行動指標については、最高速度、場内での最高速度、公道の無信号横断歩道上における速度及びその手前でのアクセル戻し、3軸方向のGの最大絶対値、見通しが悪い交差点での頭部確認回数、歩道を横切る際の速度等に注目した。また他車両や歩行者の影響や機器の不具合によって生じた欠損値については、各指標の平均値で代用した。

【結果】同乗者及び他の道路ユーザーに与える安心感評価の平均値はそれぞれ3.13(SD = 0.79)、3.56(SD = 0.95)であった。表-1は、同乗者への安心感に関する分析結果である。横方向へのGが小さかった者や場内での最高速が低かった者、無信号横断歩道手前でアクセルを戻した者、進路変更・車線変更時の安全確認に対して技能評価が高かった者ほど安心感評価が高いことが示された。

次に表-2は他の道路ユーザーへの安心感について示したものである。同乗者に対する安心感と同様に、横方向のGや無信号横断歩道手前でのアクセル戻しが有意に影響し、さらに進路変更・車線変更時の滑らかなハンドル操作や歩道を横切り際の運転に対する技能評価が高いドライバーほど安心感を与える運転ができていたと評定された。

表-1 同乗者に与える安心感

	β	t	p
横G絶対値	−.392	−3.336	.002
場内最高速	−.365	−3.656	.001
無信号横断歩道アクセル戻し	.328	3.257	.003
進路変更時確認の技能評価	.285	2.386	.024

$F(4, 27) = 20.25$, $p < .001$, adj.$R^2 = .713$

表-2 他の道路ユーザーに与える安心感

	β	t	p
無信号横断歩道アクセル戻し	.330	3.066	.005
横G絶対値	−.467	−4.224	.000
進路変更ﾊﾝﾄﾞﾙ操作の技能評価	.399	3.852	.001
歩道を横切る際の技能評価	.236	2.149	.041

$F(4, 27) = 20.10$, $p < .001$, adj.$R^2 = .711$

【考察】運転パフォーマンスに関する指導員の技能評価は、道交法に基づく基準に従って行われた。そのため技能評価は、各ドライバーの安全運転の指標と捉えることができる。ただし安心感評価と有意な関連が認められた技能評価はごく一部に留まり、安心感を導く主要素は、横方向の加速度や横断歩道での停止準備性(アクセルを緩めたり、ブレーキの上に足を置いたりすること)、教習所場内での最高速(当該教習所の場内には制限速度は明示されていない)であることが明らかとなった。このことからルールに従った運転をするだけでは、必ずしも安心をもたらすわけではないと言える。

つまりカーブや交差点での走行速度を落とすことで横方向のGを小さくすれば、乗り心地を含めた安心感が向上すると考えられる。また横断歩道付近において、いつでも止まれる準備し、その準備があることを同乗者や他の道路ユーザーへ伝えることによって安心感が導かれると予想される。

【今後の展望】本研究では、安心感を与える運転行動を、指導員による技能評価及びドライブレコーダーのデータから定量化することを試みた。ただし従属変数とした安心感評価はベテラン指導員によるものであったため、一般の方による評価を用いた同様の研究が今後必要である。

【謝辞】本研究に際して、月の輪自動車教習所の前原勉代表取締役社長をはじめ、藤井秀朗安全教育課長、谷川幸男技能指導課長には献身的なご協力を賜りましたことに心より感謝申し上げます。最後に、実験補助をいただいた大阪大学人間科学部学生の西脇拓人氏にも深謝します。

【引用文献・web 資料】

警察庁 HP 2009 http://www.npa.go.jp/index.htm (2009.6.19 現在)
中井 宏・臼井伸之介・藤井秀朗・谷川幸男 2009 自己評価スキル獲得法に関する一考察 ―一般ドライバーに対する運転評価基準の適正化― 日本交通心理学会第74回大会発表論文集, 17－20.
中谷内一也 2006 リスクのモノサシ NHK ブックス

(なかい ひろし・うすい しんのすけ)

リスクテイキング行動尺度の作成(1)

― 項目の選定と信頼性・妥当性の検証 ―

○森泉慎吾[1)]　臼井伸之介[1)]
([1)] 大阪大学大学院人間科学研究科)

キーワード：リスクテイキング行動，尺度，信頼性・妥当性

【背景と目的】 リスクテイキング行動を規定する一因であるリスク傾向(risk propensity)に関する研究は数多くなされているものの(e.g., Wang, Kruger, & Wikle, 2009; Hatfield & Fernandes, 2009)，個人のリスク傾向を把握できる一般的な尺度は日本に少ない。日本における研究例としては小塩(2001)の大学生向けのリスクテイキング行動尺度(以下，RTBS-U)があるものの，この尺度の信頼性・妥当性はあくまで大学生に限定される。よって本研究では，様々な年齢層，職業の回答者を対象にし，個人のリスク傾向を測定できる一般的な尺度を作成することを目的とする。

【項目候補の作成，選定および信頼性の検証】

項目候補の作成： 日常多くの人に関係すると考えられるリスクテイキング行動やそれに関する態度について，①交通に関わる場面，②身体の健康に関わる場面，③金銭・ギャンブルに関わる場面，④その他日常場面ごとに区別して，計 43 項目作成し，リスクテイキング行動尺度とした。以下，質問項目の選定および信頼性・妥当性の検証を行った。

方法：16 歳から 66 歳までの 374 名(男性 259 名，女性 112 名，不明 3 名)に質問紙調査を行った。なお，回答者の平均年齢は 26.74 歳(SD=12.63)，職業は高校生(36 名)，大学生(179 名)，消防学校学生(75 名)，会社員(84 名)であった。作成した項目について，「あなた自身にどれくらい当てはまるか」という問いに対し 5 件法 (1. 全く当てはまらない～5. 非常に当てはまる)で回答を求めた。

結果および考察：得られた結果に対して主因子法による因子分析を行った。スクリープロット規準等により，4 因子を採用し，再度これらの因子に対してプロマックス回転を行い，因子負荷量が 0.3 以下の項目が削除されるまで再度，回転を行った。なお，複数の因子に渡って 0.2 以上の負荷量を持つ項目は削除した。Table 1 は因子分析の結果である。

結果より，因子負荷量の高い項目に注目し，第 1 因子はギャンブルに関連する「ギャンブル行動」，第 2 因子は状況によって変化やすいと考えられる行動に関連する「状況的行動」，第 3 因子は状況に左右されない個人の一貫した信念や価値観に関連する「確信的行動」，第 4 因子は安全や防犯といった事前の安全確保に関連する「安全行動」と命名した。これらの信頼性を検討するために，クロンバックのα係数を算出した。結果，第 1 から第 4 因子のα係数は，順に.81, .69, .63, .62 となり，全ての因子について一定以上の信頼性を持つものとなった。以上の手続きによって得られた尺度を Risk Propensity Questionnaire(以下，RPQ)と名付けた。

【妥当性の検証】

目的：RPQ の基準関連妥当性の検証。

方法：19 歳から 24 歳の大学生 30 名(男性 15 名，女性 15 名)に対して質問紙調査を行った。平均年齢は 21.1 歳(SD=1.21)であった。また，基準関連妥当性を検証するために，小塩(2001)の作成した RTBS-U への回答を RPQ と同時に求めた。

結果および考察：RPQ の評定の平均値を「敢行得点」とし，因子ごとに算出した。また RTBS-U に関しては小塩(2001)に倣い，「個人的リスク」，「社会的リスク」，「全項目」の 3 変数を算出した。従って，RPQ の 4 変数と RTBS-U の 3 変数との関連を検討するためにピアソンの積率相関係数を算出した。Table 2 の通り，RPQ のほぼ全ての指標において RTBS-U と有意な，もしくは有意傾向の関連を示した。つまり，RTBS-U の得点が高い，すなわちリスク傾向が高いほど RPQ の得点が高くなることが，どの因子に関しても示された。よって，RPQ の基準関連妥当性が示されたと言え，リスク傾向を測定する尺度としての妥当性が示唆された。

【結論および今後の展望】 本研究により作成された RPQ は，個人のリスク傾向の測定において，一定以上の信頼性および妥当性のある尺度である。しかし，本研究では RTBS-U との基準関連妥当性のみしか言及できなかった。よって，実用化を考慮すれば，さらなる妥当性の検証，特に，実際の行動指標と RPQ の関連を検討する必要がある。また，各因子がどのような特性を持っているのかを明らかにすることで，リスクテイキング行動をより詳細に分類することが可能である。従って今後の展望として，コンピュータ課題などを用いた，実行動としてのリスクテイキング行動との関連性の実験的検討，および類似した尺度との比較検討などを数多く行うことが必要であると考える。

【引用文献】

Julie Hatfield & Ralston Fernandes 2009 The role of risk-propensity in the risky driving of younger drivers Accident Analysis and Prevention 41 25-35

小塩 真司 2001 大学生用リスクテイキング行動尺度(RTBS－U)の作成 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学　257-265

X.T. Wang, Daniel J. Kruger, & Andreas Wikle 2009 Life history variables and risk-taking propensity Evolution and Human Behavior 30 77-88

Table 1 因子分析結果(項目削除後)

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
第1因子(α=.81)				
ギャンブルが好きだ	0.91	−0.01	−0.05	−0.02
大金をギャンブルにつぎ込む人の気持ちが分かる	0.72	−0.05	0.10	0.07
もし自分の街にカジノがあったら行ってみたい	0.66	0.07	−0.03	−0.04
何事も「賭け」がないとつまらない	0.54	−0.01	0.17	0.00
ギャンブルは有害だと思う	−0.52	−0.04	0.15	0.00
第2因子(α=.69)				
歩行時、信号のないところで道路を横断する	−0.03	0.66	−0.03	0.08
歩行時、道路を斜め横断する	0.02	0.62	−0.03	0.05
歩行時、赤信号でも車が来なければ渡る	−0.05	0.61	0.09	0.01
夜、無点灯で自転車に乗る	0.05	0.47	−0.08	−0.18
駆け込み乗車をする	0.15	0.35	0.04	0.01
歩きながら携帯電話でメールをする	−0.04	0.34	0.05	−0.15
第3因子(α=.63)				
仮病をよく使う	−0.03	0.04	0.65	0.03
大事な約束を破る	−0.09	0.03	0.57	−0.03
会議など、重要度の高い決められた時間に遅刻する	0.05	0.10	0.49	0.01
試験勉強をあまりせずに、試験に臨む	0.05	−0.14	0.49	−0.07
運動など、日頃体を動かすことが少ない	−0.04	0.03	0.38	0.14
趣味になら、いくらでもお金をつぎ込めると思う	0.07	−0.03	0.34	−0.09
第4因子(α=.62)				
家を留守にする際は、火の元・戸締りなど安全確認を十分にする	0.05	0.02	−0.05	0.71
ほんの少しの間でも、留守になる場合は家の鍵をかける	−0.02	0.00	0.02	0.61
帰宅したら手洗い、またはうがいをする	−0.02	−0.07	0.03	0.42

Table 2 RPQ と RTBS-U の相関係数

RPQ ＼ RTBS-U	個人的	社会的	全項目
ギャンブル行動	0.56**	0.43*	0.59**
状況的行動	0.59**	0.58**	0.70**
確信的行動	0.11	0.65**	0.53**
安全行動	0.39*	0.22	0.36 †

※ **；p <.01, *；p <.05, †；p <.10

(もりいずみ しんご・うすい しんのすけ)

work engagement と職業性ストレスおよび働く目的との関連

○小畑周介(帝塚山大学学生相談室)　森下高治(帝塚山大学院人文科学研究科)

キーワード：産業保健心理学、work engagement、職業性ストレス

【研究の目的】現代社会において職業性ストレスは重大な健康問題となっているが、これまで企業のメンタルヘルス対策は、職業性ストレスなどのネガティブな側面を捉え、それを軽減することを主眼としてきた。ネガティブな側面の軽減させる必要性は言うまでもないが、従業員が活き活きと仕事をし、また企業組織としてのパフォーマンス向上を図るには、ポジティブ要因も評価していきながらメンタルヘルス活動を進める必要がある。仕事に誇りややりがいを感じ、熱心に取り組み、仕事から活力を得て活き活きしている状態を表す概念として work engagement がある。work engagement は、Schaufeli ら(2001)により「仕事に関連するポジティブで充実した状態であり、活力(vigor)、献身(dedication)、没頭(absorption)によって特徴づけられ、仕事全般に向けられた持続的な感情－認知の状態のこと」と定義されている。

本研究では、企業で働く人々の職場のストレス要因とストレス反応、work engagement、心がけている休日の過ごし方、働く目的を、質問紙調査により把握し、個人や組織のパフォーマンスを促進するとされている work engagement と他の要因との関連性について、検討することを目的としている。また、NIOSH 職業ストレスモデルを参考にしながら、work engagement 含めた形でのストレスモデルの検討(Fig.1)を行う。

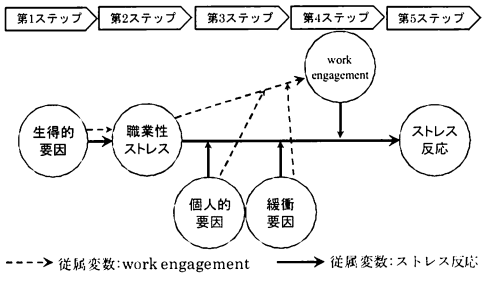


Fig.1　work engagementを含めた職業性ストレスの検討モデル

【方法】

対象　調査対象とした 5 企業に勤務する 710 名（男性 404 名・女性 306 名），平均年齢 38.8 歳。

調査票　職業性ストレス簡易調査票(中央労働災害防止協会,下光・原谷,1998)と work engagement 尺度の短縮版(島津邦訳, 2007)を使用し、さらに「心がけている休日の過ごし方」、「休日の満足度」、「働く目的」に関する質問項目を作成・追加し、「仕事と余暇に関する調査」として全 86 項目で構成。

分析方法　①work engagement と職業性ストレスとの各項目間の相関係数の算出(属性別)、②各尺度得点の算出(部署別)、③従属変数を work engagement およびストレス反応としての階層的重回帰分析。

【結果】Table.1 等の結果より、work engagement とストレス要因の関連について、「感じている仕事の適性度」(r=.440)や「職場での対人関係のストレス」(r=.317)など特定のストレス要因との関連が認められた。work engagement とストレス反応との各項目間では、抑うつ感(r=-.465)、疲労感(r-=-.347)、イライラ感(r=-.334)など、有意な負の相関が認められた。緩衝要因として職場内外の支援では、「上司によるサポート」(r=.334)、「部下によるサポート」(r=.208)の順でともに有意な相関が示された。属性別では、年代別にみた場合、30 歳代未満が最も低く、年代が上がるにつれ、work engagement が高く、分散分析から主効果に有意な差が認められた。配偶者および子どもの有無について、いずれも[あり]の方が work engagement は高く、いずれも有意な差が認められた。働く目的との関連では、「生活の張り合いのため」(r=.499)、「企業と社会のため」(r=.466)、「能力向上・可能性のため」(r=.438)、「人とのふれ合いのため」(r=.406)の項目において、work engagement との正の相関が認められた。階層的重回帰分析を用いた work engagement を含めた職業性ストレスの検討の結果、work engagement はストレス反応への影響力は弱く、ストレス反応に対する緩衝要因と捉えるよりは、職業性ストレスの結果であるという見方が妥当であるという結果となった。

【考察】本研究の結果から、work engagement が、心理的にポジティブな状態を示すことが確認でき、目指すべき方向性となりうるものと考える。また、「対人関係」や「仕事の適性度」、「上司からのサポート」、「社会貢献や自己成長を求めるような働く目的」など work engagement と関連のある要因が明らかになり、さらに、年代や配偶者・子どもの有無などの属性別、および職業別により work engagement と職業性ストレスのパターンに特徴があることも確認でき、職場の活性化へのヒントとなるものと考える。work engagement を含めた職業性ストレスの検討については、さらなる分析によって、work engagement が職業性ストレスへの緩衝要因としての役割があることを見出せる可能性も残していると考える。

【引用文献】Schaufeli, S., & Bakker, A. 2003 Utrecht Work Engagement Scale Preliminary Manual, Occupational Health Psychology Unit, Utrecht University
小杉正太郎・鈴木綾子・島津明人　2006 Work Engagement に関する心理学的ストレス研究からの検討　産業ストレス研究,13,(4),185-189.

（おばたしゅうすけ・もりした たかはる）

Table 1　work engagementと職業性ストレス要因の相関係数

		WE	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8
WE	work engagement									
S1	心理的な仕事の負担（量）	.020								
S2	心理的な仕事の負担（質）	.116 **	.587 **							
S3	自覚的な身体的負担度	.014	.201 **	.221 **						
S4	職場の対人関係でのストレス	-.317 **	.267 **	.147 **	.136 **					
S5	職場環境によるストレス	-.213 **	.061	.062	.306 **	.339 **				
S6	仕事のコントロール度	.279 **	-.191 **	-.146 **	-.294 **	-.305 **	-.305 **			
S7	技能の活用度	-.111 **	-.230 **	-.270 **	.060	.041	.122 **	-.106 **		
S8	感じている仕事の適性度	.440 **	-.078 *	.009	.029	-.324 **	-.169 **	.324 **	-.108 **	
S9	働きがい	.539 **	-.045	.072	.026	-.396 **	-.210 **	.326 **	-.125 **	.616 **

* P<.05,　** P<.001

コーチング法による高齢ドライバー教育の有効性研究

○蓮花一己[1]　向井希宏[2]　太田博雄[3]

（○帝塚山大学心理福祉学部[1]　中京大学心理学部[2]　東北工業大学ライフデザイン学部[3]）

キーワード：高齢ドライバー，コーチング，教育，運転パフォーマンス，指導員評価，自己評価

目的　過去の研究（蓮花他, 2003；太田他, 2004 等）では、高齢ドライバーの行動や意識面に関する研究を遂行し、彼らの行動・意識特性として、1)一時停止行動や左右確認行動などの適切なリスク回避行動が遂行できない傾向、2)ハザード知覚（危険対象の理解と把握）能力が低下している傾向、3)自分の運転能力の過大評価傾向（運転能力が低下しているのに、自己評価が高い傾向）を示した。

本研究の目的は、コーチング法を用いた高齢ドライバーへの教育プログラムを提案し、その効果測定を行うことである。本研究では、運転パフォーマンスの測定を教育前・教育直後及び一ヶ月後に行うだけでなく、統制群を設定してその前後比較を通じて効果検証を行った。第一の仮説として、訓練後に教育群（実験群）の運転パフォーマンスが非教育群（統制群）よりも改善されているとした。第二の仮説として、教育後に実験群の自己評価が低下するとした。

方法　調査場所　調査は三ヶ所の教習所の教室及び教習コースで実施された（北海道札幌市、岩手県一関市、静岡県静岡市）。

調査参加者　65 歳以上の高齢者 114 名（男性 111 名、女性 3 名）が調査に参加した。実験群 62 名、統制群 52 名であった。

運転パフォーマンスの測定　運転パフォーマンスはドライブレコーダを用いて測定した。交通状況及びドライバーの頭部をビデオ撮影し、ドライブレコーダに記録した。走行速度と確認行動（確認回数）をドライブレコーダの記録及びビデオ画像から解析した。走行後に指導員が高齢者の運転行動を評価した。さらに、高齢者自身が同一項目を用いて自身の運転を自己評価した。走行コースは各々の教習所ごとにいくつかの交差点での右左折が含まれるコースを設定した。調査対象者は同一コースを練習で 1 回、本走行として 3 回走行した。このセットを教育前、教育直後、教育一ヵ月後に行った。

質問紙　運転技能の「自己評価調査」として、テスト走行前に、調査対象者に交差点の右左折や一時停止、確認などについて日頃の運転ぶりを思い起こし、17 項目の運転ぶりを 5 段階で評価するよう求めた。また、同じ質問紙をテスト走行後に指導員に評価してもらい、運転技能の「指導員評価」とした。この質問紙を教育前、教育直後、教育一ヵ月後に実施した。さらに、これらの項目を「確認」、「速度」、「合図」、「ポジション」の 4 つの類型にまとめて分析した。

教育プログラムの構成　本調査の教育では、ビデオにより自分の運転振りをチェックした上で、参加者同士の話し合いや指導員の問いかけに答えるような形式で双方向教育を行った。コーチング法を用いて、参加者が自分で問題点に「気づく」ことに焦点が当てられ、指導員の役割として「気づかせる」ように適切な問いかけとフィードバックを行った。

教育時間は約30分であり、調査参加者4人がセットになり、2 名の指導員が 4 人を 2 人ずつのグループに分けて、教育を実施した。教育前後の走行や各種調査表への回答時間を含めると、調査参加者当たりの調査時間は約 3 時間であった。

結果　運転パフォーマンス　運転パフォーマンスの得点と指導員評価には中程度の相関が見られた。また、教育後に高齢者の確認回数が増大し、その効果が一ヵ月後にも継続していた（図 1）。分散分析の結果、群間及び試行間の主効果が有意であった（群間，$F(1, 110)=10.417$，$p<.01$，試行間，$F(2, 220)=18.894$，$p<.001$）。さらに群と試行要因の有意な交互作用も認められた（$F(2, 220)=6.639$, $p<.01$）。

高齢者は教育後に見通しの悪い交差点や一時停止交差点をより低速で走行した。全調査対象者の速度行動の傾向を把握するために、教育直後に速度を低下させた者と上昇させた者に二分したところ、調査対象者の約四分の三が見通しの悪い交差点左折時に速度を低下させていた（図 2 ）。χ 自乗検定で比率に有意な差が得られた。（$\chi^2(1)=12.689$，$p<.001$）．同様の結果は右折時にも一ヵ月後にも得られた。

指導員評価は教育後に上昇し、一ヵ月後も維持されていた。調査対象者の自己評価は教育後に低下したが、一ヵ月後にはほぼ以前の水準に回復した。

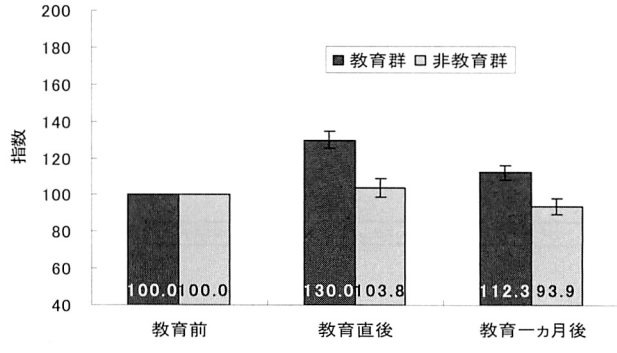


図 1　走行中の総確認回数（指数値）

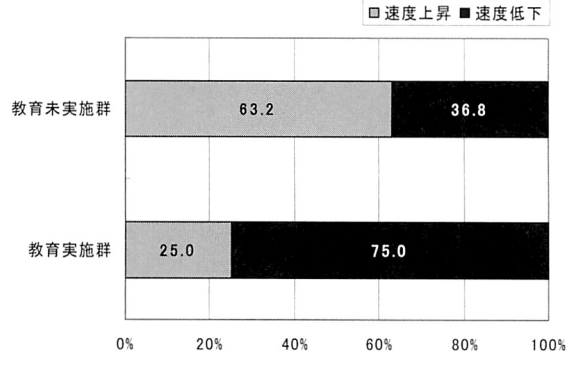


図 2　教育後の見通しの悪い交差点左折時の速度低下と速度上昇ドライバーの比率

考察　第一の運転パフォーマンスに関する仮説及び第二の自己評価についての仮説の両方が検証された。しかし、教育の日常走行への効果はさらに検証が必要である。

引用文献

1．蓮花一己・石橋富和・尾入正哲・太田博雄・恒成茂行・向井希宏 2003 高齢ドライバーの運転パフォーマンスとハザード知覚．応用心理学研 Vol.29,No.1,1-16.

2．太田博雄・石橋富和・尾入正哲・恒成茂行・向井希宏・蓮花一己 2004 高齢ドライバーの自己評価スキルに関する研究．応用心理学研究 Vol.30,No.1,1-9.

（れんげ　かずみ）

集団間関係研究の道具としての仮想世界ゲーム

○柿本　敏克　　細野　文雄
（群馬大学社会情報学部）

キーワード：仮想世界ゲーム電子試作版，状況の現実感尺度，集団同一視

【研究の目的】柿本（2004）は特定の状況におかれた当事者（たち）が，どの程度その状況にリアリティを感じるのかという主観的感覚を測定するため，状況の現実感尺度（柿本，2004）を開発し，その妥当性の検討を行なってきた（例えば柿本，2005，2007）。この状況の現実感という概念は，集団間関係研究の文脈では，方法論的な観点からのみでなく理論的な意味でも重要であるとの指摘がなされている（柿本，2008）。一方，仮想世界ゲーム（広瀬，1997）はリアルな集団間状況を構成することが知られているが（柿本・堀・黒須，2003），状況の現実感という観点からの検討はまだなされていない。また一般的な状況としてだけでなく，「集団（間）状況」としてリアルかを問う意味で，別途その側面を測定する必要もある。そこで本発表では，仮想世界ゲームを集団間関係研究の道具として捉えたときに，それがどの程度集団間状況としてリアルなものであるかを，状況の現実感尺度と集団同一視の程度を測定する質問項目を用いて検討する。

【方法】2つの仮想世界ゲームが2006年および2007年の7月に関東地方の国立大学で実習科目の一部として実施された。2007年のゲームでは，コンピュータ上でプレーできる電子試作版が用いられた。

手続き　仮想世界ゲームの第6セッション終了直前の「世論調査」の一部として，ゲーム参加者に状況の現実感尺度その他への質問の回答を求めた。この尺度に関しては「あなたが仮想世界ゲームについてどう感じるかを，お尋ねします。以下のそれぞれの意見について，最も適当と思う数字に○印をつけて下さい。1は『全くあてはまらない』を，7は『とてもあてはまる』を指します。」と文中で教示し，状況の現実感尺度12項目を示した。電子試作版を用いた2007年の実験では，この部分をモニタ上で「……について，最も適当と思うものを選んで下さい」と教示した上で，「全くあてはまらない」から「とてもあてはまる」までの7段階の限定詞が付された「ボタン」を同じ12項目のそれぞれについて配した。

参加者　参加者は前述の実習科目を受講していた大学生で，2006年が50名，2007年が46名の合計96名であった。

測定項目　用いられた質問項目は「1．私が今参加している仮想世界ゲームは，いつでもやり直しがきくものであると感じる。」「2．私が今参加している仮想世界ゲームに，私はとても注意を引きつけられている。」などの状況の現実感尺度12項目と，「自分はこの地域に属しているという気持ちが強い。」などの集団同一視の度合を測定する3項目（回答方式はそれぞれ1．まったくそう思わない ～5．大変そう思う，の5件法）その他であった。質問項目の詳細は発表当日に示す。

Table 1. 仮想世界ゲームにおける状況の現実感下位尺度得点と集団同一視の度合：平均値（標準偏差）

	ゲーム参加者の平均値（標準偏差）(N=83)
下位尺度	
主体的関心	4.88# (0.98)
一回性	4.15+ (0.82)
参加者の現実感	4.63# (1.16)
集団同一視の度合	3.70# (1.05)

中点（下位尺度得点では4，集団同一視では3）との有意差（p<.05 両側）。+ 傾向差（p<.10 両側）。

【結果】柿本(2007)にならい，状況の現実感尺度12項目から主体的関心尺度，一回性尺度，参加者の現実感尺度の3つの下位尺度得点を算出した（とり得る範囲はそれぞれ1から7）。また集団同一視を測定する3項目への回答を合算し，項目数で除して集団同一視尺度を合成した（クロンバックの信頼性係数 α=.93。とり得る範囲は1から5）。Table 1に各下位尺度得点，および集団同一視の程度の平均値と標準偏差を示す。

状況の現実感の3つの下位尺度のうち主体的関心尺度と参加者の現実感尺度の得点平均，および集団同一視尺度の得点平均は理論的中点よりも有意に大きかった（それぞれ $t(82)$=8.22，4.97，6.12，p<.05）。一回性尺度得点についても同様の傾向であった（$t(82)$=1.68, p<.10）。なお，この分析には欠損値のない83名のデータを用いた。

【考察】状況の現実感尺度得点の結果から，仮想世界ゲームがその電子試作版も含め，ゲーム参加者にとって予想通り概ねリアルな状況を生み出していたと言うことができる。また集団同一視尺度得点の結果から，多くのゲーム参加者がこのゲーム状況を集団（間）状況であると認識し，比較的強く集団との一体感をもっていたことも示唆される。従って，当初の目的はほぼ達成することができた。

但し，以上の分析はそれぞれの変数の平均値を基準にした分析であるため，個人差のレベルで同じことが主張できるかは明確でない。とは言え，物理的に同じ状況であっても人により受けとり方，解釈の仕方が違うのは実験場面であろうと現実場面であろうと同じである。従って，全体としてできるだけリアルな状況になっているかが一つの評価基準となろう。その際，特定のタイプの人びとの間に体系的な差が生じていないかに留意する必要がある。これは今後の課題である。本研究は科研費（21653059）の助成を受けたものである。

【引用文献】

広瀬幸雄(編著)(1997). シミュレーション世界の社会心理学 ―ゲームで解く葛藤と共存― ナカニシヤ出版.
柿本敏克（2004). 状況の現実感尺度構成の試み―電子的集団間コミュニケーション研究に向けて― 日本社会心理学会第45回大会発表論文集
柿本敏克（2005). 状況の現実感の場面間比較 日本社会心理学会第46回大会発表論文集
柿本敏克（2007). 状況の現実感尺度の検討：仮想世界ゲームの実施条件とシナリオ条件の比較 日本応用心理学会第74回大会発表論文集
柿本敏克（2008). 社会的アイデンティティ研究から見た自己の社会性 下斗米淳（編）『自己心理学6 社会心理学からのアプローチ』（金子書房), pp. 65-84.
柿本敏克・堀　正・黒須俊夫（2003). 研究手法としての仮想世界ゲーム ―ゲーム展開事例の報告とともに― 群馬大学社会情報学部研究論集, *10*, 103-113.

（かきもと としかつ・ほその ふみお）

大学生の違反抵抗感測定ツールの作成

— Implicit Association Test を用いて —

○安達　悠子[1,2]　臼井　伸之介[1]
([1]大阪大学大学院人間科学研究科　[2]日本学術振興会)

キーワード：違反、Implicit Association Test (IAT)、大学生

【研究の目的】態度には潜在的態度と顕在的態度がある。これまで態度というと主に顕在的態度を意味していたが，顕在的態度と潜在的態度の両方を用いれば一方だけを用いるよりも多くの説明や理解が得られる。特に，偏見や違反のように社会的望ましさが現れやすい対象への態度では，潜在的態度が果たす役割は大きい。この潜在的態度を簡単かつ有効に測定する代表的なツールが Implicite Association Test(以下，IAT)である(Greenwald & Banaji, 1995)。特に違反行動への潜在的態度を測定することができれば，安全性等の向上に寄与しうると考えられる。そこで，本研究では大学生に身近な違反行動を対象とし，その潜在的な抵抗感を測定する IAT を開発し，その妥当性と信頼性を検証することを目的とした。

【方法】参加者 大学生と大学院生 42 名(男性 22 名，女性 20 名，平均 22.21 歳，*SD* = 2.60，範囲 18 - 31 歳)であった。

課題と手順 IAT には，「一般行動 — 違反行動」，「快 — 不快」をカテゴリにしたパソコン課題を作成した。IAT では，概念間の連合を測定することで潜在的態度を捉える。概念間の連合は，対象概念(e.g., 一般行動 — 違反行動)と対になる特性語(e.g., 快 — 不快)を用いて測定する。具体的手順としては，Table 1 に示す 7 ブロックを行い，各カテゴリに属する刺激(Table 2　一般行動・違反行動ではイラストもあわせて提示した)をパソコン画面左右に用意された同カテゴリに分類する試行を繰り返す。この時，対象概念と特性語がペアで提示されるブロック 3, 4, 6, 7 の反応時間が重要になる。IAT では，連合の強いペアへの分類は連合の弱いペアへの分類よりも容易であるという前提に立つ。つまり，本研究の場合は 3, 4 ブロックは 6, 7 ブロックよりも容易と予想される。また，3, 4 ブロックの反応時間が 6, 7 ブロックに比べて短いほど違反行動と不快の連合が強い，すなわち潜在的な抵抗感が大きいと判断される。尚，練習効果を排するために本 IAT ではブロックの順はカウンタバランスをとった。

IAT 実施後，IAT の中で「違反行動」と「一般行動」カテゴリで用いた刺激に対する絶対評価(わるい(1)～よい(7)，不快(1)～快(7))，著者が独自に作成した違反行動傾向尺度，大学生用リスクテイキング行動尺度(小塩, 2001)を行った。絶対評価は顕在的態度を測定する尺度であった。後者の 2 つはそれぞれ違反とリスクテイキング行動の行ないやすさを示す指標であった。違反行動傾向尺度は，違反傾向を測定する既存の尺度がなかったため，著者が独自に作成した。大学生に身近な違反 22 項目について，「その行為を，ほとんどしない(1)～いつもしている(4)」に回答させた。大学生用リスクテイキング行動尺度は違反と部分的に重複しているリスクテイキング行動を測定する尺度で，リスクテイキング行動 12 項目について，全くしない(1)～よくする(4)を回答するものだった。個別に行い，所要時間は全て合わせて約 30 分であった。

Table.1.　IAT 構成ブロック

ブロック	左	—	右	項目数×セット数	試行回数
1	一般行動	—	違反行動	10×2	20
2	快	—	不快	10×2	20
3	一般行動・快	—	違反行動・不快	20×1	20
4	一般行動・快	—	違反行動・不快	20×2	40
5	違反行動	—	一般行動	10×4	40
6	違反行動・快	—	一般行動・不快	20×1	20
7	違反行動・快	—	一般行動・不快	20×2	40

Table.2.　刺激語のリスト

カテゴリ	概念		特性語	
	一般行動	違反行動	快	不快
刺激	泳ぐ	信号無視	よい	わるい
	貸す	騒音	すき	きらい
	探す	占領	このましい	ひきょう
	着る	ポイ捨て	すばらしい	だめ
	座る	傘さし運転	きれい	きたない

Table.3.　ブロック 4, 7 の平均反応時間(ms)と誤試行数

ブロック	反応時間 (*SD*)	誤試行数 (範囲)
4	549.15 (104.77)	1.64 (0 - 5)
7	712.92 (216.18)	2.33 (0 - 16)

Table.4.　変数間の相関(N = 41)

	M	*SD*	1	2-1	2-2	3	4
1.　IAT得点	0.82	0.28	–	.06	.01	-.36 **	-.21
2-1.　顕在的態度(わるい—よい)	2.73	1.27	–	–	.91 ***	.12	.04
2-2.　顕在的態度(不快—快)	2.38	1.22	–	–	–	.13	.04
3.　違反行動傾向尺度	1.73	0.26	–	–	–	–	.75 ***
4.　大学生用リスクテイキング行動尺度	1.80	0.32	–	–	–	–	–

**p < .05, ***p < .01

【結果と考察】まず，ブロック 4 の正答試行の平均反応時間と誤試行数は，ブロック 7 よりも速く，かつ少なかった(Table 3)。続いて Bosson, Swan, & Pennbacker (2000)を参考にクロンバックのα係数を算出したところ，0.81 と値は高かった。そのため，内的一貫性が高いことが示された。

また，Greenwald, Banaji, & Nosek (2003)に準拠して IAT 得点を算出した。反応時間が 300ms 未満の試行と 10,000ms より長い試行は分析から除外し，誤答試行の反応時間はそのブロックの正答試行の平均反応時間に 600ms 加えた値に置換えた。そして，計算式 {((ブロック 6 の平均 RT)－(ブロック 3 の平均 RT))/ブロック 3、6 の標準偏差＋((ブロック 7 の平均 RT)－(ブロック 4 の平均 RT))/ブロック 4、7 の標準偏差} ×1/2 により，参加者ごとに求めた。IAT 得点は，高いほど違反行動に抵抗を感じていることを意味する。参加者 42 名のうち質問紙の回答に不備があった 1 名を除いた 41 名について，IAT 得点，顕在的態度(わるい—よい)，顕在的態度(不快—快)，違反行動傾向尺度，大学生用リスクテイキング行動尺度の平均値と各変数間の相関を Table 4 に示す。尚，顕在的態度の値は，(一般行動刺激への回答平均値)－(違反行動刺激への回答平均値)を用いた。値が高いほど，違反行動をわるいあるいは不快と感じていることを意味する。まず，IAT 得点と顕在的態度(わるい—よい)および顕在的態度(不快—快)との間に有意な相関は見られなかった。この結果は，潜在的態度と顕在的態度が異なることを示しており，潜在的態度と顕在的態度の両方を用いる有用性が示唆される。次に，IAT 得点と違反行動尺度の頻度評価との間に有意な負の相関が見られ，IAT 得点と大学生用リスクテイキング行動尺度との間には有意な相関は見られなかった。この結果から，本 IAT は違反とリスクテイキング行動を弁別でき，潜在的抵抗感が高いと違反をしないという関連にある可能性が考えられる。また，本研究では当日無断欠席をした参加者がおり，そのうち 4 名は後日改めて参加した。この 4 名全員の IAT 得点は，平均 IAT 得点の 0.83 より小さかった(4 名の平均 IAT 得点 = 0.54，*SD* = 0.19，範囲 0.21 - 0.71)。サンプル数は小さいものの，無断欠席という実際の違反行動をした参加者の IAT 得点が低かったことは違反抵抗感 IAT の妥当性を支持すると言えるだろう。　　(あだち ゆうこ・うすい しんのすけ)

柔道の応用心理学的研究

(柔道に対するイメージ調査の検討⑨)

－都立S特別支援学校の生徒を対象として－

森脇保彦・中島たけし・飯田頴男(国士館大学) 藤田主一(日本体育大学) 橋本昇・徳安秀正(東京有明医療大学)

<ｷｰﾜｰﾄﾞ>柔道イメージ、特別支援、武道

Ⅰ．目的

1964年第18回東京オリンピック大会に柔道が公開競技として採用され、昨年の第29回北京オリンピックまでの44年間で柔道は競技面及び生涯柔道として世界200カ国に普及し飛躍的な発展を遂げてきた。また、平成23年度よりわが国固有の伝統文化の一つである武道が中学校におい必修化されることになった。しかし、柔道がどのようなイメージを人々に持たれているのかについて、われわれは日本応用心理学会、日本武道学会及び世界柔道科学会議において報告してきた。今までの研究から、柔道に対するイメージはおおよそ「心」「技」「体」「伝統」「文化」という大きな因子構造で説明できることが明らかになった。さらに、それぞれの因子を構成している下位因子については対象者によって若干異なることも明らかになっている。今回はこれまでの資料をもとに、都立S特別支援学校の柔道の授業を受講する生徒を対象にイメージ調査の結果について報告するものである。

同学校は主に知的障害児を対象に、昭和34年から柔道が実施されており、10月～12月までの3か月間行われる。指導者は5～6名(有段、無段者)で生徒約30名を指導する。柔道着の着方、正座、礼法、受け身、打ち込み、指導者を投るという内容である。

Ⅱ．研究方法

① 調査対象者：S特別支援学校の生徒58名、平均年齢17歳、標準偏差1.0歳

② 調査材料：これまでに報告した「柔道に対するイメージ調査の検討」の結果に基づいて20項目の質問項目を使用し、フェイスシートに続き、各質問項目を5件法にて回答させた。

③ 調査方法：2008年11月、都立S特別支援学校の柔道授業参加者を対象に指導者に依頼し、質問用紙を配布、実施後回収を行った。

Ⅲ．結果と考察

得られた資料を全て得点化し、記述統計に続き相関行列を計算の後、不完全主成分分析を施し、固有値1.0以上の主成分についてﾉｰﾏﾙ・ﾊﾞﾘﾏｯｸｽ基準による直行回転を適用して多因子解を求めた。

因子分析の結果、累積貢献度は71.513%で、因子負荷量0.4以上の項目を取り上げたところ8因子が抽出された。

第1因子を「柔道体型」因子、第2因子を「日本柔道の本質」因子、第3因子を「試合の流れ」因子、第4因子を「ネガティブな身体的」因子、第5因子を「柔道の魅力」因子、第6因子を「短時間で向上する」因子、第7因子を「戦うイメージ(1)」因子、第8因子を「戦うイメージ(2)」因子と解釈した。

表-1 回転後の因子負荷行列(N=58)

項目	F-1	F-2	F-3	F-4	F-5	F-6	F-7	F-8	共通性
Q4 柔道は相手の力を利用する	0.779								0.768
Q17 柔道をすると筋肉質になる	0.755								0.703
Q16 柔道はカッコいいスポーツである	0.569								0.585
Q2 柔道と言えば谷亮子(旧性：田村)である		0.789							0.753
Q15 柔道は日本の伝統文化である		0.774							0.749
Q3 柔道は日本が発祥の国である		0.714							0.744
Q7 柔道は礼に始まり、礼に終わる精神がある			0.793						0.855
Q18 柔道の勝敗には判定制度は必要だ			0.765						0.726
Q12 柔道は日本が誇れるスポーツである			0.657						0.658
Q13 柔道は痛いスポーツである				0.840					0.766
Q5 柔道は怪我の多いスポーツである				0.772					0.722
Q8 柔道は世界に親しまれているスポーツである					0.842				0.746
Q1 柔道は常に一本の世界である					0.426				0.668
Q10 柔道の試合には制限時間は必要である						0.892			0.818
Q20 柔道をすると精神力・集中力がつく						0.719			0.730
Q11 柔道の創始者は嘉納治五郎である							0.767		0.646
Q14 柔道をすると耳がつぶれる							0.631		0.738
Q9 柔道は格闘技である							0.564		0.735
Q6 柔道をすると手の指が太くなる								0.865	0.793
Q19 柔道は自分を成長させるスポーツである								0.532	0.788
貢献量	2.315	2.118	1.969	1.919	1.703	1.583	1.562	1.530	
貢献度	11.57	10.59	9.848	9.597	8.519	7.915	7.811	7.650	
累積貢献度	11.57	22.16	32.01	41.61	50.13	58.05	65.05	73.51	

Ⅳ．まとめ

以上の結果から、S特別支援学校の授業において、自ら体を動かしてカッコよく決めたい。また、強い身体に憧れる面と武道という固有文化(柔道着の着方、正座、礼法)に強い関心が示されている。反面、自分の身体と怪我等にネガティブな反応が示されている。

我々が従来から研究の対象としてきた大学生、一般社会人、柔道専攻学生等の柔道イメージと、特別支援学校生が持つイメージ（因子構造）の間に多少相違がみられ。この事実は、おそらく特別支援学校生とは純粋に指導者から習得した柔道(講義、実技)をそのまま受け入れて構造化していると理解できるかもしれない。

(もりわきやすひこ・なかじまたけし・いいだえいお・ふじたしゅいち・はしもとのぼる・ほりやすひでまさ)

柔道の応用心理学的研究

(柔道のイメージ調査の検討⑨)

－2008年国際障がい者武道円卓会議事例研究－

中島たけし*・森脇保彦*・飯田頴男*・藤田主一**橋本昇***・徳安秀正***

(*国士舘大学 **日本体育大学 ***東京有明医療大学)

＜ｷｰﾜｰﾄﾞ＞　柔道療育、特別支援学校、武道

Ⅰ．目的

1964年第18回東京オリンピック大会に柔道が公開競技として採用されて以来、急激に柔道の普及発展に拍車が掛かり、世界の人々が柔道をいろいろな角度から捉えるようになった。たとえば、競技的（勝利至上主義)、商業主義的、生涯体育的等々である。しかし最近では特に勝利至上主義的になり、勝つことを主に置き、嘉納師範が掲げた理念や理想が薄れてきているように思われる。

元来、柔術は人を殺傷する術として発生したものであるが嘉納師範によって「術」から「道」へと発展し、人格形成の道として現在199カ国に普及発展したのである。今日では競技を主とする競技柔道、生涯スポーツ、生涯武道（柔道）等々であるが、今回は障害者武道（柔道）にスポットをあて、昨年国士舘大学において行われた「2008年国際障がい者武道円卓会議」において報告された、日本で行われている障害武道と北欧の国スウェーデンで行われている障害者武道について事例研究として報告するものである。

Ⅱ．事例報告

（その１）「村井の柔道療育」（理学療法士　東隆史）

＊わらしべ会の柔道は医師である村井正直が身体・精神の発達を目的に始めた。

＊柔道の活動を通して対象者の様々な変化を感じながら日々の稽古に取り組んでいる。

＊「 村井正直博士の軌跡」

1926年香川県高松にて生まれる。

1951年米子医学専門学校（現鳥取大学医学部）卒業。

1957年医学博士の学位取得。東大阪市で村井医院開業。

1966年にイギリス・ロンドンにて行われた「ボバース法講習会」に受講したことに始まる。

1974年英国国立脳性マヒセンターに留学。

1976 年ハンガリー国立肢体不自由児者療育指導者養成大学並びに同研究所に留学。

1978年肢体不自由児療育施設「わらしべ学園」開所、柔道を療育に導入する。

1981年社会福祉法人わらしべ会発足（大阪）

肢体不自由者更生施設、知的障害者更生施設、知的障害者通所授産施設等。その他、グループホーム・ホームヘルパー事業・相談支援センター等在宅サービス支援整備。

1988年社会福祉法人大滝わらしべ会発足（北海道）後にわらしべ会と名称変更

1992年乗馬療育を導入（北海道伊達市大滝区）

1998年各種学校「日本乗馬療育インストラクター養成学校開校」

（その２）「都立Ｓ特別支援学校の現状」

「障がい者教育と柔道」―体育授業の単元学習「柔道」について―（保健体育教諭　角杉昌幸）

１）昭和 22 年創立以来「生活の中で、こまぎれ授業は適さない」を主張する。

２）昭和 34 挌技（剣道・柔道）を取り入れ。部活動として、剣道部、柔道部を実施する。

３）昭和44年体育の単元として「柔道」に取り組む。

「単元のねらい」

①技能の体得と共に、日常生活の安全性を身につける。

②相手を尊重し、礼儀正しい態度や姿勢を身につける。

③柔道着の着脱を通して日常の基本的生活態度を身につける。

（その３)「北欧スウェーデンにおける障害者武道について」（ＡＢＣＤ会長　ポントス・ジョハンソン）

＊「障害者に武道稽古ができるのか！」

＊「障害者による武道稽古はよい効果を生むのか！」

＊「何ができないのかではなく、何ができるのか！」

武道における伝統的な形にとらわれず、われわれは「箱を出て」自由に発想する必要がある。

武道指導者にとって必要なことは、総ての障害に対する知識や情報を知り尽くした博士になることではなく、普通の武道家、家族、医師なのです。

指導者としての私と私の道場生にとって、一緒に稽古をする過程を通じて、何が良い方法で、何が良くないのかがわかるのです。　「ケース　by ケース」

Ⅲ．まとめ

柔道の創始者嘉納治五郎師範の遺訓である「柔道は心身の力を最も有効に使用する道である。その修行は攻撃防禦の練習に由って、身体、精神を鍛練修養し、斯道の神髄を体得することである。そうして是に由って己を完成し、世を補益するのが柔道の修行の究意の目的である。」が、今日の柔道の国際化、多様化等を考えると嘉納師範が理想としていたもとは思われない点もあるが、しかし日本固有の伝統文化の一つである武道が、柔道本来の理念が北欧の福祉国家スウェーデンにおいて障害者に適応されていると推察される。

（なかじまたけし・もりわきやすひこ・いいだえいお ・ふじたしゅいち・はしもとのぼる・とくやすひでまさ）

大学生を対象とした障害者に対する許容度について

豊村　和真)
(北星学園大学社会福祉学部)
キーワード：障害者，意識，許容度

【目的】

ある個人がどの集団（精神障害者，健常者）に属しているかということと，その個人の行動・状態とが独立であるかどうかを検討するために，同じ行動・状態についてその個人が精神障害者の場合と健常者の場合の許容度の違いについて調査する。その際，以下の４つの作業仮説をもうけた。①学部間，また学年の差がみられる。具体的には福祉学部 1.2 年，福祉学部 3.4 年，他学部の中では，福祉学部 3.4 年が最も精神障害者に対する許容度が高い。次点は福祉学部 1.2 年であり，最も許容度が低い学部学年は他学部である。②男性よりも女性のほうが，許容度は高い。③健常者よりも精神障害者のほうが，許容度が高い。④精神障害者であっても健常者であっても，許容されやすい行動・状態と許容されにくい行動・状態の項目は一致する。本報告では，精神障害者許容度と健常者許容度および自己認知の関連性について報告する。

【方法】

[予備調査]

福祉学部大学生および社会福祉専門学校の学生 70 名を対象に,「あなたがイメージする精神障害者の特徴はどのようなものですか？思いつけるだけ自由に記述して下さい」という自由記述形式のアンケートを実施し，得られた回答から内容を勘案して，出現頻度が１のものを除外し，最終的に 26 の分類にまとめた。「情緒不安定」,「理解不能」,「騒がしい」,「対人関係」,「落ち着きなし」,「急に怒る」,「衝動的」,「意思疎通不可」,「普通」,「引き籠もる」,「独り言」,「危害を加える」,「暴れる」,「急に笑う」,「こだわり」,「自虐行為」,「社会不適応」,「無気力」,「無口」,「没頭する」,「急に泣く」,「繰り返す」,「不潔」,「不眠」,「虚言」,「暴言」の 26 項目である。

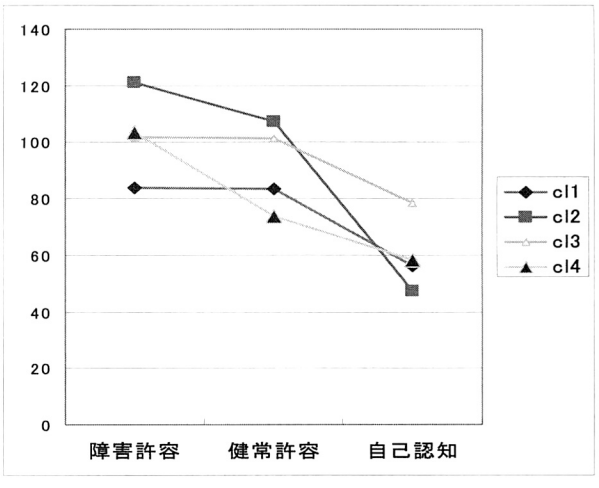
[本調査]

大学生 366 名。性別の内訳は男性 90 名，女性 275 名，不明１名。学部及び学年別では，福祉学部 1.2 年[福祉低群]212 名，福祉学部 3.4 年[福祉高群]90 名，他学部 64 名であった。予備調査によって得られた精神障害者に見られる可能性の高い行動・状態 26 項目について，それぞれ，その人物が精神障害者である場合[障害許容]と，健常者である場合[健常許容]について 1～6 段階で許容度を採点させた。また，各 26 項目に被験者自身がどの程度当てはまるか[自己認知]についても採点させた。また，これらの評価に精神障害者との接触経験や知識がどのように影響を与えるかを分析するために，性別，学年，年齢の他に，接触経験知識に関する 5 項目（「福祉系講義受講経験」,「情報関心度」,「情報摂取量」,「遭遇頻度」,「接触経験」）の質問を行った。

【結果と考察】

障害許容，健常許容，自己認知の各 26 項目について，それぞれ個人ごとに合計点を算出した。この３つの値によりクラスター分析をした。最遠隣法およびウォード法によりクラスター[cl]数を 2～27 に分類し，各 cl に収まる人数およびこれら２つの手法の一致度を勘案して，ほぼ一致した cl 数４を採用した。これ以外の cl 数では，該当する人数がごく少数の cl がどちらかの方法で存在していた。その結果を図１に示す。図１の縦軸は合計得点（最高値は 5×26=130,最低値は 26 である）

図１　クラスター別障害許容・健常許容自己認知認知平均値



cl１と cl３は，障害者にも健常者にも許容的で自己認知は低い型であるが，cl３のほうが全体に受容度が高い。Cl２は自己認知の程度は cl１と同程度であるが，他のどの cl よりも健常許容の程度が高く，障害許容はさらにわずかに高いという型である。cl４は cl１と比較して障害許容が高いという性質を持っている。相対的には cl４が最も障害者に対して許容的である群であると言える。

群別にこれらの cl に属する割合を算出したのが図２である。他学部，福祉高，福祉低の順に多くなるが他学部よりも福祉学部学生は障害者に許容的であるが学年があがるとさらに許容的になるが，同時に健常者についても許容度があがりその程度は障害者に対するよりも高くなることが示された。

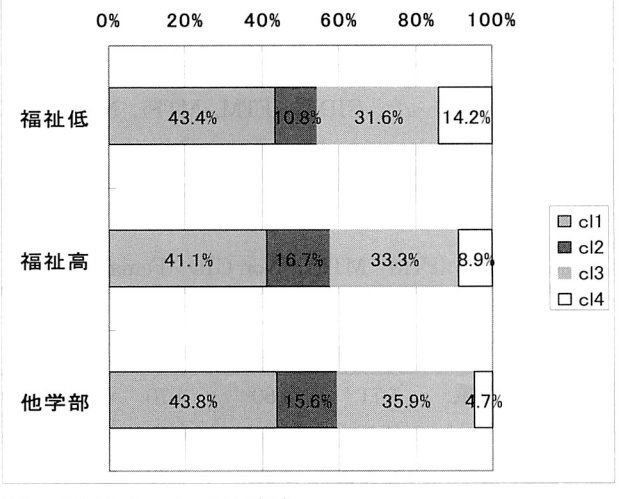


図２　群別クラスター所属割合

なお，本研究は非学会員の室田理恵氏との共同研究である。

性同一性障害者の自意識

—性別適合手術前のMale-to-femaleおよびFemale-to-maleを対象とした質問紙調査—

○長坂晟[1)] 伊藤武彦[2)]

([1)] 明治学院大学大学院心理学研究科 [2)] 和光大学現代人間学部)

Keywords：性同一性障害，MTF，FTM，公的自意識，私的自意識

問題・目的 gender identity disorderの略語であるGIDは医学的疾患であり，生物学的性別（sex）と性の自己意識・自己認知（gender）が一致しない状態である．GIDの特徴として，手術前の外見や戸籍の性別と本人の性自認が合致しないため，カミングアウトやパッシング（外見や態度，振る舞いがいかに反対の性別のものに見えるか，塚田，2004）ができず，他者からの見られ方に対する過敏性，自分自身について考えることが多いことが挙げられる．菅原（1984）は，対人不安意識の強い者及び自己顕示性の著しい者は，他者からのまなざしに対する正反対の反応特徴を持つこと，つまり他者の目に映る自分を強く意識しやすい人は，積極的自己呈示行動か，逆に防衛的・逃避的行動を取りやすいと指摘している．以上のことから，本研究では性同一性障害当事者群（以下，GID群とする）と非当事者群（以下，Non-GID群とする）に分け，心理的な問題として自意識を取り上げ，心理的特徴を明らかにしNon-GID群と比較検討を行い，相違点を見出すこととする．

方法 GID当事者であるFTM34名，MTF37名の計71名と，Non-GID女性42名，男性30名の計72名に対して2004年6月下旬から10月中旬に質問紙を行った．倫理的配慮のもと当事者には直接依頼して記入，回収し，非当事者にも同様に直接依頼，記入されたものを回収した．自意識については，菅原(1984)の21項目7件法から成る自意識尺度を用い公的自意識と私的自意識を測定した．当事者のみ，性同一性障害と治療に関する項目をたずねた．

結果 自意識21項目についてGID当事者とNon-GID143人において因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行ったところ，2因子に分かれ，項目を検討すると，菅原（1984）の因子構造と同一の結果が得られた．F1は公的自意識，F2は私的自意識であった．GID群（FTM，MTF），Non-GID群（Female，Male）における自意識の平均値および標準偏差について，Table.1に示す．

考察 GIDはNon-GIDよりも自意識が高いという結果は，日常生活における周囲からの無理解，同性愛との混同などが原因と考えられる．牛島（1999）によれば，性同一性障害者は周囲からの偏見や誤解されることにより外傷体験をして不安を増強させている．このような外傷体験をしないよう，自分が周囲に与える印象や周囲からの評価を考えながら行動するため，高い公的自意識得点となったのであろう．また，当事者は性同一性障害であるか否か考えることが多く，答えを得ようと来院するケースも多い（阿部ら，2003）．このように当事者はNon-GIDに比べ，生活の中で自己に目を向ける傾向が強く私的自意識がNon-GIDより高くなったのであろう．

そして，公的自意識はMTFよりFTMが高かったが，一つの原因として年齢が考えられる．本調査におけるFTMは低年齢が多く，MTFは高年齢が多かった．周囲を気にし始める思春期頃は，周りからの評価に最も敏感になる時期であり公的自意識は上がる．つまり，高年齢のMTFより低年齢のFTMの公的自意識得点が上がったといえる．さらに，治療段階についても言及できる．MTFは身体的加療を行っており，女性的外観を獲得し性自認に近づきつつあるが，FTMは身体的加療に至っているケースが少ないことからも，身体的外観が性自認と合致しておらず，人からの見られ方に過敏になっているのであろう．また，MTFに比べてFTMは幼少期から性別に違和感を抱いている，いわゆる中核群であるケースが多いとの報告もあり（中塚ら，2003），MTFに比べ早期より周囲の目や評価を気にし始めると考えられる．一方で，支持されなかった私的自意識は，自己内省することであり，個人差が影響しやすいものと考えられる．また，FTM・MTFともに，今の自分や今後の治療方針など，GIDに関する事柄を常に考えており，両者に差がみられない結果となったと推察できる．

主要引用参考文献

菅原健介 1984 自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.

(ながさか のぼる・いとう たけひこ)

Table. 1 GID（FTM・MTF），Non-GID（Female・Male）における自意識の平均値と標準偏差

	FTM (34名)	MTF (37名)	Female (42名)	Male (30名)	多重比較（Scheffe）	GID(71名) (FTM+MTF)	Non-GID(72名) (Female+Male)
公的自意識	5.71	4.80	4.70	4.04	FTM>MTF, Female, Male	5.23(1.32)	> 4.43(.99)
	(1.34)	(1.14)	(.73)	(1.17)	$F_{(3,139)}=12.634^{***}$	$t_{(141)}=4.159^{***}$	
私的自意識	5.75	5.30	4.83	4.25	FTM>Female, Male	5.52(.78)	> 4.59(.94)
	(0.69)	(.08)	(.62)	(1.17)	FTM, MTF, Female>Male	$t_{(141)}=6.442^{***}$	
					$F_{(3,139)}=19.659^{***}$		

*** p< .001

言語連想検査とPAC分析を用いたコンプレックスの検討

－個人別態度構造の分析におけるコンプレックス語の研究－

赤川　力

（長崎県スクールカウンセラー）

キーワード：コンプレックス、言語連想検査、個人別態度構造の分析

【目的】

“コンプレックス”complex とは，Jung(1973)が人間の通常の意識活動を妨げる心的内容の複合体という意味で“感情によって色付けられた複合体”feeling-toned complex と名付けたものが，後に略されたものである。彼は，人にはそれぞれのコンプレックスがあり，神経症やヒステリーの患者の治療や原因に大きな知見をもたらすとして，その存在を重要視した。そして，コンプレックスを知る方法として，臨床経験から言語連想検査 Word association test(以下，WAT とする)を作り上げた。

わが国での WAT を用いた多くの先行研究は，刺激語や反応語の特徴について統計学的手法を用いたものである。一事例を用いてコンプレックス語(以下、C 語とする)からコンプレックスについて考察している研究は見あたらない。また，Jung(1973)は，刺激語について反応語だけではなく，話し言葉で記録されたものを用いることが望ましいとしている。

そこで,本研究では話し言葉を用いた一事例研究を用いて，感情によって色付けられた C 語からコンプレックスについて検討する。しかしながら，C 語からコンプレックスの全容を話し言葉で表すには限界がある。そこで,検討にあたっては，内藤(1997)が開発した Personal Attitude Construct 分析(以下，PAC 分析とする)を用い，コンプレックス語の個人別態度構造を分析し，さらにその個人別態度構造と C 語についての語りからコンプレックスの現象を検討したい。

【方法】

＜被験者＞男子大学生１名（20 歳）

＜方法＞WAT と PAC 分析

・WAT は 100 語の刺激語から反応語を求め，コンプレックス指標（反応欠如，反応拒否，反応時間の長さ，再認の誤りなど）を基に，刺激語や反応語からコンプレックスを推定するものである（Jung,1973 などを参考)。

・PAC 分析は当該テーマの自由連想，連想項目間の類似度評定,類似度距離行列によるクラスター分析,被験者によるクラスター構造のイメージ解釈の報告，実験者による総合的解釈を通じて，個人ごとの態度やイメージ構造を分析する方法である（内藤,1997)。

＜手続き＞まず WAT を施行した。ここで Jung(1973)のコンプレックス指標にかかる刺激語を採取した。つぎに，その刺激語に PAC 分析を施行した。以下，原則的に内藤（1997）に従い PAC 分析を行った。刺激語はランダムに被験者に提示された。その際，以下のような教示を行った。「あなたは，『刺激語』からどんなイメージが浮かんできますか。頭に浮かんできたイメージや言葉を思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入して下さい」と教示し，カードに記入させた。ついで重要度順に並べさせた。この後，それぞれのカードに記された言葉の組み合わせが言葉の意味ではなく，直感的イメージの上でどの程度似ているかを７段階で評定させた。この親近性データからウォード法でクラスター(以下，Cl. とする)分析し，デンドログラムを析出した。このデンドログラムをもとに被験者に各 CL が併合されている理由，CL 間の違い，単独項目の補足質問，全体のイメージ，プラス・マイナス・ゼロのイメージの聴取を行った。

【結果と考察】

1.各刺激語の個人別態度構造の分析

刺激語『くせ』では，＜無意識的な安定感の希求＞→＜意識的な安定感の希求＞という構造が報告された。CL 構造にて被験者の自我が安定感を求めていると考えられた。そして，「親が緑のものを好まなかった，緑のものにやすらぎを得られる」と語った。これは反動形成であり，親に安心感を求められなかった体験が自我に影響を与えていると考えられた。

刺激語『軽蔑する』では，＜被害的体験＞→＜独裁的集団に対するマイナス感情＞→＜日常的な失態行為＞という構造が報告された。「口をきいてもらえない」「避けられる」など，自身の体験に根ざしていると考えられた。構造では CL2 を挿入することで，防衛である分離を用いたと考えられた。

刺激語『死』では，＜長期的猶予期間における死生観＞→＜短期的猶予期間における死生観＞→＜中期的猶予期間における死生観＞という構造が報告された。そして「友人が交通事故と病気でそれぞれ亡くなった」こと，祖父の死という体験が被験者の死生観に影響を与えたと考えられた。

刺激語『うそ』では，＜個人への危険＞→＜個人と他者への危険＞という構造が報告された。「うそ」「勧誘」という体験などから危険に対して過度に敏感であり，また過敏にならざる得ない自我のあり方が考察された。

2.被験者の語りの変化からみた情動の変化について

刺激語『軽蔑する』では,《声が小さくなる》《声が震えている》《笑う》や，刺激語『うそ』刺激語『死』では,《吃音》の現象がみられた。これは，語りの変化から情動の変化が起こったためと考察された。

3.個人別態度構造の多次元の軸・コンプレックスついて

多次元の軸とは，CL 内に存在するイメージの系統的な繋がりである。刺激語『くせ』では〔安定感の軸〕，刺激語『軽蔑する』では〔優劣の軸〕，刺激語『死』では〔延命の軸〕，刺激語『うそ』では〔危険性の軸〕が認められた。この多次元の軸を刺激語と反応語からなる“外面的関係”に対して，内面的関係,つまりコンプレックス表象そのものと考えられた。

Jung.C.G 1973 The collected words of C.G.Jung.Vol.2 Princeton University Press

内藤哲雄 1997 PAC 分析実施法入門 ナカニシヤ出版

（あかがわ　ちから）

視覚トラッキング課題に対する持続的報知音の影響

○武市尚大[1]・上田真由子[2]・臼井伸之介[1]
([1]大阪大学大学院人間科学研究科　[2]西日本旅客鉄道株式会社安全研究所)
キーワード：モダリティ・視覚・報知音

【研究の目的】何らかの異常事態が発生した場合、警告音が提示されるという事態は数多く起こる。そのような場合、報知音が提示され続けている状況下で作業を行うことを強いられる。聴覚手がかりによる視覚課題への影響についての知見は数多く得られており、視聴覚刺激の提示位置が近い場合には視覚課題の成績を向上させるということが明らかにされている。このことを踏まえると、実際場面上の報知音も視覚的情報の提示位置の近くから提示された方が課題成績を向上させることが考えられる。しかし、今までの研究は視覚ターゲットを提示する前に短時間提示される聴覚刺激の影響を調べたものである。そこで、実際に聴覚刺激を提示し続けた状態で課題を行い、現実場面における警告音の影響を検討した。

【方法】実験協力者：大学生・大学院生 24 名(男女 12 名ずつ、平均年齢 22.50 歳,SD = 2.65)。

装置：視覚刺激は、超単焦点ミラープロジェクタ(NEC ビューテクノロジーWT600J)を用いて実験協力者の前方 130cm に置かれたスクリーンに投影した。また、聴覚刺激は画面両端に画面中央と同じ高さに設置したスピーカーから提示した。

刺激：視覚トラッキング課題のターゲットとして、赤色の円(直径視角 1°)を提示した。トラッキング課題の操作位置を表すリングとして視角 2° の円を提示した。リングはターゲットを内に入れると白、それ以外は緑であった。聴覚刺激は券売機の釣銭取り忘れ注意音を提示した(約 65dB(A))。

課題：本実験ではジョイスティックを操作することによってカーソルを動かし、ターゲットを追従し続ける視覚トラッキング課題を用いた。左右の移動方向は 1 試行中では常に一定であったが、上下方向はランダムであった。また、ターゲットは、最初は画面を 2×4 に分割したスペースのうち、いずれかの中央に提示され、そこから移動した。ターゲットはそれぞれのスペースから逸脱することのないよう移動した。尚、1 試行は 10 秒間で、実験では練習試行を 80 試行と本試行 1 ブロック 30 試行を 6 ブロック行った。

指標：(a)反応時間：ターゲットが提示されてからジョイスティックを倒しはじめるまでの時間を、反応時間として記録した。(b)連続成功：100ms ごとにターゲットがリング内に入っているかを記録し、何回連続で捕捉できていたかを判定した。持続的注意を測定するという目的から最大値を分析した。

実験条件：聴覚刺激に対して内発的に注意を向けやすいか否かによって提示位置の影響が変化するかを検討するため、「聴覚刺激の提示方向からターゲットが多く提示される」と教示する群(以下手がかり群)と、「聴覚刺激は視覚課題とは全く関係ない」と教示する群(以下無関係群)の 2 種類を設け被験者間要因とした。また、被験者内要因として視聴覚刺激提示位置が被験者の正面に対して左右で一致しているか不一致である、あるいは聴覚刺激が提示されない(以下一致性)と、聴覚刺激の提示時間 4、7、10 秒(以下提示時間)の 2 つを設定した。

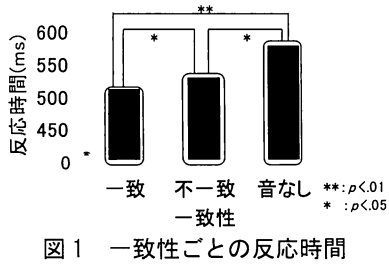


図 1　一致性ごとの反応時間

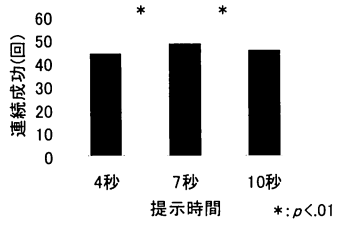


図 2　提示時間ごとの連続成功

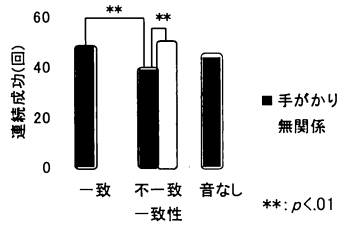


図 3　教示群および一致性ごとの連続成功

【結果】一致性×聴覚刺激の提示時間(以下提示時間)×聴覚刺激の教示群による 3 要因分散分析を行った。(a)反応時間：一致性の主効果が有意であった(F(2,30)=8.44, p<.01)。そこで、多重比較を行ったところ、一致、不一致、音なし条件の順に反応時間が短かった(p<.05; 図 1)。(b)連続成功：教示・提示時間の主効果、教示と一致性の交互作用が有意であった(F(1,22)=5.16, p<.05; F(2,44)=3.61, p<.05; F(2,44)= 5.69, p<.01)。提示時間について多重比較を行ったところ、7 秒の場合に成績が最も良かった(p<.05; 図 2)。教示と一致性の交互作用について多重比較を行ったところ、不一致条件において、無関係群が手がかり群より、また手がかり群では一致条件が不一致条件よりも成績が高かった(共に p<.01; 図 3)。

【考察】反応時間に対して、一致条件の方が不一致条件よりも成績が良かったことから、従来の空間手がかりパラダイム研究同様、聴覚刺激の提示による視覚ターゲット提示位置への反応の促進が存在する可能性が示唆された。ただし、なし条件は聴覚刺激が提示された条件(一致条件・不一致条件)よりも有意に反応時間が長かったことから、聴覚刺激の提示による視覚課題の開始を知らせる効果も存在していることが示された。連続成功に関して、手がかり群では一致および音なし条件の成績が不一致条件の成績よりも良かったことから、聴覚刺激に対して内発的に注意を向ける状況では視聴覚刺激の提示位置が離れていることによる妨害が発生すると考えられる。これは、無関係群では手がかり群のような成績の低下が見られないことからも示されている。以上のことから、課題開始時には何らかの聴覚刺激を提示すると成績が向上し、特に注意を惹きつけたい方向から提示することが望ましいと考えられる。提示時間を長くした場合、7 秒で成績が最もよい点について、今後更に聴覚刺激を提示し続けることの影響について検討を行う必要がある。

(たけち　なおひろ・うえだ　まゆこ・うすい　しんのすけ)

不登校児の親グループにおけるファシリテーター研究

― ファシリテーター関係認知尺度作成に向けて ―

中地　展生
（帝塚山大学　心のケアセンター）

キーワード：不登校，サポートグループ，ファシリテーター，関係認知，尺度作成

【研究の目的】 不登校児がいる家族への効果的な援助方法として，同じような悩みを持つ親たちに，専門家や経験者が加わった「サポートグループ」での援助が挙げられる。このようなグループを中心的に運営するスタッフは「ファシリテーター」と呼ばれることが多い。従来臨床心理学におけるファシリテーター研究は，主としてエンカウンターグループ（以下EG と略す）について行われている。例えば，申（1986）はEG 参加者への質問紙調査を通して，ファシリテーターが参加者にどのように認知されているのかを明らかにする尺度を作成している。このような尺度はファシリテーターが自分のグループ運営や参加者との接し方を振り返るための客観的な指標として貴重なものである。一方，不登校児の親グループにおけるファシリテーター研究の場合，小野（2000）や中地（2007）らによって，実践的な立場からのファシリテーター研究は行われているものの，EG のような実証的な研究はほとんど行われていないというのが現状である。そこで，本研究では EG のファシリテーター研究を参考に，不登校児の親グループにおいて，ファシリテーターがどのように参加者に認知されているのかを明らかにする尺度を作成することを目的とする。

【調査方法】 1. 対象者：小野（2000）が作成した親グループのリストなどを参考にして，各グループの主催者に対して事前に調査の主旨を説明し協力の可否などを求め，43 グループ（参加者 462 名）から協力の承諾を得ることができた。

2. 質問紙構成：申（1986）の EG 用の「ファシリテーター関係認知スケール」（5 件法）をもとに作成した。これは大きく「ファシリテーター行動項目」と「メンバー反応項目」とに分けられる。前者は①「相互作用の促進」（全 5 項目），②「率直さ」（全 3 項目），③「無理強い」（全 2 項目），④「傾聴」（全 2 項目）の 4 因子からなる尺度である。後者は「肯定的感情」（全 6 項目），「依存的不満」（全 3 項目）の 2 因子からなる尺度である。今回，不登校児の親グループ用として，筆者が行った不登校児の親グループの逐語録やセッションアンケートなどから項目を抽出し，①～④に新たに 19 項目を追加した「親グループにおけるファシリテーター行動項目」（5 件法）を作成した。なお，これらの追加項目は臨床心理士 3 名により内容的妥当性の評定を行い，3 名が妥当と認めた項目のみを採用した。

3. 手続き：各グループの主催者宛に質問紙と返信用封筒を人数分送付し，定例会などで参加者に配布を依頼した。参加者は個々人で回答後，封筒に入れ返送してもらうという方法をとった。調査期間は 2008 年 6 月～10 月であった。

【結果と考察】 質問紙の返送があったのは参加者 213 名（男性 15 名，女性 195 名，無記入 3 名）であり，参加者の多くは母親であった。平均年齢 49.2 歳（*SD*=6.2），グループへの参加年数は，2 年未満が 74 名，2 年以上 5 年未満が 47 名，5 年以上が 84 名，無記入が 8 名であった。このうち半年以上の参加経験を持ち，欠損値がない 170 名の親からの回答を対象に「親グループにおけるファシリテーター行動項目」について因子分析（主因子法，Varimax 回転）を行った。解釈可能性などを考慮して，5 因子，23 項目を選択した。結果および各因子の Cronbach の α 係数を表 1 に示す。第 1 因子は，親グループ独自の項目がまとまり，「価値観変化のための関わり」と命名した。第 2 因子は③「無理強い」と④「傾聴」の項目が見られたことから「個々の尊重」と命名した。第 3 因子は①「相互作用の促進」の項目が多く見られたので「相互作用の促進」と命名した。第 4 因子は，親グループ独自の項目がまとまり「情報提供」と命名した。第 5 因は②と同様「率直さ」と命名した。このように，第 2，3，5 因子のように EG と共通する各因子に加え，第 1，4 因子のように親グループ独自の因子の存在が明らかになった。また，これらの 5 因子については，臨床的な先行研究と照らしてもその内容的にも妥当なものと考えられ，Cronbach の α 係数から，第 4，5 因子がやや低いもののある程度の信頼性を持つ尺度であるといえた。なお，「メンバー反応項目」についても，因子分析（主因子法，Varimax 回転）を行った結果，EG と同じく 2 因子に分けることができた。

今後の課題としては，父親のデータを増やしていくことや，縦断的な調査を通して，参加者のファシリテーター関係認知の変化を時系列に見ていくことなどが挙げられる。

表1 親グループにおけるファシリテーター行動項目の因子分析結果

項　目	F1	F2	F3	F4	F5	h2
【価値観変化のための関わり】 α＝.882						
9. 彼は私の視野を広げるような発言をしてくれる	**.80**	.19	.19	.13	.10	.73
10. 彼は子どもとの接し方について具体的なアドバイスをしてくれる	**.76**	.09	.16	.16	.09	.64
31. 彼は私に子どもがちゃんと成長していることを気づかせてくれる	**.75**	.13	.27	.10	.06	.67
19. 彼は不登校についての専門的な知識を提供してくれる	**.70**	.08	.12	.16	.09	.54
6. 彼は私に子どもの不登校についての理解が深まるような手助けをしてくれる	**.65**	.20	.17	.14	.01	.52
15. 彼は私に自分自身の課題について気づかせてくれる	**.59**	.26	.24	.16	.20	.54
23. 彼は私に家族関係を見直すような指摘をしてくれる	**.59**	-.07	.14	-.08	.22	.42
【個々の尊重】 α＝.841						
33. 彼はみんなに無理強いするようなところがある(③)	-.10	**-.70**	-.11	-.04	.02	.51
17. 彼はみんなに自分の意見をおしつける(③)	-.09	**-.68**	-.26	-.10	.04	.55
38. 彼は一人ひとりの異なる意見や考え方を大切にしてくれる	.10	**.67**	.26	.20	.14	.58
34. 彼はみんなの話を理解しようと耳を傾けていた(④)	.17	**.64**	.16	.16	.11	.50
4. 彼はメンバーの言うことをよく聞いてくれた(④)	.27	**.51**	.31	.15	.08	.45
【相互作用の促進】 α＝.859						
13. 彼はメンバー同士のコミュニケーションを円滑にしている(①)	.17	.35	**.73**	.19	.09	.73
18. 彼はそれぞれのメンバーの共通点を見つけて話しやすくしてくれる	.40	.19	**.68**	.26	.07	.74
16. 彼はメンバー相互の意思の疎通をはかるように努めていた(①)	.16	.25	**.61**	.18	.00	.49
28. 彼は少人数だけで話が進んでいく時には、全員が話しに加われるように配慮してくれる	.35	.19	**.55**	.06	-.03	.47
32. 彼はグループに活気をもたらした(①)	.44	.24	**.50**	.05	.21	.55
【情報提供】 α＝.660						
27. 彼は地域にある相談機関の情報を提供してくれる	.12	.04	.20	**.66**	.05	.49
14. 彼は不登校についての講演会や親の会の情報を提供してくれる	.08	.28	.18	**.58**	.10	.46
7. 彼は受験や進学についての地域の情報などを提供してくれる	.38	.17	.05	**.49**	-.01	.42
【率直さ】 α＝.558						
26. 彼は率直に自分を表現している(②)	.15	.30	.08	.03	**.88**	.90
21. 彼は自分の気持ちに忠実に動いている(②)	.32	.27	.05	-.01	**.42**	.35
8. 彼は感情の表し方がストレートだ(②)	.09	-.22	.01	.11	**.40**	.22
説明率(%)	18.87	12.48	10.96	6.06	5.81	

※ 申(1986)の4因子については対応する番号を項目末尾に示す

【引用文献】 申　栄治　1986　エンカウンター・グループにおけるメンバーのファシリテーター関係認知スケール作成の試み　心理学研究 57（1）39-42

中地展生　2007　公立の教育相談機関における不登校児の母親へのグループ・アプローチ　心理臨床学研究 25（1）49-59

小野　修　2000　子どもとともに成長する不登校児の「親のグループ」黎明書房

（なかじ のぶお）

大学生の親密性におけるコーピング選択とコーピング過程の研究

○中川拓也[1)]　森下高治[1,2)]
([1)] 帝塚山大学大学院人文科学研究科　[2)]帝塚山大学心理福祉学部)
キーワード：親密性、ストレスコーピング、コーピング過程

【研究の目的】ストレスフルな状況の一つに、対人関係に起因したイベント、すなわち、対人ストレスイベント（以下、対人イベント）がある。対人イベントは最も遭遇頻度の高いストレスフルな状況であり、本研究の対象である青年にとっては避けられない問題である。対人イベントに対するコーピングは対人ストレスコーピング（以下、対人コーピング）といわれ、わが国において、いくつかの研究が報告されている（加藤 2004, 2007）。例えば、加藤（2000, 2003a, 2007）は、国内外を通じて、初めて、信頼性と妥当性が検証された対人コーピング尺度を作成し、対人コーピングを三つに分類している。ポジティブ関係コーピングは、対人イベントに対して、積極的にその関係を改善し、よりよい関係を築こうと努力する方略群である。ネガティブ関係コーピングは、そのような関係を放棄・崩壊するような方略群である。解決先送りコーピングはストレスフルなイベントにこだわらず、時間が解決するのを待つような方略群である。

従来のコーピング研究では、対人関係を考慮に入れた研究はほとんどなされておらず、対人関係は様々であり、友人関係の親密性によって関係の深さが違う。友人関係といっても顔見知りや知人、友達やさらに親しい友達など様々であり、そして同じ位の強さの対人イベントに遭遇した場合でも、その原因である相手が、顔見知りと親しい友達とではその解決の仕方（コーピング選択）も変わってくるだろうし、その解決の仕方によってストレスをどのくらい感じるか（ストレス反応）も変わってくると考えられる。

そのため、本研究の目的は、ストレスフルなイベントを喚起した友人との親密性の程度により、コーピングとストレス反応との間に関連性があることを検証し、またコーピング選択によってストレス反応がどのように変化するかを検証することである。

【仮説】

仮説１は当事者間の関係が進展している関係では、ポジティブ関係コーピングを行なう程、ストレス反応が高いとする。

仮説２は当事者間の関係が進展していない関係では、ネガティブ関係コーピングを行なう程ストレス反応は低いとする。

【方法】

対象　2008年6月から2009年6月にわたり、大学生を対象に質問紙による調査を実施した。全ての項目に回答した有効回答者300名（男性146名、女性156名、平均年齢19.88歳±1.76歳）を分析対象とし分析した。

調査票　ストレス場面の内容：最近、実際に経験したストレスフルな、友人関係の中で最も不快であったできごとについて自由記述を求めた。親密性を測定する質問項目：親密性（1項目）、類似性（1項目）、自己開示尺度（24項目）、役割期待尺度(18項目)を用いた。対人コーピング尺度:加藤(2000、2003a,2007)によって作成された対人ストレスコーピング尺度34項目のうち、18項目を使用した。同尺度はポジティブコーピング(16項目)、ネガティブ関係コーピング(10項目)、解決先送りコーピング(8項目)の三つの下位尺度からなる。ストレス反応：尾関（1993）の改訂大学生用ストレス自己評価尺度のストレス反応尺度の35項目のうち、28項目を使用した。

【結果と考察】

当事者間の関係

分析に先立ち、当事者間の関係を検討するために、親密性得点、自己開示得点、類似性得点、役割期待得点、それぞれの個人得点をz得点に換算した値に基づき、ユークリッド距離を算出し、ward法によるクラスタ分析を行い、被調査者を4つのクラスタに分類した。クラスタ2はほとんど当事者間の相互作用がほとんどなされていない関係であり、顔見知り・知人のような関係であると考えられる。クラスタ1は関係初期の段階又は友人程度の関係であると考えられる。クラスタ3は発展途上の親しい関係、クラスタ4は進展した親しい関係・親友であると考えられる。

親密性とコーピングの選択

当事者間の親密性とコーピングの使用頻度との関連性を検証するために、それぞれのクラスタにおけるコーピング得点の平均値と標準偏差を算出した。クラスタごとのコーピング選択ではポジティブ関係コーピングでは親密性が高いほど得点が高かった。ネガティブ関係コーピングではクラスタ1が一番得点が高かった。解決先送りコーピングではどのクラスタにおいても得点が高くあまり差が見られなかった。

親密性とコーピング過程

当事者間の親密性の水準によって、コーピングがストレス反応に及ぼす影響に違いがみられるかどうか検証するために、それぞれのクラスタにおけるコーピングとストレス反応との間の偏相関係数を算出した（表1参照）。

表1　対人ストレスコーピングとストレス反応との偏相関

変数	指標	CL2	CL1	CL3	CL4
	標本数	26	87	91	96
ポジティブ		.03	−.02	.03	.06
ネガティブ		.39†	.10*	.23	.21*
解決先送り		−.17	−.07	−.15	−.01

†p<.10,*p<.05

ポジティブ関係コーピングではクラスタ3とクラスタ4で有意な正の影響を与えていなかったことなどから仮説1は支持されなかった。本結果になった理由の一つに性差が考えられる。また親しい関係ではポジティブ関係コーピングを使うとその時点で問題は解決し、ストレス反応への影響がないのではないかと考えられる。

ネガティブ関係コーピングではクラスタ2、クラスタ1において有意な負の影響がみられなかった。そのために、仮説2は支持されなかった。これはストレスコーピングを行った直後である為に、ストレス反応が高くなっていたと考えられ、ストレス反応は短期間に低下するのではないかと考えられる。

【引用文献】

加藤　司(2007). 大学生における友人関係の親密性と対人ストレス過程との関連性の検証　社会心理学研究 23(2), 152-161.

（なかがわ たくや・もりした たかはる）

在職者のストレスに関する研究

―地方自治体職員を対象にして―

○高田誠己[1)]　森下高治[1,2)]　鹿野麗子[1)]

([1)]帝塚山大学大学院人文科学研究科　[2)]帝塚山大学心理福祉学部)

キーワード：職場ストレッサー、ストレスコーピング、ストレス反応

【研究の目的】社会経済生産性本部メンタル・ヘルス研究所による全国の自治体を対象に実施した調査(2007)によれば、約半数の組織体で、最近3年間の「心の病」は「増加傾向」と回答している。年齢別にみると「心の病」は30代が最も多く(34.4%)、次いで40代(30.8%)が多い。そのために、働き盛りである30代、40代のメンタルヘルス対策が重要な課題と言える。

問題1.働き盛りである30代、40代におけるメンタルヘルス問題の特徴を明らかにすること。

問題2.心理学的ストレスモデルにおいて、ストレス反応の低減方略としてのコーピング、(Lazarus & Folkman, 1984)に注目し、対策について検討したい。

【方法】

対象　2008年11月にA県B市の職員358名に配布した。回収人数は249名(回収率69.6%)、そのうち有効回答数は、236名(男性134名,女性102名,有効回答率65.9%)である。

調査票　職業性ストレス簡易調査票(下光, 1998)より14項目を抜粋、これに勤務時間の2項目と将来の不安(雇用に対する不安)の1項目を加えた17項目。ストレス反応尺度―SRS-18(鈴木伸一他, 1997)。就労外ストレッサー―協業に関するストレッサーとしてライフイベント尺度(大塚他, 1999)より抜粋した2項目、家庭生活ストレッサー(尾関, 1993)より抜粋した4項目の計6項目から構成した。この他コーピング尺度―TAC-24(神村他,1995)。ソーシャルスキル尺度―KiSS-18(菊地, 1988)。ゆとり尺度(吉川, 1990を一部改変)。ライフスタイル尺度(NIP研究会,1998の尺度のうち仕事、生活、社会の現状認知9項目)を採用した。

【結果】因子構造の検討

ゆとり尺度について、主因子法バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、3因子12項目が抽出された。第1因子は、経済的ゆとり因子とした。第2因子は、時間的・経済的ゆとり因子、第3因子は、空間的ゆとり因子と名付けた。次に、各質問項目とストレス反応との関連を明らかにするために、相関を調べた結果、職場の対人関係でのストレスの相関が最も高く(R=.516, p<.01)、次に時間的・精神的ゆとり(R=-.468, p<.01)、仕事の適性度(R=.433, p<.01)、将来の不安(雇用への不安)(R=.414, p<.01)という結果になった。

問題1.年齢を軸に5歳刻みで対象の階層を見ると、30歳以下は、対象数が少ないので分析から除外した。31歳以上のストレス反応をみてみると、36～40歳(N=42)が最も高く、次に46～50歳(N=48)、41～45歳(N=39)という結果になった。次に、30代,40代を前半、後半、50代で区分すると5つに分けられるが、就労、就労外ストレッサー各項目得点とゆとり各項目得点を従属変数とする一元配置の分散分析を行った。その結果の一部を紹介する。対人関係ストレス F(4,211)=2.40, p<.10、将来への不安 F(4,211)=3.22, p<.05、家事・育児ストレス F(4,211)=6.78, p<.01、経済的ゆとり F(4,211)=3.96, p<.01での主効果が有意であった。多重比較を行ったところ、対人関係ストレスでは、30代後半>50代、40代後半>50代において、有意に高い傾向にあることが示唆された。将来への不安(雇用への不安)では、30代後半>50代、40代後半>50代において有意に高いことが示された。家事・育児ストレスでは、30代前半>40代後半、30代前半>50代、30代後半>50代、40代前半>50代において、いずれも有意に高いことが示された。経済的ゆとりでは、30代前半>30代後半、30代前半>40代前半、30代前半>40代後半において、いずれも有意で経済的ゆとりが低いことが明らかになった。

問題2.コーピング方略パターンを調べるために、TAC－24の各下位尺度得点を平均項目点に換算し、その得点についてK-means法によるクラスター分析を行った。その結果、4つの解釈可能なクラスターが得られた(図1)。

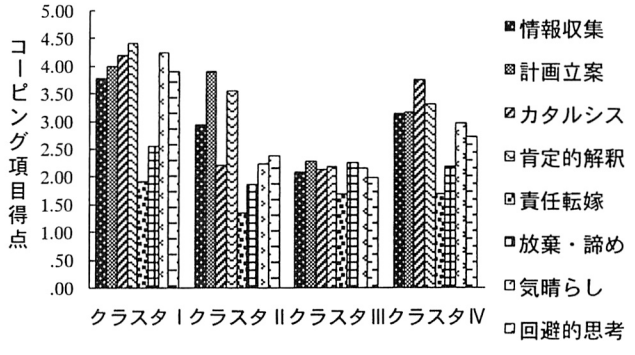


図1. コーピング方略パターンの個人差

クラスターⅠは複数のコーピング得点が高いことから混合型、クラスターⅡは計画立案と肯定的解釈得点が高いことから肯定的解決、クラスターⅢは全てのコーピング得点が低いことから消極的対処、クラスターⅣはカタルシス得点が高いことからソーシャルサポート希求と名付けた。コーピング方略パターンの個人差によってストレス反応にどの様な影響を及ぼすのかを検討した。各クラスターを独立変数、ストレス反応を従属変数とした一元配置の分散分析を行った。その結果、主効果が有意であった F(3,232)=6.49, p<.01。多重比較を行った所、ソーシャルサポート希求パターンの者>混合型パターンの者、ソーシャルサポート希求パターンの者>肯定的解決パターンの者、消極的対処パターンの者>肯定的解決パターンの者において、いずれも、ストレス反応が有意に低いことが示された。消極的対処パターンの者>混合型パターンの者においてストレス反応が有意に低い傾向にある事が示された。

【考察】各年齢層の特徴としては、50代と比べ、30代後半、40代後半において、将来への不安(雇用への不安)が高く、40代後半、50代と比べ、30代前半から40代前半において、家事・育児ストレスが高く、30代前半、50代と比べ、30代後半から40代において、経済的ゆとり低いことが示唆された。今後、それらの特徴を踏まえた対策を考える事が必要となる。問題2.では、日常的なコーピング方略の資源を増やすだけではなく、特に肯定的解釈や計画立案といったコーピング方略を軸にすることで、ストレス反応を低減させる可能性が示唆された。

【引用文献】社会経済生産性本部メンタル・ヘルス研究所(2007)

(たかだ まさみ・もりした たかはる・かの　れいこ)

デートレイプの判断基準における性差の検討

― 強要エピソードに対する反応パターンに注目して ―

○北風菜穂子[1)]　伊藤武彦[2)]　井上孝代[3)]
([1)] 明治学院大学大学院心理学研究科　[2)]和光大学　[3)]明治学院大学)

キーワード：デートレイプ、判断基準、多次元尺度法

【研究の目的】　今日、配偶者や交際相手からの性暴力（以下、デートレイプ）の防止は緊要の課題である。しかしデートレイプは、女性の側に責任が帰属され、レイプにあたらないと判断されやすい（北風・伊藤・井上, 2008; 岩崎, 2003)。また、特定の服装や言動など被害者の側の状況要因、性別や伝統的性役割態度など回答者の個人要因が、レイプの判断に影響を与えることが明らかにされている（Pollard, 1992)。

ところが加害者の側の要因、特に言動の暴力性がレイプの判断に与える影響はほとんど検討されていない。ケリー(2001)は、多くの女性が身体的暴力による無理強いや言語による脅し、精神的圧力を受け、交際相手との性行為を行っているが、それらをレイプと定義していないことを示している。

そこで本研究では、デートレイプのリスク群である大学生の男女を対象に、交際相手からの暴力的エピソードに対する「強要」の判断基準を明らかにすることを目的とする。レイプの判断において、被害者の側の状況要因の影響を受けやすいのは女性よりも男性であることから（Pollard, 1992)、反応の男女差について検討する。

【方法】対象：首都圏文系私立大学の学生、および大学院生56名であった。内訳は、男性25名、女性31名であり、平均年齢は21.63才(*SD*=3.27)であった。

調査期間：2009年5月に行われた。

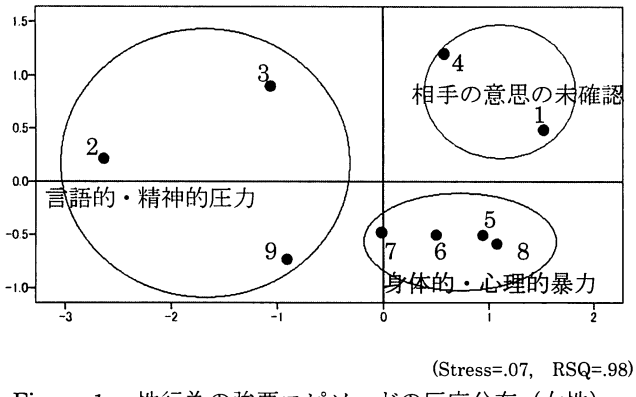
調査方法：縁故法により、質問紙を配布し、郵送で回収した。調査は倫理的配慮のもと、匿名で行われた。

調査内容：藤岡(2006)、ケリー(2001)を参照し、交際相手からの性行為の強要に関する記述を抜粋し、各9項目に対し、「1．まったく無理強いしていない」から「5．かなり無理強いである」までの5段階で回答を求めた。

結果の処理：χ^2検定、クラスター分析、多次元尺度法（MDS）によって、性別によって各項目の反応の分布が異なっているかどうかを検討した。

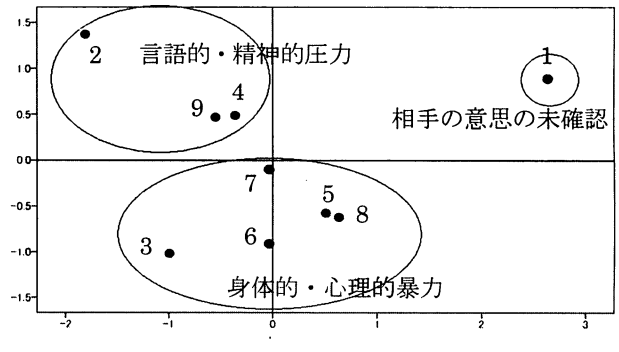
【結果】1．回答を「無理強いしている」、「どちらともいえない」、「無理強いしていない」の3群に分割し、反応の分布に差があるかどうかを検討するため、χ^2検定を行ったところ、すべての項目において有意差が認められた（χ^2=21.3～71.2, P<.000)。「セックスを無理強いしている」とする回答が、「無理強いしていない」とする回答よりも有意に多いことが示された。また性差を検討するため、χ^2検定を行ったが、いずれの項目においても有意な差は認められなかった。

2．男女別にクラスター分析・MDSを行ったところ、男性と女性では異なるカテゴリー分類が示され、MDSにおいても項目の布置がいくつかの項目で異なっていた。男女ともに「意思の未確認」、「言語的・精神的圧力」、「身体的・心理的暴力」の3つのカテゴリーが得られたが、男性では、項目4『疲れて眠ろうとしている相手にセックスする』が「言語的・精神的圧力」にグルーピングされたのに対し、女性では「意思の未確認」にグルーピングされた。（Figure 1、Figure 2）



(Stress=.07,　RSQ=.98)

Figure 1.　性行為の強要エピソードの反応分布（女性）



(Stress=.05,　RSQ=.99)

Figure 2.　性行為の強要エピソードの反応分布（男性）

【考察】　結果から、加害者側の暴力的な言動について、セックスの強要にあたるとする見方が、男女ともに優位であることが明らかになった。今回検討した項目は、実際に経験した女性のほとんどがレイプとは定義しないであろう暴力的行為として抜粋したものであった。しかしそれらが明らかに性行為の強要である、と判断される内容であることが示された。

MDSによって示された項目に対する反応パターンの布置は、おおまかには男女で一致しているが、状況の受け取り方が男女で異なっていると思われる項目が一部存在した。「疲れて眠ろうとしている相手にセックスする」ことは、男性では言葉による無理強いと近似の反応であり、強要の度合いが低く判断されるのに対し、女性では強要の度合いが高い「相手の意思の未確認」と近似の反応を示した。この行為を「圧力」または「強要」として解釈するかどうかには男女の立場の違いが示されたといえる。以上のことから、加害者側の暴力的な言動に対して、セックスを無理強いしているかどうかの判断基準はある程度男女で共通しているが、内容の解釈については性別による違いがあることが示唆された。

【主要引用文献】

北風菜穂子・伊藤武彦・井上孝代 2008 レイプ神話受容と被害者 - 加害者の関係によるレイプの責任判断に関する研究 応用心理学研究 34(1), 56-57.

Pollard, P. 1992 Judgements about victims and attackers in depicted rapes: A review. *British Journal of Social Psychology*, 31(4), 307-326.

（きたかぜなほこ・いとうたけひこ・いのうえたかよ）

文章完成法テスト数量化の試み（２）

○　澤田　正康[1)]　玉井　寛[2)]　近岡　恵子[3)]　三浦　公一[3)]
([1)] (株)ニコンシステム　[2)] 福島学院大学　[3)]キャリアダイナミックス研究所)

キーワード：SCT（文章完成法テスト）パーソナリティ　対人認知

【研究の目的】　ＳＣＴの評価を安定化し評価者の負担を軽減する方法としてＳＣＴ評価のスコアリング化を開発中である。ＳＣＴの評価の特徴は、評価者がＳＣＴの刺激文に対する反応から被験者をイメージして、その人らしさを言語で表現するところにあって、それをスコアリングによって変更するつもりはない。スコアリングの目的は、評価者が被験者のイメージを構成していく過程で参考になる情報を提供することにある。昨年報告した[1)]ように、スコアリングの最初の試みとして、ＳＣＴに熟練した評価者が評価のポイントとしている要因を抜き出し、その項目について評価者がＳＣＴを読んだ印象で数値化するという方法を試みた。項目として上げた要因のスコアとＳＣＴの評価は矛盾するものではなかったし、同じ被験者に対する複数の評価者のスコアに相関が見られるなど、スコアリング化の可能性を示唆する結果は得られたと考えている。しかし、評価者が被験者のイメージを作り上げた後でスコアしている可能性が否定できなかったし、大きくはないが無視できない程度の評価者間の食い違いが見られるなど、考慮すべき問題点もあった。それらの問題点を解決しスコアリングの精度の向上を目指すに当たって、評価者がどのような思考過程を経て被験者のイメージを構成していくのかを調べることにした。評価の思考過程で認知的な負荷が集中する部分とかエラーの起こりやすい部分、あるいは評価者による思考過程の違いや共通点が見えてくれば、そこに焦点を当てて、効果的にスコアリングを改善することができると考えたからである。スコアリングを検証するためのデータ取りは、評価者にかなりの負担をかける。この試みによってスコアリングを改定する回数を減らせれば、評価者の負担軽減にもなる。

【方法】　取り掛かりとして評価者８名に集まってもらい、３時間程度お互いの評価の仕方を話し合ってもらう形でインタビューを行った。その内容を参考に、アンケートを作成し、評価経験１２年から３年の評価者１２名にアンケートに答えてもらった。アンケートへの反応が著者らの意図を反映しないよう、アンケートの質問項目やその狙いを事前にアンケートの対象者に相談したり開示することはなかった。また、アンケートに特定の評価の印象が反映しないように、ＳＣＴの評価依頼が少ない時期に実施した。

アンケートは７５項目からなるが、評価にかける時間やケースを読む回数などの数量を問うもの以外は、例えば“評価でＳＣＴを読むとき、別紙やパソコンに印象のメモを取りながら読むか”といった質問に、１．ほとんどない、２．たまにある、３．わりによくある、４．たいてはそうである、のような４段階を選択する形式である。質問の内容は、評価者がＳＣＴから被験者のイメージを構成しいく過程の認知的な情報処理プロセスが推測できるものを中心に構成した。後に述べるように、評価過程をモデル化する手掛として対人認知研究の知見を利用しようと考えたからである。

【結果】　詳細は発表で報告するので、ここではアンケート結果の概要を述べ、それと対人認知の情報処理モデルとの対比を示すにとどめる。アンケートの結果を評価の過程という観点を中心にまとめると次のようになる。

ａ）数量的な項目を除くと、評価者間での回答の相関係数は0～0.6でまちまちであるが、すべての相関係数は正であり、平均すると0.3程度の弱い相関がある。評価過程に個人差はあるが、共通している部分もあることを示唆している。

ｂ）評価では被験者の全体的な印象を作り上げてから、文章化（後述）の作業にかかるという順序の評価者が多い。

ｃ）全体的な印象を作り上げる過程でどのようなことに注目するかは評価者によって違いがある。

ｄ）被験者に対するイメージがわきにくいときにはＳＣＴを読む回数を増やしたり、しばらくしてから読み直すなど、印象形成を始めからやり直す傾向が見られる。

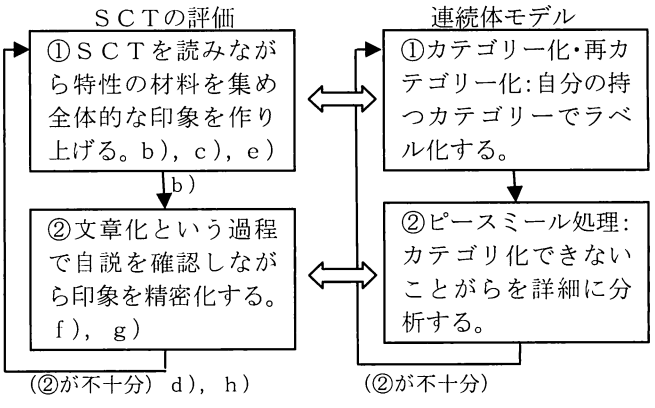
ｅ）全体的な印象形成に要する時間が、評価の全過程に占める割合は、10%～30%程度の評価者がほとんどである。

ｆ）全ての評価者が評価を文章化することに負荷を感じている。(文章化とは被験者のパーソナリティを数百字程度にまとめることを言う。)

ｇ）文章化の過程では、言い回しを重複させないなど文章を作ること自体に労力を使うだけでなく、“書こうとしていることが本人にあてはあまっているか”、“内容に整合性があるか”といった情報の統合や原因帰属など多くの認知的作業を同時に行っている様子がうかがえる。

ｈ）文章化の過程で評価や印象が変わることはまれなことではない。

以上をフィスクとニューバーク(1990)の対人情報処理の連続体モデル[2)]の大まかな流れと対比すると次のようになる。



【考察と今後の展開】　対人情報報処理の流れに類似してはいるが、SCTの評価は日常での印象形成に比べて厳しい制約があり、上の述べたモデルの概要を精密化していく過程でそれらを組み入れていかねばならない。今回のモデルはアンケートという内観的なデータをもとにしているので、評価者の思考過程がSCT評価やスコアリングの結果にどのような形で表れているかといった、客観的なデータの分析を通してモデルの検証をしていく必要がある。評価過程のモデル化を通して、スコアリング化の改良のみならず、新しいアイデアも得られるのではないかと期待している。

【引用文献】１）澤田正康・玉井寛・近岡恵子・三浦公一 2008 –文章完成法テスト数値化の試み（１）- 日本応用心理学会発表論文集　弟７５回　２）山本眞理子・原奈津子(2006) 他者を知る - 対人認知の心理学 - サイエンス社

（さわだ まさやす・たまい ひろし・ちかおか　けいこ・みうら こういち）

筆者識別の正答率と書字運動情報の検討

関　陽子
(科学警察研究所)

[目的]

筆者識別では、識別対象となる筆跡の特徴を比較して、両者が同一の筆者により記載されたかどうかを判断する。筆跡の特徴は、紙の上に残された色材の軌跡という観点から、字画の長さや転折の大きさなどの図形としての特徴ととらえられやすい。筆跡の図形としての特徴は、異なる筆者の間で異なっているので、図形としての特徴は筆者識別に有効である。このことは、ストローク座標をを用いた筆者識別の試みにおいて高い正答率が得られていることからも裏付けられる。しかし、図形的としての特徴が指摘しにくい単純な構造の文字における筆者識別では、図形的な特徴だけでは高い識別率が得られないのではないかと考えられる。

そこで、本報告では、単純な構造のひらがなを用いて、図形的な特徴のみを用いて筆者識別を行ったた場合と、図形的な特徴以外の特徴も用いて筆者識別を行った場合の識別の正答率を比較し、図形以外の情報の利用が識別の正答率に与える影響について考察する。

[方法]

手書きひらがな２字種を各字種ごとに似たものどうしに分類した。分類に使用した手書き文字は、「く」「つ」で、成人６名が各字種６回ずつを、それぞれ１cm四方の正方形の記載枠に１文字ずつ記載したものである。分類は、「く」「つ」それぞれ３６文字を、字種ごとに似たものどうしに分類するという課題でおこなった。

手書き文字を収集した後、各筆跡を１文字ごとに1200dpiでスキャナで取り込み、縦横それぞれを３倍に拡大してプリンタで出力し、分類用筆跡画像データ、36文字×２字種＝７２個を作成した。

一方、各字種ごとに、21箇所の計測箇所を定めた後、各手書き文字について計測箇所の（x, y）座標を測定した。座標測定後、各筆跡の重心を原点として全筆跡の座標値を規格化し、規格化座標値を得た。各筆跡ごとに21箇所の規格化座標値間を結び、もとの筆跡の再構成パターンを作成した。さらに、再構成パターンが、３倍に拡大した手書き文字と同じ大きさになるように大きさを調整してプリンタにより出力した。

文字の分類には、１名の被験者を用いた。被験者に、計測点を結んで再構成した出力パターン３６個を用いて類似の図形に分類させた。分類に際しては、対象となるパターンが文字であることは示さなかった。

この作業の１ヵ月後に、同じ被験者にオリジナルの手書きひらがな文字２字種、各３６個ずつのを提示し、似たものどうしに分類させた。

いずれの分類試行においても、分類作業終了後に、被験者に分類の根拠を答えさせた。

一方、再構成したパターンについては、各字種３６個ずつのパターンについて、それぞれの規格化座標値を用いてクラスター分析を行った。

[結果および考察]

目視による分類では、同じ筆者の筆跡もしくは再構成パターンが同じグループに分類されていた場合に正答とし、異なる筆者のデータが同一グループに混在していた場合は、グループ内で最もデータ数が多い筆者を正しい筆者とし、正しい筆者のデータ数により正答率を求めた。手書き文字の場合は、「く」で100%、「つ」で75%であった。パターンの場合は、「く」では６グループに、「つ」では７グループに分類された。正答率は、「く」で31%、「つ」で57%であった。

クラスター分析では、クラスター数が「く」では６に、「つ」では５になった時点ので分類の正答率を求めた。正答の定義は、目視検査と同様とした。この結果、正答率は「く」では42%、「つ」では56%であった。

被験者の回答から、再構成パターンでは目視分類の手がかりとして、始筆部の形状が手がかりとして重視されていた。これは、始筆部の筆の入りがラインの転折とみなされたためと考えられた。再構成パターンの分類と比較すると、手書き文字では、始筆部の形状は分類の手がかりとして重視されず、文字の縦横比や傾き、終筆部の運筆方法が手がかりとして用いられていた。これは、筆跡を図形としてみた場合はラインの曲直が類似の手がかりとして重視されるが、筆跡としてみた場合は筆跡として意味のある箇所の曲直が重視されたためと考えられた。

再構成パターンの分類の正答率は、クラスター分析によっても目視によっても正答率は高くなかった。一方、手書き文字の目視による分類では、パターン分類に比べて正答率が向上したこと、終筆部の書字方法が手がかりとして用いられたことから、「く」「つ」のような単純な形状の文字を正しく分類するには、始筆や終筆の方法などの運動情報を加える必要があることがわかった。

（せきようこ）

注意配分検査による疲労評価について

○竹内　由則[1)]　荒毛将史[1)]
([1)] 航空医学実験隊)
キーワード：注意配分検査、疲労、コンピュータ検査

【研究の目的】注意配分検査とは第二次世界大戦中にドイツで知能検査として開発された検査である。7×7の升目上に1—49の数字がランダムに配置されており、被検査者が1から49まで昇順に指で差し終えるまでの時間をストップウォッチで測定する。竹内・門尾（1999）はこの検査をコンピュータ上で動作させるプログラムである改良型注意配分検査（modified attention distribution test, mDAT）を開発し、標的毎の反応時間取得を可能とした。

mDATは航空自衛隊において疲労を評価する検査として検討されてきたが、7×7で実施すると被検査者の負担が大きい事や、mDATはコマンドプロンプト上で動作する検査であるため、標的を確実にクリックできたか分かりにくいといった指摘を受けてきた。

そこで、本研究においてmDATの規模を6×6に縮小し、GUI化したもの（mDAT_GUI）を新たに作成した。GUI化に伴う反応特性の変化を検討するための基礎データの収集を目的とし、6×6版mDATとの比較を行った。練習効果を検討するため、5日間の測定を行った。

【方法】

・実験参加者：正常な視力を持つ27歳—46歳の成人男性4名（平均年齢37.75歳，SD=8.88）が実験に参加した。

・検査：mDAT・mDAT_GUI・自覚症しらべを用いた。mDATは6×6の升目に00—35の数字を標的として表示し，00から順にマウスでクリックさせて直前の標的クリックからの経過時間を各標的に対する反応時間として記録する検査であった。プログラムはC++で記述し、コマンドプロンプト上で実行した。mDAT_GUIは同様の検査をVisual Basic 2008を用いGUIとして記述したものであった。

・手続き：2つの注意検査配分検査をわせ，それぞれの終了直後に自覚症しらべを記入させた。これを5日間実施した。検査の実施順は実験参加者間・日程間でカウンタバランスした。

【結果】

・注意配分検査・検査の種類による比較

各標的の反応時間を昇順に並べ、その第3四分位数の平均値を代表値として両検査の日程間変動を比較した（Fig.1.）。両検査において日程間変動は少なく、また各日程において検査間の反応時間に差は認められなかった。

・注意配分検査・遂行順序による比較

各日程において両検査を実施する間隔が5分程度と短かったため、先行検査による後続検査への影響（学習効果・慣れ等）を検討するために、先行検査及び後続検査の第3四分位数の平均を求め、日程毎に比較した。各日程において先行検査と後続検査の反応時間に差は認められなかった（Fig.2.）。

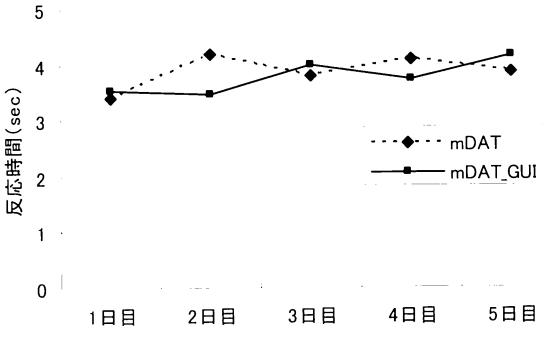


Fig.1. mDAT・mDAT_GUIにおける反応時間の比較

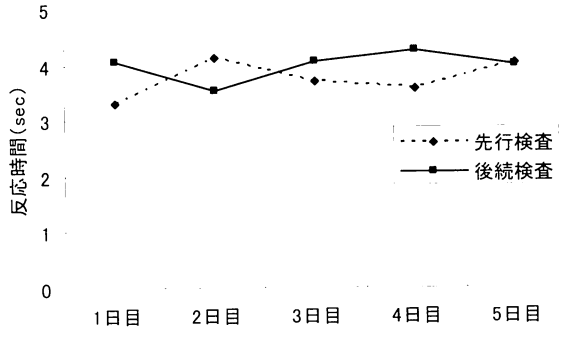


Fig.2. 先行検査・後続における反応時間の比較

・自覚症しらべ

各検査実施直後に測定した自覚症しらべ全25項目の平均得点について、日程間変動を検討した。全ての測定時点において1.1—1.15点の間に収まっていた。

【考察】

自覚症しらべの得点は常に1点台である事から、本研究においては実験参加者がほぼ疲労を感じていない状態で測定していた事が示唆された。従って平常時のデータを蓄積するという目的に合致したデータであると考えられる。

本研究において、mDAT・mDAT_GUI間で反応時間の第3四分位数に差は認められず、5日間の測定における日程間変動も認められなかった。以上からmDAT及びmDAT_GUIは10回程度の実施であれば学習による影響は無い事、mDATからmDAT_GUIへの移行においてパフォーマンスの違いを考慮する必要の無い事が示唆された。

【引用文献】

竹内由則・門尾考是 1999 Response time in the modified Attention Distribution Test(mADT)--development of new performance test 航空医学実験隊報告

（たけうち よしのり・あらけ まさし）

釜ヶ崎におけるホームレスの人々のストレスレベル

— Trauma Screening Questionnaire の結果を中心に —

○金子 潤[1,2] 津田葵[1,2] Gerd Ferdinand Kirchhoff[1,2]
[1] 常磐大学大学院人間科学研究科 [2] 常磐大学国際被害者学研究所

キーワード：ホームレス、ストレスレベル、TSQ-J

【研究の目的】ホームレスの人々のストレスレベルはどの程度か、そして、そのことはホームレスの人々が受けている被害とどのような関係があるのか。Posttraumatic Stress Symptom という視点から、この発表では前者のストレスレベルに焦点をあてて考察する。

図1 ストレスレベル

	ストレス	度数	%	有効%	累積%
有効値	0	72	7.3	10.5	10.5
	1	75	7.6	11.0	21.5
	2	73	7.4	10.7	32.2
	3	70	7.0	10.2	42.5
	4	69	6.9	10.1	52.6
	5	78	7.9	11.4	64.0
	6	64	6.4	9.4	73.4
	7	60	6.0	8.8	82.1
	8	43	4.3	6.3	88.4
	9	44	4.4	6.4	94.9
	10	35	3.5	5.1	100.0
	合計	683	68.8	100.0	
欠損値	欠損合計	310	31.2		
合計		993	100.0		

【方法】質問項目は短く、理解し易く、そして答え易いことが肝要であるので方法論の枠組みを、 Brief screening instrument for post-traumatic stress disorder (Brewin, et al, 2002)の Trauma Screening Questionnaire (以下、TSQ と呼ぶ)を援用した。この質問紙は DSM- IV-TR (2004 年)の PTSD 309.81 をもとに開発され、鉄道衝突事故被害者 41 人と暴力犯罪被害者 157 人の 2 回の調査によって信頼性と妥当性がすでに確認されている(同掲書)。この方法によるとどんな組み合わせでも10項目のうち少なくとも6項目以上に該当するならばストレスレベルが高いとされている(同掲書)。

今回の調査は心的外傷を引き起こすような可能性がある被害を体験したホームレスの人々を対象とした。まず TSQ の英語を日本語に直し、さらに英語に再翻訳し、最初の英語と研究者が試みた第二版が同一内容であるかを比較検討し、最終的に日本語版(TSQ-J)を作成した。調査紙作成においてホームレスの支援団体である NPO スタッフの助言を受けた。

予備調査は大阪市の釜ヶ崎地区で 20 人のホームレスの人々に対面式で行なった。事前に調査者として依頼された NPO 釜ヶ崎の職員 30 名に質問紙に関する説明を行い、その後、質疑応答の時間を持った。本調査は 2009 年 2 月に大阪市が委託する「特別清掃事業」に参加したホームレスの人々1000 人に配布した。回収にあたっては NPO スタッフの支援を受け、回収率は 99.3%であった。

質問事項(TSQ-J)は以下の通りである。

(1)その出来事が心に浮かぶと、あなたはうろたえますか。
(2)その出来事について、あなたをいらいらさせるような夢を見ますか。
(3)ときどき、その出来事が再び起こるような感じがしますか。
(4)その出来事を思い出そうとすると、心が乱されますか。
(5)自分のからだに次のようなことを感じることがありますか。例えば、心臓がはげしく打ったり、汗がでたり、まためまいがしたりする。
(6)眠りにくいまたはぐっすりと眠り込む事が難しいですか。
(7)怒りで、爆発したくなりますか。
(8)集中して何かをすることが難しいですか。
(9)自分や他人に何かが起こるかもしれないと、とても用心深くなっていますか。
(10)驚かされてすぐに、びくっと反応しますか。

回答は「はい」、「いいえ」で答えてもらった。分析には「はい」と答えると 1 を加算する方法をとった。従って、最小値が 0 で、最大値が 10 となる。

【結果】回答者は男性が圧倒的(99.1%)で、年齢は 50-69 歳(95.7%)が一番多かった。ホームレス歴は、57.5%で 1 年以上が最多であった。質問紙の信頼性について、有効値 683 の「Cronbach のアルファ」は 0.813 でありこの尺度の信頼性は高いといってよい。ストレスレベルの平均値は 4.38 である。ストレスレベルのサンプル分布はほぼ漸近線カーブ(Allport curve)を示している。6 をカットオフポイントとすると 36.0%が重度のストレス状態にあるといえる。単純集計では、最も多い症状が睡眠困難 (質問 6) で 60.7%、過度の警戒心(質問 9)で 51.5%、過度の驚愕反応 (質問 10) が 49.5%と続いた。ストレスレベルは、6 以上の強度のストレス状態のホームレスの人々が 36.0%を占めた。

【考察】この研究の結果から約 40%のホームレスの人々が重度のストレス状態にあることが解かった。しかしながら、この数値の意義は同じ枠組みを用いて、対象群(ホームレス以外の人々)との比較分析が必須となる。

日本におけるホームレス研究は人数と分布、ホームレスになった理由や彼らの生活領域や生活状況などが主なものである。しかしながら、被害者学的な視点で研究したものは管見では皆無である。それに比べて、海外においては非常に活発に研究がなされてきている。例えば、アメリカではホームレスに関する大辞書が 2 冊発行されている。被害とストレスレベルとの関係性を見極めるためにこのような基礎的データが現時点で急がれている。

【引用文献】

Brewin, Chris R. et al, 2002, Brief screening instrument for post-traumatic stress disorder, British Journal Psychiatry, 158-162
Kirchhoff, Gerd Ferdinand 2007, Prejudice Against Homeless as a Victimological Problem, 常磐大学人間科学論究, 117-129
高橋三郎・大野裕・染谷俊幸, 2004, DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル, 医学書院

(かねこ じゅん・つだ あおい・きるひほつふ げるど ふぇるでぃなんど)

筆跡の特徴マッピングに基づく筆者識別に関する研究Ⅱ

○菅原　博嗣[1)]　若原　克文[1)]　三井　利幸[2)]
([1)] 愛知県警察本部刑事部科学捜査研究所　[2)]数値解析研究所)
キーワード：筆跡、特徴マッピング、筆者識別

【研究の目的】

筆跡から筆者の特定や判別を行う方法として、演者らはこれまでに筆跡を数値化し、多変量解析法を用いることで筆者識別が十分に可能であることを報告してきた。

そこで、従来の筆跡の記載状態を指摘して行う筆者識別に加えて、筆跡を数値化して行う筆者識別を併用することで筆者識別結果の信頼性を向上させることに繋がると期待している。しかし、これまでの筆跡の数値化からクラスタ分析のデンドログラムや主成分得点の分布の状態では、各筆跡が相対的に表されるために筆者識別に影響を及ぼす可能性があり、多変量解析法を用いた筆者識別の方法を理解しやすく表す必要性がある。

そこで本報では、数値化したデータから相関係数を求め、同一筆者の運筆の安定性や異なる筆者の筆跡が混入した場合の相関係数の違いから筆者識別結果に反映させることを目的とした。

【実験方法】

1．試料

検査筆跡は実務鑑定を想定して「河合伸○」の氏名筆跡とし、問題となる筆跡（UN１）は１回、対照する筆跡(sam.)は５回記載したものを用いた（図 1,2)。

また、実験の過程では異なる筆者が記載した筆跡（UN2）も含めて検討した（図 3)。

筆跡の数値化は各筆跡をスキャナで取り込んだ後、各文字の特徴マッピングから得られる角度、距離情報を用いた。前報では、角度情報のみを測定値としてクラスタ分析、主成分分析を用いて筆者識別を行ったが、今回は、測定点間の距離を計測し、各資料間で相関係数を求めて、筆者識別結果に反映させた。

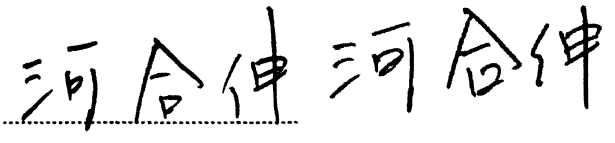


図１　検査筆跡（UN1）　図２　検査筆跡（sam.3）

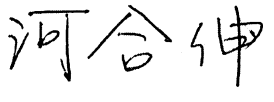


図３　検査筆跡（UN2）

2．筆跡の数値化

検査筆跡については、これまでの手法と同様に大きさを揃えるための基線を定めた後、字画の始筆、終筆や転折を測定点とした。また、距離の計測については、各字画の長さに加え、各字画の始筆間の距離も併せて、合計 36 点を測定値とした。

3．多変量解析

相関係数については、測定値を Microsoft 社 表計算ソフト Excel の分析ツールを用いて求めた。

また、試料から得られた測定値について、クラスタ分析（ジーエルサイエンス社製の多変量解析ソフト「ピロエット」）も行い、これまでの筆者識別結果に反映させ、検討した。

【実験結果】

1．相関係数による分類結果

対象となる筆跡の数値化したデータからは、同一筆者が記載した sam.1 から 5 間の相関係数は平均 0.955（max.0.977,min.0.921）と高く、運筆の恒常性を示す結果となった。次に、sam.1 から 5 と UN1 間においても相関係数が平均 0.918（max.0.927、min.0.909）であり、sam.1 から 5 の筆跡群に UN1 を含めることに矛盾はない。

一方、同一筆者群に包括できる sam.1 から 5、UN1 と UN2 間では、相関係数が平均 0.836（max.0.848、min.0.829）であり、sam.1 から 5 と UN1 の相関係数が示す範囲に UN2 を含めることはできない。

2．クラスタ分析結果

各筆跡の数値化したデータをクラスタ分析し、デンドログラムにより示したところ、図４に示すように sam.1 から 5 に UN1 が結合し、その後に UN2 が結合しており、相関係数による分類を裏付ける結果となった。

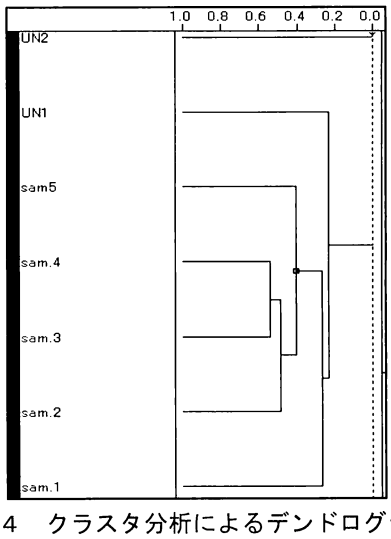


図４　クラスタ分析によるデンドログラム

【考察】

以上の結果から、これまでに報告してきた筆者識別をデンドログラムや主成分得点の分布のみで表示した場合、同一筆者による筆跡かどうかの誤判定の恐れのある場合においても、数値化データのグラフや相関係数を示すことで同一筆者の運筆の安定性を表示することができ、これらの検討の有効性が確認された。

また、異なる筆者の筆跡が混入した場合の違いも確認でき、多変量解析法を用いた筆者識別の信頼性の向上に有益な提示となると考えられる。

今後は資料数を増やして、さらに検討を加える予定である。(すがはら　ひろし、わかはら　かつふみ、みついとしゆき)

研究発表(ポスター発表)

対面方向が表情の解読に与える影響

— メッセージ送信者自身による解読結果 —

宮島　直子
（北海道大学大学院保健科学研究院）

キーワード：表情、解読、対面方向

【研究の目的】

対面方向が表情の解読に与える影響を、メッセージ送信者自身の解読結果から検討する。

【方法】

著者らが 2001 年に作成した刺激画像 [1]（感情を表出した顔の写真）を、調査対象者に 1 枚ずつ無作為に提示し、それぞれの刺激画像が「どのような感情」を「どの程度」表しているのかを質問紙調査した。

回答方法は、感情の種類を「a.驚き」「b.幸福感」「c.軽蔑」「d.恥」「e.嫌悪」「f.怒り」「g.悲しみ」「h.恐怖」「その他」から 1 つ選択し、感情表出がないと感じた場合には「×」を記入するようにした。またその程度を「大変強く感じる」～「わずかながら感じる」の 5 段階評定とし、1～5 の数字を記入してもらった。併せて、対象者の非言語的コミュニケーション能力を測定する尺度として、堀毛によって開発された ENDE2[2]、自尊感情尺度には、Rosenberg が作成した Self-Esteem Scale の 10 項目を山本らが邦訳 [3]したものを使用した。

調査対象者：過去に刺激画像のモデルになった 12 名のうち、今回協力を得ることが出来た 20 歳代の女性 1 名。

調査日：2006 年 12 月

刺激画像：4 種類の顔の表情 1）幸福感、2）怒り、3）悲しみ、4）ニュートラルな感情をそれぞれ同時に 3 方向から撮影した合計 12 枚の画像で、調査対象者自身がモデルになったものを使用した。1）～3）の撮影では、それぞれの感情を最大限に表出するように依頼した。4）については、日常的なことの記憶を想起させる場面とした。撮影方向は、正面、斜め左（水平方向左から 45 度）、斜め下（垂直方向下から 45 度）の 3 方向である。

今回調査対象者へは、過去に作成した刺激画像に加工することの許可を事前に得て、刺激画像の感情表出およびその程度については、予測がつかないようにした。また、被写体となったのは 5 年前であり、当時の記憶はほとんどなかった。

【結果】

1. 感情の種類と程度に対する解読結果

各刺激画像における感情の種類に対する回答は、表 1 に示した。図 1 は、その程度をグラフにしたものである。刺激画像でモデルが意図して表出した感情の種類と解読が一致したのは、9 枚中 5 枚であった。感情の種類別にみると「幸福感」が 3 方向、「悲しみ」は 2 方向で一致していた。「怒り」については全ての方向で一致していなかった。方向別で見ると、正面と斜め左では「幸福感」と「悲しみ」が一致し、斜め下では「幸福感」だけが一致していた。回答した感情表出の程度では「幸福感」で斜め左と斜め下が、「怒り」と「悲しみ」では、正面で感情の表出を強く感じていた。

2. ニュートラルな感情表出に対する解読結果

正面では「恥」で程度 1、斜め左では「恥」で程度 2、斜め下では「幸福感」で程度 2 であり、方向により感情の種類または程度で異なる回答を得た。いずれの方向も、表出の程度としては軽度であった。

3. 対象者のコミュニケーション能力と自尊感情得点

ENDE2 解読得点は 16 点、自尊感情得点は 20 点であった。

Tab.1. 対面方向別感情の種類の解読結果

感情の種類＼対面方向	正面	斜め左	斜め下
幸福感	幸福感	幸福感	幸福感
怒り	嫌悪	軽蔑	嫌悪
悲しみ	悲しみ	悲しみ	恥

注）○は提示感情と回答が一致した箇所

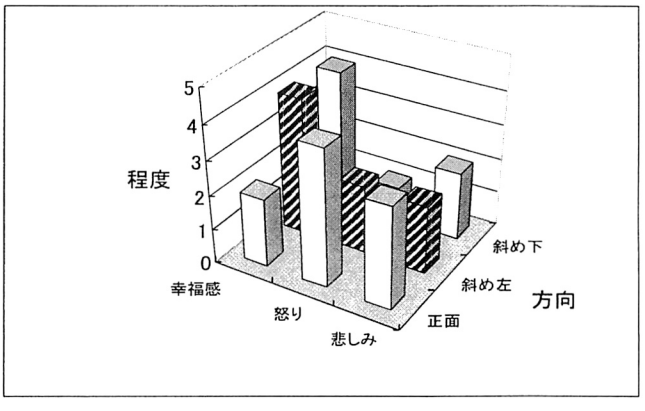


Fig.1.　対面方向別感情表出の程度

【考察】

刺激画像で提示した感情と一致した解読が最も期待できる、モデル自身の回答結果から、感情の種類またはその表出の程度は対面方向で異なり、解読は対面方向の影響を受けることが確認された。この結果は宮島ら（2001）の大学生を対象とて同一刺激画像を用いた調査結果 [1]と一致している。しかし、「幸福感」の正面条件が最も感情を正確に伝える点については、今回の結果から支持されなかった。感情表出の程度では正面条件で「幸福感」が最も弱く、「幸福感」では正面条件が最も弱かった。このことは、対象者本人の顔写真であるが故に、見慣れた表情と細かい比較が可能であったためと推測される。斜め下の条件は、最も感情の種類の一致率が悪く、多様な感情を捉えるためには、ふさわしくない方向といえた。よって、身長差のある大人が小児に関わる場合や車椅子を使用している人とのコミュニケーションにおいて、相手の目の高さに合わせることは、感情がより適切に解読されるために必要な条件と考えられた。

更に、ニュートラルな感情の表情は、メッセージの送信が意図されていないにも関わらず、解読者の主観的影響を受けて解読される危険性がある。

【引用文献】

1)宮島直子、森下節子、斉藤早香枝：看護におけるコミュニケーション・チャンネルの研究－対面方向が表情の解読に与える効果、北海道大学医療技術短期大学部紀要、14、17－24、2001.

2)堀毛一也：恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル、実験社会心理学研究、34:116－128、1994.

3)山本真理子、松井豊、山成由紀子：認知された自己の諸側面の構造、教育心理学研究、30:64－68、1982.

（みやじま　なおこ）

高齢者うつ予防プログラム実施による抑うつ感情と心理的QOLの変化

―抑うつ傾向の改善が認められた78歳女性の事例―

奥井　良子
（神奈川県立保健福祉大学　保健福祉学部　看護学科）

キーワード：うつ予防、高齢者、自己表現トレーニング、心理的QOL

【研究の目的】近年自殺者の増加は大きな社会問題となっており、中でも60歳以上の自殺者の占める割合は36.6%にものぼっている（警視庁，2008）。自殺予防の対策のために地域社会が一体となったうつ対策の重要性が指摘され、高齢者の介護予防の観点からもうつ対策への取り組みは広がりつつあるが、現状ではスクリーニングで「うつ」と判定された人のみが対象となっている。高齢者は身体的、社会的機能の低下や近親者との喪失体験が増えるといったことから、うつになるリスクが高く予防が大切であると考える。現在、地域包括介護支援センターにより実施されている介護予防教室等は一般高齢者を対象とし、主に介護予防を目的とした健康管理や転倒予防をテーマとして行われている。従来の介護予防教室で行っている運動プログラムにうつ予防のプログラムを加えて行い、心理的QOLと抑うつ傾向の改善が認められた78歳女性の事例の報告をする。

うつ予防プログラムとして、うつの精神症状である悲観的な認知の変容を促すための『自己表現トレーニング』を加えて実施し、教室に参加することにより、抑うつ感情に変化が生じるか、それに伴い心理的QOLがどのように変化したかを検証する。

【実施】60歳以上の方13名を対象に週1回の頻度で全11回の介護予防教室を実施した。介護予防教室の内容は、転倒予防を主とした運動プログラムとうつ予防プログラム『自己表現トレーニング』を行った。『自己表現トレーニング』とは、①日常の「あいさつ」を意識的に自分から進んで行い、その日一日の出来事を回想し実施回数を記録する②教室で自己認知を喚起させる要素と快感情を活性化させる要素を備えたレクリエーションを行うというものである。

教室実施期間中の第9回と10回の間に参加者の1名がお亡くなりになるといった思わぬ出来事に遭遇し、急遽、参加者全員と教室スタッフによるモーニングワーク（追悼の会）を実施した。

教室の初回と最終回にGDS15（高齢者抑うつ尺度）、WHOQOL-OLDの質問紙、星と波テスト、ワルテッグ描画テストを行い実施プログラムの効果を検証した。

【結果】参加者全体の結果は、GDS15（高齢者抑うつ尺度）、WHOQOL-OLDの結果では、抑うつ感が高い人ほど、うつの要因に対しての脆弱性を示し、さらに抑うつ感が高くなる傾向にあった。一方、抑うつ傾向の低い人うつの要因が負荷されたにも関わらず、更に低くなった。『うつ予防プログラム』の中のあいさつ療法は威厳と生きがい感との相関が認められ、これがうつの予防に関与していると考えられる。

本事例の78歳の女性は教室前のGDS15でうつ傾向ありと判定された。プログラムへの取り組みは良好で「あいさつ」の回数は一日平均17.6回と多かった。全体を通して「あいさつ」の回数の大きな変動はなかったが、回数と併記された備考欄の記述の量が増えていったことと記述内容、様式に大きな変化が見られた。初めの頃は『実家の墓参り　買い物　電話3回　孫泊まる』といった箇条書きであったのが、第4週目には『夫の友人ご夫妻が高尾山に登った帰り道、寄ってくれた。懐かしい昔話を聞いて、今夜は夫の夢を見たい気持ちです。』というように感情表出の伴った文章構成を成した記述へと変化した。また、参加者メンバーの死に際しては『―前略―元気だった○○さん、突然天国に行ってしまった、どうして、どうして！』と感情の混乱が窺われた。追悼の会でも涙を流し亡くなられたメンバーの思い出を語られ、ケース自身、8年前に夫との死別を体験していることで、亡くなられたメンバーの奥様を思いやる言葉が聞かれた。GDS15は6から5へと1ポイントの改善がみられたが、WHOQOL-OLDは3.54から3.25と低下し、中でもグループ全体の結果であいさつ療法との相関がみられた下位項目の威厳と生きがいがこのケースでは低下した。一方、星と波テストとワルテック描画テストでは明らかに筆跡、構成に主体性が表れ現実認識の高まりと自我機能と心的エネルギーの高まりがみられた。

【考察】本プログラムの実施は、グループ全体の結果から参加メンバー内での喪失体験という出来事があったにも関わらず、教室前のGDS15での結果が良好であったケースでは教室後の結果がよりうつ傾向が低くなり、うつ傾向の低い人に対しては効果があったが、うつ傾向の高い人に対しては喪失体験による抑うつ感情の揺さぶりを抑止する効果が低いと言える。本事例においては、GDS15は教室前「うつ傾向あり」であったのが、教室後は1ポイント改善したものの、「うつ傾向なし」の上限値である。投影法検査からはもともと他者への興味関心は高く、心的距離も近かったが、さらに他者に対する意識が高まり、自分の印象を良くしようという気持ちが働くようになったのではないかということが読み取れ、現実認識が高まり、自我機能と心的エネルギーが高まった様子が窺え、それによりかえって自己評価を下げることになったのではないかとも思われる。あいさつの記録の備考欄の記述の変化からは、情緒機能と思考の統合機能に関与している前頭前野機能の活性化が向上したと推察される。

【引用文献】

1)「国勢調査」．2005．総務省統計局．
2) 加藤芳朗　他11名．2005．WHOQOL-OLDフィールド調査票による量的調査．老年精神医学雑誌.16 (9). P.P. 1057－1067.
3)高橋真義．2006．『SHINGI式自己表現・評価トレーニングガイド』．「SINGI式自己表現・評価トレーニングガイド」編集委員会．
4)大野裕（主任研究者）．2001．うつ状態のスクリーニングとその転帰としての自殺予防システム構築に関する研究，総合研究報告書．平成11～12年度厚生労働科学研究費補助金障害保健福祉総合研究事業．P.P.3-24.
5 大山博史．2003．『医療・保健・福祉の連携による高齢者自殺予防マニュアル』．診断と治療社．

（おくいりょうこ）

「人間関係論」の授業で実施したﾛｰﾙﾚﾀﾘﾝｸﾞによる看護学生の学び

關戸　啓子
（徳島大学医学部保健学科）
キーワード：ロールレタリング、看護学生、学び

【研究の目的】

ロールレタリングは「役割交換書簡法」とも呼ばれ，人間関係調整や自己・他者理解促進のための心理技法のひとつである。これは相手に手紙を書き，つぎに相手になり代わってその返事を自分で書き，一人で手紙の往復を繰り返す技法で，日本の少年院で開始され，現在は学校教育，カウンセリングなど様々な分野で活用されている。

看護教育でもロールレタリングは活用されつつあり，看護の専門科目への導入における効果が報告されている。しかし，基礎科目への導入で１年生を対象者とした実践報告は少ない。今回，看護学生が１年次に履修する基礎科目である「人間関係論」にロールレタリングを取り入れたので，学生の学びについて報告する。

【方法】

１）研究対象者と実施時期

看護系大学１年生で「人間関係論」を受講している 65 人の学生を対象者とした。2006 年度「人間関係論」の授業最終回（2007 年１月）に実施した。

２）実施内容と方法

授業最終回の授業目的は，「臨床の場における患者理解」で，授業内容は，①臨床の場における患者の心理，②患者理解の阻害要因，③患者理解とは，であった。

授業後半に，看護学生として検査見学を一旦了承された患者（Ａさん）から，検査開始寸前になって見学を断られてしまう架空の設定を学生に示した。その詳細は表１に示したとおりである。この断られた看護学生が自分だと考えて「ワークシート」を使って，Ａさんと手紙の交換をしてみましょうと学生に説明した。すなわち，この状況設定で「わたしからＡさんへ」「Ａさんから学生さん（わたし）へ」「わたしからＡさんへ」手紙（ワークシート）を書いてもらった。さらに，ワークシートには「このロールレタリングからわかったこと」を記述してもらった。このロールレタリングは授業の一環として実施したので，学生全員がワークシートは提出した。本研究では，「ロールレタリングからわかったこと」として学生が記述した内容を分析対象として，そこから学生の学びを抽出した。

３）倫理的配慮

ワークシートは無記名とした。提出前に，研究の趣旨，研究への参加は自由であり参加不参加は成績に影響しないこと，プライバシーは守られること，結果は学会や学会誌に発表することを説明した。研究に協力する学生は，ワークシートの研究協力承諾欄に○を付けて提出するように依頼した。受講学生 65 人のうち，「ロールレタリングからわかったこと」の記述について，研究への使用を承諾した学生は 41 名であった。

【結果】

学生が「ロールレタリングからわかったこと」として記述した内容を，学びについてひとつの意味を持つように文章化し，類似内容ごとにカテゴリー化を行い名前をつけた。

結果は表２のとおりである

【考察】

看護学生の学びには，患者理解と自分に対する理解の両方が認められた。患者理解については，ロールレタリングで患者になって返事を書くことによって，患者の状況や気持ちに思いをはせることができ，患者の洞察につながったことが窺えた。学生自身については，自分の行動を振り返ったり，断られたショックから立ち直るなど，手紙を書くことで冷静に自分を見つめる時間が持てたと考えられた。学生の学びから「人間関係論」の授業目標は達成できたと推察された。

今回のロールレタリングは１往復半と短く，さらに１年生を対象者とした，一斉に実施するロールレタリングであったが，ロールレタリングのもつ自己・他者理解を促進する効果が期待できることが示唆された。

表１　ロールレタリングの状況設定

- あなたは臨床で実習をしています。
- 実習は明日で終了です。 今回の実習では，実習の課題のひとつとして「胃内視鏡（胃カメラ）」を見学しなければならないことになっていますが，実習グループであなただけが，まだ「胃内視鏡」を見学できていません。
- 本日，胃がんの疑いがあり，胃の内視鏡をすることになっている患者のＡさんが来院されます。検査室の看護師さんがＡさんが来られたら，見学しても構わないかたずねてくれることになりました。
- Ａさんが来られました。やせた 40 歳くらいの女性で，ひとりで来院され，不安そうに見えました。独身でひとり暮らしだとカルテには書いてありました。看護師さんが，学生が検査を見学することをお願いすると，小さな声で「はい」と承諾してくれました。
- Ａさんが，検査室に入る前に「学生の○○です。検査を見学させていただきます。よろしくお願いします」とあいさつをしました。Ａさんは「そうですか」と返事されました。顔色が少し悪いように感じました。それ以上は何も話しませんでした。
- 検査室では，じゃまにならないように医師が座るいすの後ろの方に黙って立って見ていました。看護師さんが，Ａさんにいろいろ説明していました。医師が来て検査の準備をはじめると，Ａさんが「学生さんはやっぱり見ないで欲しい」と言いました。このため，「胃内視鏡」を見学することは結局できませんでした。

表２　ロールレタリングによる看護学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
患者の気持ちの理解	・患者の気持ちに気づけた ・患者の気持ちを察する大切さ
患者の立場の理解	・患者が断った状況が理解できた ・なぜ断ったか納得できた
自分の行動に対する振り返り	・自分の行動を反省した ・自分の未熟さがわかった
自分の気持ちの整理	・患者の気持ちを受け止めることができた ・患者から断られたときのショックがやわらいだ

（せきど　けいこ）

医療従事者の自己表現とバーンアウトとの関連

○川口智子[1)]　森下高治[1,2)]
([1)]帝塚山大学大学院人文科学研究科　[2)]帝塚山大学心理福祉学部)

キーワード：医療従事者、自己表現、バーンアウト

問題と目的

医療従事者のバーンアウト問題の解決にアサーションは重要なコミュニケーションの一つと考えられるが(鈴木ら,2003)、アサーションは相手によりアサーティブな表現が変わることや「自己表明」「適切な表現」「他者表明の奨励」の考慮が必要というアサーション尺度の問題がある(高橋,2006)。本研究はこれらの問題を考慮した医療従事者の同僚に対する自己表現と、バーンアウトの関連を調査することを目的とし、どのような自己表現が適応的であるか検討する。

研究Ⅰ

目的　「自己表明」「他者表明の奨励」を含む、医療従事者の同僚への自己表現を測定する質問紙を作成する。

方法　社会人6名、大学院生18名の合計24名に、同僚に自己表明するときにどんな思いをどのように表現するかと、どんな思いをどのように伝えることができなかったかを自由記述により回答を求めた。回答を柴橋(2001)の質問紙をもとに、心理学専攻教員1名と心理学専攻の大学院生3名でKJ法を参考に分類した。また、分類した「自己表明」を同僚が行うことをどの程度望むかを尋ねる項目を作成し「他者の表明を望む気持ち」とした。

結果と考察　「自己表明」33項目、「自己表明の方法」9項目、「他者の表明を望む気持ち」31項目の自己表現尺度原版を作成した。高橋(2006)の「自己表明」「適切な表現」「他者表明の奨励」の3側面を測定する質問紙となった。

研究Ⅱ

目的と仮説　医療従事者の自己表現とバーンアウトとの関連を調査することを目的とする。仮説①【自己表明】得点より【他者の表明を望む気持ち】得点が高い。仮説②【自己表明】【他者の表明を望む気持ち】の得点がともに高い者は、そうでない者よりもバーンアウト傾向にない。上記仮説に加え、表明内容、表明方法とバーンアウトがどのように関連するかを検討する。

方法　発表者の知人を通して回答を求めた助産師、看護師、准看護師と、関西圏にある5病院に勤務する助産師、看護師、准看護師511名を対象に質問紙調査を配布し、471名(回収率92.2%)より回収し、有効回答数は405名(有効回答率79.3%)であった。

フェイスシート　性別、年齢、経験年数などの基本情報に関する回答を求めた。

自己表現尺度　研究Ⅰの質問紙を用い、全くあてはまらない(1点)からとてもあてはまる(4点)の4件法で回答を求めた。

バーンアウト尺度　Maslach Burnout Inventory 日本語版17項目(久保,1998)を5件法で回答を求め、「情緒的消耗感」「脱人格化」「個人的達成感の低下」を得点化した。

結果と考察

自己表現の因子分析　【自己表明】は「不満と正当性の表明」「積極的感情と困り事の表明」「意見と断りの表明」に分類された。【自己表明の方法】は「他者配慮法」「理解促進法」に分類された。【他者の表明を望む気持ち】は「断りと望みの表明を望む気持ち」「率直な意見の表明を望む気持ち」「不満と怒りの表明を望む気持ち」「積極的感情の表明を望む気持ち」「つらさと支援要求の表明を望む気持ち」に分類された。

仮説の検証　【自己表明】と【他者の表明を望む気持ち】を比較し、仮説①は支持された($t(404)=-29.00, p<.01$)。また【自己表明】と【他者の表明を望む気持ち】の平均値より、得点高群と低群に分類し(自己高他者高:HH,自己高他者低:HL,自己低他者高:LH,自己低他者低:LL)、バーンアウト得点の差を検討するため一元配置分散分析を行った結果、仮説②は支持された(Tab.1)。また表明内容、表明方法とバーンアウトの関連について詳しく検討するため、Pearsonの相関係数を算出した。その結果、【自己表明】では「不満と正当性の表明」と「個人的達成感の低下」が($r=-.28, p<.01$)、「積極的感情と困り事の表明」と「個人的達成感の低下」が($r=-.25, p<.01$)、「意見と断りの表明」と「情緒的消耗感」が($r=-.20, p<.01$)で負の相関を示した。【自己表明の方法】については「理解促進法」と「個人的達成感の低下」が($r=-.23, p<.01$)で負の相関を示した。さらに【他者の表明を望む気持ち】では、「断りと望みの表明を望む気持ち」($r=-.20, p<.01$)、「率直な意見の表明を望む気持ち」($r=-.20, p<.01$)、「不満と怒りの表明を望む気持ち」($r=-.21, p<.01$)、「つらさと支援要求の表明を望む気持ち」($r=-.22, p<.01$)と「脱人格化」は負の相関を示した。自己も他者も尊重したアサーティブな自己表現を行う者はバーンアウト傾向が低いことが示されたが、本研究より、表明内容、表明方法により関連するバーンアウト状態に違いが見られた。これらのことから医療従事者個人に不足した表明内容、表明方法に焦点をあてたアサーション・トレーニングを行うことで、バーンアウトの軽減・予防に繋がるのではないかと思われる。

Tab.1　自己表現4分類とバーンアウトとの関連

	脱人格化			個人的達成感の低下			情緒的消耗感		
	M	*SD*	*F*値	*M*	*SD*	*F*値	*M*	*SD*	*F*値
自己表現4分類			5.43**			6.82**			4.42**
LL($n=117$)	2.39	.89		3.64	.67		3.51	.96	
LH($n=87$)	2.10	.81	HH<LL,HL	3.61	.77	HL,HH<LL	3.54	.94	HH<LL,LH
HL($n=72$)	2.34	.92		3.34	.80	HH<LH	3.27	.99	
HH($n=129$)	2.00	.77		3.26	.82		3.13	1.01	

†: $p<.10$, *: $p<.05$, **: $p<.01$,

引用文献

久保真人　1998　ストレスとバーンアウトとの関係－バーンアウトはストレンか？産業・組織心理学研究,12,5-15.

柴橋祐子　2001　青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち　発達心理学研究,12(2),123-134.

鈴木英子・永津麗華・森田洋一　2003　大学病院に勤務する看護師のバーンアウトとアサーティブな自己表現　日本保健福祉学会誌,9(2),11-18.

高橋均　2006　アサーション尺度の現状と課題　心理臨床学研究,24(5),606-614.

(かわぐち　ともこ・もしりた　たかはる)

就職活動に関する不安の研究

濱　保久
（北星学園大学文学部　心理・応用コミュニケーション学科）
キーワード：就職，不安，変化

研究の目的

近年，新規学卒採用を縮小する企業が増え，就職活動は厳しい展開を余儀なくされている。藤井（1999）は就職に関する不安を「職業決定および就職活動段階において生じる心配や戸惑い，ならびに就職活動後における将来に対する否定的な見通しや絶望感」と定義し，就職活動不安因子と職業適性不安因子と職場因子の３つに分類した上で，就職活動不安が一番強く，場合によってはうつ状態など精神的健康喪失に至る危険性もあると指摘している。そこで本研究では，就職活動不安に焦点をあて，まずはその構造を明らかにした上で，どのような不安がいつ生じ，またそれはどのように増幅あるいは低減していくのかを検証することを目的としている。

質問紙調査

【方法】

被調査者：北星学園大学生　男子 46 名，女子 157 名

質問紙：就職活動における不安を，あらかじめ行った予備調査で１９項目に絞り込んだ。それらを１）就職活動を進めるにあたっての不安（5 項目），２）就職活動中の様々な場面や状況に遭遇したときの不安（7 項目），３）内定先が決まったことに関わる不安（7 項目）の３つに分類して被調査者に提示し，そのそれぞれについて，不安の程度を 7 段階で評定させた。

【結果・考察】

被調査者の回答値に基づき不安の３分類ごとに因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行った。その結果，就職活動を進める際の不安として，「自分の志望する業界・会社の内定がもらえるのか」「就職活動中の精神的ショックや落ち込みに耐えられるのか」という項目に代表される行動不安因子と「就職活動にどのくらい時間をとられるのか」「就職活動にどのくらいお金がかかるのか」という項目に代表される活動コスト不安因子を抽出した。就職活動中で遭遇する不安としては「続けて何社も落ちたとき」「圧迫面接を受けたとき」という項目に代表される状況不安因子と「周りの友達と就職について話しているとき」「友人がリクルートスーツで学校に来ているとき」という項目に代表される周囲意識不安因子を抽出した。また，内定先が決まったことに関わる不安については「内定した会社がほんとうに自分らしさにあっているのか」「内定した会社で安定した収入を得ることができるのか」という項目に代表される入社後周辺不安因子と「内定した会社でとんでもない勤務を指定されないか」「内定した会社でとんでもない部署に配属されはしないか」という項目に代表される入社後環境因子と「内定した会社で求められる能力が自分にあるか」という項目に代表される入社後自分不安因子を抽出した。

パネル調査

【方法】

パネラー：北星学園大学 4 年生，酪農学園大学 4 年生 15 名（男子 2 名，女子 13 名）。

調査時期：2008 年 4 月から 8 月

手続き：パネラー一人ひとりに約 1 ヶ月に 1 度電話による聞き取り調査を 5 回行った。

質問項目：質問紙調査の結果を踏まえて以下のような質問項目を準備し，それぞれについて不安の程度を 7 段階で評定させた。なお，問３，４については「はい」と回答した者に対してだけ評定をさせた。

問１．就職活動が満足のいくものとなり，よい結果に結びつくかどうかについて。

問２．就職活動でどの程度の時間・お金がとられるのかについて。

問３．前回の電話から今回の電話までの間に，就職活動に関連した挫折感や敗北感を感じることはありましたか？

問４．前回の電話から今回の電話までの間に，就職活動に関連した焦りを感じることはありましたか？

問５．会社でうまくやっていけるかどうかについて。

問６．配属にかかわる希望が叶うかどうかについて。

問７．会社で，求められている能力が自分にあるかどうかについて。

【結果・考察】

行動不安について：パネラー全体の傾向をみると，不安が徐々に低減されていた。しかしながら，内容を精査すると 2 種類のタイプのパネラーが混在していることが分かったので，タイプ別に詳細な検討を行った。2 種類のタイプとは，１，２回目の調査段階ですでに１社以上の内定を獲得している序盤内定者と 3 回目の調査段階でまだ内定を獲得していない終盤内定者である。まず，序盤内定者は予想通り徐々に不安が低減していったが，しかし完全解消に至らないのはまだ就職活動を継続する意思を持つ者が含まれていたからである。一方，終盤内定者は初回から最後まで高い不安を示し続けており，内定確保が不安軽減に大きな効果を果たしていることが明らかである。

状況不安について：序盤内定者の不安は回を追うごとに低減していったが，5 回目の調査で値が上昇したのは，獲得した内定に満足しきれず就職活動を再開したパネラーの影響であった。一方，終盤内定者は 3 回目の調査で値を下げていた。この段階でまだ１社も内定をもらっていないのにも関わらず値を下げた原因として２つのことが考えられる。ひとつは，パネラーの発言にもあったように「落ち慣れてきて不安を感じなくなった」という耐性の向上によるものと，もうひとつは挫折感，敗北感の蓄積により就職活動そのものを遠ざけてしまったという逃避によるものである。

周辺意識不安について：序盤内定者が内定を確保した段階で急速に不安を低減させている一方で、終盤内定者は一貫して高い不安を示していた。しかし，終盤内定者の不安の質は微妙な変化を示しており，2 回目の調査では周りの友人の内定が焦りに直結していたのであるが，3 回目の調査では自分がなにをしたいのかわからなくなってきたという焦りへと変化していた。また，4 回目の調査では，夏休みまでには終わらせたいという季節的な要因も新たに加わって焦りはなかなか容易に解消しない現実を示していた。

【引用文献】

藤井義久 1999 女子学生における就職不安に関する研究，心理学研究，70，417－420.

本研究の遂行にあたり谷川友紀氏（現在，株式会アイデム勤務）の多大なる貢献を得た。ここに記して謝意を表す。

（はま　やすひさ）

心理会計

—耐久性商品と非耐久性商品の支払いの比較（1）—

蜂屋　真

（流通科学大学　サービス産業学部）

キーワード：心理会計　前払い・後払い　耐久性商品　非耐久性商品

研究の目的

心理会計(mental accounting)とは、心の中の口座、すなわち心理的口座(mental account)の違いが、お金の支払いの意思決定に影響を及ぼすという現象を指す。

心理会計が関わる課題には、前払い・後払い課題がある。Prelec & Loewenstein (1998)は、ある一群の被験者に家電の代金を前払いするかそれとも後払いするか、また別の一群の被験者に旅行の代金を前払いするかそれとも後払いするかを選択させた。その結果、両場面でお金の支払い条件が同一であるにもかかわらず、60%の被験者が旅行の前払いを選択し、わずか16%の被験者しか家電の前払いを選択しなかった。この結果は、家電と旅行の心理的口座が異なっていることを示唆している。

蜂屋（2005）は、被験者に、6ヶ月後に購入する、旅行、家具、スーツに関して、それらの商品を今から毎月2万円ずつの6ヶ月間前払いするのか、それとも商品購入後に毎月2万円ずつの6ヶ月間後払いするかを選択させた。その結果、商品ごとに前払いのしやすさを検討した所、家具とスーツに比べて、旅行は前払いされやすいことが見出された。さらに、被験者内の支払いパターンを検討した所、最も頻繁に見出された支払いパターンは、すべての商品を前払いする、旅行だけを前払いにし他を後払いにする、すべての商品を後払いするであった。この結果は、非耐久性商品は耐久性商品に比べて前払いされやすいことを示唆している。

蜂屋（2005）は、12 万円の商品を6ヶ月後に購入するという場面で実験を行っているが、もっと高額な商品の購入に関しても、また購入までの期間がもっと延びた場合でも、この現象が確認できるのだろうか。さらに、蜂屋（2005）は1つの非耐久性商品と2つ耐久性商品を用いて実験を行っているが、2つの非耐久性商品と1つ耐久性商品を用いた場面でも、この現象が確認できるのだろうか。

本研究は、1年後に購入する 120 万円の商品を毎月 10 万円ずつ前払いするか、商品購入後毎月 10 万円ずつ後払いするかを検討した。実験では2つの非耐久性商品として新婚旅行と結婚披露パーティが、1つの耐久性商品として家電、家具、自動車のいずれかが用いられた。

方法

日時：2009 年 4 月

被験者：平均年齢 19.0 歳の大学生 144 名（男子 109、女子 35 名）、

実験手続：心理学の授業中に質問紙を配布し、1年後の結婚に際し購入予定の3つの商品を、それぞれ前払いするか、それとも後払いするかを尋ねた。購入される商品は、新婚旅行・披露パーティ・家電、新婚旅行・披露パーティ・家具、あるいは新婚旅行・披露パーティ・自動車のいずれかであった。新婚旅行・披露パーティ・家電の質問紙では、新婚旅行に関して、「あなたは1年後に1ヶ月間のヨーロッパへの新婚旅行を予定している。旅行には 120 万円かかるが、あなたは次のどちらの支払い方法をとるだろうか。」という教示文の下、被験者に以下の選択肢AとBの選択をさせた。

A.　毎月 10 万ずつ 12 ヶ月間支払う。支払い終了後、新婚旅行に行く。

B.　まず新婚旅行に行く。その後毎月 10 万ずつ 12 ヶ月間支払う。

また、パーティ及び家電に関しては、教示文の「1ヶ月間のヨーロッパへの新婚旅行」を、それぞれ「結婚披露パーティ」及び「家電の購入」に置き換え、回答を求めた。質問紙は商品提示の順序効果を相殺するため6種類の質問紙が作成され、各質問紙にほぼ同比率の男女学生が回答した。新婚旅行・披露パーティ・家具、あるいは新婚旅行・披露パーティ・自動車に関しても、同様な質問紙が作成され被験者が回答した。

結果及び考察

図1は、新婚旅行、結婚披露パーティ、及び家電の前払いを選択した被験者の割合を示す。旅行、パーティ、家電の前払いを選択した被験者の割合はそれぞれ 83.3%、87.4%、41.7%であり、旅行とパーティーは前払いが好まれるが、家電では前払い・後払いに差が見られなかった。図2は、旅行、パーティ、家電に対する各前払いパターンを選んだ被験者の割合を示す。すべての商品を前払いする、旅行とパーティを前払いし家電を後払いするというパターンは、それぞれ37.5%、41.7%の被験者に選択されており、他のパターンより多く選択されていた。このような反応傾向は、家電の代わりに家具あるいは自動車を用いた条件でも確認された。

蜂屋（2005）は、非耐久性商品である旅行は、耐久性商品である家具とスーツと比べ、前払いされやすいことを示唆する結果を得たが、商品価格、分割期間、及び非耐久性商品と耐久性商品の組み合わせを変更した本研究でも、非耐久性商品である旅行とパーティが、耐久性商品である家電・家具・自動車と比べ、前払いされやすいことを示唆する結果が見出された。

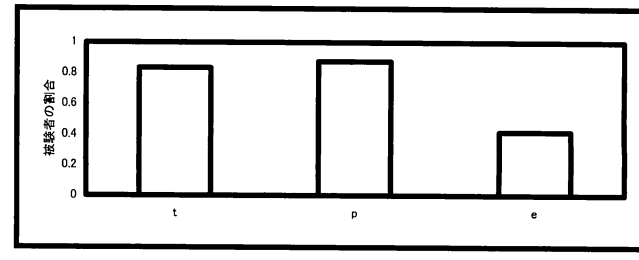


図1　各商品の前払いを選択した被験者の割合(N=48)。

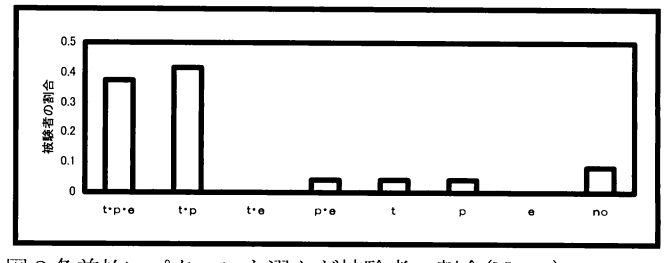


図2各前払いパターンを選んだ被験者の割合(N=48)。
tは新婚旅行、pは結婚披露パーティ、eは家電、noはすべて後払いを示す。

（はちや　しん）

プラント従業員の繁忙感影響要因の分析

－ 職種間の差異について －

○余村 朋樹[1)] 藤掛 和広[1)] 落合 信寿[1)] 奥村 隆志[1)] 施 桂栄[1,2)] 彦野 賢[3)] 伊藤 典幸[1,2)] 細田 聡[1,2)]
([1)]労働科学研究所 [2)]関東学院大学 [3)]原子力安全システム研究所)

キーワード：繁忙感，忙しさ，組織，保守

【研究の目的】繁忙感による事故やトラブルを減少させるには，繁忙感に影響を与える要因に対して対策を打つ必要がある。その際，組織のマネジメントも含めた，業務を行う者を取り巻く組織環境を総合的に捉えねばならない。そこで，組織環境下の従業員の繁忙感に影響を与える要因について明らかにするため，繁忙感の直接要因を測定する質問紙法の開発に取り組んでいる（余村他，2006，2007，2008）。

普遍的な繁忙感の要因を解明するには，幅広い産業組織を対象とすることが望ましいが，繁忙感をより効果的にコントロールするには個々の対象に適合した対策の実施が求められ，従って対象毎の繁忙感要因の詳細な把握が必要となる。そこで本研究では，ある産業組織における繁忙感並びにその直接要因について，業種によって差があるか否か，あるならばどのような差があるのかを明らかにすることを目的とした。

【方法】調査対象者は，ある設備産業企業に属する複数のプラントの課長職以下全員（有効回答率 95.0%, n=1,355）で，そのうち設備の保守管理に関する業務に携わる者（保守）が435名，それ以外（保守以外）が904名，分類不可・不明が16名。調査実施時期は2008年9月。質問項目は余村他(2007)が開発した繁忙感に関する質問項目を使用したが，繁忙感影響要因初期仮説の主観的業務量，重複性，情報量，切迫性，阻害性，突発性，能力，支援性，制御性，可視性，情報時機の11の繁忙感直接要因に「(業務に対する）納得性」を追加し，各要因3項目ずつの 36 項目と，結果変数として繁忙感と業務遂行性の6項目の計 42 項目で構成した（回答方式は5件法)。「繁忙感」に関する項目は，繁忙感1「現在，繁忙感が高い」（現在の繁忙感)，繁忙感2「時々非常に忙しい」（集中的繁忙感）と，繁忙感3「時期に関わらず，いつも忙しい」(定常的繁忙感）とした。また，既存の項目についても内容を精査し，修正した。

【結果】現在の繁忙感，集中的繁忙感，定常的繁忙感の3項目の平均において，保守が保守以外よりも有意に高かった(順に $F(1,1337)=83.23$, $p<.001$; $F(1,1337)=13.04$, $p<.001$; $F(1,1337)=164.89$, $p<.001$)(Fig.1)。

次に，繁忙感要因の 36 項目の共通因子を見つけるため，全てのデータを用いて因子分析を行い，5因子を抽出した(固有値>1.0）(Tab.1)。第1因子は業務量や重複性，情報量，切迫性に関する項目の因子負荷量が大きいことから，「業務密度感」とした。第2因子は能力や，先行き・現在地の見えなさ，それに自分で制御出来ないことに関する項目が含まれるため，「不能感」と命名した。第3因子は支援状況や業務配分・方法への納得性に関する項目が多いため「不公平感」とし，第4因子は含まれた項目から「情報時機不適感」，第5因子は突発性や阻害性に関する項目から「予定外業務感」とした。

続いて，保守，保守以外のデータでも同様に因子分析を行った。詳細な結果は割愛するが，上で述べた全体データでの結果との主な相違点を挙げると，保守では，Tab.1 の「不公平感」のうちの納得性に関する項目（No.14,15）が，突発性や阻害性を含む「予定外業務感」因子に含まれた。一方，保守以外では，「不能感」のうちの自分で制御出来ないことに関する項目（Tab.1 の No.22,23,24）が能力や先行き不明感に関する因子ではなく，独立して第6因子を構成した。

また，基準変数を繁忙感，説明変数を保守の5因子，保守以外の6因子とした重回帰分析の結果，保守・保守以外ともに業務密度感の標準偏回帰係数が最も大きかった（各々 $\beta=.80$; .72, 共に $p<.001$)。さらに，この業務密度感を基準変数とし，他の因子（保守は4，保守以外は5因子）を説明変数として重回帰分析したところ，多くは繁忙感を基準変数としたときよりも標準偏回帰係数の値が大きく，かつ有意であった（詳細結果は当日示す)。

【考察】今回対象とした組織では，限られた時間で多くの業務を遂行せねばならないこと（業務密度感）が繁忙感に強い影響を与えており，それ以外の要因は概ね業務密度感を仲介して繁忙感に影響を与えていた。また，この結果は保守，保守以外に共通していた。一方，(1)保守業務においては，保守以外と異なり，自分で制御出来る業務かどうかということが能力・可視性と強く関連していることや，(2)納得性は，保守では予定外業務との関連が強く，保守以外では部署内での支援状況との関連が強いことなど，職種によって差異があることも明らかになった。繁忙感をコントロールするためには，こういった職種による特徴を踏まえたマネジメントが求められる。

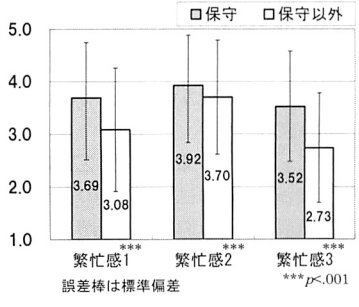


Fig 1. 業種別繁忙感値

Tab.1. all data による因子分析結果（因子パターン）

No.	項目	1	2	3	4	5
〈Factor1: 業務密度感〉 (α =.95)						
18	非常にたくさんの仕事をこなさなければならない	**0.94**	0.00	0.06	−0.06	−0.12
19	並行してやらなければならない仕事（直接業務）が多い	**0.84**	−0.04	0.05	−0.09	0.06
17	時期に関わらず，業務量がいつも多い	**0.84**	0.02	0.15	−0.08	−0.13
2	その日のうちに処理できないほど多量の情報が入ってくることが多い	**0.81**	−0.10	−0.16	0.23	−0.02
1	情報の整理に追われることが多い（情報量の上で）	**0.80**	−0.11	−0.14	0.20	−0.05
25	時間に追われることが多い（納期・工程上など）	**0.75**	0.08	−0.12	0.01	0.08
16	処理できないほどの仕事量であることが多い	**0.75**	0.11	0.17	−0.01	−0.10
20	今している業務の他に，気にかかる業務があることが多い	**0.65**	0.05	0.04	−0.04	0.12
26	期限の切迫した仕事依頼が多い	**0.64**	0.02	−0.02	0.01	0.18
21	(性質，目的が異なるなど）頭の切り替えが必要な業務を重ねて持っていることが多い	**0.54**	0.04	−0.01	−0.03	0.25
11	1つの業務が他のことで中断されることが多い	**0.51**	−0.11	0.06	0.00	**0.40**
27	なかなか取りかかることができず，結果的に期限が切迫することが多い	**0.46**	0.26	0.03	0.03	0.11
3	重要でない書類やメールがたくさん回ってくることが多い	**0.42**	−0.18	−0.11	**0.38**	0.16
〈Factor2: 不能感〉 (α =.90)						
34	自分にとって困難な仕事が多い（経験・知識上から）	0.04	**0.96**	−0.14	−0.05	−0.14
32	全体像を知らないままやっている仕事が多い	−0.18	**0.75**	−0.04	0.14	0.10
33	全体の中での今の位置付けが分からない仕事が多い	−0.18	**0.74**	0.01	0.17	0.09
35	能力以上の仕事を求められることが多い	0.19	**0.74**	0.09	−0.14	−0.09
36	今の業務を遂行するに十分な教育・訓練を受けていない	−0.02	**0.65**	0.24	−0.03	−0.13
23	仕事の順番・やり方を自分で決められないことが多い	0.10	**0.52**	−0.09	0.03	0.21
24	自分の権限内でこなせない業務が多い	0.03	**0.50**	0.04	0.07	0.10
31	到達点の見えない仕事が多い（どこまでやれば良いのか，いつになったら終わるのかなど）	0.15	**0.38**	0.00	0.03	0.26
22	自分でコントロールできない仕事が多い（作業の工程など）	0.29	**0.35**	−0.10	0.03	0.26
〈Factor3: 不公平感〉 (α =.87)						
9	忙しい時でも，上司・部下からの援助を受けられないことが多い	0.01	0.00	**0.87**	−0.03	−0.07
8	他のメンバーと協力して仕事をしようという雰囲気がない	−0.13	−0.02	**0.86**	0.01	0.00
7	忙しい時に仲間のサポートが得られないことが多い	0.10	−0.02	**0.72**	0.12	−0.09
14	分配(割り振り)などに納得できない業務が多い	0.12	0.01	**0.49**	0.02	0.25
15	納得できない方法で業務を行わなければならないことが多い	0.01	0.12	**0.46**	0.06	0.24
〈Factor4: 情報時機不適感〉 (α =.82)						
5	必要な情報が必要な時にどこにあるか分からないことが多い	0.06	0.12	−0.02	**0.77**	−0.12
6	必要な情報をすぐに入手できるチャンネル・手段ができていない	−0.03	0.17	0.12	**0.68**	−0.16
4	必要な情報が適切なタイミングで得られないことが多い	0.07	−0.05	0.07	**0.68**	0.05
〈Factor5: 予定外業務感〉 (α =.88)						
30	外部からの要請により，急にやらなければならない仕事が生じることが多い	0.28	0.04	−0.09	−0.07	**0.64**
29	不具合の発生により，突然やらなければならない仕事が生じることが多い	0.28	0.02	−0.10	−0.08	**0.63**
28	全く予定外の仕事の発生が多い（突発的に飛び込んでくる仕事など）	0.33	0.06	−0.02	−0.11	**0.58**
12	他の業務が入り，業務の優先順位が変わることが多い	**0.43**	−0.08	0.04	−0.04	**0.46**
10	メインの仕事とは別だが，間接業務でやらなければならない仕事が入ってくることが多い	0.33	−0.10	0.17	−0.02	**0.42**
13	重要でないと思う業務が多い	0.05	−0.04	0.24	0.18	**0.40**

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法 （因子間相関などは割愛）

（よむらともき・ふじかけかずひろ・おちあいのぶひさ・おくむらたかし・しけいえい・ひこのまさる・いとうのりゆき・ほそださとし）

運転者のシートベルト着用行動を説明する要因

— 商業施設における調査結果から —

○岡村　和子　藤田　悟郎　小菅　律
（科学警察研究所交通科学部）

キーワード：態度、規範、意図

【問題】 シートベルト(SB)は、交通事故の被害を軽減する最も効果的な方法である。それにも拘わらず SB を着用しない運転者がみられ、彼らは SB を着用する運転者とは異なる規範意識や態度を持っている可能性がある。その一方、SB 着用に関しては、態度や規範意識よりも、習慣や外部要因(e.g.不快感や走行する道路)の方が SB 着用の意図に強く影響するとの結果が示されている(例えば Cunill, et al, 2004)。そこで、Ajzen(1991)の Theory of Planned Behavior (TPB)理論に基づき、SB 着用行動と関連するとされる構成概念(規範、態度、習慣、意図等)が、観察により確認される SB 着用行動の説明にどの程度寄与するか検討することを本研究の目的とする。

【方法】 千葉県野田市の大型商業施設駐車場入口において、施設利用車両の乗員の SB 着用状況を観察した(2008 年 12 月 7 日(日)と 11 日(木)の 10:00-16:00、2009 年 4 月 19 日(日)の 11:00-17:00 に実施。天候はいずれも晴天)。前席と後席乗員の SB 着用状況を観察する調査員を 2 名ずつ配置し、車両 1 台につき合計 4 名が目視により確認した(調査員間の一致率は 92%、κ 係数は .95)。観測場所には、「交通量調査実施中」と記した垂れ幕をかけ、SB 着用調査をしていることがわからないようにした。

次に、観測対象とした 2214 台の車両の中から、乗員の SB 着用状況を基準に 280 人の運転者に対して駐車場内で個別に質問紙調査への協力を依頼し、141 人から回答を得た(協力率 50%)。質問紙調査では、TPB に基づき作成した次の質問群に 5 件法で回答してもらった。様々な走行場面における SB 着用の①習慣、②阻害要因、③主観的規範、④法規範、⑤取締りへの認識、⑥被害軽減効果の認識、⑦非着用の場合に感じる不安感、⑧今後 SB を着用する意図(⑤～⑦は広義の態度に相当)。

【結果】 観測対象とした車両乗員の SB 着用率は、運転席で 91%、助手席で 74%、後席で 23%であった。また、後席窓に透過率の低いスモークがかかった車両が多く、後席の SB 着用状況が確認できなかったケースが 3 割以上に達した。Table 1 に、観測対象とした車両の運転者のうち、質問紙調査に回答した者の特徴を SB 着用・非着用別に示す(SB 着用状態が不明であった 1 名を除く)。SB 着用状況は、観測結果に基づく分類である。着用群と比較して、非着用群には同乗者なしの割合や SB 着用義務違反で取締りを受けたことのある者の割合が高いといった特徴がある一方、性別、年齢、走行距離に差はみられなかった。

Table 1 質問紙調査に回答した運転者(N = 140)の特徴

	SB着用群 (n = 108)		SB非着用群 (n = 32)		χ^2/t
	n/M	(%/SD)	n/M	(%/SD)	
前・後席ともに同乗者なし	22	(18)	17	(55)	$\chi^2(2) = 15.3, p < .000$
過去3年間に交通事故経験あり	18	(17)	9	(28)	$\chi^2(1) = 2.1, p = .149$
過去3年間に取締り受けた経験あり	28	(26)	14	(44)	$\chi^2(1) = 3.7, p = .053$
過去3年間にSB着用義務違反で取締り受けた経験あり	8	(7)	9	(28)	$\chi^2(2) = 12.8, p = .002$
女性	60	(56)	13	(41)	$\chi^2(1) = 2.2, p = .138$
年齢(歳)	43.3	(11.3)	42.1	(13.7)	$t(138) = -0.5, p = .602$
年間走行距離(km/年)	10600	(13229)	12396	(13170)	$t(138) = 0.7, p = .501$

一般道路を走行する際の前席での SB 着用に限定し、前述①~⑧の構成概念に相当する 9 変数を説明変数とし、運転者の SB 着用・非着用を予測する判別分析を行った。Table 2 に示すとおり、7 変数は、該当する質問への回答平均値を計算した合成変数である(項目間の回答の信頼尺度 $0.72<\alpha>0.97$)。モデルの Wilks' λ は 0.78 ($\chi^2(9) = 32.4, p < .000$)、正準相関は.47 であり、SB 着用群の 83%、SB 非着用群の 69%が正しく分類された。説明変数のうち、最も SB 着用行動の予測に寄与していたのは SB 着用の意図であり、これに取締り回数、阻害要因、習慣が続いた。これらと比較すると、態度(SB の被害軽減効果の認識)や規範の説明力は低かった。

【考察】

判別分析の結果は、SB 着用行動を直接規定するのは意図であるとする TPB モデルを支持するといえる。また、SB 着用は合理的な判断に基づく知識ベースの行動ではなく、習慣ベースの行動であり、外部要因の影響を受けるとの欧米の先行研究とも矛盾しない結果が得られた。取締りを受けても SB を着用しないという結果は、信念の要因も検討する必要を示唆している。本調査は現在も継続して実施中であり、サンプル数を増やして TPB モデルの検証を行う予定である。

【引用文献】

Ajzen, I. 1991 The theory of planned behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, ***50***, 179-211.

Cunill, M. et al. 2004. An investigation of factors reducing seat belt use amongst Spanish drivers and passengers on urban roads. *Accident Analysis and Prevention, **36***, 439-445.

（おかむらかずこ・ふじたごろう・こすげりつ）

Table 2 運転者の SB 着用行動を予測する判別分析結果

Predictor variables	標準化正準判別関数係数	Wilks' λ	SB着用群 M	SB着用群 SD	SB非着用群 M	SB非着用群 SD
			(n = 108)		(n = 32)	
意図 [1:着用しない～5:いつも着用する](2変数)	0.61	0.86 ***	4.89	0.34	4.41	0.88
SB着用違反での**取締り回数** [0～2回]	-0.48	0.91 ***	0.08	0.26	0.23	0.60
法規範(SB着用違反の罰則の妥当性) [1:軽くすべき～5:厳しくすべき]	-0.44	0.99 *n.s.*	3.20	0.79	3.32	0.99
阻害要因(不快感etc.) [1:非常に感じる～5:全く感じない](4変数)	0.33	0.93 **	4.29	0.88	3.69	1.12
習慣 [1:いつもつけていない～5:いつもつけている](2変数)	-0.28	0.93 **	4.83	0.67	4.33	1.12
法規範(SB着用の妥当性) [1:全く納得できない～5:よく納得できる](2変数)	0.22	0.92 **	4.76	0.64	4.25	0.98
主観的規範(身近な人のSB着用) [1:いつもつけてない～5:いつもつけている](2変数)	0.20	0.96 *	4.80	0.70	4.44	0.96
SB非着用時に感じる**不安感** [1:全く不安でない～5:非常に不安だ](3変数)	-0.05	0.98 +	3.84	1.10	3.45	1.09
被害軽減効果(死亡重傷の回避可能性) [1:非常に低い～5:非常に高い](2変数)	0.03	1.00 *n.s.*	4.08	1.13	4.08	1.10

+ $p < .1$, * $p < .05$, ** $p < .001$, *** $p < .000$

安全に対する受注者責任の範囲とは

― 受注者に対するヒアリングを中心とした現状調査 ―

○ 藤掛 和広[1)] 余村 朋樹[1)] 奥村 隆志[1)] 落合 信寿[1)] 施 桂栄[1,2)] 細田 聡[1,2)] 井上 枝一郎[1,2)]
([1)] 財団法人 労働科学研究所 [2)] 関東学院大学)

キーワード：安全文化評価ツール（Safety Culture Assessment Tool: SCAT)、ヒアリング調査、受注者責任

【研究の目的】 作業現場の業務には，発注者・受注者・協力会社（下請負業者）などが関わっているものの，現場での作業は協力会社が行い，協力会社の管理や調整は受注した会社が行うのがほとんどである。そのため、現場で事故や災害が発生した時には，受注元や協力会社の担当者が直接の被災者となることが多い。そして，事故災害の対策や改善方法について，発注側が受注側と協力会社に求める例も見受けられる。しかし，事故や災害の原因を探ってみると，受注側や協力会社の現場では解決しきれない要因が含まれている場合もある。つまり，受注者や協力会社には，事故や災害を予防するための活動が制限されているともいえる。

そこで，受注元である某企業（以下，組織 A）が取り組んでいる安全の活動についての調査を行い，その結果についての報告をする。

【方法】 対象は組織 A とその協力会社である。組織 A は，プラントでのメンテナンス業務を主とし，複数の事業所を有している。はじめに安全文化評価ツール（以下，SCAT）を使用して，組織 A とその協力会社の安全文化の評価を行った。SCAT の調査は，組織内を幾つかの職位の階層に分類して（本調査では 5 層とした：組織 A は 3 層，協力会社は 2 層），階層ごとに相互評価を質問紙形式で行うものである（細田他，2004)。次いで，SCAT の結果をもとに，組織 A とその協力会社の従業員に対してヒアリング調査を行った。ヒアリング調査は 2 箇所の事業所で行い，各階層の数名（7～8 名程度）を対象とした。

【結果】 SCAT とヒアリング調査の結果から，組織間・組織内での「信頼性の欠如」「納得性の欠如」「透明性の欠如」を示唆する発言がみられた。さらに，安全の取り組みに関する発言内容から，PDCA サイクルが十分に機能していないことが示唆された。また，発注者に関しては，受注者と協力会社のみで行う取り組みには限界があるという内容の発言がみられた。

【考察】 組織 A とその協力会社が抱える問題点として，信頼性・納得性・透明性の欠如と，PDCA サイクルが十分に機能していない状況が明らかとなった。さらに，発注者・受注者・協力会社の組織を超えた取り組みの必要性が示唆されたことから，発注者に対するアプローチが求められる。

これらの点を踏まえて，以下の改善策の提案を行った。

1．信頼性・納得性・透明性の獲得について

＜受注者である組織 A がすべき取り組み＞

- 安全の原理・原則・ポリシーを「声明」として宣言する
- 発注者とパートナーシップを確立する
- 組織の負荷となっている組織構造の再検討を行う
- 工程の調整管理を行う

＜組織 A の協力会社がすべき取り組み＞

- 提案内容のエビデンス作りを行う

2．ＰＤＣＡサイクルの構築について

＜組織 A の本社が中心となってすべき取り組み＞

- 各事業所に権限を有する安全専任者を置く
- 安全活動の全てを事業所に強要しない
- 各事業所の安全計画の進捗状況を管理する

＜組織 A の各事業所がすべき取り組み＞

- 安全専任者の元に数名の協力者を置く
- 現在取り組んでいる安全の活動の中から，ひとつだけ取り組むものを選ぶ
- 4W1H によって，取り組みを明確化する
- 取り組みへの外部機関の評価・意見を収集し，反映する

表 1．ヒアリング調査の発言内容の例

信頼性に関して
・事業所の差について，協力会社からの不満は聞こえてくる。
・改善提案は，なかなか進まないから言いにくい。
・人によって言うことが違う。
・本当のことを言わない人がいる。
納得性に関して
・安全は，人それぞれが解釈してやっている。
・書類などに統一性がない。
・ルールを守るのに負担を感じる。
・受注者は，技術はないのに口を出してくる。
透明性に関して
・リスクアセスメントは，口だけ。
・懲罰の基準が曖昧で，不透明に感じる。
・協力会社は，意見を言ったら干されると思っているので，協力会社に対して意見が聞けない。
安全の取り組みに関して（PDCA サイクルについての問題点）
・方針があやふやで，人が変われば書類の出し方も変わる。
・制度が大きくなって，人が追いついていかない。
・安全制度，活動は効率性を悪くするだけだと思っている。
・改善提案は途中で止まる。
発注者に関して
・発注者は，受注者に対策を任せている。
・発注元に合わせて組織構造を改変したが，やりにくい。
・事故対策を丸投げしている。
・作業工程に無理がある。
・発注元からの要求で金額を下げると，安全に十分なお金をかけられない。
・作業手順書は，どれが最新版か分からない。

今後，組織 A とその協力会社では，信頼性・納得性・透明性の獲得および PDCA サイクルの構築を目指して組織の改善の取り組みを実施する。また，先述したように，受注者と協力会社だけでは実行可能な取り組みに限界があることから，受注者である組織 A は発注者に対して取り組みも含めて理解を求めていく。

我々は，組織 A とその協力会社の取り組みの支援を行うと共に，取り組みによる変化の過程を記録・調査していく予定である。

【引用文献】

細田聡・菅沼崇・施桂栄・奥村隆志・井上枝一郎 2004 安全文化を具体化する–安全文化評価ツールの提案– プラントエンジニア, 36(2), 32-37

（ふじかけ かずひろ・よむら ともき・おくむら たかし・おちあい のぶひさ・し けいえい・ほそだ さとし・いのうえ しいちろう）

オフィス用パーティションのプライバシー保護効果について

— 感覚時間による実験的検討 —

○尾入　正哲
（中京大学　心理学部　応用心理学領域）

キーワード：作業環境　パーソナルスペース　プライバシー

【研究の目的】 近年、オフィスでは個人の作業スペースを区切るパーティション（つい立て）の導入が盛んに行われてきた。パーティションはワーカーのプライバシーを確保し、作業への集中度を上げる効果があるとされる。本研究では、実験者と実験参加者との間にオフィスで用いられているパーティションを設置して着席させ、両者の間の距離や座席の向きを変化させた際に、参加者が実験者の存在を意識する程度や緊張感などを検討した。指標として、矢川・田村（2002）で用いられた感覚時間の評価を参加者に求めるとともに、着席時の居心地などに関する質問紙に回答を求めた。感覚時間はストップウォッチを用い、参加者が一定の時間を作成する方法により測定された。感覚時間が短いほど居心地がわるい（早くその場から離れたい）と考えられる。

【方法】 実験参加者：大学生18名（男性9名、女性9名）。全員、実験者（大学生男）と面識があった。

室内の状況：会議室内で、実験者が定められた位置に着席し、間にパーティションをはさんだ位置に参加者を着席させた。パーティション（ウチダ製パーティションボード、幅100cm×高さ172cm）は実験者の位置から約50cm参加者寄りの箇所に置いた。室内の状況を図1に示す。パーティションの下半分は細かいパンチングメタル状になっており、実験者の足が透けて見える状態であった。独立変数として、両者の間の距離（1m・2m・4m）、パーティションの有無、参加者の実験者に対する席の向き（正面・側面・背後）が操作された。

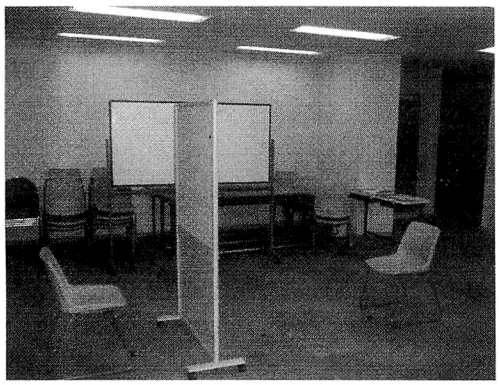


図1　室内の状況

手続き：参加者は試行ごとに、座席に着席後、実験者の合図によってストップウォッチをスタートさせ、1分経過したと判断した時点で停止させることを求められた。参加者により作成された経過時間を感覚時間として記録した。その後、参加者は時間経過や着席時の居心地などに関する質問紙に回答を記入した。参加者には実験中は閉眼しないこと、ストップウォッチの表示面を見ないことを指示した。各独立変数の組み合わせにより18試行（距離3×パーティション有無2×向き3）が連続して行われ、試行順はラテン方格により参加者間でカウンターバランスされた。

【結果】 各指標について3つの独立変数を要因とした分散分析を行った。感覚時間の結果を表1に示すが、いずれの主効果・交互作用も有意でなかった。感覚時間は全体に60秒を超えていた。時間経過の主観評価（時間経過が長く感じた−短く感じた）について、7段階の回答を数値化し、平均評定値について同様の分散分析を行った所、パーティションの有無の主効果が有意であった（$M=4.05, 3.75, F(1,306)=4.63, p<0.05$）。パーティションがない場合の方が、時間が長く感じられていた。

表1　感覚時間の結果（単位秒、カッコ内はSD）

	正面		側面		背後	
	有	無	有	無	有	無
1m	71.2	75.4	81.2	74.4	78.2	74.0
	(16.3)	(15.6)	(21.3)	(17.7)	(14.6)	(16.3)
2m	75.3	77.1	86.4	77.3	76.8	74.1
	(17.2)	(19.2)	(30.2)	(20.6)	(22.7)	(18.2)
4m	76.0	79.3	75.4	80.2	87.4	75.4
	(16.0)	(24.1)	(16.4)	(18.7)	(22.1)	(15.5)

質問紙への回答について「緊張した−しなかった」の項目の結果を表2に示す。上記と同様の3要因分散分析によると、距離・パーティションの有無・向きのいずれの主効果も有意であった（$F(2,306)=17.97, p<0.05, F(1,306)=28.42, p<0.05, F(2,306)=3.99, p<0.05$）。

表2　「緊張した−しなかった」
項目の平均評定値（7段階評定、カッコ内はSD）
数値が大きいほど「緊張しない」ことを示す

	正面		側面		背後	
	有	無	有	無	有	無
1m	4.22	3.22	5.00	3.72	4.72	4.17
	(1.86)	(1.97)	(1.37)	(1.84)	(1.67)	(1.65)
2m	5.33	3.89	5.39	4.33	5.61	4.94
	(2.08)	(1.53)	(1.54)	(1.68)	(1.38)	(1.43)
4m	5.67	4.72	6.17	5.17	5.83	5.28
	(1.33)	(1.78)	(0.86)	(1.47)	(1.20)	(1.56)

【考察】 感覚時間の作成課題にはパーティションの効果がみられなかった。本実験では実験者と参加者が既知の間柄であり、滞在時間も短いことから、実験者の存在はさほど居心地に影響しなかったと思われる。しかし、主観評価には両者の距離・パーティションの有無・座席の向きの効果が認められた。距離が大きい場合でもパーティションがある方が、緊張感が緩和され、視線や表情を隠すといった視覚的な遮蔽に意味があることが示された。また、他の主観評価項目の結果をみると、実験者が男性であったためか、男性より女性の方にパーティションの有無の違いが大きいことがうかがわれる。

本研究の一部は杉直記氏（2008年中京大学心理学部卒）の卒業研究として行われた。

（おいり　まさあき）

青年期における重要な他者への自己開示と健康なパーソナリティーの関係について

松原　詩緒
（立正大学心理学部臨床心理学科）

キーワード：自己開示、対人恐怖、ふれ合い恐怖、充実感、重要な他者

【目的と仮説】　本研究では、青年期における重要な他者への自己開示と、健康なパーソナリティーの関係について検討を行った。自己開示量の上昇と健康なパーソナリティー、あるいは自己開示量の減少と不健康なパーソナリティーが関係していることについては、近年も研究が続けられており、これを支持する結果がえられている（丸山・今川, 2002; 井上, 2006; 高木, 2007）。しかしこれらの研究では、自己開示の対象に家族や友人といった周囲の人間を挙げており、開示者にとって相手がどの程度重要であるかについての言及はなされていない。そのため本研究では、重要な他者と非重要な他者に対する自己開示について調査をし、健康なパーソナリティーとの関係について検討を行った。重要な他者には、松原（2008）を参考に、恋人と最も大切な同性の友人をあげた。そして非重要な他者は、初対面の異性と同性とした。健康なパーソナリティーの指標には、対人恐怖とふれ合い恐怖、充実感を用いた。同調査で松原（2009a）は、恋人と初対面の異性、そして最も大切な同性の友人と初対面の同性の重要度には有意な差がみられ、恋人や最も親しい同性の友人の方が初対面よりも重要であるという結果をえている。また重要な他者へは、非重要な他者よりも有意に多く自己開示を行うことがわかっている。本研究では先行研究と同様に、自己開示と健康なパーソナリティーは関係していると仮説をたてた。つまり、自己開示は対人恐怖やふれ合い恐怖と負の相関、充実感とは正の相関がみられると仮説をたてた。また重要度にも焦点をあて、重要な他者への自己開示と健康なパーソナリティーの相関は、非重要な他者への自己開示との相関よりも強いと仮説をたて、これを検討した。

【方法】　1.調査対象　2008年12月に大学生305（男104、女201）名を対象に質問紙調査を行った。恋人について回答したなかで、現在恋人がいると答えたのは57（男15、女42）名であった。過去にいた、あるいはいないと答えたのは145（男54、女91）名であった。最も大切な同性の友人について回答したのは103（男35、女68）名であった。平均年齢は19.66（SD=1.5）歳であった。恋人の有無により開示量が異なった（松原; 2009a）ことから、以降の分析では、現在恋人がいないと回答した145名は除外した。　2.質問紙　以下の①～⑤の質問により、自己開示とパーソナリティーについて回答を求めた。なお恋人の有無についてたずねた①を除き、回答は全て5件法で求めた。　①恋人の有無：恋人と初対面の異性についてたずねた質問紙にのみ、恋人の有無についての質問を設けた。回答は「いる・過去にいた・いない」の3択で求めた。②自己開示：ESDQ-45（榎本,1987）から松原（2009b：印刷中）を参考に抜粋し、用いた。『将来展望』や『実存的自己』などの10因子、37項目からなる。③対人恐怖：永井（1991）の対人恐怖的心性の質問紙から一部を抜粋し、用いた。永井（1991）が質問項目全体で因子分析を行った際に、因子負荷が高かった質問項目を、因子ごとに3項目ずつ選んだ。なお質問が2項目の因子では、質問を削除せず、そのまま用いた。『他人とうちとけた行動の困難さ』『自己統制の弱さ』などの6因子17項目からなる。④ふれあい恐怖：ふれあい恐怖尺度（岡田, 2002）の一部を抜粋し、用いた。岡田（2002）と松原（2008）の、いずれにおいても因子の変動がなく、負荷が高かったものを各因子5項目ずつ選んだ。『関係調整不全』などの2因子10項目からなる。⑤充実感：充実感尺度（大野久, 1984）を用いた。『連帯－孤立』などの4因子、20項目からなる。

【結果と考察】自己開示と対人恐怖、ふれ合い恐怖、充実感の関係を検討するため、相関分析を行った。松原（2008, 2009a, 2009b：印刷中）で開示対象の違いや性差により結果が異なったことから、これらを分けて相関分析を行った。　1.恋人への開示　男性では、対人恐怖の『自己統制の弱さ』と中程度の負の相関がみられた。ふれ合い恐怖の『関係調整不全』『対人退却』と、『将来展望』の開示に中程度の負の相関がみられた。充実感では『連帯－孤立』と強い正の相関がみられた。『将来展望』の開示と『充実感気分－退屈・空虚感』『信頼・時間的展望－不審・時間的展望の拡散』で中程度の正の相関がみられた。全体を通して、『将来展望』の開示と有意な相関が多くみられた。一方女性では、自己開示と対人恐怖の『自己統制の弱さ』に中程度の負の相関がみられた。充実感では、『充実感気分－退屈・空虚感』『自立・自信－甘え・自信のなさ』『連帯－孤立』『信頼・時間的展望－不審・時間的展望の拡散』で中程度の正の相関がみられた。男女ともに、対人恐怖の『自己統制の弱さ』と自己開示に多くの有意な相関がみられた。　2.最も大切な同性の友人への開示　男性では開示と対人恐怖の『緊張感の高まり』と『視線の問題』に中程度の負の相関がみられた。そして充実感の『充実感気分－退屈・空虚感』『自立・自信－甘え・自信のなさ』『信頼・時間的展望－不審・時間的展望の拡散』では中程度の正の相関がみられた。特に『信頼・時間的展望－不審・時間的展望の拡散』は多くの自己開示因子と相関がみられた。一方女性では、開示とふれ合い恐怖の『対人退却』と弱いあるいは中程度の負の相関が多くみられた。充実感では『充実感気分－退屈・空虚感』『自立・自信－甘え・自信のなさ』『連帯－孤立』『信頼・時間的展望－不審・時間的展望の拡散』と中程度の正の相関がみられた。　3.初対面の異性への開示　男性では、開示と対人恐怖の『他人とうちとけた行動の困難さ』『緊張の高まり』『視線の問題』『関係的自己意識について』『自己の不安定さと劣等感』と中程度の負の相関がみられた。特に、『将来展望』の開示とは有意な結果が多く、『視線の問題』とは-.71の強い負の相関がみられた。ふれ合い恐怖の『関係調整不全』とも中程度の負の相関がみられた。恋人への開示と比較し、相関の強さや有意な結果の数には、顕著な差はみられなかった。また、重要度に関わらず、『将来展望』についての開示と対人恐怖やふれ合い恐怖、充実感には有意な相関が多くみられた。女性では、自己開示との相関は、あまり有意な結果がみられなかった。有意な相関であったのは以下のとおりである。対人恐怖の『自己の不安定さと劣等感』『自己統制の弱さ』に中程度の負の相関が、ふれ合い恐怖の『関係調整不全』と『対人退却』にも中程度の負の相関がみられた。また充実感では『自立・自信－甘え・自信のなさ』と『信頼・時間的展望－不審・時間的展望の拡散』で中程度の正の相関がみられた。女性では、恋人への開示と比較すると、若干相関の強さが弱まり、有意な結果の数が減少した。　4.初対面の同性への開示　男性の開示では、ほとんど有意な相関はみられなかった。唯一有意であったのは、『パーソナリティー』の開示と対人恐怖の『緊張の高まり』であり、仮説とは異なる中程度の正の相関であった。女性でもほとんど有意な結果がみられなかった。対人恐怖の『緊張の高まり』と弱い負の相関がみられた。有意であったのは、『他人とうちとけた行動の困難さ』で、弱い正の相関がみられた。充実感の『信頼・時間的展望－不審・時間的展望の拡散』と弱い負の相関がみられた。最も大切な友人と比較すると、相関の強さは明らかに弱まり、有意な相関も減少した。以上の結果から有意な相関においては、ほとんどの自己開示と健康なパーソナリティーには正の相関が、不健康なパーソナリティーには負の相関がみられた。仮説は概ね支持されたといえる。また、男性の恋人や初対面の異性に対する開示を除き、重要な他者への自己開示は、非重要な他者への開示より強く、有意な相関が多く見られた。この仮説も概ね支持されたといえる。男性の、恋人と初対面の異性への自己開示のみ、相関に違いはみられなかった。本研究では、恋人が現在いない実験参加者も多かったため、分類した結果、少ない人数のグループもみられた。今後、調査数を増やし、より確かな結果を模索する必要があるだろう。　（まつばら しお）

韓国青少年を取り巻く成育環境の変化

― 韓国の新聞報道を手掛かりとして ―

小川隆章)
(環太平洋大学・次世代教育学部)

キーワード：成育環境、韓国社会、マスコミ報道

【研究の目的】私はソウルオリンピック（１９８８年）の前後から日本と韓国の青少年を取り巻く成育環境の類似性と差異に興味を持って、多少とも聞き取り調査・アンケート調査などを実施している。近年、日本でもそうだが、韓国でも大きな社会の変化、国民の価値観と行動に大きな変動が生じて来ているようである。ここでは、韓国青少年を取り巻く成育環境としての韓国社会の変化を整理し、まとめてみたい。

【方法】韓国の３大新聞、朝鮮日報、中央日報、東亜日報の記事を中心として、ここ数年の記事を通覧することによって、主要な社会変動、価値観、人々の行動に見られる変化を取り上げ整理してみることにした。

【結果】１．少子化の進行　　出生率の推移は図１の通りで



図１．韓国の合計特殊出生率の推移
（中央日報　２００９年２月２６日）

ある。２０００年頃より世界最低レベルとなっている。合計特殊出生率が１９７０年には４．５３であったが、近年では図１のように推移している。このひとつの要因は晩婚化・未婚化だろう。韓国人の初婚年齢は年々遅くなっている。２００８年の男性の平均初婚年齢は３１．４歳、女性２８．３歳となった。１９９０年の統計では男性２８．６歳、女性２５．５歳だった。韓国保健社会研究員院は、学歴の向上、女性の経済活動の増加、就職難などが影響していると分析している。女性の社会進出が目覚ましいのに、働きながら出産・子育てをする環境が整っていないことも指摘されている。

２．結婚観の変化　　結婚観も変わってきていて、結婚前に同居（同棲）するカップルが増えて来ている（中央日報２００９年３月１日）。「伝統的家族倫理が崩れている２００９年韓国社会の姿だ。同居（ｃｏｈａｂｉｔａｔｉｏｎ）は普通「結婚はせず、性関係のある２人の男女が共同の住居を持って日常生活を共有すること」と定義される。全女性回答者たちの３７．６％が同居に賛成し、２０～２９歳の女性たちの賛成率は５５．６％だった。３０代女性の半数以上の数字が同居に賛成した。未婚女性（５２．９％）や離婚した女性（４７．８％）が同居に対して賛成する割合が高く、夫と死別した女性（２４．１％）と現在、配偶者がいる女性（３５．９％）は、これらより相対的に賛成率が低かった。」また、同紙２００８年９月１９日はソウル市傘下の女性家族財団がソウル市在住の２５～４４歳の男女２５００人を対象にした調査結果を紹介している。結婚について、「必ずしなければならない」との回答は１４．８％、２０代後半の女性では１１．１％だった。ひとり暮らしの高所得未婚女性を表すことばで、「ゴールドミス」があるそうだ。「学歴が大卒以上、年俸４０００万ウォン、年齢３０歳から４５歳までの未婚女性」というのが雇用情報院による定義だそうだ。その上を行くのがプラチナミス、ゴールドミスまでいかない女性はシルバーミスと呼ばれ、近年は増加しているということである。

３．男児選好の緩和　　韓国では男児選好思想が強く、１９８７年に医療法第２０条として、医療関係者が胎児の性別を告知することが禁じられてきた。近年は男児選好の傾向が著しく弱まり、自然の性比に近くなったため、憲法裁判所はこの条項を違憲とした。早急に法改正が迫られている。

４．埋葬文化の変化　　儒教的伝統から土葬が主流の埋葬方式だった韓国で、近年では火葬が多くなった。本年５月自殺した盧武鉉（ノ・ムヒョン）前大統領が遺書で「火葬にしてくれ」と遺言し、国民葬の後、水原の火葬場で火葬されたことは日本でも報道された。保健福祉家族部の資料では２００６年に死亡した人の約６割が火葬であった。

５．女性の社会進出の増加　　近年、小学校教師採用者の９０％近くを女性が占める。上級国家公務員試験合格者も半数ちかくを占め、司法試験合格者は２００６年に３７．７％、外交官試験３６％を占めた。医師免許保持者が２００５年に２割ほど、大学教授１３．５％、地方議会の議員１４．４％となっている。

６．離婚の増加　　１９７０年代には年間離婚は１万組ほどであったのが、２００７年には１２万４５９０件となっている。ＯＥＣＤ加盟国中でも上位圏に入る。協議離婚の申請中で離婚理由では男女とも浮気が多い。裁判所が２００５年３月、協議離婚申請をすぐ受け付けず、１週間（子供がいない場合）ないし３週間（子供がいる場合）考えさせる制度を取り入れたことにより、やや少なくなった。

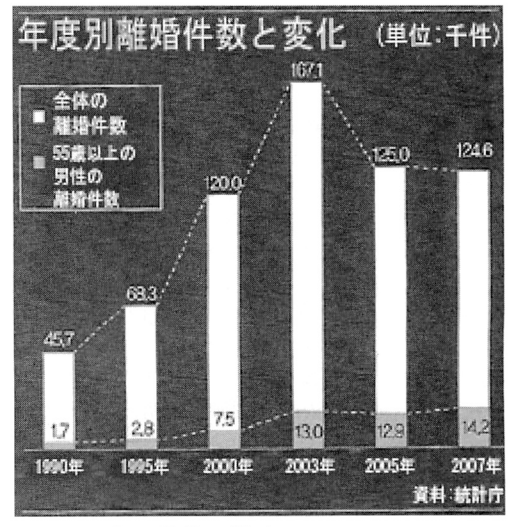


図２．離婚件数の推移
（中央日報２００８年６月４日）

（おがわたかあき）

想像されたヒト免疫不全ウィルス感染後の自己イメージ尺度の作成

○飯田 敏晴[1,2] 伊藤 武彦[3] 井上 孝代[4]
[1] 明治学院大学大学院心理学研究科 [2]国立国際医療センター 戸山病院 第一専門外来部
[3]和光大学現代人間学部 [4]明治学院大学心理学部
キーワード：HIV、エイズ、自己イメージ、予防

【目的】

本研究では、予防的視座を踏まえた心理教育的プログラムの策定及び評価のために、「ヒト免疫不全ウィルス感染が判明した後に、自己が置かれる状況や周囲から受ける影響に関する見通し（以下、想像されたヒト免疫不全ウィルス感染後の自己イメージ）」を測定する尺度を開発するための予備調査を行うことを目的とする。

【方法】

・調査時期　2009年4月下旬

・手続き

ⅰ. 対象:首都圏A私立大学の授業を履修する大学1年生209名に質問紙を配布。118名(男29名、女86名、不明3名)から回収が得られた。回答に不備があるものを除き、最終的に112名(男27名、女85名)を分析対象とした(有効回収率=53.6%)。平均年齢は18.34歳(SD=.69)であった。

ⅱ. 倫理的配慮：調査内容が、人の生死に関わるものであるため、調査対象者への侵襲性を考慮し、以下の4点を質問紙配布前に口頭で伝えた。まず、1)ヒト免疫不全ウィルス(HIV)、および後天性免疫不全症候群(AIDS)に関わる調査であること、2) 回答は任意であり、拒否しても不利益にならないこと、3)個人を特定せず研究以外の目的には使用しないこと、4) 質問紙は、添付の封筒に封緘の上での留置法での回収であることを伝えた。同様に文章でも明示した。また、1週間後の質問紙回収時、近隣の保健所の抗体検査(無料)の案内と公共団体の提供する電話相談と疾患に関する一般的知識の普及啓発を目的とした冊子を配布し、広報活動を行った。

・調査内容

ⅰ. デモグラフィック：性別、年齢

ⅱ. 暫定版 想像されたヒト免疫不全ウィルス感染後の自己イメージ尺度:予備調査によって収集された大学生263名(男99名、女164名)の自由記述文を、KJ法(川喜田, 1967)を参考に、研究協力者4名によって分類され、52項目に整理した。ついで、別の研究協力者4名(博士後期課程大学院生1名、臨床心理士3名)で項目表現及び内容を検討した。結果、10項目が逆転項目として修正され、2項目が文章のわかりやすさを考慮して、別々に分離された。これらの検討を基に、最終的に筆者らの合議により54項目を採択した。各項目に対し「もしあなたがヒト免疫不全ウィルス(HIV)に感染したとしたら、どのような状況になると思いますか。各項目について、あなたの意見にあてはまるものを1つだけ選んで○をつけてください」という教示文のもと、7件法での回答を求めた。

・その他

上記の[手続き]及び[調査内容]につき、第1筆者の所属する大学院専攻委員会において倫理的側面について検閲を受け採択された。

【結果と考察】

項目分析において、回答に50%以上の偏りが認められた項目(例「非常にそう思う」を選択した者が50%を越えた場合)や、肯定率または否定率が80%を上回った項目、12項目を削除した。

42項目に対して主因子法による探索的因子分析を行った。固有値1.0以上を示していたのは12因子であり累積寄与率は58.1%であった。再度、各指定因子数での固有値の減衰と累計寄与率に着目し、指定の因子数を除々に減らし、解釈可能な4因子解を採択した。*Promax*回転後、因子負荷量が.35以下の項目及び、3つ以上の因子にまたがっている項目を除き、最終的に第1因子10項目、第2因子9項目、第3因子5項目、第4因子6項目、合計30項目となった。第1因子は「自己隠蔽(α=.83)」、第2因子は「身体的物理的負担(α=.80)」、第3因子は「親密な対人関係の喪失(α=.82)」、第4因子は「自己制御(α=.76)」と命名した(累積寄与率は41.4%)。

Table1　暫定版 想像されたヒト免疫不全ウィルス感染後の自己イメージ尺度の因子分析結果

項目番号	項目内容	因子負荷量 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ	自己隠蔽(α=.83)				
41	まわりの人の自分の見る目は変わらない	-.66	.11	.08	-.15
47	まわりの人に感染したことを言う	-.63	.07	.16	.18
13	病院に行きづらくなる	.63	-.16	-.06	.04
9	大学から遠のく	.57	.07	.17	.00
19	まわりの人に感染したことを言える	-.56	-.12	.10	.13
14	まわりの人が精神的に支えてくれる	-.56	.26	.23	.19
6	まわりの人と距離を置いてつきあう	.56	.05	.26	.12
11	ひきこもる	.52	.13	.24	-.04
3	まわりの人から偏見や差別を受けることがない	-.47	-.13	-.06	.00
12	まわりの人の目が気になる	.46	.02	.25	.15
Ⅱ	身体的物理的負担(α=.80)				
27	病気にかかりやすくなる	.12	.74	-.20	.12
10	身体がだるくなる	-.08	.69	.05	-.14
37	病気が治りにくくなる	-.01	.66	-.13	.17
42	お金がかかる	-.08	.61	-.02	-.04
30	身体に痛みが走る	.05	.55	-.01	.10
21	熱が出る	-.28	.54	.11	-.07
26	気持が不安定になる	.01	.46	.23	-.17
34	頻繁に通院しなくてもよい	-.08	-.44	.15	-.10
46	まわりの人に迷惑をかけてしまう	.00	.41	.10	-.09
Ⅲ	親密な対人関係の喪失(α=.82)				
16	結婚が出来なくなる	-.20	-.11	.87	-.01
38	恋人が出来なくなる	-.02	-.08	.86	.07
33	まわりの人と気まずくなる	.23	.08	.58	-.08
54	まわりの人が自分と距離を置く	.31	-.06	.55	.01
51	性行為が出来なくなる	-.03	.05	.47	.10
Ⅳ	自己制御(α=.76)				
20	出来るだけ楽しい生活を送ろうとする	.11	.03	-.03	.88
7	悔いの残らないような生活を送ろうとする	-.03	-.01	.25	.61
17	出来るだけ自分がしたいことをする	.19	.06	-.01	.58
53	出来るだけ前向きに生きていく	-.21	-.22	.04	.51
24	積極的に病気と闘う	-.24	.09	-.18	.48
36	自分自身の事をきちんと理解しようと努力する	-.08	.01	.01	.42

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅱ	.32		
Ⅲ	.59	.37	
Ⅳ	-.27	.21	.02

Note：主因子法(プロマックス回転)

本研究は、大学生がヒト免疫不全ウィルス感染後に自己がどのように変容するかに関する見通しについて探索的に調査を行い、暫定版の尺度項目を作成した。今回の調査に引き続き、さらに尺度の信頼性・妥当性の検討をしていきたい。

【主要参考文献】

飯田敏晴・伊藤武彦・井上孝代 2008 日本の大学生におけるHIV感染者・AIDS患者に対する偏見と知識：中国との比較 応用心理学研究, 33, 142-143.

（いいだ としはる・いとう たけひこ・いのうえ たかよ）

自己意識の日本と韓国の国際比較研究

○山田竜平[1)]　金成恩[2)]　荻野七重[3)]　齊藤勇[4)]
([1)]立正大学大学院心理学研究科　[2)]EKOS 韓国語教室 [3)] 白梅学園短期大学心理学科　[4)] 立正大学心理学部)
キーワード：自己意識，内心発言，日韓比較

【研究の目的】 自己意識については欧米だけでなく、日本においても数多くの研究がなされている(黒沢,1992;押見・渡辺・石川,1985;菅原,1984)。社会心理学において、文化相対論が盛んに唱えられ、西洋と東洋の比較研究が多くなされている。ただ、東洋といってもそれぞれ国が特有の異なった文化を持っている。そこで、本研究では日本と近い国、近い文化を持っているとされる韓国において、自己意識の比較を行い、両国の類同を検討することとした。Fenigstein, Scheier, & Buss (1975)は**自己意識**に，公的自己意識と私的自己意識という二つの自己意識があることを提唱している。そこで、本研究においても自己意識を公的と私的に分け、調査した、さらに、それらの自己意識は内心で思っていることと、人に話すときとでは異なると考えられるので、内心どの程度意識しているか、発言するときどの程度話すかをあわせて調査した。日韓において自己意識の自己開示の比較を行い対人関係の違いについての知見を得ることにした。

【方法】調査対象者および調査時期　調査対象者は日本人大学生 297 名，韓国人大学生 185 名で，調査は、2007 年に行った。このうち回答に不備のあった 7 名を除いた 475 名(日本人男性 151 名，女性 142 名，韓国人男性 80 名，女性 102 名)を分析対象者とした。**質問紙**　菅原(1984)の自意識尺度の項目を参考に,本研究のために作成した下記の 10 項目で構成されている。A1_私は自分のしたことについて反省する。A2_私は人が自分をどう思っているのか気になる。A3_私は自分の気持ちに注意を向けている。A4_私は人に良い印象を与えているか気になる。A5_私は自分の内面を理解しようと努力する。A6_私は自分をどう見せるか関心がある。A7_私は自分が何をしたいのかに関心がある。A8_私は自分の外見が気になる。A9_私は自分の感情の変化に敏感である。A10_私は自分の髪型や服装には気をかけている。この 10 項目について荻野・齊藤(2002)の欲求行動調査表に基づいた，内心と発言という2層の心理をそれぞれ7件法(まったくあてはまらない～非常によくあてはまる，絶対話さない～非常によく話す)で回答を得た。

【結果と考察】 因子分析と信頼性分析　自己意識尺度の下位構造を確認するために，全 10 項目について主因子法による因子分析を行った。スクリープロットにより因子数を 2 とし、再度因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。その結果,欲求・行動段階でともに 2 因子構造が確認された。第 1 因子は全 6 項目で，菅原(1984)の公的自意識と同じ，周りの目を気にすることに関する項目が含まれていたので,「公的自己意識」と命名した。第 2 因子は全 4 項目で，菅原(1984)の私的自意識と同じ，自分の内面を意識した項目が含まれていたので,「私的自己意識」と命名した。信頼性分析(Cronbach の α 係数)の結果，尺度全体では α=.80,「公的自己意識」は α=.77,「私的自己意識」は α=.74 であった。因子分析と信頼性分析の結果は Table.1 に示す。

自己意識の日韓比較　因子分析によって得られた各因子を構成するそれぞれの項目の上位 2 項目を採用し，その平均値を下位尺度得点とした。各因子それぞれの自己意識得点を比較するため，因子ごとに日韓で t 検定を行った。「公的自己意識」では発言(t(473)=2.58, p<.05)で，「私的自己意識」では内心 (t(473)=4.72, p<.001)と発言(t(473)=6.88, p<.001)において有意な差が見られた。「公的自己意識」の内心では有意な差は見られなかった(t(473)=0.41, n.s.)。さらに，それぞれの項目ごとに日本と韓国の比較，および内心と発言の比較をするために，t 検定を行った。日韓の比較では，A3 の内心(t(436)=4.67, p<.001)と発言(t(473)=5.48, p<.001)，A4 の発言(t(473)=3.25, p<.01)，A5 の内心(t(448)=3.32, p<.01)と発言(t(473)=6.54, p<.001)，A6 の発言(t(473)=5.25, p<.001)，A7 の内心(t(443)=5.70, p<.001)と発言(t(473)=6.77, p<.001)，A8 の発言(t(473)=3.77, p<.001)，A9 の発言(t(473)=4.18, p<.001)において有意な差が見られた。内心と発言の比較では、日本(t(292)=4.23~15.96, p<.001)と韓国(t(181)=4.53~10.43, p<.001)ともに，全ての項目において有意な差が見られた。各項目の平均値は Figure.1 に示す。

この結果，内心において、韓国人は日本人よりも私的自己意識が高いことが示唆された。他方、公的自己意識については日本人も韓国人もともにかなりの程度に意識していることが明らかにされた。これに対して、人に話すときは、日本人も韓国人も内心で思っているほどには発言していないことが明示された。ただ、日本人と韓国人を比較すると、韓国人の方が、私的自己意識においても公的自己意識においても、より多く発言していることが明らかにされた。韓国人の方が、自己意識についてより多く自己開示されていることが明らかにされ、同じ東洋人でも違いがあり、日本人の自己開示の抑制性が示唆された。

Tab.1　自己意識の因子分析結果(主因子法・プロマックス回転)，因子間相関および α 係数

	公的自己	私的自己	α係数
A4	.79	−.03	.77
A2	.76	−.03	
A8	.75	−.09	
A6	.45	.19	
A10	.40	.00	
A1	.40	.17	
A5	−.05	.77	.74
A3	.01	.71	
A7	−.02	.66	
A9	.23	.39	
		.418	.80

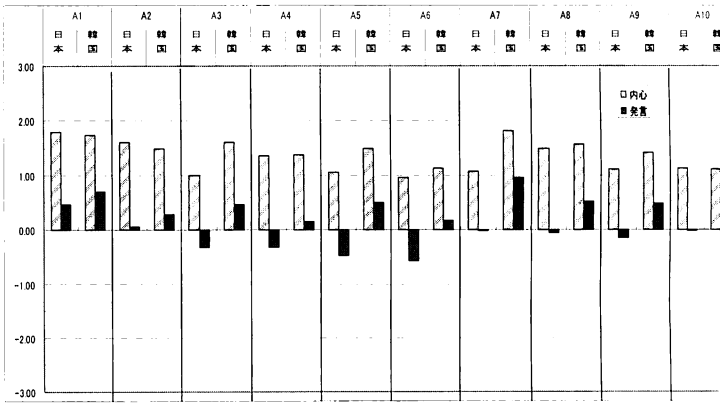


Fig.1.各項目国別平均値

(やまだ　りゅうへい・きむ　そんうん・おぎの　ななえ・さいとう　いさむ)

自己意識、自己評価、セルフモニタリングの関連についての日本と韓国の国際比較研究

○齊藤勇[1)]　山田竜平[2)]　金成恩[3)]　荻野七重[4)]
([1)] 立正大学心理学部　[2)] 立正大学大学院心理学研究科 [3)] EKOS 韓国語教室　[4)] 白梅学園短期大学心理学科)
キーワード：自己意識，自己評価，セルフモニタリング，日韓比較

【研究の目的】本研究は自己について社会心理学的に注目されている自己意識、自己評価、セルフモニタリングの日本と韓国の国際比較を行うことを目的としている。社会心理学において文化相対論では西洋に対する東洋的自己が注目されているが、ここでは同じ東洋に属する日本と韓国を比較し、その類同を検討する。日韓の自己意識と自己評価とセルフモニタリングの相関関係を見るとともに、内心と発言の違いも加えて検討する。

【方法】調査対象者および調査時期　調査対象者は日本人大学生 297 名，韓国人大学生 185 名で，調査は、2007 年に行った。このうち回答に不備のあった 7 名を除いた 475 名(日本人男性 151 名，女性 142 名，韓国人男性 80 名，女性 102 名)を分析対象者とした。**質問紙**　菅原(1984)の自意識尺度の項目を参考に，本研究のために作成した 10 項目で構成されている自己意識尺度，Rosenberg(1965)の自己評価尺度の項目を参考に，本研究のために作成した 10 項目で構成されている自己評価尺度，　Snyder(1987)のセルフモニタリング尺度の項目を参考に，本研究のために作成した 20 項目で構成されているセルフモニタリング尺度。これら 40 項目について荻野・齊藤(2002)の欲求行動調査表に基づいた，内心と発言という 2 層の心理をそれぞれ 7 件法(まったくあてはまらない～非常によくあてはまる，絶対話さない～非常によく話す)で回答を得た。

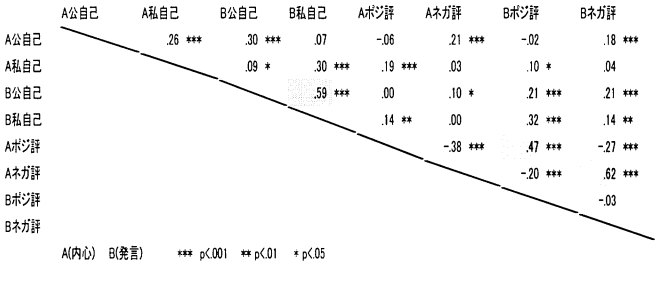
【結果と考察】　相関分析　自己意識、自己評価、セルフモニタリングそれぞれの因子ごと、また、内心と発言ごとに日本と韓国のデータを合わせた相関係数を算出し、有意差検定を行った。次に、日本と韓国、それぞれのデータを別にして同様の分析を行ない。両者を比較検討した。日韓合わせた相関分析の結果は Table.1 に示す。

自己意識，自己評価，セルフモニタリングの日韓比較　1．自己意識と自己評価の相関、両者の因子分析の結果から、両者とも 2 因子（公的・私的自己意識、ポジティブ評価、ネガティブ評価）が抽出されているので、それらを内心と発言に分け、4×4 の相関係数を算出した。その結果が Tab. 1 に示されている。その結果、16 のうち、9 の相関において有意差がみられたが、その相関係数は高いとはいえず、3 を越えているのはわずかに私的自己意識の発言とポジティブ評価の発言のみであった。自分の内心を人に話す人は自分のポジティブな面を人に話す傾向があると推測できる。

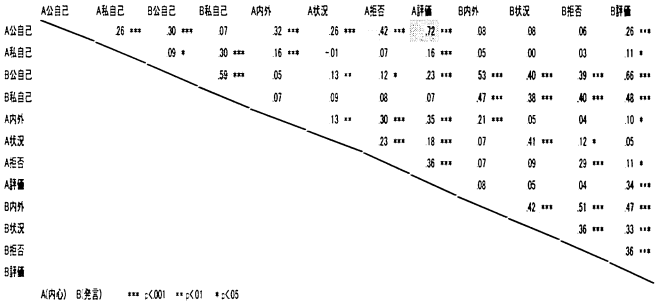
2．自己意識とセルフモニタリングの相関　両者の因子分析の結果から、自己意識は 2 因子、セルフモニタリングは 4 因子が抽出されているので、それらを内心と発言に分け、4×8 の相関係数を算出した。その結果が Tab.2 に示されている。その結果、32 のうち 19 の相関において有意な差がみられた。一貫して高い有意な差がみられたのは、公的自己意識の内心とセルフモニタリング全 4 因子とのプラスの相関、公的自己意識の発言とセルフモニタリング全 4 因の発言とのプラスの相関、私的自己意識の発言とセルフモニタリング全 4 因の発言とのプラスの相関である。特に公的自己意識と評価懸念との相関は内心、発言ともに高い相関を示している。公的、私的いずれの自己意識の発言もセルフモニタリング全 4 因子の発言と高いプラスの相関を示していることから、自己意識について人に話す人は、セルフモニタリングについても人に話す傾向をもっていることが明らかにされたといえよう。

3．自己評価とセルフモニタリングの相関　両者の因子分析の結果から、自己評価は 2 因子、セルフモニタリングは 4 因が抽出されているので、それらを内心と発言に分け、4×8 の相関係数を算出した。その結果が Tab.3 に示されている。その結果、32 のうち、8 の相関において有意な差がみられたが、いずれも 3 以下であった。なかでも一貫して有意な差がみられたのは、ポジティブな自己評価の発言がセルフモニタリング全 4 因子の発言とプラスの相関が示されている点である。この結果から自分のポジティブな面を人に話す人は、自分のセルフモニタリング傾向をも人に話す傾向があることが示されたといえよう。日韓それぞれの相関分析をみると、いくつかの点で、相異がみられたが、総じて、双方は同じ傾向が見られた。今後の課題、自己意識、自己評価とセルフモニタリングとの関係について、共分散構造分析などの多変量解析を用いて、さらにこれらを精査していく。

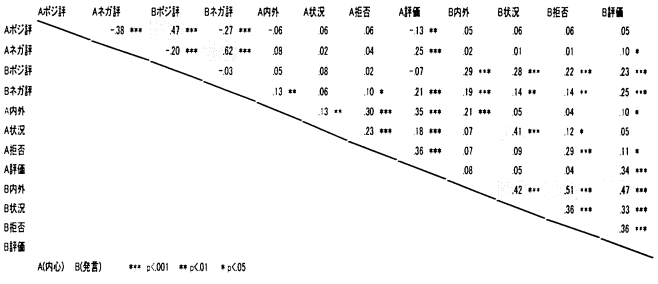
Tab.1　自己意識と自己評価の相関分析結果



Tab.2　自己意識とセルフモニタリングの相関分析結果



Tab.3　自己評価とセルフモニタリングの相関分析結果



(さいとう　いさむ・やまだ　りゅうへい・きむ　そんうん・おぎの　ななえ)

セルフモニタリングの日本と韓国の国際比較研究

○荻野七重[1)]　齊藤勇[2)]　山田竜平[3)]　金成恩[4)]
([1)] 白梅学園大学子ども学部子ども学科　[2)] 立正大学心理学部 [3)]　立正大学大学院心理学研究科 [4)] EKOS 韓国語教室)
キーワード：セルフモニタリング，内心発言，日韓比較

【研究の目的】 Snyder(1974)により提唱されたセルフモニタリングについては欧米だけでなく、日本においても多くの研究がなされている(岩淵・田中・中里,1982;吉野・岩佐,2000)。社会心理学において、文化相対論が唱えられているなか、西洋と東洋の比較研究が多くなされているが、東洋といってもそれぞれ国が特有の異なった文化を持っている。そこで、本研究では同じ東洋の韓国と日本において、セルフモニタリングの比較を行い、両国の類同を検討することとした。さらに、セルフモニタリングは内心と発言では異なると考えられるので、内心と発言の程度をあわせて調査した。

【方法】調査対象者および調査時期　調査対象者は日本人大学生 297 名，韓国人大学生 185 名で，調査は、2007 年に行った。このうち回答に不備のあった 7 名を除いた 475 名(日本人男性 151 名，女性 142 名，韓国人男性 80 名，女性 102 名)を分析対象者とした。**質問紙**　Snyder のセルフモニタリング尺度の項目を参考に，本研究のために作成した下記の 20 項目で構成されている。A1_私は先輩や上司に話を合わせる。A2_私は人前でスピーチするときは自分がどうみられているか気になる。A3_私は相手が嫌がることは言わない。A4_私は性格テストで出る自分の性格が気になる。A5_私は面接試験では、好印象を与えるため、本当の自分より明るく見せる。A6_私は人と話していて、相手がつまらなそうだと話題を変える。A7_私は周りから孤独だと思われたくないため、無理して友達づきあいをしている。A8_私は状況によって、まったく別人のように振舞う。A9_私は先輩や上司に好かれるように行動する。A10_私は外で見せている顔と心の内とが違う。A11_私は、人を喜ばせたり、機嫌をとろうとして、自分の意見や行動を変える。A12_私は、学生は学生らしくなど、その人らしい行動をすることが大事である。A13_私は、お世辞は必要で、人間関係の潤滑油である。A14_私は相手や状況に合わせて自分の行動を変えるのは苦にならない。A15_私は本人を怒らせてまで、本当のことを言う必要はない。A16_私はスピーチするときは、自分の考えを話すより聞いている人が喜ぶような話をする。A17_私は相手のことを考えて必要ならウソをつく。A18_私は、本当は嫌いな人でも、親しげに振舞うことができる。A19_私は周りの人が自分をどうみているか気になる。A20_私は周りから暗い性格と思われたくないので、無理しても明るく振舞う。この 20 項目について荻野・齊藤(2002)の欲求行動調査表に基づいた内心と発言という 2 層の心理をそれぞれ 7 件法(まったくあてはまらない～非常によくあてはまる，絶対話さない～非常によく話す)で回答を得た。

【結果と考察】 因子分析と信頼性分析　セルフモニタリング尺度の下位構造を確認するために，全 20 項目について主因子法による因子分析を行った。スクリープロットにより因子数を 4 とし、再度因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。その結果，欲求・行動段階でともに 4 因子構造が確認された。第 1 因子は全 7 項目で，内側の自分と外側の自分を使い分けるという項目が含まれていたので，「内外使分」と命名した。第 2 因子は全 6 項目で，状況に合わせて自分の行動などを変えることができるという項目が含まれていたので，「状況迎合」と命名した。第 3 因子は全 4 項目で，周りの人たちから孤独だと思われたくないという項目が含まれていたので，「拒否回避」と命名した。第 4 因子は全 3 項目で，周りの人たちからどう評価されているのかが気になるという項目が含まれていたので，「評価懸念」と命名した。因子分析と信頼性分析(Cronbach の α 係数)の結果は Table1 に示す。

セルフモニタリングの日韓比較　因子分析によって得られた各因子を構成するそれぞれの項目の上位 2 項目を採用し，その平均値を下位尺度得点とした。各因子それぞれのセルフモニタリング得点を比較するため，因子ごとに日韓で t 検定を行った。「内外使分」では発言($t(473)=4.40$, $p<.001$)で，「状況迎合」では内心($t(473)=1.97$, $p<.05$)と発言($t(473)=2.75$, $p<.01$)で，「拒否回避」では内心($t(473)=3.99$, $p<.001$)と発言($t(473)=3.31$, $p<.01$)で，「評価懸念」では発言($t(473)=2.88$, $p<.01$)で有意な差が見られた。各項目の平均値は Figure1,2 に示す。この結果から，双方ともモニタリング傾向は高いが、ともに発言は抑制的であり、さらに日本人の方がより抑制的であることが明示された。

Tab.1　セルフモニタリングの因子分析結果(主因子法・プロマックス回転)，因子間相関およびα係数

	状況　合	否回		数
8	.713	−.104	−.025	−.073	.74
10	.694	−.110	.008	−.032	
9	.586	−.103	.117	.041	
11	.414	.149	.238	−.010	
17	.348	.118	−.155	.115	
3	.313	.186	−.192	.177	
1	.292	.159	.260	.075	
14	−.068	.596	−.099	.053	.54
16	−.207	.417	.350	−.057	
18	.197	.387	.031	−.086	
13	.320	.332	.029	−.091	
6	.045	.221	.080	.175	
12	−.069	.219	.079	.059	
20	−.061	.073	.607	−.011	.48
7	.068	−.083	.454	.079	
5	−.027	.207	.236	.028	
15	.135	.075	.178	.013	
2	−.009	−.151	.146	.698	.59
19	.053	.003	.104	.581	
4	−.058	.256	−.142	.474	
		.380	.568	.481	.80
			.329	.276	
				.477	

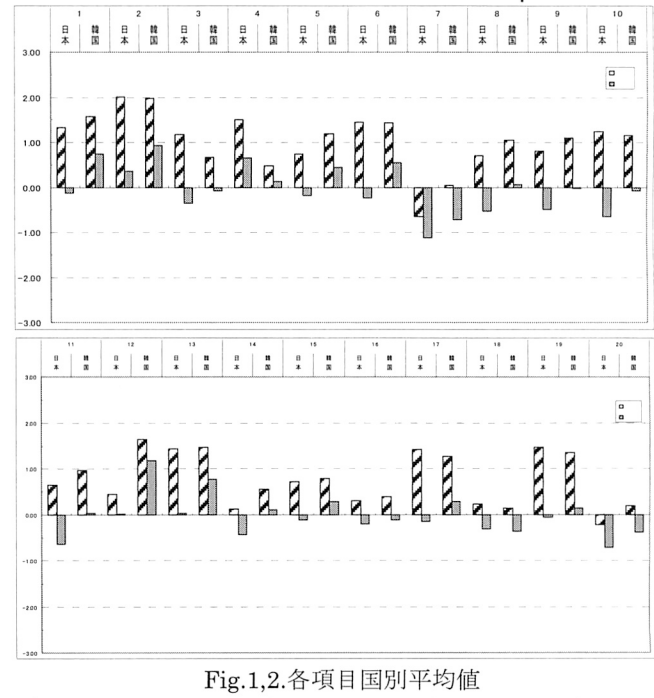


Fig.1,2.各項目国別平均値

(きむ　そんうん・おぎの　ななえ・さいとう　いさむ・やまだ　りゅうへい)

地域在住高齢者における筋力向上トレーニングの心理面改善効果と血中ビタミンの関係

○長尾　史英[1)]　川俣　幸一[,2)]
([1)]飯田女子短期大学幼児教育学科　[2)]飯田女子短期大学家政学科)
キーワード：筋力向上トレーニング、SF-36、FES、GDS、血中ビタミン

【研究の目的】

従来、高齢者への運動活動はウォーキングなどの有酸素運動が主流とされていたが、現在、高齢者に対する高負荷レジスタンストレーニング（いわゆる筋力向上トレーニング）が注目されている。高齢者への運動は身体面だけでなく心理面における改善も期待でき、最終的にはＱＯＬの向上、健康寿命の延伸などに対する一要因ともなると考えられる。

近年、介護予防運動分野において、高齢者への身体改善効果と血中ビタミンＤやＣ等との関係が報告されている。しかしながら、運動における心理改善効果と血中ビタミンの関係にまで検討を行った研究は未だ少ない。

今回我々は、地域在住一般高齢者を対象に、無作為化比較対照試験下において、漸増レジスタンストレーニングとバランストレーニングを組み合わせた介護予防運動教室を３ヵ月半実施し、教室参加前後における参加者の心理変化、ならびに身体機能変化(血液生化学検査)を追跡する研究を行った。その結果、いくつかの知見が得られたので報告する。

【方法】

調査協力者

本研究に同意した長野県在住の65歳以上の一般高齢者26名（男性10名、女性16名)。対象者を無作為に2群に分け、それぞれ運動教室参加群、コントロール群（通常生活群）とする無作為化比較対照試験下で行った。測定の際に欠損値のある回答は無効とし、最終的な分析対象は24名とした（運動教室参加群13名、コントロール群11名)。なお、コントロール群においては同3ヶ月において、何ら制約をかけずに通常の生活をおくるようにお願いをした。

調査期間

2008年11月下旬から2009年2月中旬の3ヶ月間にかけて介護予防運動教室を週2回実施した。

調査内容

①身体・血液検査

運動教室実施前後で、運動教室参加群とコントロール群ともに、血中ビタミン（脂溶性ビタミンA、D、Eと副甲状腺ホルモン（PTH)、ならびに水溶性ビタミン B1、B6、C）を測定した。なお血液検査は依頼分析とした。

②心理評価

運動教室実施前後で、運動教室参加群とコントロール群ともに、健康関連QOLアンケートであるSF-36v2、転倒有能感尺度FES（Falls Efficacy Scale)、老年期うつ病評価尺度GDS簡易版、老研式活動能力指標を実施した。また、データの集計・解析にはSPSS12.00 for Windows Base Systemを使用した。

倫理的配慮

本研究は対象者にはヘルシンキ宣言に基づき、事前に研究の主旨などを説明し、文書にて調査に関しての同意を得た。

【結果】

運動教室参加群とコントロール群において、身長、体重、年齢、老研式活動能力指標において、それぞれ有意差はみられなかった。次に、介護予防運動教室参加群において、運動教室実施前後でWilcoxonの符号付き順位検定を行ったところ、SF-36の下位尺度「身体機能」の値が有意に改善した（$p< .05$)。また、「全体的健康感」ならびに総合数値である「身体的健康度」に改善傾向がみられた（$p< .10$)。また、FESにおいて、改善が見られた（$p< .05$）が、GDSでは有意差が見られなかった。コントロール群においてはGDSならびにSF-36全ての下位尺度値ならびに総合数値において有意差はみられなかったが、FESにおいて有意差がみられた。

次に、介護予防運動教室参加群において、心理的側面と血中ビタミンとの関連を調べる目的で、運動教室参加後にとったFES、GDSおよびSF-36で有意差のみられた項目（「身体機能」「全体的健康感」「身体的健康度」）を従属変数とし、脂溶性ビタミンA、D、EとPTHを独立変数として重回帰分析を行ったが、有意な回帰式は得られなかった。

【考察】

本研究では、地域在住の高齢者を対象とした介護予防運動教室においてQOLに向上がみられたか、また、QOLと血中ビタミンとの関連性について検討した。その結果、運動教室参加群のSF-36においては、「からだを前に曲げる、ひざまずく、かがむ」といった日常よく行う活動についての「身体機能」、「私は他の人に比べて病気になりやすいと思う」といった現在の健康状態の自覚である「全体的健康感」ならびに総合数値である「身体的健康度」に改善傾向がみられた。また、転倒有能感（FES）においても改善が見られた。すなわち今回行なった筋力向上トレーニングにおいては、身体的な健康度の自覚には影響がみられ、「精神的健康度」には有意差がみられなかったものの、本トレーニングが身体的な健康度の自覚へと繋がり、それが転倒および骨折予防、ひいては精神健康度へ結びつくのではないかと考えられる。その他の項目については当日報告する予定である。

（ながお　ふみえ・かわまた　こういち）

自己意識の年齢による変化（2）

― ＳＣＴ（文章完成法テスト）の応用 ―

○桜井　裕子[1]　横山　泉[2]　玉井　寛[3]　三浦　公一[4]
([1] 相模女子大学　[2]文化女子大学　[3] 福島学院大学　[4]東京国際・ｷｬﾘｱﾀﾞｲﾅﾐｯｸｽ研究所)

キーワード：ＳＣＴ（文章完成法テスト）、自己意識、発達

【研究の目的】 本研究は、前回の報告(2008) に引き続き、精研式 SCT に表れる自己意識を、発達的な観点から年代別に見ることを通して、経験の結晶化機能としての能力（人間としての生きる“知恵”(diff.)）を見るための一つの尺度モデルを見いだすことを目的とする。今回は第 2 段階として、前回の 20 代・30 代に 40 代を対象に加え、自己意識の年齢による変化についての示唆を得るための比較検討を試みた。

【方法】 対象：分析に使用したデータは、同一企業の 40 歳～49 歳の社員 58 名の管理職登用場面での精研式SCTである。前回同様、今回も対象者を男性で統一した。
評定：精研式 SCT の十分なトレーニングを積んだ 11 名の評定者が SCT を読み、右図の 22 項目に対して、対象者の自己意識がどの程度表れているかを、4 件法で評定した。また、特に印象に残った点や特徴的だった点があれば、自由に記述する方法をとった。さらに、1 つの SCT に対して、2 人の評定者が別々に評定し、各々の評定結果を比較検討した（本稿においては省略）。
項目：前回と同様、梶田(1980) によって示されている 8 つの側面に、さらに diff.の視点を加えて自己意識の主要様式を捉えた三浦(2004) の 8 項目に基づき、本人自身の視点と他者の視点というパースペクティブ、評価的視点、規範的視点などを考慮して 22 項目とした。

【結果】 （1）自己意識の年代による表れ方の差について、評価項目毎の平均評価を、前回の 20 代・30 代と比較した結果、40 代と 30 代の表れ方に類似性がうかがえた（右図）。また、特に有意差 ($p<.05$) の表れた項目は以下の通りである。

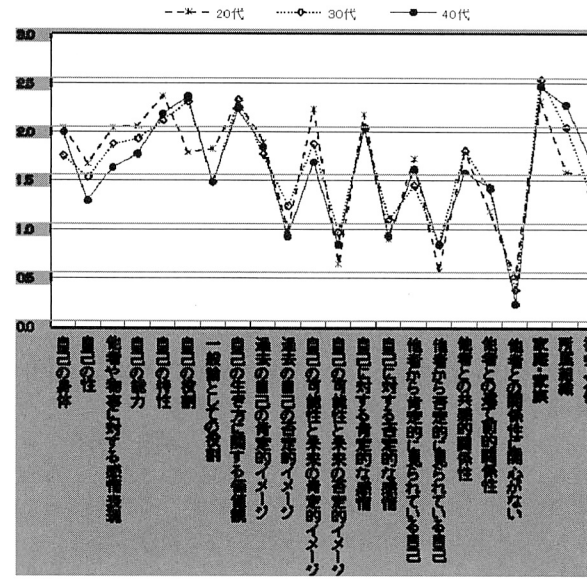
t 検定による p 値 項　目	20 代と 30 代	30 代と 40 代	20 代と 40 代
自己の役割	0.001	0.715	0.000
自己の可能性と未来の肯定的イメージ	0.011	0.143	0.000
所属組織	0.006	0.122	0.000

（2）項目間の相関係数をとったところ、40 代においては、「自己の生き方に関する価値観」と以下の項目との間で、ある程度の相関がみられた。

過去の自己の肯定的イメージ	0.55
自己の可能性と未来の肯定的イメージ	0.56
自己に対する肯定的な感情	0.64
自己に対する否定的な感情	-0.54

（3）「自己の身体」の表れ方は、20 代と 40 代では平均値および標準偏差にはそれほどの差はない(20 代：2.05,0.77，40 代：2.00,0.78)が、自由記述欄を見ると、40 代では「体力低下」など「老い」への意識が表れており質の変化がみられた。また、「自己の能力」にも同様の傾向がうかがえた。

【考察】 前回に 40 代のデータを加えた本研究によって、自己意識の表出に経年変化が見られるという、我々の予測を支持する結果がさらに得られたのではないかと思われる。



（図．各評価項目における年代別の評価平均）

（1）では、キャリア形成の過程で、「自己の役割」や「所属意識」（20 代＜30 代、40 代）が 20 代から 30 代にかけて変化し、確立されていくことが示唆される。また、「自己の可能性と未来の肯定的イメージ」（20 代＞30 代、40 代）の表れ方からは、30 代・40 代での理想の引き下げ傾向の存在が推測される。さらに（2）では、40 代における、自己評価の全体的な肯定度合いと「自己の生き方に関する価値観」の表出度合いの相関が示唆された。

しかし、自己に対する「肯定的な感情」「否定的な感情」での経年による有意差が認められず、成人期の発達課題とされる「自己再吟味」による「自己肯定感の獲得」を示唆する結果は得られなかった。その要因としては、対象者が企業の男性に限られること、また、企業に属する 30 代・40 代での「発達課題の先送り」傾向の可能性も考えられる。今後は、対象を女性にも広げ、さらに同一対象者における年齢による変化について検討することも必要であろう。

評定者間の評価のズレに対する対策も喫緊の課題であり、サンプル数を増やし、評価尺度、評定基準について再検討しながら、年代別変化について得られた知見の信頼性を検証していくことが求められる。

【参考・引用文献】

桜井裕子・横山泉・玉井寛・三浦公一 2008 –自己意識の年齢による変化(1)- 日本応用心理学会第 75 回大会発表論文集
梶田叡一 1980 自己意識の心理学 東京大学出版会
三浦公一 2004 自己（自己意識・自己概念・自己認知） SCT 専門コース講義資料　東京国際・ｷｬﾘｱﾀﾞｲﾅﾐｯｸｽ研究所
榎本博明 1998 「自己」の心理学 サイエンス社

（さくらい ゆうこ・よこやま いずみ・たまい ひろし・みうら こういち）

若年層の防犯方略レベルと性格特性

○本多明生[1)]　山入端津由[2)]
([1)] いわき明星大学人文学部　[2)]沖縄国際大学総合文化学部)
キーワード：防犯方略，性格特性，個人差

【目　的】

若年層は世界的にも他年齢層よりも犯罪被害に遭いやすいが犯罪被害リスク知覚や犯罪不安が低い傾向にある。筆者らは，これまで個人の防犯方略の程度を測定するための尺度を作成し（Honda and Yamanoha, in preparation），同方略に寄与する諸要因についての検討を行ってきた。これまでの研究結果から，(1) 若年層は，「警戒心」「危険地区回避」「リスク管理」「危険経路回避」「自制」「夜間外出自粛」の六つの防犯方略を利用していること，(2) 上記の防犯方略レベルには男女差が示されること，(2) 若年層の防犯方略レベルは低いことが示されている（例えば本多, 2009）。本研究では，若年層の防犯方略レベルと性格特性の関連性を検討した。従来の研究は，防犯方略レベルに寄与する要因として，性別や年齢，環境・状況的要因，そして心理的要因などを主に検討している（例えば Riger et al., 1982）。これらの研究において，防犯方略レベルを高める心理的要因として多く検討されているのは犯罪不安であるが，その他の心理的要因に関する知見は乏しい。例えば，防犯では，安全性を確保するために自己の行動を制限・管理することが求められることも多い。しかしながら，このようなモニタリング行動を可能にする性格特性との関連性は検討がほとんど行われていない。本研究では，上述した問題を解決し，若年層の防犯方略レベルの個人差についての更なる知見を得るために，性格心理学の主要理論のひとつであるビッグファイブに着目して検討を行った。

【方　法】

参加者：高校生 227 名（男性 107 名・女性 120 名，平均年齢 15.73 歳），大学生 211 名（男性 126 名・女性 85 名，平均年齢 19.84 歳）の計 438 名。

防犯方略尺度：Honda and Yamanoha（in preparation）による個人の犯罪被害警戒・回避の程度を計測するための尺度。同尺度は，(1) 個人情報の管理や施錠の厳重化などの「警戒心」方略（7 項目），(2) 死角が多い地区の回避などの「危険地区回避」方略（3 項目），(3) 動きやすい服装や近隣住民とのコミュニケーションなどの「リスク管理」方略（5 項目），(4) 明るい道の選択などの「危険経路回避」方略（3 項目），(5) 派手な服装の自粛などの「自制」方略（3 項目），(6) 夜間の単一行動の自粛などの「夜間外出自粛」方略（3 項目）の 6 つの下位尺度から構成（全 24 項目・5 件法）。同尺度得点が高いほどその方略の利用レベルが高いことを示す。

主要五因子性格検査：ビッグファイブ理論に基づく性格検査（村上・村上, 2001）。参加者の「外向性」「協調性」「勤勉性」「情緒安定性」「知性」を計測することが可能。全 70 項目。

手続き：授業時間の一部を利用して配布・回収した。

【結　果】

防犯方略尺度の平均値と主要五因子性格検査の素点との相関係数を示す（Table 1）。本研究結果から，男女ともに (1) 外向性と「自制」方略に負の有意な相関，(2) 協調性と「危険経路回避」方略に正の有意な相関，(3) 勤勉性と「警戒心」「リスク管理」「危険経路回避」方略に正の有意な相関，(4) 知性と「リスク管理」方略に正の有意な相関が示された。

Table 1. 防犯方略尺度と主要五因子性格検査の相関係数

	E	A	C	N	O
男性（n = 233）					
警戒心	.034	-.029	.224***	-.092	.053
地区回避	.042	.088	.050	-.027	.009
リスク管理	.204**	-.002	.146*	-.022	.209***
経路回避	.107	.178**	.163*	-.172**	.003
自制	-.165*	-.042	.075	-.059	-.114
夜間自粛	.032	.062	.158*	-.113	-.004
女性（n = 205）					
警戒心	.106	.177*	.289***	.069	.178*
地区回避	.081	.135	.069	.021	.182**
リスク管理	.092	.132	.222***	-.011	.247***
経路回避	.125	.165*	.179**	.041	.167*
自制	-.187**	.063	.084	.052	-.053
夜間自粛	.043	.178*	.105	-.038	.074
全体（n = 438）					
警戒心	.067	.063	.249***	-.024	.102*
地区回避	.088	.135**	.044	-.006	.067
リスク管理	.150**	.062	.181***	.017	.225***
経路回避	.140**	.194***	.152***	-.076	.054
自制	-.167***	.009	.076	-.012	-.092
夜間自粛	.082	.159***	.097*	-.072	.000

E：外向性，A：協調性，C：勤勉性，N：情緒安定性，O：知性
* $p \leqq .05$, ** $p \leqq .01$, *** $p \leqq .001$

【考　察】

若年層では男女ともに (1) 勤勉性が高い人はいくつかの防犯方略レベルも高いこと，(2) 外向性は「自制」方略レベルを低める可能性があること，(3) 情緒安定性は防犯方略レベルへの関与が少ないことが示された。上述した性格特性との相関は，防犯方略全般と正の相関を示す犯罪不安（本多, 2009）とは異なるパタンである。したがって，個人の防犯方略レベルが，犯罪不安以外に性格特性によっても特徴付けられていることが示されたといえる。今後の研究では，防犯方略レベルの個人差に関しての更なる実証的検討が必要である。

【謝　辞】

本研究は文部科学省科学研究費補助金（課題番号：20730450，研究代表者：本多明生）の助成を受けた。記して謝意を表す。

【引用文献】

本多明生 (2009). 防犯：リスクと不安. 仁平義明編「防災の心理学：ほんとうの安心とは何か」(pp. 193-212), 東信堂.

Honda, A., & Yamanoha, T. (in preparation). Perceived Risks and Crime Prevention Strategies of Japanese High School and University Students.

Riger et al. (1982). Coping with Urban Crime: Women's Use of Precautionary Behaviors. *American Journal of Community Psychology*, Vol. 10, 369-386.

（ほんだ　あきお・やまのは　つよし）

眼球運動を指標とした注意の定位に関する研究

○小野洋平[1)]　石岡綾香[1)]　谷口泰富[2)]
([1)]駒澤大学人文科学研究科・[2)]駒澤大学文学部)
キーワード：注意の定位，眼球運動，情動刺激

問題と目的

Nummenmaa et al.(2006)は，情動刺激と中性刺激を用いた実験から，情動刺激への注意の定位を制御することが困難であることを示している。しかし，採用された刺激の情動性と中性性は実験者の判断に依存しており刺激の普遍性に問題がある。一方，刺激統制の問題は残るが，この指摘には，虚偽検出検査に関する新視点が内包されていると思われる。そこで本研究では，情動価の評定法を再考し，注意の定位に関するこの問題の再検討を行った。

方法

実験参加者　37名（男14名，女23名，平均年齢24.3歳）

実験装置　Talk Eye Ⅱ（竹井機器製）

サンプリング周波数は60Hzで，観察距離は100cmであった。

実験刺激　視角縦6.5°×横12°の画像刺激を用いた。予備調査に基づき，情動価の高い画像（情動画像）を6枚，中程度の情動価を持つ画像（中位画像）を12枚選定し，情動画像と中位画像の組み合わせによる6ペアと中位画像同士のペアを3ペア，計9ペアを実験に用いた。

実験条件　情動画像注視条件，中位画像注視条件

手続き　注視点提示後，画像ペアを5秒間提示した。参加者に各条件で注視するように指示された画像を真っ先に注視し，それを見続けるように教示した。練習を1試行行った後，本試行を行った。本試行では提示画像の組み合わせは実験参加者ごとに一定で，提示位置はランダムであった。また，提示画像ペアの提示順序は実験参加者ごとにランダムにした。実験後，実験において提示された18枚の画像の情動価を7件法（1＝非常に不快，4=どちらでもない，7＝非常に快）で1つずつ評定させ，実験を終了した。

結果

眼球運動データ解析　実験参加者の情動価評定に基づき，快画像（評定値7，6，5）と中位画像（評定値4）のペア【快－中位ペア】，不快画像（評定値1，2，3）と中位画像（評定値4）のペア【不快－中位ペア】提示時の眼球運動を分析対象とした。Talk Eye Ⅱによって検出された座標データから各画像刺激への初注視率と停留回数，総停留時間を算出した。なお，画像ペア提示後の初発停留反応のうち，指示どおりの正反応を初注視とした。

画像への停留と初注視　図1は，初注視率に関して，情動画像の情動価の高さ（高－低）と評定の種類（快－不快）の2要因分散分析の結果を示したものである。

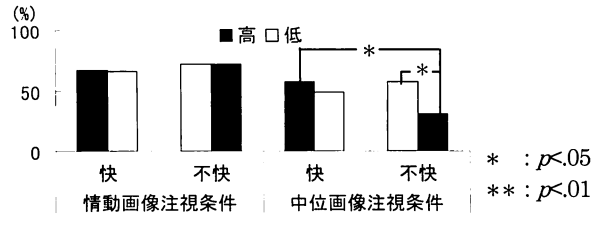


図1　情動価の高さと評定の種類ごとの初注視率

分析の結果，有意な主効果は認められなかった。しかし，中位画像注視条件において情動価の高い不快画像が提示された場合，正反応である中位画像への初注視率が有意に低下し，初注視には情動評定（快－不快）が影響を及ぼすことが判明した。したがって以後は，情動評定の種類ごとに分析を行った。本実験における教示と反応の一致性（正反応）と刺激選定の妥当性を検討するために，各条件において提示された情動画像と中位画像への停留回数と総停留時間を分析した。検定の結果，両条件における各画像ペアで，正反応となる画像への停留回数と総停留時間が有意に高く，実験参加者の反応が指示どおりであったことが確認された。

次に情動画像への注意の定位を検討するため，各条件間における初注視率を分析した。その結果，両画像ペアで条件間に有意な反応差異が認められた（t_{229}=2.10, p<.05, t_{123}=3.07, p<.01）。また，チャンスレベル検定を行った結果，情動画像注視条件における初注視率は評定の種類にかかわらず期待値を上回っていた（図2）。

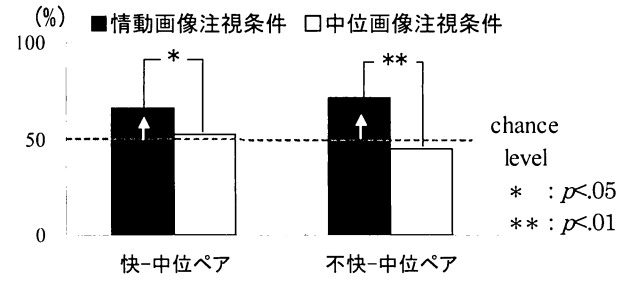


図2 各条件における初注視率とチャンスレベル

次に，各条件における初注視の反応潜時を比較した。【不快－中位ペア】では情動画像注視条件における初注視の反応潜時は，中位画像注視条件の場合に比べ有意に短かった（$t_{30.5}$=2.77, p<.01）。一方，【快－中位ペア】では有意な差は認められなかった（図3）。

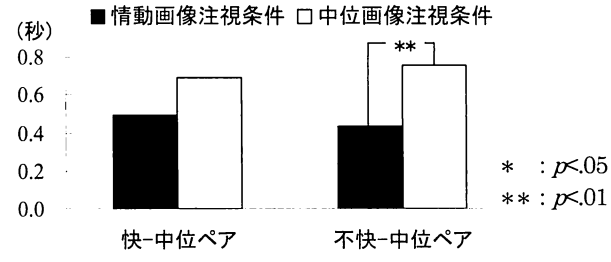


図3　各条件における反応潜時

考察

本研究では，実験参加者の情動価評定をもとに決定された情動画像を採用し，Nummenmaa らの指摘する眼球運動の意図的制御の問題を再検討した。その結果，指示された画像へ停留回数と総停留時間が有意に高かったことから，教示と反応の一致性（正反応）および刺激選定の妥当性が確認された。また初注視率の分析結果から，中位画像より情動画像への注意が定位しやすく，意図的な制御が困難であることが確認された。さらに，反応潜時の分析結果から，不快画像が提示された場合，快画像提示時よりも注意が定位しやすいことが示された。一方，初注視には情動評定（快－不快）が影響を及ぼすことが明らかにされた。

疲労の影響によるエラー後の補償の違い

○櫻井美由紀，　岩崎祥一
（東北大学大学院・情報科学研究科）
キーワード：flanker 干渉，疲労，エラー

【研究の目的】反応エラー（正しく実行されなかった行為）は単調な道路環境で長時間運転を続けた場合のように，注意が課題に集中しなくなると起こりやすくなり，運転リスクと事故との関連において反応エラーが実際の事故へ結びつくかどうかは，行動のモニタリング及びその結果としてのエラー後の的確な行動修正が関わってくる。こうしたエラー後の行動修正についてはおそらく個人差があると思われるが，エラーを犯すとそれがきっかけとなって反応基準がより慎重になるだけでなく，課題に対する注意の集中力が増すことにつながると予想される。しかし疲労時には不活動の状態を示し，エラーを修正しなくなることが生じることが考えられ，このことから単調な作業(課題)を長時間続けたときに発生するエラー後には，疲労の影響によってエラー後の補償の程度は少なくなることが予測される。そこでエラー後の注意制御のあり方と疲労によるエラー後の行動修正への影響を実験によって観測し，単調な課題を連続して行った場合のエラー後の行動修正と性格特性や注意機能特性がこれらと関係しているかどうか，個人差との関係を調査し検討することを目的とした。

課題への集中力を反映する指標としては反応干渉量を用いた。エラーによる注意集中への影響は注意がエラーにより課題に再集中するなら，それがエラー後の干渉量の減少として観測されるだろうと予測した。

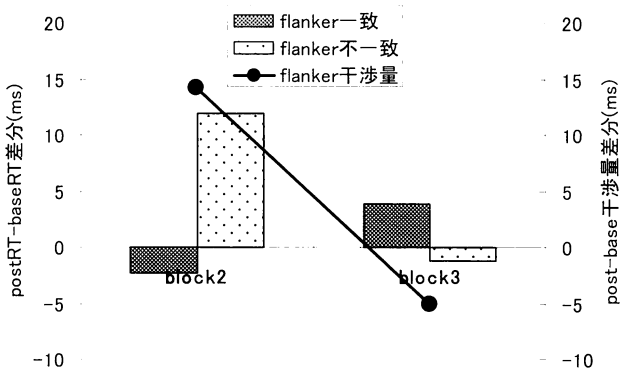
【方法】参加者　大学生・大学院生 42 名（平均 21.5 歳）。

課題　実験は flanker 干渉課題を用いて，対象となる数字(刺激)が偶数か奇数かを判断し，左右のボタン(偶数の場合は右手のボタン・奇数の場合は左手のボタン)を押して反応することとした。また，個人差の測定としてワーキングメモリ容量(日本語リーディングスパンテスト)，質問紙(注意機能尺度，日本版アイゼンク性格検査;EPI，失敗行動傾向;CFQ)を性格特性の評定として用いた。

flanker 干渉課題の刺激と条件　刺激は、画面の中央の位置に数字が提示された。刺激の条件は 3 種類あり ⅰ)ニュートラル(判断の対象となる真ん中のみ数字が表示され，その両側は×印が並んで出現) ⅱ)flanker 一致 ⅲ)flanker 不一致であった。

エラーは数字の判断の間違いによるボタンの押し間違えの試行と定義し，エラー率はエラーの個数／試行数とした。数字が提示されてからボタンを押すまでの時間を反応時間(RT)とし，flanker 一致と flanker 不一致のときの反応時間の差分を干渉量と定義した。またエラー数を増やすために各実験参加者の 1block 目の試行の平均 RT を基準値として本試行では基準値を下回らないように努力することを教示した。1 回の block で行う試行数（出題数）は 200 試行，これを個々人の基準値を測定する 1block と実際の分析に使用される 2 つの block とで合計 3block 行い，合計で 600 試行を行った。

分析　実験参加者のうち分析の対象となった人数は 39 人であった(尚早反応の多い人等は分析から除いた)。エラー試行の RT は分析から全て除き，RT と干渉量は正確に反応した試行のみを分析の対象とした。またエラーの試行の前およびエラー後の試行の RT は個別に集計し，エラーの前後を除いた試行を baseline として分析に用いた。分析は 2(block2,3)×3(試行: base line, Pre-E, Post-E)×3(条件: ニュートラル, F・一致, F・不一致)の被験者内要因の分散分析であった。



［Fig.1. block2,3 のエラー後の RT と flanker 干渉の増加量］

【結果】エラー率　刺激条件ごとの試行数に対する平均エラー率は、ニュートラル 26 % flanker 一致 23 % flanker 不一致 37 % であり，それぞれの条件ごとのエラー率に違いがみられ(p<.01)，block 間でも block2(27.8)よりも block3(30.1)の方が，有意にエラー率が増加した。

反応時間　flanker 一致(371.0 ms)と flanker 不一致(382.2 ms)に有意な違いがみられ($F(1,38)=14.47$,p<.001)，flanker 干渉効果が見られた。エラーの前後の反応時間は flanker 一致条件($F(1,38)=7.20$, p<.05)と flanker 不一致条件($F(1,38)=10.45$, p<.005)の両方においてエラーの前よりもエラーの後に有意に長くなり，エラー後の補償の効果が見られた。

flanker 一致・不一致とも block2,3 間に有意差が見られ(p<.005)，block2 の方が反応時間が長かった。また baseline と比較したエラー後の反応時間は F 不一致のときに block2 よりも 3 で長くなる様子が伺えたが，有意差は見られなかった(p=.15)。

干渉量　エラーの前後の干渉量はエラーの前後および baseline との間で有意な差が見られなかった($F(2,76)$= 0.95, p=.39)。baseline の干渉量は block2,3 の間で違いがみられなかった。baseline と比較したエラー後の干渉量は block2 よりも block3 で少なくなる傾向が見られた(p=.085)(Fig.1)。(block2,3)×2 試行(Pre-E, Post-E)の分散分析を行った結果 block の主効果が見られたので(p<.01)，block ごとに質問紙との相関を見たところ，block3 の Pre-E 干渉量と注意機能尺度の切替不全に正の相関が見られ(r =.35, p<.05)，注意をうまく切り替えられない人ほど長時間単調な課題が続いた時にエラー前の干渉量が多くなることが示唆された。また block の Post-E 干渉量と EPI の外向性に正の相関が見られたことから(r =.38, p<.05)，外向性の高い人ほど長時間単調な課題が続いた時にエラー後の干渉量が多くなることが伺えた。

【考察】baseline の干渉量の block 間での違いがみられなかったことから本実験での疲労による注意集中の悪化の程度は小さいことが伺われた。しかし flanker 不一致時のエラー後の補償の効果および干渉量は block2 よりも block3 で小さくなる様子が伺われ，エラー後に注意の集中力が上がるにもかかわらず補償の程度は少なくなることが伺われた。

（さくらい みゆき・いわさき しょういち）

向上心尺度作成の試み

田中道弘
(埼玉学園大学)

Key words: 向上心，自己肯定感，時間的展望，特性的自己効力感

【目　的】Rosenberg(1965)は，自分自身の不足の点を改善したいと思うことが，これでよい（good enough）という意味での自尊心(self-esteem)の高い青年の特徴の一つと指摘した。自分自身の不足の点を改善することは，向上心と言い換えることができる。向上心は，広辞苑（６版）では「より優れた状態を目指そうとする心である」と説明されている。田中(2002)は，向上心を「現状に満足せず，何か目標を持って，それに向かって努力する態度」と定義し，向上心には，二つの異なる源泉があることを指摘した。つまり，Rosenberg(1965)の見出した自尊心の高い者に見られる態度を「現状満足を源泉とした向上心」，日本人論や文化心理学での日本人像に見られる前向きな態度を「現状不満足を源泉とした向上心」とした。さらに田中（2006）は，現在の自分に満足していない者の中に，自己に対して否定的な感情を持つ「自己嫌悪群」と，自己に対して肯定的な感情を持つ「向上心群」があり，Rosenberg の邦訳版自尊心尺度項目の中に，それぞれが独立した群として混在していることを明らかにした。「現状不満足を源泉とした向上心群」は，Rosenberg の自尊心の定義に従えば，自尊心得点が低い群に属するものの，自己肯定感尺度（2008）得点を見ると，自己肯定感得点の平均得点よりも高い群に属する。つまり，向上心という視点を導入することで，新たな精神的健康感を見出す可能性があると考え，向上心尺度の作成を試みることにした。

【方　法】**調査協力者**：茨城県内のＡ国立大学の学生、及びＢ私立大学の学生、埼玉県内Ｃ私立大学の学生の合計 279 名(男性 199 名，女性 80 名)。**年齢**：18～25 歳（平均年齢 男性 19.4 歳　女性　19.3 歳)。調査時期　2005 年９月下旬から 2006 年１月下旬　**使用した尺度**：向上心尺度項目の 10 項目（4 段階評定)，自己肯定感尺度 ver.2（田中,2008）の８項目（4 段階評定)，時間的展望体験尺度（白井，1994）の目標指向性下位尺度，希望下位尺度，現在の充実感下位尺度，過去受容下位尺度の 18 項目（5 段階評定)，特性的自己効力感尺度（成田・下仲・河合・佐藤・長田，1995）の 23 項目(5 段階評定)。なお，向上心尺度項目は，広辞苑などの国語辞典，及び 1999 年から 2005 年までに筆者の調査研究で得られた,大学生が考える向上心についての自由記述を参考に,最終的に 10 項目を作成した。

【結　果】向上心尺度に対して主成分分析を行った結果，項目１が第１主成分の中で.30 以上にならず，再度，項目１を削除して主成分分析を行った結果，すべての項目が.30 以上で第１主成分にまとまった（表１）。そこで本研究では項目１を除いた９項目を向上心尺度として採用することにした。なお９項目での向上心尺度の信頼性はα＝.755 であった。向上心得点の平均得点は 21.53 点（SD＝3.71）であった。基準関連妥当性を検証するために,向上心尺度と,自己肯定感尺度，時間的展望体験尺度，特性的自己効力感尺度との相関分析を行った（表２）。その結果，向上心尺度は，自己肯定感尺度，特性的自己効力感尺度，及び時間的展望体験尺度の目標指向性下位尺度,希望下位尺度に中程度の正の相関が確認された。

次に，向上心得点の調査協力者全体の得点から，基準正規分布を利用して第１，および第３分位に３分割し，その基準を基に低群（9-19 点:78 名），中群(20-24 点:140 名)，高群(25-36 点:61 名）に分類した。向上心得点の低群，中群，高群の各群と，自己肯定感尺度，時間的展望体験尺度，特性的自己効力感尺度について,一元配置の分散分析をおこなった。その結果を（表３）に示した。

表1　9項目での向上心尺度の主成分分析結果

向上心項目	主成分分析
7.私は，常に何か目標を持っている。	.772
9.私は，自分の可能性を信じている。	.758
2.私は，成功するために努力を惜しまない。	.723
8.私は，熱心に打ち込んでいる趣味がある。	.599
5.私は，物事をすぐ諦めがちである。＊	.556
6.私は，現状よりも常に良くしたいと考えている。	.553
10.私は，失敗に挫けることはない。	.533
4.私は，常に自分を改善していきたい。	.364
3.私は，過去に成功してきたと思う。	.316
（　1.私は，未熟な点が多いと思う。）	

＊は逆転項目

表２　向上心尺度と本研究で使用した尺度との相関

	向上心	自己肯定感	目標指向性	希望	現在の充実感	過去受容	特性的自己効力感
向上心	1						
自己肯定感	.51	1					
目標指向性	.47	.34	1				
希望	.57	.60	.59	1			
現在の充実感	.30	.51	.26	.44	1		
過去受容	.15	.53	.15	.34	.42	1	
特性的自己効力感	.53	.52	.43	.54	.37	.39	1

表３　向上心の各群と本研究で使用した尺度との分散分析結果

	向上心低群 n=78	向上心中群 n=140	向上心高群 n=61	多重比較 Tukey	F(5, 278)
自己肯定感	10.61(3.81)	21.21(3.86)	24.93(3.64)	L<M<H	47.35
目標指向性	12.74(5.39)	15.43(4.62)	19.33(5.10)	L<M<H	30.32
希望	9.50(3.23)	12.00(2.78)	14.80(2.70)	L<M<H	57.46
現在の充実感	12.92(4.65)	14.49(4.44)	17.79(5.28)	L<M<H	18.87
過去受容	11.92(3.87)	12.46(3.72)	14.10(3.87)	L<H, M<H	6.04
特性的自己効力感	56.07(12.81)	65.50(11.94)	76.79(13.51)	L<M<H	46.71

【考　察】向上心尺度は，自己肯定感尺度と中程度の相関があったが，現在の充実感下位尺度や過去受容下位尺度とは，弱い相関，もしくはほとんど相関が無かった。この点は，向上心概念が過去との関係性よりも，現在から将来に対する関係性が強いものと判断され，妥当な結果であると思われる。また分散分析の結果からは，向上心得点の低群よりも高群の方が自己肯定感，時間的展望体験の各下位尺度，特性的自己効力感の平均得点が高く，精神的健康と密接な関わりがあることが推測できる。以上の結果から，向上心尺度は，概ね実用可能であると判断された。

【引用文献】

Rosenberg, M.(1965). *Society and the adolescent self-image.* Princeton : Princeton University Press.

田中道弘(2002).文化と自己　梶田叡一（編）　自己意識研究の現在（初版第２刷）　ナカニシヤ出版　pp.171-188.

田中道弘(2006). Rosenberg の自尊心尺度の再検討　埼玉学園大学紀要人間学部篇,6,135-139.

田中道弘（2008）.自尊感情における社会性，自尊感情形成に際しての基準：自己肯定感尺度の新たな可能性　下斗米淳（編）シリーズ自己心理学第６巻　社会心理学へのアプローチ　金子書房　pp.27-45.

(TANAKA, Michihiro)

首尾一貫感覚（SOC）と自己主張性の関連について

― P-F スタディ分析より ―

○銅直　優子[1)]
([1)] 流通科学大学　サービス産業学部　医療福祉サービス学科）

キーワード：首尾一貫感覚（SOC）、P-F スタディ、欲求不満場面

【目的】

Aron Antonovsky（1987）によって提唱された、首尾一貫感覚（Sense of Coherence：SOC）は健康を維持する要因である。SOC 能力の高い者は、ライフクライシスに直面した場合に、上手く対処することが可能であり、結果的に、健康を保持できるというものである。しかし、SOC は、ライフクライシス場面だけでなく、日常場面でもその傾向は反映されていると考えられる。そこで、本研究では、日常の欲求不満場面を用いた、P-F スタディによって、SOC の高得点群と低得点群の差異を検討していくことを目的とする。

また、通常、SOC は合計得点で見ていくことが多いが、3 要素はそれぞれ違った機能であるため、各要素で分析を行っていく必要があると考える。そこで、SOC の 3 要素が P-F スタディとどのような関連にあるのか見るために、相関分析によって検討をおこなう。

【方法】

対象と調査期間：対象は、関西私立 A 大学心理学関連講座の受講生 83 名（男子：41 名、女子 42 名）のうち、分析対象となったのは、22 名であった。調査時期は、2007 年 5 月と 2008 年 5 月である。

調査用紙：

〔SOC スケール〕Antonovsky(1987)が作成した 13 項目を山崎らが日本語に翻訳したものを使用した。本調査用紙は、把握可能感（Comprehensibility:Co）、処理可能感(Manageability:Ma)と有意味感(Meaningfulness:Me)の 3 要素から構成されている。回答は、7 件法であった。合計得点の上位 11 名と下位 11 名を今回の分析対象とした。

〔P-F スタディ〕P-F スタディ成人用紙を使用。結果の処理については、2 名の心理臨床家によって行い、スコアリング結果に相違があった分については、協議を経てスコアリングの決定を行った。スコアリング後、通常の結果処理と同様、反応場面数に対する百分率を算出した。

【結果と考察】

SOC 高得点群と低得点群の P-F スタディ比較：

SOC 高得点群と低得点群の反応率については、表 1 の通りである。t 検定を行った結果、I'（自責逡巡反応）と M'（無籍春秋反応）で有意差が認められた（I'：t=-2.24, p<.01; M'：t=3.29, p<.05）。

I' では、高得点群が低得点群よりも反応率が高く、欲求不満を起こさせた障害の指摘、失望や不満を表明することが少ないことが明らかとなった。M'では、高得点群が低得点群よりも反応率が低く、低得点群は、欲求不満を起こさせた障害の指摘や失望を表明することを避ける傾向にあることが明らかとなった。

SOC 能力の高さは、遭遇した困難な状況に対して、その状況は自分にとって何らかの意味があると理解したり、その状況を乗り越えることは可能であるという感覚が持てることである。SOC 能力の高い者の I' の反応率の高さは、現在直面している障害を自分で対処していけるという感覚があるからこそ、表明せずにいられるのではないかと考えられる。また、SOC 能力の低い者の M' の反応率の低さは、障害の存在を受け入れられずに、回避しているとも考えられる。

表1 SOC高群と低群におけるP-Fスタディ反応率

		Obstacle-Dominance		Ego-Defence		Need-Persistence		Total	
Extraggression	E'	10.42	E	17.05	e	7.39	E-A	34.85	
		10.42		19.72		6.13		26.26	
Intraggression	I'	8.33 *	I	18.00	i	10.61	I-A	36.93	
		12.07		17.61		9.37		39.05	
Imaggression	M	6.82 **	M	14.20	m	7.20	M-A	28.22	
		1.94		15.10		7.64		24.68	
Total	O-D	24.43	E-D	52.43	N-P	23.14	GCR	52.6	
		25.56		49.25		25.19		53.9	

上段SOC高得点群　下段SOC低得点群
** P<.01, * P<.05

SOC と P-F スタディの相関分析：

相関分析の結果は、表 2 の通りである。相関係数.40 以上が認められたのは、I'（Ma:r=.45, Co:r=.43）と M'（Ma:r=-.53, Co.:r=-.40）においてであった。

表2 SOCの3要素得点とP-Fスタディの相関係数

		Obstacle-Dominance		Ego-Defence		Need-Persistence		Total	
Extraggression	E'	Me	0.23	E	-0.05	e	-0.28	E-A	-0.05
		Ma	-0.06		0.03		0.05		0.02
		Co	0.09		0.01		-0.09		0.01
Intraggression	I'	Me	0.27	I	0.09	i	-0.02	I-A	0.19
		Ma	***0.45***		-0.12		-0.25		0.04
		Co	***0.43***		0.10		-0.04		0.28
Imaggression	M	Me	-0.35	M	0.11	m	-0.04	M-A	-0.14
		Ma	***-0.53***		0.09		0.22		-0.08
		Co	***-0.40***		-0.01		-0.12		-0.35
Total	O-D	Me	0.14	E-D	0.07	N-P	-0.17	GCR	0.15
		Ma	-0.09		0.02		0.05		0.05
		Co	0.09		0.06		-0.12		-0.11

I' と正の関連が認められた Me と Co は困難な状況を自分で何とか対処することが出来ると感じられる部分であるため、SOC 高得点群者の I' の出現率の高さから、不満などの気持ちを表明することを我慢しているのではなく、なんとかなるという感覚があるからこそ不満などを表明する必要がないと解釈してよいと思われる。また、M' においては、Ma と Co 要素と負の関連が認められ、何とかなるという感覚の低さは、先の見えない不安にもつながると考えられ、自分にとって苦痛の種である、障害の存在自体を認めることを回避してしまうことが考えられる。

【まとめ】

SOC と P-F スタディの関連から、SOC の高得点者は、ストレス場面において、ストレス源の指摘や失望、不満などの存在の認識を回避することなく、表明する必要性も低いということが明らかとなった。その理由としては、SOC の処理可能感や把握可可能感の高さが回避や表明の必要性の低さと考えられるが、更に、欲求不満場面で応答した理由について個別にインタビューを行い、明確にしていく必要があると考える。

（どうべた　ゆうこ）

「血液型性格学」は信頼できるか（第26報）I

—能見俊賢追悼・藤田紘一郎の新構想—

○大村政男　藤田主一　浮谷秀一
（日本大学）（日本体育大学）（東京富士大学）

血液型　能見俊賢　藤田紘一郎　パラサイト式血液型診断

I　はしがき　古川竹二の死去（1940）以降約30年を経て能見正比古（1925 - 1981）が師匠の大宅壮一の薦めにしたがって古川の遺産に手をつけた。そして「鳥無き里の蝙蝠」のごとく飛び回った。彼が青春出版社から刊行した「血液型でわかる相性」（1971）は、出版社の誇張した発表かもしれないが、150万部の発行になったとのことである。「婚活」の時代だったからかもしれない。正比古の後継者は養嗣子の能見俊賢（1948－）である。彼は血液型人間学・ABOの会という大きな遺産を抱えて尽瘁したが、不遇のうちに2006年9月、57歳という若さで急逝してしまった。

我われは日本心理学会第73回大会（'09年8月26－28日、立命館大学）で、「血液型人間学者：能見俊賢を追悼する—血液型人間学の終焉」と題する発表を行なって鎮魂した。かつての敵方に対する最大の弔砲である。ここでは能見俊賢についてわずかに触れるが、大部分を血液型性格学の新しい流れに費やしたいと思っている。

II　血液型性格学は科学なのか　このQに対するAは不確定である。「科学とはなにか」という定義が曖昧なので回答の出ようがないのである。我われはかつては血液型性格判断を派生させている研究に対して非科学的という烙印を捺したが最近は漸次修正している。能見正比古は1983年に刊行した角川文庫の「新・血液型人間学」のなかで「心理学は部分的には自然科学的な実験方法を採用しているが中心思想は科学ではない。極端にいえば、心理学者の数だけ心理学が存在する。もし物理学が甲氏の物理学と乙教授の物理学とが違っていたら科学の名に値しなくなる。心理学はまだ万人共通の客観性を持たぬ主観の学なのだ」とまとめている。能見の意見のある文脈は傾聴に価する。

最近の心理学研究はすっかりマニュアル化してしまった。かつて〝*Psychologie ohne Seele*〟ということばがあった。現在は新しい意味での〝*Psychologie ohne Seele*〟なのではないだろうか？

III　血液型と病気とは関連があるのか　能見正比古たちが古川竹二が創設した土台の上に強引に建設した血液型人間学は能見俊賢の死亡とともに瓦解してしまった。しかし、血液型をベースにした学術的業績は進歩している。新しい切り口を発見しているとしてもいいと思う。その切り口の一つが免疫学である。東京医科歯科大学の名誉教授である藤田紘一郎がその人である。

藤田紘一郎は、専門は寄生虫学で自身もかつて体内に1匹のサナダ虫を飼育していたという話である。この人は『パラサイト式血液型診断』（2006年5月、新潮社刊）のなかで「学問の世界では'血液型と性格'について語ることはタブー視されていますが、私（藤田）は、その相関について、敢えて考えてみたいと思っています。それは、私が寄生虫や細菌、ウイルスなどの微生物たちと30年以上も付き合ってきたことから導き出したものなのです」と記述している（P. 24）。彼の論点のベースになっているものは、血液型による病気の罹りやすさや重症度の違いが血液型による性格の違いを生んだのではないかという考えである。A型は肺結核、胃ガン、食道ガン、子宮ガン、乳ガン、糖尿病、心筋梗塞、肝硬変などに罹りやすいという。これに対してO型はタフである。胃潰瘍や十二指腸潰瘍にはなりやすいが、ガンにはなりにくい。どうしてこのような差異が生ずるのであろうか。当然、体質的なものが考えられるけれど藤田はその差異と血液型とを連関させていく。すなわち、A型の人はガンのような重い病気だけではなく多くの生活習慣病にもなりやすい。多くの生活習慣病は人間関係から受けるストレスが病気を進行させる。そこでA型の人は周囲の人たちと協調するような性格になっていったのではないだろうか。O型の人はフロンティア精神にあふれ、自己主張が強い性格になったのはなぜだろうか。それは多くの病気に罹りにくいからではないだろうか。

この藤田の考え方は、A型の人は自分が多くの病気に対して脆弱なために防衛的になり、O型の人は自分がタフなために力強さを露わにしてくる—ということになる。性格の2次的形成と考えられるのであろうか。我われは、ここで1次的に、つまり素因的に考えていくのが尋常の論理と思うのであるが、どうだろうか。

IV　ある病院における3年間の観察　この観察資料はある病院における胃ガンの患者583名の資料である。3年間の退院者は32,104名、血液型の内訳は、A型7,485名、B型3.952名、O型5,460名、AB型1,808名、不明13,399名である。これらのうち、胃ガン患者583名について考察していく。Table1はその考察結果である。

Table 1　胃ガン患者の血液型分布

	A	B	O	AB	合計
観察値	274	92	145	72	583
期待値	217.5	128.8	183.6	53.1	583.0

（注：この病院の承諾を得ていないので匿名にする）

このTable 1をカイ自乗検定してみると、$\chi^2_0=40.0$になり（残差分析はしていないが）、A型が期待値よりも56.5名も多くなっている（期待値の計算は、古畑種基の基準にしたがっている）。一般に胃ガンとA型が親近性があるといわれているが、実際の資料ではっきりと認められたのはこれがはじめてであろう。ただ、このA型の人がどんな性格だかわかっていない。この病院で性格検査を実施していなかったのがせめてもの幸いだったかもしれない。

V　結論　科学は至近距離から出発する。古川竹二の血液型気質相関説は能見親子や鈴木芳正たちによって商業化され、学問的世界からは白眼視されるようになってしまった。藤田紘一郎たちの新しい見解でそういう風潮がいくらかでも払拭されることを願っている。

なお、本年の5月から6月にかけて『読売新聞』の日曜版が上・中・下の3回にわたって「血液型と性格」を連載した。おおむね中庸的な立場であるが、どうしても批判的傾向が強い。最後に池内了（総合研究大学大学大学院）が人間を4種類に分けることは不可能と批判しているようだが、これは「類型学」という伝統的な学問である。決しておかしなことではないのである。市井の人びとの雑談ならともかく大学教授の見解となるといただけないところである。

（おおむらまさお・うきやしゅういち・ふじたしゅいち）

「血液型性格学」は信頼できるか（第26報）II

—藤田紘一郎のチェックリストをチェックする—

○浮谷秀一　大村政男　藤田主一
（東京富士大学）（日本大学）（日本体育大学）

藤田紘一郎　血液型チェックリスト　血液型

I　はしがき　ここでは「カイチュウ博士」という綽名で知られている東京医科歯科大学名誉教授　藤田紘一郎の所説をベースにして、我われの“「血液型性格学」は信頼できるか”の26報を展開していきたいと思う。

II　藤田紘一郎　1939年、中国東北部（旧満洲）で生まれる（能見正比古は1925年、同地域で生まれている）。東京医科歯科大学卒業は東京大学大学院で「寄生虫学」を専攻、テキサス大学に留学、帰国後、金沢医科大学、長崎大学医学部、東京医科歯科大学などの教授を歴任している。専門は、寄生虫学、熱帯医学、感染免疫学であるが、自分自身がその体内にサナダ虫（その愛称まで付いていた）を飼育していたという破天荒な学者である。彼は「性格は血液型によってきめられている」（「パラサイト式血液型診断」新潮新書、P. 186）と断言しているユニーク学者でもある。ここでは藤田が作成した「血液型チェックリスト」を使用した結果について報告する。

III　藤田の基本的スタンス　血液型で性格まで判断されてはたまらないという声は大きい。しかし、私は長い間、免疫学を研究してきた結論として人間の性格はある程度血液型が影響を与えていると考えている。A型は病気に弱い血液型である。だれからどんな病原菌をもらってしまうかわからないからどうしても慎重になってくる。これに対してO型は一般的に胃酸の分泌が多い。人類の先祖が消化しにくい肉類を食べていたからこそ胃酸の分泌が多くなったのであろう。しかも多くの細菌に対して抵抗力が強い。O型が強力なゆえんである。藤田の論点はこのように免疫学の見地をベースにしている。血液型気質・性格問題が多くの心理学者から軽蔑？されているのも菊池聡（信州大学）が指摘しているように科学的根拠のないフィルターを（多くの人びとによって）かけられてしまったからである。藤田のような学者のスタンスはこのようなフィルターを払拭する強力なパワーになればいいと思う。

IV　この研究の目的　藤田紘一郎が『血液型の暗号』（日本書院刊）に発表したABO式4型の血液型性格のチェックリストの妥当性を検討する。

V　方法　上記のチェックリストを多くの大学生男女に実施し、藤田の手法にしたがって整理していく。彼の手法には異見があるがいちおうそのまま踏襲している。

VI　チェックリストの概要　見本としてA型に関するインストラクションを掲げておこう。

「慎重で用心深い」、「几帳面で神経質」など、とても細やかな印象を持たれるA型ですが、A型の人がすべてこうした性格の持ち主ではありません（注：この記述には興味がある）。そこで、血液型性格診断で一般に言われているA型の特徴をあげてみましたので、あなたの中にどれくらいA型の要素があるかをチェックしてみましょう。

藤田はこれに続いて26項目のチェックリストを並べている。初頭にある10項目を記載しておくことにする。

□与えられた仕事はつい一生懸命やってしまう。□たとえ病気でも仕事や学校を休むのはイヤだ。□いつも忙しい気がする。□時間に追われているような感覚がある。□人を待たせるより待たされることのほうが多い。□上昇志向が強いほうだと思う。□自分は負けず嫌いだと思う。□何事でも楽しむことより勝敗が気になってしまう。□人と議論をするのが好きで話をしているとつい夢中になってしまう（注：全体に藤田と文字表記が若干異なっていることを承知してほしい）。

藤田は、各チェックリストへの回答を1項目1点として採点し、その合計点を5段階に分けている（注：この分割にも異見があるが原案にしたがう）。0〜3点（指数10%）、3〜8点（指数30%）、9〜14点（指数60%）、15〜19点（指数80%）、20点以上（指数100%）。標準化されたアセスメントではないので心理学者からすれば異論が多いと思う。0〜3点、3〜8点という分割については再考を要するところである。なお、各指数は次のようにコメントされている。A型についてのコメントを例にして紹介しておこう。

指数10%：A型とは程遠い性格の持ち主です。

指数30%：A型の特徴も多少持ち合わせていますが、まだまだA型には及びません。

指数60%：かなりA型に近い人。しかし、もう少し足りない。

指数80%：ほぼ完全にA型の特徴を踏襲している人でしょう。

指数100%：あなたは完全にA型人間です。

VII　結果　次のTable 1は大学生男女616名に藤田のチェックリストを実施した結果である。調査対象の血液型は次のとおりである。A型220名（男子96・女子124）、B型131名（男子80・女子51）、O型196名（男子94・女子102）、AB型69名（男子32・女子37）。

Table 1　藤田のチェックリストの総合的結果

A型者 →A型ﾘｽﾄ	A型者 →B型ﾘｽﾄ	A型者 →O型ﾘｽﾄ	A型者 →AB型ﾘｽﾄ
106	54	113	71
48.2	24.6	51.4	32.3
B型者 →B型ﾘｽﾄ	B型者 →O型ﾘｽﾄ	B型者 →AB型ﾘｽﾄ	B型者 →A型ﾘｽﾄ
58	65	50	50
44.3	49.6	38.2	38.2
O型者 →O型ﾘｽﾄ	O型者 →AB型ﾘｽﾄ	O型者 →A型ﾘｽﾄ	O型者 →B型ﾘｽﾄ
98	57	73	59
50.0	29.1	37.2	30.1
AB型者 →AB型ﾘｽﾄ	AB型者 →A型ﾘｽﾄ	AB型者 →B型ﾘｽﾄ	AB型者 →O型ﾘｽﾄ
34	29	19	31
49.3	42.0	27.5	44.9

（注）上段の数値は人数、下段はその%である。「A型者→A型リスト」の欄を例にして説明すると、106はA型220名中の指数80%以上の人数、48.2はその%である。

VIII　結論　A型者の大多数がA型リストにおいて80%以上の指数をとることが期待される。また、他のリストで低い比率が期待されるがそうはなっていない。

（うきやしゅういち・おおむらまさお・ふじたしゅいち）

「血液型性格学」は信頼できるか（第26報）III

—血液型（体質型）と食物の摂取との関連—

○藤田主一　大村政男　浮谷秀一
（日本体育大学）（日本大学）（東京富士大学）

血液型　食物の好嫌　体質型

Ⅰ　はしがき　東京医科歯科大学の名誉教授で「カイチュウ博士」渾名がある藤田紘一郎は、寄生虫学の専門で、本人も自分の体内にサナダ虫を飼っていたことがある不思議な学者である。この人が2006年5月に新潮社から「パラサイト式血液型診断」という一書を世に出している。そのなかに血液型に合う食物・合わない食物についての記述がある。ここではその件について検討を加えることにする。

Ⅱ　目的　藤田紘一郎の仮説の実際を調査してみる。人間における食物の好嫌が体内の血液型物質によって決定されているというのは本当であろうか。

Ⅲ　方法　大学生男女約700名に食物の好嫌についてアンケートを実施する。食物名はTable 1に示した通りである。アンケートを渡された学生は、最も好きな食物に◎印、大嫌いな食物、どうしたわけか食べたくない食物に×印をつけていく。回答は血液型別に整理される。Table 1 はその整理の結果である。

調査の対象になったのは学生約700名であるが、整理の対象となったのは、A型220名（男子96名・女子124名）、B型131名（男子80名・女子51名）、O型196名（男子94名・女子102名）、AB型69名（男子32名・女子37名）。Table1には紙幅の関係上、A型・B型・O型・AB型の欄には男女合併の人数の%しか記載されていない。Table1の「1 牛(牛肉)」の欄にある5.9%はA型の男女220名中の5.9%、つまり13名が牛肉を拒否していることを示している。

Table 1 の右端にある適・不適は、その食物がある血液型の人の身体の内的状態に対して適しているか、どうかということである。太字で記載してあるのは藤田紘一郎の指定で、斜字（イタリック体）で記載してあるのは米国のダダモ医師の指定によるものである。ダダモなる人物は、米国でブームになった「血液型別食事療法」の主唱者で、集英社文庫の『ダダモ博士の血液型健康ダイエット』の著者としてわが国でも有名である。藤田とダダモはともにO型の血液型を人類の最初の血液型とする学者である（日本における血液型研究の世界的権威、文化勲章受賞者　古畑種基はO型を唯一の起源とする所説には反論している）。ここで問題にしたいのは、血液型（体質型）が実際の生活面で生かされているかどうかということである。

Ⅳ　藤田の構想　藤田は人間がABO式4型の血液型を持つようになったのは腸内細菌の仕業であるとする。腸内細菌は、A型物質を持つもの、B型物質を持つもの、O型物質を持つものなどに分化している。藤田はここで腸内細菌の血液型物質の遺伝子が人間の体の中に潜り込み、遺伝子移入が起こった結果、人体にABO式4型の血液型が生じたとする。我われが摂取している動物や植物にも血液型物質が見られる。例えば、牛はA型物質とB型物質を持ち、豚はA型、羊やクジラはB型。植物にもある。キャベツはO型、そばはA型である。ここで人体との対応が生まれてくる。A型の人はB型物質に対する抗体を持っているのでB型物質を持っているもの（羊やクジラ）には合わない。また、B型の人はA型物質に対する抗体を持っているのでA型物質を持っているものには合わない。例えば、ウナギ・山椒魚などには合わないのである（山椒魚を食べることはまずはないであろう）。

このようにして血液型的な見地から好物と拒否物とが決まってくる。それでは実際生活で前述のようなことがどう生かされているであろうか。藤田の指摘を基準にしてまとめてみよう。

Ⅴ　結果　A型者で拒否する食物が多く見られるのは、羊の26.4%とクジラの29.5%である。ハマグリはチェックされているが9.1%にすぎない。B型者で拒否する食物が見られるのは、豚の1.5%とウナギの4.6%である。O型者で拒否する食物が多く見られるのは、馬の26.5%であるが、これは血液型的に拒否したとは思えない。その他チェックされたものとしては牛の6.1%が見られている。

Table 1には掲載されていないが大好物のデータをみると、A型者においては羊が2.7%、クジラ4.5%と低率である。また、B型者においても豚の17.6%、ウナギの9.2%とこれも低率である。しかし、O型者においては牛が39.3%を示している。O型者にとって牛肉は不適合なのであるが、けっこう食べられているのである。

多くの人びとは血液型的に（体質的に）適当でないといわれている食物も味覚の誘惑には勝てないようである。

（ふじたしゅいち・おおむらまさお・うきやしゅういち）

Table 1　若者たちが拒否する食物（注：適：血液型にあっている　不適：血液型に合っていない）

食　品	A	B	O	AB	適	不適	食　品	A	B	O	AB	適	不適
1 牛	5.9	3.1	6.1	8.7	AB,*O*	O,*A*,*AB*	17 キャベツ	2.3	0.8	2.0	2.9	O,*B*	*O*
2 豚	1.8	1.5	3.6	2.9	A	B	18 にんじん	10.5	9.2	11.7	14.5	*B*	*O*
3 羊	26.4	21.4	25.5	17.4	B,,*AB*	A	19 いんげん豆	19.1	14.5	14.8	20.3		*A*
4 クジラ	29.5	37.4	36.7	34.8	B	A	20 ｶｼｭｰﾅｯﾂ	13.2	16.0	11.2	15.9		*A*
5 馬	19.5	29.8	26.5	18.8	AB	O	21 メロン	11.4	3.8	7.1	10.1		*A*
6 にわとり	1.4	1.5	1.0	4.3		*B*,*AB*	22 オレンジ	0.9	0.0	1.0	2.9		*A*
7 鶏卵	7.7	0.8	0.5	7.2		*O*	23 かぼちゃ	5.9	7.6	5.1	10.1	*O*	*B*
8 うずら	6.8	4.6	7.1	10.1		*B*	24 トマト	13.6	13.0	12.2	14.5		*B*
9 ウナギ	12.3	4.6	8.7	8.7	A	B,*AB*	25 バナナ	4.5	3.8	3.1	7.2		*AB*
10 蛤	9.1	14.5	8.7	8.7	B,O	A ,*B*	26 マンゴー	12.3	13.0	12.2	5.8		*AB*
11 ｽﾓｰｸﾁｷﾝ	6.8	13.7	4.1	13.0	*A*	*O*	27 レモン	5.9	7.6	4.6	1.4		*AB*
12 ｷｬﾋﾞｱ	13.2	23.7	37.2	21.7		*A*	28 そば	2.7	3.8	3.6	5.8	A B,*A*	*AB*
13 ひらめ	9.1	8.4	7.1	13.0	*B*	*AB*	29 チーズ	6.8	2.3	7.1	7.2		*O*
14 かに	4.1	5.3	5.6	8.7		*A*	30 ヨーグルト	1.8	1.5	1.0	0.0		*O*
15 タコ	4.1	2.3	3.6	8.7		*B*	31 パスタ	1.8	2.3	0.0	1.4		*A*
16 とうもろこし	1.4	3.1	2.0	4.3		*O*	32 ｱｲｽｸﾘｰﾑ	1.4	1.5	0.5	1.4		*B*

大学生のリジリエンスの差異による心理特性

統合的-HTP・SCT・リジリエンス尺度

橋本　泰子

（桜美林大学）

キーワード：大学生・統合的-HTP・SCT

目的：2008年の米国における経済危機による影響で、日本でも失業者が20万人を越し、内定取り消しや、引きこもりの増加・長期化等が憂慮されている。この様な厳しい社会状況において、大卒後の学生は社会適応が困難と予想されることから、学生時代にコミュニケーションスキルを促進する対策が必要であると思慮される。

そこで、大学生を対象にリジリエンスの高低群間で、どのような心理特性が認められるか検討を試みた。

対象と方法：対象は都内四年制大学の学生237名で、方法は以下の3種類を用いた。

1）リジリエンス尺度：「ものごとに積極的に取り組んでいますか」等の10の質問項目に「全くそうである」、「全くそうでない」の5件法で回答する。

2）SCT：15項目の単語・書きかけの文章を完成する。

3）統合的-HTP：「家・木・人物」をA4の用紙に自由に絵を書いて貰う。2008年11月に集団法で実施した。

結果と考察：リジリエンス尺度の全体の平均＝33.6、SD＝5.85、±1SDにより高群（77名、男子＝36、女子＝41名、平均年齢＝20.4歳）と低群（73名、男子＝31名、女子＝42名、平均年齢＝20.2歳）に区分し、結果の検討をした。

「SCTの結果」15項目中、χ二乗検定で12項目に有意差（$p<.05$）が認められた。

要約すると、高群は、性格は明るく、家族関係も親和的で、親との間に確執が生じた時には、コミュニケーションにより問題を解決している。友人も多く、学生生活も充実し、恋愛・結婚・就職にも積極的で、老後のライフスタイルも肯定的イメージを描いている。

これには、高いリジリエンスが関係するものと解釈される。

低群は、性格は内向的で、両親に対しての、葛藤を有し、問題が起きた時には、怒り出し、稚拙な解決方法を取る。不満を溜め込み易く、うつ状態になり易い。友人も少なく、学生生活も楽しくなく、恋愛・就職にも消極的で、老後の生活にも不安を抱いている。

「統合的-HTPの結果」＊形式分析：20項目中、6項目に有意差（$p<.01$）が認められた。

高群は統合性・活動性・信頼性が認められるが、低群は内向性・自己中心性・情緒の不安定性が窺われた。＊　家：1個の有意差と2個の有意傾向から、低群は、対人関係の回避・不安・抑うつ傾向が認められた。差が少数なのは、家族から自立傾向があるためだろう。

＊　木：25項目中、6項目に有意差（$p<.05$）認められた。高群は活動的・適応的・自己同一化もほぼ確立。低群は柔軟性に欠け、ストレスを受け易く、情緒不安定である。

＊　人物：31項目中、4項目に有意差（$p<.05$），高群は活動的・自己顕示性・対人関係に関心あり。低群は内向的・対人関係は稀薄で引きこもり傾向がある。

共通点として、社会的役割に関心が薄い、「匿名性・非個性化」が窺われた。

結語：高群の性格は外向・親子、対人関係も良好で、恋愛・結婚・就職にも積極的で老後のライフスタイルも肯定的である。低群は、内向・自己同一化も達成されてなく、親とに葛藤があり、情緒不安定で、不満を溜め込み、うつ状態になり易い。就職・友人に対しても回避的で老後の生活に不安がある。低群に対して、リジリエンスを上げるトレーニングにより社会生活に容易に適応するものと考察される。

（橋本　泰子）

中学生の「いじめ」被害の性差に関する報告

三 島 浩 路
（中部大学　現代教育学部）

キーワード：いじめ，中学生，調査研究，性差

＜問　題＞

三島(2009)は，「いじめ」の形態（特定の仲間集団×学級内の不特定多数）と内容（直接的×非直接的）により，「いじめ」に関連する要因や対応の方法などが異なる可能性があることを指摘した(Figure1)。本研究は，親しい友人により構成されることが多い，仲間集団内における「いじめ」の被害程度と，学級内の不特定多数からの「いじめ」被害程度に性差がみられるのかどうかを検討することを主な目的にしている。本研究では，卒業直後の中学生を対象に，中学３年当時の「いじめ」被害体験等に関する調査を行い，「いじめ」の形態等により，男女間に被害程度の差があるのかどうかを分析した。

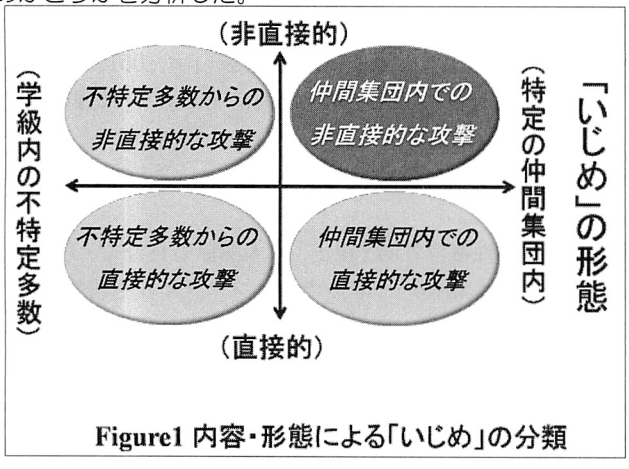


Figure1 内容・形態による「いじめ」の分類

＜方　法＞

対象：県立 A 高等学校に 2008・2009 年４月に入学を予定している中学卒業生 595 名（2008 年度：320 名，2009 年度：275 名）を対象に調査を行った。なお，欠損値があったものは分析から除外したため，分析に用いたのは 580 名（男子 243 名，女子 337 名）のデータである。
のデータである。

調査の内容

「いじめ」被害：学級内の不特定多数からの「いじめ」被害に関しては，「クラスのみんなからいじめられたように感じた」という質問で調査し，仲間集団内における「いじめ」被害に関しては，「親しい仲間からいじめられたように感じた」という質問で調査した。

「いじめ」に関連する出来事：仲間はずれ被害・暴力被害について，「仲間はずれにされたと感じた」「同学年の子にたたかれたり，けられたりした」という質問を用いて，それぞれ調査した。

集計の方法：「いじめ」および「仲間はずれ」被害に関しては，被害の程度により３群化した（無被害：まったく感じなかった・ほとんど感じなかった。弱被害：あまり感じなかった。被害：ときどき感じた・感じた）。また，暴力被害に関しても，被害の程度により３群化した（無被害：まったくなかった・ほとんどなかった。弱被害：あまりなかった。被害：ときどきあった・あった）

＜結果と考察＞

■「いじめ」被害の性差

学級内の不特定多数からの「いじめ」被害の程度ごとの人数を男女別に集計(Table1)して比較した結果，男女間に有意なちがいはみられなかった(χ^2=3.74, *df*=2, *n.s.*)。しかし，仲間集団内における「いじめ」被害の程度に関しては(Table1)，男女間に有意なちがいがみられた(χ^2=8.09, *df*=2, p<.05)。残差分析を行った結果，男子に比べて女子の方が，被害群の占める割合が有意に大きい(p<.01)。こうした結果が得られたことから，中学生に関しては，学級内の不特定多数からの「いじめ」被害に性差はみられないが，仲間集団内における「いじめ」被害は，女子の方がより多く体験していることが予想できる。小学校高学年児童を対象に行った調査の結果（三島，2003）においても，親しい友人間における「いじめ」は，女子の方がより顕著にみられたことから，仲間集団内における「いじめ」は，年齢を超え，女子により顕著な「いじめ」である可能性がある。

Table1 「いじめ」被害群ごとの人数と割合

		学級内の不特定多数からの「いじめ」被害		仲間集団内における「いじめ」被害	
		男　子	女　子	男　子	女　子
被害程度	無被害	220 (90.6)	287 (85.2)	220 (90.5)	288 (85.5)
	弱被害	13 (5.3)	27 (8.0)	17 (7.0)	22 (6.5)
	被　害	10 (4.1)	23 (6.8)	6 (2.5)	27 (8.0)
	全　体	243 (100)	337 (100)	243 (100)	337 (100)

( ):%

■「いじめ」に関連する出来事の性差

仲間はずれ被害について，被害の程度ごとの人数を男女別に集計(Table2)して比較した結果，男女間に有意なちがいがみられた(χ^2=20.03, *df*=2, p<.001)。残差分析を行った結果，男子に比べて女子の方が，被害群の占める割合が有意に大きい(p<.01)。こうした結果が得られたことから，中学生に関しては，仲間はずれにされた経験は，女子の方がより多いことが予想できる。

「仲間はずれ」は，仲間集団内でなされる非直接的な方法による「いじめ」と考えられ，そうした「いじめ」が女子に多いということは，仲間集団内における「いじめ」が女子により多く発生していることを裏付けるものである。

暴力被害について，被害の程度ごとの人数を男女別に集計(Table2)して比較した結果，男女間に有意なちがいがみられた(χ^2=11.74, *df*=2, p<.01)。残差分析を行った結果，女子に比べて男子の方が，弱被害群・被害群の占める割合が有意に大きい(p<.05)。こうした結果が得られたことから，中学生に関しては，暴力被害を受けた経験は，男子の方がより多いことが予想できる。

Table2 「いじめ」に関連する出来事の被害群ごとの人数と割合

		仲間はずれ被害		暴力被害	
		男　子	女　子	男　子	女　子
被害程度	無被害	192 (79.1)	232 (68.9)	193 (79.4)	302 (89.7)
	弱被害	39 (16.0)	47 (13.9)	25 (10.3)	18 (5.3)
	被　害	12 (4.9)	58 (17.2)	25 (10.3)	17 (5.0)
	全　体	243 (100)	337 (100)	243 (100)	337 (100)

( ):%

■本研究の実施に当たり，平成21年度中部大学特別研究費（研究課題番号 21IL22A:「いじめ」の類型化と類型に応じた予防・解消プログラムの開発）の助成を受けた。

年齢による化粧行動と自意識

○八田　武俊[1)]　八田　純子[2)]
([1)] 岐阜医療科学大学保健科学部　[2]愛知学院大学心身科学部)
キーワード：年齢、化粧行動、自意識

【研究の目的】化粧行動は外見を美しく見せるなど対人的効用が期待されるメーキャップ、素肌の手入れや健康の保持を目的とし、個人内的効果が期待されるスキンケア、さらに香水などの気分変容や自己イメージの向上を目的としたフレグランスに大別される。こうした化粧行動を促すとして、自意識はもっとも注目されてきた心理的要因であり、年齢とともに変化することが知られている(菅原・山本・松井, 1986)。そこで、本研究では、年齢にともなう自意識と化粧行動の変化について検討することとした。

自意識は外見など他者から観察可能な自己に注意を向けやすい公的自意識と、態度や感情など他者から観察不可能な自己の内的側面に注意を向けやすい私的自意識に分けられる。これまで、公的自意識はメーキャップを促すことや(Miller & Cox, 1982)、私的自意識の高さとスキンケア行為との関連が指摘されている(阿部・日比野,1997)。この自意識は年齢によって変化することが指摘されている。菅原ら (1986)は、15～49歳までの男女 1500 人以上を対象に自意識に関する調査を行ったところ、私的自意識は15～23 歳くらいまでにかけて高まり、その後は、ほぼ安定する傾向を示し、公的自意識は 15 歳を過ぎたあたりから徐々に低下する様子を示している。

つぎに、化粧行動と年齢の関係について、永尾(1983)は化粧に対するイメージについて調べたところ、10 歳代までは「美しく見せたい」ために化粧する人が多いのに対して、20 歳代以降では「気分が引き締まる」「エチケットとして」といった認知から化粧をする人が多くみられることを示している。こうした傾向は 30 歳代以降で顕著となる。このことは、10 歳代までの化粧行動が対人的効用を期待したものであるのに対して、20 歳代以降の化粧行動は個人内的効果を期待した化粧行動であると考えられる。

これらのことから、年齢による化粧行動と自意識の変化は類似していると思われる。つまり、公的自意識と対人的効用を期待する化粧行動はともに 10 歳代がピークで、20 歳代を過ぎると低下する傾向にあり、私的自意識と個人内的効用を期待する化粧行動は 20 歳代以降に高まり安定する傾向にある。それゆえ、10 歳代の若年女性は中高年女性よりも公的自意識が高く(仮説 1)、私的自意識が低いだろう(仮説 2)。また、若年女性は中高年女性よりもメーキャップをする人の割合が多く(仮説 3)、スキンケアをする人の割合が少ないと予想される(仮説 4)。

【方法】本研究における中高年齢者は北海道 Y 町が主催する住民検診(2006 年)の受診者で、本調査への参加に同意し、自意識特性尺度と化粧行動に関する全項目に回答した 39～91 歳の女性 205 名で、平均年齢は 61.52 歳であった。本研究では 39～64 歳を中年齢群、65～91 歳を高年齢群とした。次に、若年齢者の対象は、中高年齢者同様、全項目に回答した17～19 歳の女子大学 123 名で、平均年齢は 18.09 歳であった。

本調査では、自意識特性尺度(菅原, 1984)について測定したが、高齢者を対象とするため回答方法を従来の 7 件法から 3 件法に単純化した。次に、「特別な用事がないとき」「買い物へ出かけるとき」「友達に会うとき」「法事や結婚式のとき」の各状況において、洗顔・化粧水・乳液による基礎化粧とファンデーション・白粉による下地化粧、口紅・頬紅・眉墨による仕上げ化粧を「する」と「しない」の 2 件法で回答するよう求めた。ただし、本研究では特別な用事がない状況についてのみ報告する。

【結果】年齢要因を独立変数、両自意識得点を従属変数とする分散分析を行ったところ、両自意識得点について年齢要因の主効果が有意であった($F(2, 325) = 54.03$; 4.60, $ps < .05$)。下位検定の結果、表 1 に示したように、若年齢群は中・高年齢群よりも公的自意識得点が高く($ps < .01$)、中年齢群よりも私的自意識得点が高かった($p < .01$)。

表1 私的・公的自意識に関する各年齢群の平均と標準偏差

	若年齢群	中年齢群	高年齢群
公的自意識	2.44(0.36)	1.97(0.35)	1.96(0.47)
私的自意識	2.29(0.38)	2.13(0.37)	2.21(0.49)

次に、特別な用事がない状況での各化粧行動の有無に関する回答と年齢要因について χ^2 検定を行ったところ、基礎化粧に関して年齢要因による比率の差が有意傾向で、下地化粧と仕上げ化粧に関して、年齢要因による比率の差が認められた。下位検定の結果、若年齢群は中・高年齢群よりも下地・仕上げ化粧をすると回答した人の割合が少なかった。また、高年齢群は中年齢群よりも仕上げ化粧をすると回答した人の割合が多かった (表 2)。

表2 用事がない状況で各化粧行動について「する」と回答した年齢群ごとの人数と割合

	弱年齢群	中年齢群	高年齢群	χ^2値	p
基礎化粧	118 (95.9%)	120 (90.9%)	64 (87.7%)	4.70	p = .096
下地化粧	11 (8.9%)	70 (53.0%)	47 (64.4%)	77.39	p < .01
仕上げ化粧	9 (7.3%)	68 (51.5%)	49 (67.1%)	85.29	p < .01

【考察】年齢と自意識の関係について、公的自意識は年齢とともに低下することが示され(仮説 1 を支持)、先行研究と同様の結果が得られた。一方、私的自意識は青年期において高く、成人期後期に一度低下した後、老年期に若干上昇していた(仮説 2 を不支持)。その原因として、多くの女性は成人期から老年期にかけて家事や育児に追われるため、自己に関心が向きにくいことが挙げられる。ただし、そうした時期に一区切りがついたとき、自己への関心が高まると思われる。年齢と化粧行動の関連について、若年齢者は中・高年齢者よりもメーキャップをしないこと(仮説 3 を不支持)、中高年齢者と基礎化粧行動について違いはないことが示された(仮説 4 を不支持)。それゆえ、メーキャップは 10 代の若者にとって特別な行為であり、中・高年齢者にとっては習慣化された行為であると思われる。

【引用文献】

阿部恒之・日比野嵩 1997 化粧がもたらすいやしとはげみ－効用のしくみを考える　*クレアボー*, 11, 2-6
Miller, L., & Cox, C. L. 1982 For appearance sake: Public self-consciousness and makeup use. *PSPB*, 8, 748-75
永尾松夫 1983 女性における化粧意識. *化粧文化*,8,133-144
菅原健介 1984　自意識尺度(self-consciousness)日本語版作成の試み *心理学研究*, 55, 184-188
菅原健介・山本真理子・松井豊 1986 Self-consciousness の人口統計学的特徴 日本心理学会第 50 回大会発表論文集
(はった たけとし・はった じゅんこ)

遊びを用いたグループ活動による凝集性の変化

— 保育士の視点から —

○福本　敏宏[1)]　大久保純一郎[1,2)]
([1)] 帝塚山大学大学院人文科学研究科　[2)]帝塚山大学)

キーワード：凝集性，幼児，グループ

近年，人間関係の希薄さが指摘され，その低年齢化も進んできている。それを受け，幼児期の人間関係の結びつきの強さが注目されている。しかし,小学校以上の学生では多く見られるが，就学前児を参加者として扱っている研究あまりされていなかった。そのため先行研究（福本ら,2006,2008）では，遊びを用いた構成的エンカウンター・グループ（以下 SEG）を行い,保育園児の心理的効果やクラスの集団体験の認識（仲間意識）の変化を質問紙調査で捉えた。その結果，保育士による保育園児の評価から，集団遊びを積極的に実施することの心理的有用性が示唆された（福本ら,2006)。また,保育園児の高い凝集性と保育士の評価による凝集性の高まりが示唆された（福本ら,2008)。

＜目的＞本研究では統制群を加えた介入調査を行い，保育士の評価から,遊びによる保育園児の凝集性の変化を捉えた。

【方法】

週に１回１時間程度の「遊び介入」を行い，質問紙等を用いて研究参加者の変化について調査を行った。

＜対象者と実施時期＞参加者は５歳児クラスの保育園児２クラス（１組 22 名，２組 24 名）を対象に，2008 年 11 月から 2009 年３月まで（2009 年１月を除く）の金曜日，４ヶ月間行った（11，12 月は１組が実験群，２，３月は２組が実験群となった。統制群のときは質問紙のみを行った)。

＜手続き＞１組では，週に１度約１時間程度を目安に実施された「遊び介入」（SEG に基づき，実験者が提供した）を実験者がファシリテーターとなり一緒に行った。これを週に１回２ヶ月間（11，12 月），計８セッション実施した。その後の２，３月は「遊び介入」を行わなかった。

２組では，11，12 月は「遊び介入」を行わなかった。その後の２，３月は，１組と同様の「遊び介入」を週に１回２ヶ月間（２，３月），計８セッション実施した。

＜保育士用凝集性尺度＞保育士から見た園児全体の凝集性の変化を客観的に捉えるために，集団体験の認識に関する項目（高橋ら,2005）を参考に，Q1「ここ１週間で，メンバーはお互いに，協力し合うことができていた」Q2「ここ１週間で，メンバーは，遊びに積極的に取り組んでいた」Q3「今日の遊びは，みんなが満足できたようだった」の３項目を Visual Analogue Scale (VAS)を用いて測定し，０cm から 10cm の線上にチェックを入れてもらうよう依頼した。また，自由筆記欄を設け,「特に気になったこと」を記入してもらった。本質問紙は，クラス担当の保育士に，調査開始時と２月初旬（４回目）をベースラインとし，その他毎月月末に保育士用質問紙の記入を計６回依頼した。

【結果】

Fig.1 は凝集性得点の推移を示す。図によると，１組では「遊び介入」を始めた，１回目から４回目にかけ得点が増加し，それ以降「遊び介入」をしなくなると得点が減少した。２組では「遊び介入」を行っていない３回目と，「遊び介入」を行った６回目で得点が増加した。

Fig.2 は１組の各質問項目得点の推移を示す。図によると，Q1 は,「遊び介入」を行った３回目まで得点の増加が見られ，それ以降減少した。Q2 は同様に４回目まで得点の増加が見られたが，「遊び介入」をやめると得点は減少した。Q3 は４回目に得点が増加したが，それ以外ではあまり得点に変化は見られなかった。

Fig.3 は２組の各質問項目得点の推移を示す。図によると，Q1 は，「遊び介入」を行わなかった１回目から３回目までは得点が高く、「遊び介入」を行った４回目，５回目で得点が減少し，６回目で再び得点が増加した。Q2 は、３回目までは増加し，以降減少するが６回目には再び増加した。Q3 は２回目に減少するがそれ以降高い得点を保持している。

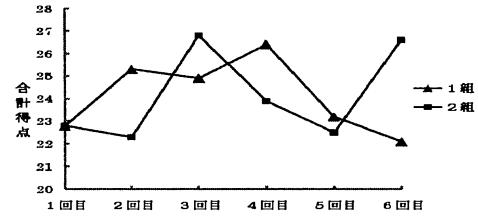


Fig.1　凝集性得点の推移

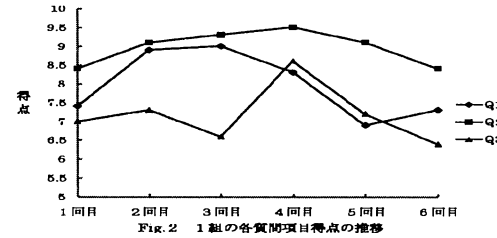


Fig.2　１組の各質問項目得点の推移

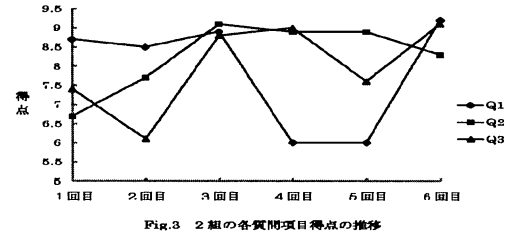


Fig.3　２組の各質問項目得点の推移

【考察】

１組では「遊び介入」をやめた頃から得点の減少が目立った。これは「遊び介入」が保育園児の凝集性に影響を与えていたと推察できる。２組では「遊び介入」の始まる前とやめた時に得点が増加した。これは，１組から「楽しい」など聞いていたようなので期待感や,「最後だから」という思いがあったのかも知れない。また，卒園式が近く様々な園行事があったことも影響しているのかも知れない。

最後に，保育士の視点から、「遊び介入」を行うことは凝集性を高めるのに効果があるのではないかと考えられる。

【引用文献】

福本敏宏・岩満優美・蓮花一己(2006). 保育園児の集団遊びによる気分変化―保育士による評価― 日本心理学会 第70回大会 発表論文集, 370.

福本敏宏・大久保純一郎・岩満優美 (2008). 構成的エンカウンター・グループを用いた保育園児の集団体験の認識の変化に関する研究 日本心理学会第 72 回大会 発表論文集, 1227.

（ふくもと　としひろ・おおくぼ　じゅんいちろう）

障がい者を兄弟にもつ健常児のこころ

― 様々な体験や感情の共有で形成される兄弟関係―

中村　歩
（帝塚山大学大学院人文科学研究科）

キーワード　：　障がい，　兄弟(同胞)，　絆

【問題】

同胞に障がい児をもつ健常児は，幼少の頃から同胞の面倒をみるという重要な役割を担い，義務感や責任感が強い事が指摘されている(三原，1998)。出生順位も大きく関係しており，年長兄弟は特に責任感が強い。自分が弟，妹の面倒をみなければならないという自覚を強くもつため，早熟になりがちである（西村・原，1996)。また，同胞のために様々な犠牲を強いられること，突然の問題行動への対処の困難などによるストレスを感じている。母親が手の掛かる障がい児のほうに労力を費やすため，嫉妬が生まれることもある(平川，2004)。将来の同胞の世話も重要な問題で，多くの兄弟姉妹が，何らかの形で将来同胞を支えていかなくてはならないと考えている（三原，1998)。

【目的】

本研究では，障がいに由来する様々な体験や感情を，健常な兄弟が共有することによって生じる，障がい者同胞に対する特別な深い情で結ばれた兄弟観を「絆(きずな)」と定義し，その特性について検討する。そのため，障がい者同胞と兄弟姉妹との関係を幼少期から現在に至るまで概観し，健常な兄弟に生じる絆について考察した。

【方法】

対象者

知的発達遅滞者(女性，21 歳)を同胞にもつＡ氏(女性，24 歳)と，自閉症者(男性，23 歳)を同胞にもつ Ｂ 氏(女性，25 歳)の２名を対象とした。

手続き

半構造化面接法を用いた。面接時間は 90～120 分，対象者の自宅で実施した。面接内容は，対象者の同意を得て，録音により記録した。

質問内容

はじめに，続柄，障がいの種類，障がい者同胞の年齢，性別，兄弟の年齢を確認した後，面接の中で以下の質問に自由に回答してもらった。

(1)兄弟の幼少期の体験 1)家庭の様子，2)母親との関わり，3)ケンカの体験，4)幼少期の障がい者同胞に対する気持ち

(2)兄弟の児童期の体験 1)学校での出来事，2)友達との関係，3)児童期の障がい者同胞に対する気持ち

(3)兄弟の思春期の体験 1)家庭の様子，2)学校での出来事，3)思春期の障がい者同胞に対する気持ち

(4)親亡き後の将来のことについて

(5)障がい者同胞との思い出

(6)現在の障がい者同胞に対する気持ち

(7)嫉妬や我慢などの辛い経験について

(8)絆について

【結果と考察】

兄弟の責任感

「同胞の通学途中の事故や，学校でケガをした時に，親の代わりに対応し，その後はより一層の注意を向けた」(Ａ氏)，「同胞が友達と仲良くできるように手助けをした。」(Ｂ氏)などの内省から，両氏とも，幼少期から障がい者同胞に対して，自分が面倒をみる，守っていくという責任感を強く感じていた。特に，学校など，親が不在の状況で，少しでも両親を助けようとする兄弟の気持ちが認められた。

兄弟が体験した辛い体験

「祖母が発した妹の障がいに関する言葉に非常にショックを受け，長年悩み苦しんだ。」(Ａ氏)，「家族での外出時に周りの人の目が気になった。」(Ｂ氏)また，「同胞の障がいを告白したが故の恋人との別れを経験した。」(Ｂ氏)と内省した。このように，内容は多岐に渡るが，本人は健常であるにも関わらず，障がいを原因とする二次的な悲嘆・挫折を兄弟が経験していることが明らかになった。

思春期の体験について

Ａ氏，Ｂ氏は，ともに思春期を部活動に専念して過ごした。家庭内は，歳の近い同胞の思春期によるパニックで荒れていたという。このことから，思春期という不安定な時期に，ある程度同胞と距離のとれた環境で過ごせた事が，ストレスへの効果的な対処となり，健全な自己の確立と，同胞に対する良心的な感情の成熟に繋がったのではないかと考えられた。

親亡き後の将来のことについて

兄弟はこの問題を，重要であると感じていた。両氏ともに女性ということもあり，将来自分が家庭を持つ可能性も視野にいれ，面倒をみるのは自分たちだと強く自覚していた。また，それを苦痛とは感じず，当たり前の事として考えていた。

特別な絆について

Ａ氏もＢ氏も，障がい者同胞の他に，健常な弟がいた。Ｂ氏は，「健常な弟よりも，障がいをもつ弟との間に切っても切れない深い絆が存在する。どちらが先に亡くなるかわからないが，一生一緒にいる」と断言した。Ａ氏は，「どちらの兄弟にも絆を感じ，大切に思っている」と答えた。しかし，Ａ氏と同胞の関係を全体的に考察すると，同胞の気持ちを察しながらも姉として叱った辛さ，その時に同胞に謝りながら流した涙，Ａ氏が落ち込んだ時，一番に気づき心配する同胞の様子，Ａ氏の気持ちがどの時期も変わらず同胞に向いている事などから，同胞との間に深い絆が存在することが考えられた。

【まとめ】

障がい者を兄弟にもつ健常児には，健常者の兄弟関係とは異なる特別な兄弟観つまり「絆」が存在するようである。それは①親に類似した強い責任感や保護の感情，②障がい者同胞と類似した悲嘆・挫折の経験，③ストレスへの効果的な対処，④障がい者同胞との将来の共有，⑤健常な兄弟間よりも強い愛情・心からの深い繋がりなどである。

【引用文献】

平川忠敏(2004)．自閉症のきょうだい教室．児童青年精神医学とその近接領域，45(4)，372-379.

三原博光(1998)．知的障害者の兄弟姉妹の生活体験について―幼少期の体験や両親とのかかわりなどを中心に―．発達障害研究，20(1)，72-78.

西村辨作・原幸一（1996)．障害児のきょうだい達（2)．発達障害研究，18（2)，150-157.

謝辞　本研究は，発表者が京都文教大学臨床心理学部に提出した卒業論文を修正したものである。本研究にあたり，ご指導いただいた京都文教大学金山由美教授に深く感謝致します。

（なかむら　あゆみ）

企業選択に見られる大学生の職業観(5)

― 特に，1998年調査結果と2008年調査結果との比較 ―

和田　美知子
(城西短期大学ビジネス総合学科)

キーワード：就職活動，企業選択，大学生

【研究の目的】これまで4回にわたり，大学生の職業観について，質問紙調査結果の分析を試みてきた。最初の調査は，超氷河期といわれた1998年7月に実施し，応心第66回大会（1999）においてその結果の一部を報告した。その10年後，100年に1度といわれる大不況直前の2008年5月に実施した調査の一部は，応心第75回大会（2008）において報告した。今回は，分析対象を文系1･2年次の男子学生に限定し，両調査結果の比較分析を通して，どのような意識の変化が見られるのかを明らかにしたい。

【方法】(1)調査対象者：埼玉県内の文系の1･2年次男子大学生で，1998年7月調査時の323名（A群）と，2008年5月調査時の100名（B群）。

(2)調査材料：①就職活動への取り組み方について，『あなたは，就職活動についてどのように考えていますか。』という設問に対して6つの選択肢を用意した。②勤続期間について，『あなたは，卒業後，最初に就職した会社（または就いた仕事）でどのくらい働き続けようと思いますか。』という設問に対して選択肢を用意した。③就職先の選択基準について，『あなたは，就職先（企業）を選ぶときに，以下の条件をどの程度重視しますか。』という設問に対して30項目を示し，“非常に重視する”から“全く重視しない”までの，6件法で回答を求めた。なお，質問項目はこれまでと同様，「就職に関する意識」（宮沢,1990）を参考に作成したものを用いた。

(3)手続き：各教室において教示を読み上げて実施した。

【結果】①就職活動への取り組み方について

この設問はB群にのみ実施した。「多少妥協しても，必ず就職を決める」59.0%，「人一倍頑張って，希望に沿った就職を決める」24.0%であった。これは，2000年1月調査時の，3･4年男子（それぞれ51.9%，17.4%）より高い数値である。

②勤続期間について

実際の調査票では，A群は「結婚まで」「出産まで」等の8選択肢，B群は「30代でやめたい」等の7選択肢を示してあったが，比較のため，それぞれを共通の4選択肢にまとめて比較した。結果は下表のとおりで，両群の回答比率に有意な差が認められた（$\chi_0^2=68.9$，$df=3$，$p<0.01$）。

	2～3年は	5～6年は	定年まで	その他
A群	3.1%	5.6%	39.0%	52.3%
B群	5.0%	15.0%	74.0%	6.0%

③就職先の選択基準について

“非常に重視する”から“全く重視しない”まで，順に1から6までの点数をつけて集計と分析を行った（右表参照）。

平均値を見ると，両群とも重視するとしている項目は，「企業の安定性」「仕事内容」「給料」「失業のおそれ」であった。しかし，表の右端の列に示したとおり，8項目に両群の平均値の有意差が認められた。「給料」「失業のおそれ」等はB群の方が重視しているが，「企業の安定性」「企業の業績」「能力や才能の発揮の可能性」等は逆の結果であった。

主因子法・バリマックス回転により因子分析を行った結果，因子Ⅰは「業績」「資本金」「規模」「知名度」「将来性」等の『企業』因子，因子Ⅱは「勤務時間」「残業」「休暇」「給料」「失業のおそれ」等の『生活条件』因子，因子Ⅲは「仕事への適性」「経営者の手腕」「業種」「能力を発揮できるか」「技術・企画・開発力」等の『キャリアアップ』因子，因子Ⅳは「福利厚生」「社会貢献」「労働組合」「縁故」「社宅･寮」等の『職場環境』因子と，それぞれ解釈した。選択の条件として重視しているのは，因子Ⅱ（ハーズバーグの衛生要因に該当）と，因子Ⅲ（動機づけ要因に該当）に分類された項目である。なお，因子Ⅰについては，因子得点の平均値に有意な差（$p<0.05$）が認められた。

【考察】本研究の分析によって次の点が明らかになった。

(1)B群の調査時期は，非正規雇用の増加が社会問題化しつつある時期だったことが，①や②の結果に反映されたと思われる。ただし，彼らが実際に就職活動の厳しさに直面したときに，調査時に持っていた積極的な気持ちが萎える事のないよう，今後の適切な職業指導が重要である。

(2)平均値から概観すると，超氷河期よりも非正規雇用問題の方が衛生要因をさらに重要視させ，動機づけ要因を二の次にさせたと言えよう。因子分析の結果抽出された因子は以前の分析と同様であるが，項目を個別に見ると入れ替わっているものも散見される。特に，「企業の安定性」はこれまで因子Ⅰに入っていたが，今回は因子Ⅱ（衛生要因）になった。「企業の安定性」は就職しようとする企業の持つ条件ではなく，「失業のおそれ」と同様に，自分の生活を守るための基本条件として認識されてきたことの現れであると考える。

【引用文献】1) 宮沢秀次 1990 大学生の就職意識に関する研究 名古屋経済大学・市邨学園短期大学人文科学論集

（わだ みちこ）

	項　目	因子分析		平均値		F-t検定
		負荷量	共通性	A群	B群	
因子Ⅰ	24. 企業の業績(実績)	0.667	0.652	2.81	***2.38***	**
	23. 資本金	0.634	0.551	3.16	3.02	
	18. 企業の規模	0.614	0.530	2.94	2.95	
	22. 企業の知名度	0.596	0.446	2.94	2.82	
	1. 企業の将来性	0.470	0.400	2.14	2.12	
	12. 昇進の可能性	0.419	0.447	2.37	2.20	
因子Ⅱ	30. 勤務時間	0.645	0.454	2.45	2.29	
	19. 残業の多さ	0.518	0.411	2.87	2.71	
	2. 休日･休暇の多さ	0.544	0.324	***2.19***	2.44	*
	14. 給料	0.527	0.425	1.94	***1.67***	**
	11. 失業のおそれ(リストラ)	0.524	0.398	1.98	***1.65***	**
	28. 転勤の可能性	0.523	0.334	2.74	2.64	
	4. 企業の安定性	0.419	0.386	***0.96***	1.63	**
	7. 通勤の便利さ	0.402	0.181	2.22	2.43	
因子Ⅲ	27. 仕事(職業)への適性	0.687	0.499	2.07	2.13	
	26. 経営者の手腕･能力	0.604	0.509	2.54	2.60	
	29. 業種や事業内容	0.573	0.389	2.34	***2.09***	*
	3. 能力や才能の発揮の可能性	0.561	0.365	***2.22***	2.62	**
	8. 技術力･企画力･開発力	0.525	0.410	2.69	2.95	
	16. 仕事内容	0.431	0.248	1.86	1.80	
	25. 資格取得の可能性	0.380	0.362	2.96	2.83	
因子Ⅳ	9. 福利厚生施設(保養所など)	0.570	0.400	3.27	3.14	
	10. 社会的な貢献度	0.553	0.420	3.06	3.07	
	15. 労働組合の有無	0.534	0.389	3.25	***2.97***	*
	20. 企業内での縁故(コネ)	0.522	0.391	3.66	3.39	
	17. 社宅･寮の有無	0.461	0.255	3.75	3.75	
	21. 従業員の年齢構成比	0.434	0.226	3.46	3.46	
	13. 知人や先輩の勤務の有無	0.433	0.256	3.66	3.55	
	5. 男女格差の可能性	0.398	0.221	3.68	3.59	
	6. 海外出張の可能性	0.312	0.210	3.30	3.31	

(** $p<0.01$, * $p<0.05$)

日米の児童の異文化理解を深めるための方法

日本文化を取り入れた非言語的コミュニケーションを促す活動を通して

中田 栄
(上智大学)

Key words: リーダーシップ，異文化理解，日米の児童の行動観察

【研究の目的】

本研究は，児童の行動観察を通して、異文化コミュニケーションを質的に検討することを目的とする。言葉以外の伝達手段を用いて、どのような活動場面で相互作用が促されるのかを検討する。特に非言語的コミュニケーションを質的に分析することを通して相互作用を促す指導方法を検討することを目的とする。

そこで、本研究では、木の葉のカルタで、お互いの文化を生かしながらコミュニケーションを促す。それを踏まえ、米国の遊びに日本文化を取り入れたとき、遊びがどのように発展していくのかを検討する。

さらに、児童の発達を踏まえて、異文化理解を深めるための教育方法について検討する。時間の経過に伴う活動の変化についての行動観察を行う。

【方法】

対象者: 観察データを収集した児童の中から今回は、８～９歳(22名)の対象を取り上げる。内訳は米国の児童12名(男子６名、女子６名)、北米在住の日本人10名(男子５名，女子５名)である。

手続き：児童をもつ家族に協力を依頼し、児童の観察と撮影の協力を得た。なお、対象者は、観察記録の了解を得て研究に参加している。

観察内容:以下の野外での活動を観察した。

(1)木の葉のカルタ取り(第１回目):木の葉や実を用いて、様々な形の葉や木の実を集め、10種類以上の葉を台紙に貼りカルタを作る。材料は袋、鳥の羽根、木の葉(大きな葉、小さな葉、ギザギザの葉、長い葉、短い葉、野生のネギ)、台紙、草笛。

(2)各国の素材を生かしてカゴを編む。材料は細い枝(山ぶどうのつる)、柳の枝、いけばな用の細いワイヤ、果物(青りんご、栗)、絵カードが用いられた。

(3)素材を生かした贈り物(第２回目)：材料は石、竹、ボンド、木の葉、花、セミの抜け殻、どんぐりである。

観察場所:児童とその家族への説明については、Grand Floridian Resort で個別に説明を行い、観察の協力を依頼した。

期間: 第１回目:2008年12月20日～28日。
第２回目:2009年１月１日～１月４日。

経過と手続き: 北米在住の児童をもつ保護者については、2006年と2007年にも観察の協力を依頼してきた。１年前から予定を確認し、12月19日から事前の打ち合わせをし、米国での縦断的なフォローアップ調査が可能となった。冬休みに米国で過ごす家族に、研究協力を依頼し、子ども同士の相互作用場面についての行動を記録した。米国の児童の遊びを日本の児童に伝える場面では、想像力を働かせて得意なことを取り入れている。児童がどのように自己と他者との相互作用を通して、文化への理解を深めていくのかを検討していく。

【結果】

導入からみんなで葉を集めることによって参加意識を高めることを促した。米国の児童が草笛で合図をすると、日本の児童も草笛で合図をし、袋の中から１枚の葉を取り出した。その葉を見た他の児童が木の葉のカルタのところに走り、読み手の出した葉と同じ形の葉をとりに走った。米国の児童がリーダーシップをとる場面で、葉を取り出すときに、合図をした後、時間をおいて、取り出すそぶりを演じ、なかなか葉を取り出さないことによって、他の児童の関心を引こうとする行動が見られた。米国のリーダーの児童はメンバーの交代やタイミングに変化をつけて、１つの遊びが長く続くように工夫していた。

日本の児童のグループは、日本から持ってきた竹を組み合わせて空気で葉や羽根を飛ばす遊びに発展した。１組目のグループは、山ぶどうの細いつるでかごを編んで見せた。日本から持ってきた生け花用の細いワイヤを用いて、山ぶどうのつるを結んだ。不揃いであっても日本的な落ち着きのある雰囲気のかごができあがった。そのカゴに青りんごと栗をおいて飾ると、米国の児童も欲しがり、日本人と一緒に作りはじめた。

日本人のＢ児は山ぶどうのつるを編んだかごを発展させ、竹のアートを作り、米国の児童と交換しあった。Ｂ児は竹のアートをＣ児に贈り、今度は、米国のＣ児が、石をボンドでつなぎあわせて、葉と花をのせてアートを作り、Ｂ児に贈った。さらに、Ｂ児は、大きな石と小さな石をボンドでつなぎ、どんぐりとセミの抜け殻を組み合わせて不思議なアートを作ってＣ児に贈った。児童は木の葉や実などを用い、想像力を働かせてコミュニケーションをした。米国のリーダーの児童が作り方の手順をイラストで書いて説明した。日本の児童は、日本語のイラストの絵カードを見せ、他の児童に作り方を伝えた。

【考察】

木の葉を集めるとき、米国の子どもが葉を２枚ずつの組にし、２枚の葉のうち、１枚を袋にいれ、もう１枚をカルタにした。遊びが発展していく中で、１グループにつき、２人のリーダーがでてきた。はじめにリーダーになった児童は、米国のＡ児であった。リーダーは、準備を手伝う行動をし、他の児童に遊び方を説明した。日本のカルタとりを落ち葉の形で選ぶ形式は、米国の児童に理解されやすかった。他者に役割を与え、自己の考えを提案して遊びに引き込むことによって、お互いの文化を理解し合うことが可能となった。

葉の長さを比べるときに、最も長い葉を出したものが得点を取るという遊びでは、様々な基準で比べることを学んでいる。野生のネギを出した児童が得点を得たとき、同じ児童が続けて勝つことがないように、子ども同士で基準を変化させ、公平にするための工夫が可能となった。

【引用文献】

Nakata, S. 2008a Emotional control of the children in stress coping and the process of the resolution. Paper presented at the 29th International Congress of Psychology(Berlin, Germany).

(なかた さかえ)

自律訓練法の習得に伴うイメージの変化

— PAC 分析を用いて —

○政本　香[1)]　長谷綾子[1)]　林　幹也[2)]
([1)] 松山東雲女子大学人文科学部　[2)]明星大学人文学部)

キーワード：自律訓練法、イメージ、PAC 分析

【目的】

リラクセーション技法のひとつである自律訓練法は，長年の実践ならびに研究成果の蓄積により，心身に様々な効果を及ぼすことが明らかとなっている (e.g., 松岡・松岡, 1999)。これらの効果に関連する要因としてイメージの構造の変化が考えられるが，体系的な研究成果の蓄積は今後の課題である。

PAC 分析(Personal Attitude Construct Analysis)は，個人別のイメージや態度構造を測定するために開発された手法である(内藤, 2004)。本研究では，自律訓練法の習得に伴うイメージの変容について，PAC 分析を採用して検討することを目的とする。

【方法】

実験参加者：私立大学に在籍する心身ともに健康な女子大学生 3 名（年齢：20-21 歳)。実験参加者は過去に自律訓練法を含むリラクセーション技法の習得体験はなかった。

手続き：

イメージの測定：実験参加者には，自律訓練法の指導を実施する前に，以下の内容を含む教示によりイメージの測定を行った。「心身の健康と聞いた際に，どのようなことを思い浮かべますか。文章や単語，あるいは絵でも構わないので，頭に思い浮かんだものを思い浮かんだ順にカードに記入して下さい。」

イメージを思い浮かべ，カードに記入した後，それぞれの連想イメージがどのくらい近いかを比較し評定してもらった。

自律訓練法の指導と実施：自律訓練法の標準練習の実施方法を指導し，実際に行った後，実施に関わる留意点を説明し，さらに質問等に回答した。

1 回目の面接が終了する 2 ヶ月の間，毎日，最低 1 回は自律訓練法を行うよう依頼した。記録用紙を配布し，自律訓練法を実施した際に必ず，実施した公式，どのくらい感じたか，その他自由記述を実施するように求めた。

1 回目の面接：自律訓練法の指導から 2 ヶ月経過した時点で一回目の面接を実施した。面接では，まず自律訓練法に関する筆問等に回答し，次いで，イメージの測定を行った。さらに，自律訓練法を指導する前に測定したイメージについてクラスター分析を行い，得られたデンドログラムを基にインタビューを実施した。

2 回目の面接：1 回目の面接時において測定したイメージを構造化したデンドログラムを基にインタビューを行った。その後，自律訓練法指導前のデンドログラムと比較して実験参加者の内省報告を求めた。

【結果】

記録用紙の記載事項を基に，2 回目の面接が終了した時点で，練習の欠損がなく，自律訓練法標準練習第 2 公式（四肢重温感）までを習得したと報告した 1 名(20 歳)を分析の対象とした。

自律訓練法実施前ならびに実施後において連想された単語はそれぞれ 18 個，10 個であった。イメージの構造を析出するために，内藤(2004)の手法に習い，ウォード法によるクラスター分析を行った。分析の結果得られたデンドログラムを Fig.1 に示した。2 回にわたるインタビューの結果をみると (Fig.1)，自律訓練法実施前には 3 つのクラスターであったイメージが，自律訓練法習得後は 2 つのクラスターに収束していた。さらに，自律訓練法前には，心身の健康に対するイメージが，他者から癒しを受ける側面が強かったのに対し，自律訓練法実施後においては，現在の自身に対して深く見つめなおし，自律・自立して自ら困難に立ち向かおうとする内容に変容する様子が語られた。実験参加者実験参加者の内省については当日詳細を報告する。

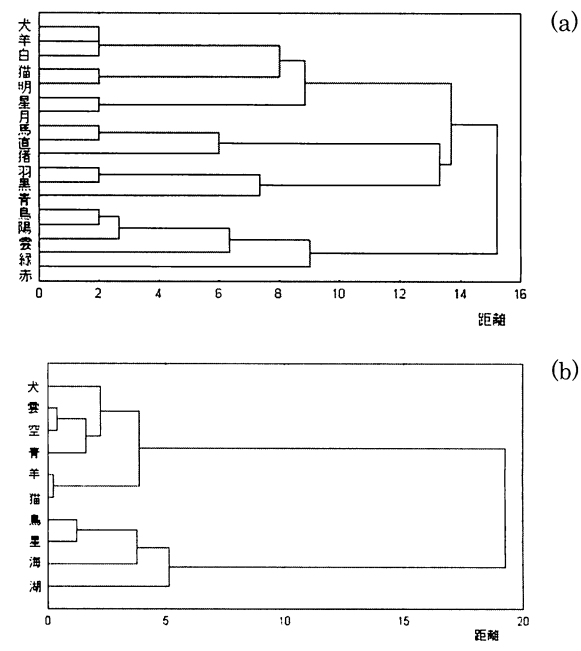


Fig.1. 自律訓練法実施前(a)ならびに習得後(b)におけるイメージのデンドログラム

【考察】

本研究結果から，自律訓練法標準練習第 2 公式の習得において，イメージの変容が観察された。また，イメージの内容に関しては，自己内省が深まり，ポジティブかつ適応的なイメージへと変容する傾向が観察された。この結果は，自律訓練法の効果のひとつとして挙げられる自己評価や自己強度の高まりを反映しているとも考えられる。今後はこのような側面についても同時測定を行い，相互関係を検討する必要があろう。

本研究では，イメージ構造の測定に PAC 分析を採用した。本手法は，自律訓練法の習得に伴う効果の測定に有用な手法として，今後さらなる活用が期待されると思われる。

今後はさらなる事例研究を蓄積するとともに，統制群との比較や量的分析を行う必要があろう。

【引用文献】

松岡洋一・松岡素子 (1999). 自律訓練法　日本評論社
内藤哲雄 (2004). PAC 分析実施表入門[改訂版]　ナカニシヤ出版

（まさもと　かおり・はせ　あやこ・はやし　みきや）

動的家族画(KFD)にみられるきょうだい数と学校適応感との関連について

○橋　本　秀　美
（追手門学院大学 心理学部）

三　島　浩　路
（中部大学　現代教育学部）

キーワード：動的家族画，学校適応感，きょうだい数

＜問　題＞

これまでの研究や臨床的な知見により，実際のきょうだいのうちの誰かを動的家族画（以下，KFD）に描かない場合には，そのきょうだいに対する葛藤や否定的な感情などがあると推察される。また，動的学校画（以下，KSD）における友人についても，人物が描かれないことが，社会的な相互作用からの逃避を意味するという指摘がある（Sarbaugh，1982）こうしたことから，KFDに描かれたきょうだい数や，KSDに描かれた友だちの数は，描画者の社会的適応に関連すると考えられる。

本研究では，KFDに描かれたきょうだい数と実際のきょうだい数の違いに着目し，実際のきょうだい数とは異なる数のきょうだいをKFDに描いた中学生の学校生活に対する適応感について検討する。

＜方　法＞

対象：A県内の２つの中学校の２年生（男子127名・女子98名）と，３年生（男子95名・女子88名・不明３名）の合計411名を対象に調査を実施した。なお，欠損値があったものは分析から除外したため，分析に用いたのは367名のデータである。

調査時期：2008年10月

調査の方法：担任教師の指示のもと，学級単位の集団面接法でKFD・KSDの描画，および質問紙への回答を生徒は行った。調査は匿名で実施したが，のちほど担任教師から実際のきょうだい数に関する情報を得て，その情報との対応付けを行うために，出席番号を２種類の描画および質問紙に記入させた。

質問紙の構成：小学校高学年用に開発された「階層型学級適応感尺度」（三島，2006）をもとにして，中学生用に表現を一部改めたものを使用した。具体的には以下の３つの指標についての調査を行った。なお，一つの指標についてそれぞれ３つの質問を行い，質問の回答（５件法）の平均値を尺度得点として利用した。①総合的適応感覚（例：学校に来るのは楽しい），②友人関係（例：困ったことがあったら，友だちに相談する），③学習適応（例：授業中，先生の話をよく聞いている）

きょうだい数による群分け：KFDに描かれたきょうだい数と実際のきょうだい数を比較し，実際のきょうだい数の方がKFDに描かれたきょうだい数よりも多い場合を「実際の方が多い群」，実際のきょうだい数とKFDに描かれたきょうだい数とが同じ場合を「実数と一致群」，実施のきょうだい数よりもKFDに描かれたきょうだい数の方が多い場合を「描画の方が多い群」として３群化した。

＜結　果＞

■ KFDに描かれたきょうだい数と実数

KFDに描かれたきょうだい数と実際のきょうだい数の相関係数を求めた。その結果，KFDに描かれたきょうだい数と実際のきょうだい数との間には有意な相関がみられた（r=.65，p<.001）。KFDに描かれたきょうだい数は，おおむね実際のきょうだい数を反映したものと考えられる。

■きょうだい数と学校適応感

KFDに描かれたきょうだい数と実際のきょうだい数とのちがいをもとにして３群化した群ごとの学校適応感尺度得点の平均値と標準偏差をそれぞれ求め，１要因３水準の分散分析を行った**(Table1)**。

総合的適応感覚：分散分析を行った結果，３つの群の平均値の間に有意なちがいがみられた（$F(2,364)$=3.38，p<.05）。多重比較（*Tukey*のHSD）を行った結果，「実数と一致群」に比べて「実際の方が多い群」は，総合的適応感覚の尺度得点が有意に低い値であった（p<.05）。こうした結果が得られたことから，実際のきょうだいよりも少ない人数をKFDに描いた生徒は，実際のきょうだいと同じ数のきょうだいをKFDに描いた生徒に比べて，学校生活の中に楽しさをみい出しにくいと考えられる。

友人関係：分散分析を行った結果，３つの群の平均値に有意なちがいはみられず（$F(2,364)$=0.69，*n.s.*），KFDに描かれたきょうだい数と実際のきょうだい数とのちがいにより，友人関係に関連する適応感に大きなちがいはみられないと考えられる。

学習適応：分散分析を行った結果，３つの群の平均値の間に有意なちがいがみられた（$F(2,364)$=4.42，p<.05）。多重比較を行った結果，「実数と一致群」に比べて「実際の方が多い群」は，学習適応に関する尺度得点が有意に低い値であった（p<.01）。こうした結果が得られたことから，実際のきょうだいよりも少ない人数をKFDに描いた生徒は，実際のきょうだいと同じ数のきょうだいをKFDに描いた生徒に比べて，学習活動に関連した適応感が低いと考えられる。

Table1　描画中のきょうだい数と実数の差による適応感尺度得点の平均・標準偏差

きょうだ数	人数	学校適応感		
		総合的適応感覚	友人関係	学習適応
実際の方が多い	73	2.72 (0.81)	3.11 (0.89)	2.69 (0.99)
実数と一致	282	3.02 (0.89)	3.21 (0.79)	2.99 (0.70)
描画の方が多い	12	2.92 (1.08)	3.36 (0.80)	2.86 (0.82)
全　体	367	2.95 (0.89)	3.20 (0.81)	2.92 (0.78)

( ):S.D.

(HASHIMOTO Hidemi, MISHIMA Kouji)

認知症理解についての一考察

林　　潔
（白梅学園短期大学）

（認知症　在宅介護　行動理解）

【目的】

認知症者は2010年には208万人になると予測されている。

在宅介護重視の現在,直接の介護者と合わせて周囲の人々も認知症患者とかかわりを持つことになる。そしてそのかかわり方も認知症者の状態,症状に対して影響を与える。

認知症の症状あるいは対応について,一般にどのような理解がなされているのであろうか。そしてどのような事柄が加齢心理学・加齢教育の内容として必要であろうか。

このことについての示唆を得るために,認知症理解の尺度による調査を試みた。

【方法】

認知症理解についての尺度を，首都圏の２大学，１専門学校の学生男女123人に実施した(2009年５月)。

認知症理解の尺度は42項目からなる３肢選択の質問紙である。選択肢は正しい，誤，不明であって正答のみを得点（１点）とする。なお妥当性検討は概念的妥当性による。信頼性検討は折半法による（r=.702 p<.01)。

【結果】

各項目の結果は，以下の通りである。

この結果約半数の20項目が，誤答，不明の合計が正答を上回わった。また不明の回答が，正答あるいは誤答と同数かそれを上回るものは，8.赤ワインは，アルツハイマー型認知症の危険を減らす効果がある，9.認知症の人は，自分が消えてしまうように感じている，17.認知症の人は周りがどんどん飛んでいくようで怖い，36.認知症の人は自分の味方になってくれそうな人を探す，38.認知症の人は，分かってくれそうな人に出会うと自分を取り戻すの５項目であった。

	正	誤	不		正	誤	不		正	誤	不
1	82	24	17	15	74	15	34	29	75	30	18
2	80	26	17	16	17	58	48	30	57	44	22
3	96	11	16	17	30	41	52	31	44	45	34
4	50	37	36	18	77	21	25	32	50	43	30
5	93	17	13	19	84	19	20	33	66	27	30
6	68	17	43	20	37	58	28	34	49	30	44
7	26	52	45	21	59	29	35	35	28	57	38
8	32	32	59	22	92	10	21	36	45	33	45
9	35	39	49	23	60	26	37	37	60	25	38
10	65	30	28	24	44	44	35	38	24	50	49
11	84	8	31	25	57	34	32	39	66	20	37
12	64	45	14	26	41	57	25	40	82	20	21
13	83	24	16	27	35	48	40	41	112	2	9
14	89	15	19	28	42	45	36	42	63	19	41

varimax法による因子分析の結果，５因子が抽出された。第Ⅰ因子は基本的知覚・認知の因子，第Ⅱ因子は分離感の因子，第Ⅲ因子は行動障害の因子，第Ⅳ因子は順応行動の因子，第Ⅴ因子は予防と自己ペースの因子である（固有値6.772，2.424，2.251，2.018，1.973)。

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
1	34	-13	30	-15	-06	22	-17	28	35	22	-42
2	21	13	08	65	11	23	59	35	-03	-14	-11
3	-08	08	06	73	01	24	58	47	-03	-16	-05
4	27	03	17	14	-00	25	39	36	31	-33	-09
5	35	06	13	-12	-27	26	44	23	04	-02	05
6	13	-19	41	-03	16	27	22	25	40	11	09
7	60	-09	11	18	09	28	29	30	24	22	-15
8	24	02	16	-06	63	29	02	-04	63	07	28
9	58	01	27	02	12	30	06	03	68	21	21
10	52	-00	12	-06	02	31	08	55	42	08	16
11	44	12	10	13	-04	32	21	66	04	05	13
12	3	14	16	-00	38	33	05	62	-14	-00	15
13	22	02	49	-09	-01	34	03	70	-03	14	03
14	25	-06	34	34	-32	35	-04	14	13	21	52
15	06	10	19	-32	30	36	34	39	00	-10	27
16	55	01	06	22	35	37	47	17	09	-01	-01
17	62	0	13	13	31	38	04	30	12	01	64
18	42	07	21	32	31	39	44	08	-27	19	17
19	11	26	35	08	04	40	29	-13	45	-02	03
20	-03	28	45	-01	02	41	10	08	24	27	09
21	-02	28	26	-36	15	42	27	01	25	-20	-13

【考察】

正答よりも誤答・不明の合計が上回った項目はほぼ半数である。これは，基本的知覚の因子，予防と自己ペースの因子に関する項目が多かった。

認知症の場合その水準に応じて認知構造,行動基準が健常者と大きく相異する。もし通常の行動様式とは異なる行動を故意ととらえると,困難な状況にさらに附加的な葛藤の準備状態を形成することになる。また人は理解が困難であるととらえた対象に対して不安を感じる。その結果放任や，過剰反応がもたらされる。ここに周囲の人々に対する加齢心理学に基づく加齢教育が要求される。

また二者関係の行き詰まりを打開するものが三者関係である（松村,1961)。高齢者と介護者との関係調整のサポート源の認知は，特に介護者にとってストレスの緩衝効果をもたらす。介護ストレスに対する介護専門家の果たす直接的,緩衝的機能役割がある。

【引用文献】　松村康平 1961　心理劇　誠信書房

「ありがとう療法」の試み

― 夫婦関係修復における事例検討 ―

木村　たき子
（日本子ども家庭総合研究所）

キーワード：ありがとう・コンピタンス・メール活用

【はじめに】

“ありがとう”という言葉は世界中で使われている言葉であり、それぞれがそれぞれの場面で感謝の気持ちを表すときに使っている。そして、その言葉は、魔法の言葉と言われ、さまざまな本やグッズさえも販売されているし、重要性も指摘されている。

勝俣（2007年）は、“ありがとう”を1日に20回以上周りに言うことにより、コンピタンス心理学的にみると情緒安定の3A（愛情 affection,受容 Acceptance,承認 approval）の要求を充足する効果があることをうつ病患者に試行し効果を確認している。また、木村（2009年）も母子関係に悩みをもつ親子に「ありがとうごっこあそび（Role play）」を通して“ありがとう”を家庭の中で言い合うことで関係修復に効果があったことを確認している。

今回、夫婦関係修復にむけて“ありがとう療法”を行うことで、関係修復にどのような変化があったかを検討する。

【事例の概要】

クライエント：Y男（40歳）　アルバイト学生
家族　　：妻（33歳　）　子（3歳）
近くにY男の両親が住んでいる。妻は子を連れて時々訪問。経済的援助あり。
主訴　　：妻が苦情ばかりいう。精神的不安があるように感じる。自分には時間がない

【面接過程】

#1～3回（○年9月　2週に1回、50分面接）
－問題所在の確認時期－
クライエントは、仕事（アルバイト）・夜間学生・夫・父親と日々忙しい。仕事も学校もない日も、長男として地域活動に参加しなければならないので、妻と会話をする時間もない。そのせいか、妻は苦情ばかり言う。最近は「離婚したほうがいいのではないか」とまで言うようになった。
今のような状況（アルバイト学生）がずっと続くのではないことを妻は知っているはずなのに、精神的におかしいのではないか？と訴える。
クライエントは子育てに協力できないでいる自分を責めたりもし、どのようにして時間を作ったり、精神的不安定な妻の気持ちにこたえていったらよいのかわからないとも言う。
カウンセラーは、クライエントが訴える妻の精神的不安は、実はクライエント自身の不安ではないかということに気がつく。そして、その不安が夫婦間で話し合うことや真剣に向き合うことをさけているようにも感じた。
#4～7回（週1回、50分面接）
－“ありがとう”交換日記の活用時期－
クライエントが「時間がない」「妻の精神状態が不安定」と言うところに焦点をあて、要因を見出しながら、“ありがとう”を妻にいうことを提案する。
しかし、「恥ずかしくて、今さら言えない」というので、＜交換日記（小さいノート）で、“ありがとう”の文字を入れたものを毎日送り続けること。書いたら妻に渡す。妻にも書いてもらう。この交換日記であれば、通勤の電車の中でも書くことができるはずであるので、継続してもらうことにした。
その結果、「最初のうちは、照れくさかったが“ありがとう”と書くことができてきた自分をほめてやりたくなった」
「“ありがとう”と書いているうちに、以前より言葉でも“ありがとう”を言えるようになった」という。
カウンセラーはさらに＜お弁当おいしかったよ“ありがとう”。子育てしてくれて“ありがとう”と短い文でも継続して書いてみること＞を提案する。
#8～9回（週1回50分面談）
－“ありがとう交換日記惰性期－
クライエントから「最近の交換日記は妻からの文句や要求ばかりになり“ありがとう”と書きたくなくなる。どうしたらよいか」と言われる。カウンセラーは＜文句や要求は、ご助言“ありがとう”ございます。ご指摘“ありがとう”ございます。として返事をしてはどうか＞と提案。これは、“ありがとう”を丁寧に言ったり、嫌な気分の時ほど“ありがとう”をいう事により自身の効力感や有能感を高めるのに効果があるのである。
#10～12回（週1回50分面談）
－交換日記とメール活用－
交換日記も継続しながら、メールで“ありがとう”を送信することも提案する。電車の中では、メールのほうが活用しやすいこともありメールでの“ありがとう”効果は、妻の愚痴が減ってきたということである。
クライエント自身が、自分の気持ちの問題や夫婦間の問題をさけてきたことに、文字で表すことで確認したり“ありがとう”を相手に伝える事で気がつき、カウンセラーとの面談の中で整理ができたケースである。
今後も交換日記やメールでの“ありがとう”を継続することで、終結となった。

【結果と考察】

このケースは、夫婦間の問題把握能力の低下や精神的不安・将来への不安などが問題になっている。
それは、勝俣（2007年）のいう、人間のもつ5つのコンピタンスの中の認知的コンピタンス（能動的な情報収集や処理活動にかかわるコンピタンス）の低下や、社会的コンピタンス（自己開示性、友好性、協調性、社会的交流など）の低下、特に、情緒安定と自信の2つの構成成分からなっている総合的自己評価コンピタンスの低下が夫婦間の問題に結びつき理婚問題にまでいったと考えられる。
それが“ありがとう”とお互いが交換日記やメールで伝えあうことで、認知的コンピタンス、社会的コンピタンス、総合的自己評価コンピタンスが充足されてきたものと判断される。
カウンセリング最終におこなったコンピタンス尺度でも、第2回目に施行した時の結果よりも総合的自己評価コンピタンスの数値が高くなった結果を確認できた。今後は、さらにさまざまなケースにおいて“ありがとう”療法を試みたいと考えている。

きむらたきこ

対人恐怖心性とTEGの関連

○嶋田　佳織[1)]
([1)] 関西福祉科学大学大学院　社会福祉学研究科)
キーワード：対人恐怖心性、TEG、高校生

【研究の目的】東大式エゴグラム（TEG）は、CP（理想、良心、責任感、批判などの価値判断や道徳、倫理観などの父親的な厳しい部分）、NP（共感、思いやり、保護、受容などの子どもを養育する母親のような部分）、A（事実に基づいて物事を判断しようとする部分）、FC（親の影響を全く受けていない生まれながらの部分）、AC（人生早期に周囲の人たちの愛情を失わないように、子どもなりに身につけた処世術的な部分）の５つの自我の状態からパーソナリティを測定するものである（末永他,1993)。TEGは、クライエントの自我状態を、自己分析するのに非常に役立つ質問紙である。TEGと対人恐怖心性との関連が明らかになれば、対人恐怖のクライエントに対する有力な手掛かりが得られる。しかし、TEGと対人恐怖心性との関連を調べた研究は少なく、その結果も一貫していない。例えば、（新里,1992）は、対人恐怖症の者のTEGの多くに、ACが突出したタイプが多いことを報告している。しかし、（八木,2004）による対人不安尺度とTEGとの関係の調査では、対人不安とFCに正の相関、ACとの間に負の相関があるといった、異なる結果が報告されている。

また、多くの研究の対象者は大学生であり、対人恐怖の好発年齢である中高生の調査は少ない。以上のことから、本研究では高校生を対象とした対人恐怖心性と、TEGとの関連を明らかにすることによってTEGの有用性を検討したい。

【方法】調査者または代理の高校教員が、調査対象者の各自に配布し、記入後ただちに回収した。

【研究対象者】大阪府に在学の高校生（私立・公立の合計２校）224名（1年生男子72人・女子82人、3年生男子35人・女子22人）を対象とした。

【調査時期】2007年7月

【調査用紙】（１）**対人恐怖心性の測定には、**堀井・小川（1996）により作成された、対人恐怖心性尺度を用いた。この尺度は、①自分や他人が気になる悩み、②集団に溶け込めない悩み、③社会的場面で当惑する悩み、④目が気になる悩み、⑤自分を統制できない悩み、⑥生きることに疲れている悩み、以上６つの下位項目からなっており、それぞれ５つの質問で合計３０項目であった。

（２）自我状態の測定には、末松・野村・和田（1993）によって作成された、５つの自我の状態からパーソナリティを測定する東大式エゴグラム第２版（以下TEG）を用いた。項目数は、合計６０であった。

【結果】TEGの５尺度と、対人恐怖心性の６尺度との間でピアソンの相関係数を算出した。その結果をTable1に示した。

ACと①自分や他人が気になる悩み(r=.500)、②集団に溶け込めない悩み(r=.444)、③社会的場面で当惑する悩み(r=.501)、⑤自分を統制できない悩み(r=.410)との間に、有意な比較的強い正の相関がみられた。また、④目が気になる悩み(r=.358)、⑥生きることに疲れている悩み(r=.390)との間に、有意な弱い正の相関がみられた。

FCと②集団に溶け込めない悩み(r=-.527)、③社会的場面で当惑する悩み(r=-.541)、④目が気になる悩み(r=-.422)の３尺度との間で、有意な比較的強い負の相関がみられた。また、①自分や他人が気になる悩み(r=-.233)、⑤自分を統制できない悩み(r=-.272)⑥生きることに疲れている悩み(r=-.286)との間に、有意な弱い負の相関がみられた。

Table1　対人恐怖心性とTEGとの相関係数

対人恐怖心性	TEG				
	CP	NP	A	FC	AC
自分や他人が気になる悩み	.251**	-.172**	-.118	-.233**	.50**
集団に溶け込めない悩み	.127	-.359**	-.205**	-.527**	.444**
社会的場面で当惑する悩み	.039	-.354**	-.345**	-.541**	.501**
目が気になる悩み	.087	-.332**	-.208**	-.442**	.358**
自分を統制できない悩み	.115	-.186**	-.346**	-.272**	.41**
生きることに疲れている悩み	.282**	-.303**	-.158*	-.286**	.39**

※**=p<.01、*=<.05を表している。

NPと②集団に溶け込めない悩み(r=-.359)、③社会的場面で当惑する悩み(r=-.354)、④目が気になる悩み(r=-.332)、⑥生きることに疲れている悩み(r=-.303)との間で、有意な弱い負の相関がみられた。また、①自分や他人が気になる悩み(r=-.172)、⑤自分を統制できない悩み(r=-.186)の間で、有意な非常に弱い負の相関がみられた。

Aと②集団に溶け込めない悩み(r=-.205)、③社会的場面で当惑する悩み(r=-.345)、④目が気になる悩み(r=-.208)、⑤自分を統制できない悩み(r=-.346)の４尺度との間で、有意な弱い負の相関がみられた。また、①自分や他人が気になる悩み(r=.118)、⑥生きることに疲れている悩み(r=-.158)との間に、有意な非常に弱い負の相関がみられた。

TEGのCPと①自分や他人が気になる悩み(r=.251)、⑥生きることに疲れている悩み（r=.282）の間で、有意な弱い正の相関が見られた。

【考察】ACと対人恐怖心性尺度との間に強めの正の相関があり、FCとは強めの負の相関があったことは、八木（2004）の調査とは反対の結果であった。この結果の違いは、今回、高校生を調査対象とした為であるかもしれない。

【引用文献】新里里春　1992　交流分析療法―エゴグラムを中心に―　チーム医療

堀井俊章・小川捷之　1996　対人恐怖心性尺度の作成　上智大学心理学年報　第20巻、55－65

八木成和　2004　青年期の対人関係に関する研究（Ⅰ）―対人不安尺度とTEGとの関係について―　四天王寺国際仏教大学紀要　大学院第２号、57－68

（しまだかおり）

マズローの自己実現概念の再考

三島重顕
（九州国際大学経済学部）
キーワード：Maslow, self-actualization, the values of Being (the B-Values)

【研究背景】

マズロー（Maslow）の欲求階層性理論ないしその自己実現概念は、経営学を専攻するほぼすべての学生が学ぶ。また、最近では自己啓発本などでも自己実現という用語が頻繁に登場する。一般的に、それは仕事を通じて自分の能力を発揮し成長することといった解釈をされている。しかし、マズローの論文を時系列的に精読すると、上述の解釈は彼の概念全体を正確に反映したものでないことが明らかとなる。

【研究方法】

本研究は初歩的な学説史研究である。したがって、マズローが自己実現概念について言及した主要な論文に着目し、その概念の変遷を時系列的に精査していくという手法を採択した。そのうち本稿で取り上げるのは、1943年、1955年、1959年の論文である。自己実現概念に関するマズローの研究の進展が伴う変遷が見受けられたからである。以下の文章は、各年の概念の要点とその根拠となる原文である（紙面上、掲載する原文に限りがある。詳細は参考文献を参照）。

【概念の変遷】

1943年の概念

①自己実現の欲求は、最高次の基本的欲求である（"For instance, if I may assign arbitrary figures for the sake illustration, it is as if the average citizen is satisfied perhaps 85 per cent in his physiological needs, 70 per cent in his safety needs, 50 per cent in his love needs, 40 per cent in his self-esteem needs, and 10 per cent in his self-actualization needs"）。②自己実現の欲求は、通常、他の基本的欲求が十分に満たされてから生じる（"The clear emergence of these needs 〔＝self-actualization needs〈筆者注〉〕 usually rests upon prior satisfaction of the physiological needs, safety, love, and esteem needs"）。③自己実現の欲求は、個人が潜在的にもっているものを実現しようとする欲求である（"It 〔＝ the need for self-actualization〕 refers to the desire for self-fulfillment, namely, to the tendency for him to become actualized in what he is potentially."）。

1955年の概念

④成長欲求は、自己実現の欲求である（"Self-actualization, the coming to full development and actuality of the potentialities of the organism, is more akin to growth and maturation"）。⑤自己実現の欲求は、欠乏欲求と比較して長期的性格をもつ（"Growth motivation may be long-term in character. Most of the lifetime may be involved in becoming good psychologist or a good artist"）。⑥自己実現の欲求は、人間をより非利己的・問題中心的にならせる（"The more growth-motivated the person is the more problem-centered can he be, and the more he can leave self-consciousness behind him as he deals with the objective world"）。

1959年の概念

⑦自己実現の欲求とは、B価値を反映させて生きたいという欲求である（"Then 〔＝ when person do holistic perception of another human being 〕 and only then can we perceive its values rather than our own. These I call the values of Being, or for short, the B-values."）。⑧自己実現とは、B価値に基づいて生き続けることである。（"They 〔＝ self-actualizing people 〕 were clearly living a self-fulfilling, self-perfecting life, rather than seeking for the basic need gratification that the average citizen lacks, i.e., growth motivation rather than deficiency motivation.）。⑨自己実現は、非常に困難である（"Growth has not only rewards and pleasures but also many intrinsic pains and always will have." "It also often means giving up a simpler and easier and less effortful life, in exchange for a more demanding, more responsible, more difficult life. Growth forward is in spite of these loses"）。

【結論】

こうした変遷を考慮すれば、端的に言って、世間一般のマズローの自己実現概念の解釈は1943年の論文を中心としたものであり、1955年と1959年の概念がほとんど含まれていないと結論することができよう。

【参考文献】

Maslow, A. H. "A Theory of Human Motivation", *Psychological Review*. Vol.50, 1943. pp.370-379.
——. "Deficiency motivation and growth motivation", In M. R. Jones, *Nebraska Symposium on Motivation*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1955.
——. "Cognition of Being in the Peak Experiences", *Jour. Genetic Psychol.* Vol.94, 1959. pp.43-66.

（みしましげあき）

重さ知覚機構解明のための実験環境構築の試み

○川合　悟
（帝塚山大学心理福祉学部心理学科）
キーワード：Heaviness、視覚情報、触運動感覚情報、Virtual Reality、実験環境

【研究の目的】 物体を把持したときに知覚される重さ（Heaviness）は、重量だけでなく指先から得られる大きさ情報、質量分布や重心、把握面の滑り易さ、温度、視覚から得られる情報（大きさ、素材観、色）など、物体に起因する物理的要因（Sensory-based factor）、疲労などの生理的要因、さらに、被験者自身の期待、経験、合理的判断、実験者の教示など認知的要因（Cognitive-based factor）によって左右される。特に、重量、物体の大きさ、質量分布によって生じる力学的要因は、知覚される重さに対して強い影響力があり、かつ相互に影響し合っているため、他の要因の影響（特に視覚情報の影響）の解析を困難にしているのが現状である。そこで、物体の物理的要因の統制ツールとして、Virtual Reality を用いて視覚情報、Haptic 情報を独立に統制し共存させる実験環境（Augmented Environment, A 環境）の構築を試みた。本研究では、A 環境の妥当性を検討するため、①物体を操作時の力発揮特性および②知覚される重さについて、A 環境（図 1 左）と従来実施されてきた物理環境（図 1 右）で比較した。

【方法】 ①A 環境:物体の触運動感覚から得られる情報は、作業空間に置かれた把握物体（Physical Object）により制御し、その視覚情報は PC グラフィックス（Virtual Hand Lab System, Simon Fraser University）の立体映像を共存させることにより制御した。実験 1（図 1－a）では、被験者が操作する把握物体に力センサーが組み込まれ、持ち上げるときの力発揮特性と大きさ情報との関係が、２つの環境で比較された。実験２(図１－b)では、同じ質量（30g）で同じ大きさ（1 辺 3cm）の２つの立方体が作業空間に吊り下げられ、基準刺激（1 辺 5cm の立方体の映像）に対して知覚される重さと、比較刺激（一辺が 1～9cm に変化）に対して知覚される重さとの比較により、知覚される重さと大きさ情報との関係が、２つの環境で比較された。通常の物理環境では、Size-weight illusion (SWI、Charpentier 1891)が出現することが知られている。

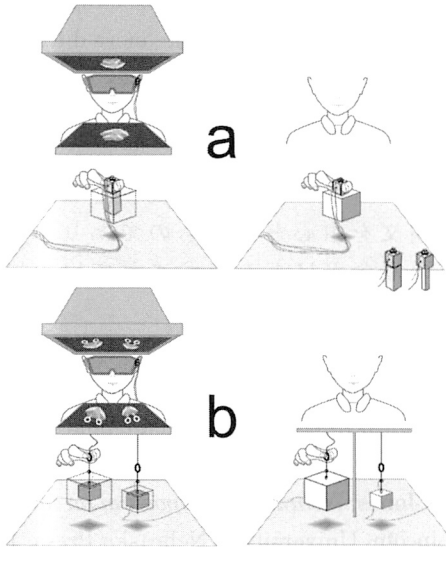


Fig. 1．A 環境（左）と従来の物理環境（右）

②被験者：実験 1 では 24 名の被験者が、実験 2 では 16 名の被験者が同意の上参加した。いずれも手指の運動機能および知覚機能、視覚機能には異常のない成人であった。

【結果】 **①実験環境に対する被験者の評価**：実験終了後、被験者に A 環境について評価を得た。その結果、映像で作り出された物体に対する立体感には違和感はなかったとの報告が大半であった。また、被験者の物体操作と映像の動きに対する遅延はほとんど認識されなかった。**②物体操作時の力発揮特性**：実験 1 において、指先および手首・前腕で発揮される力のプロフィールが、A 環境と物理環境で比較したが、類似した力発揮プロフィールが得られた。すなわち、物体把握時の指先に作用される力と手首・前腕で持ち上げに作用される力の発揮開始のタイミングはほぼ同期し、物体が持ち上がるといずれの力も安定した。また、より大きな物体を持ち上げたとき、この持ち上げ力（最大力・最大加速度）は小さい物体よりも大きくなった。**③知覚される重さへの影響**：いずれの実験においても、手指から得られる力学的情報は一定であったが、いずれの環境においても、視覚から得られる大きさによって影響を受けた。すなわち、より大きな物体が小さい物体よりも軽く感じられ、Size-weight illusion が経験された。特に、実験２では、大きさと重さとに組織的な関係があることが明らかになった。

【考察】 重さ知覚に関する研究は 120 年に及ぶが、重さ知覚機構に関しては依然として不明な点が多い。その背景には上述した様々な要因の複雑な絡み合いがあり、実験統制に苦慮したためと考えられる。本研究結果から、コンピューターグラフィックスを用いて視覚情報を他の要因と独立させる手法は、被験者の物体操作戦略を変化させることなく課題を遂行させることができるので、重さ知覚機構解明に有用であると考えられた。

謝辞
本研究は、文部省科学研究費補助金（平成 11～12 年度基礎研究 C116867、平成 18～19 年度基盤研究 C185209）、NSCIR(MacKenzie CL, Simon Fraser University,)、帝塚山学園学術研究補助金（平成 19、20 年度）の補助を得た。

【引用文献】

Kawai S, Summers VA, MacKenzie CL, Ivens CJ, Yamamoto T (2002), Grasping an augmented object to analyze manipulative force control, Ergonomics, 45:1091-1102.

Kawai S, Kuang, AB, Henigman F, MacKenzie CL, Faust PH (2007), Reexamination of the size-weight illusion induced by visual size cues, Experimental Brain Research, 179: 443-456.

（かわい　さとる）

McGregor リーダーシップ論の初期的形成に関する覚書

村田　晋也
(九州大学大学院経済学府博士後期課程)
キーワード：McGregor、Maslow、リーダーシップ論、自己実現、部下の安心感

【1. 1960年；自己実現への援助者】 企業組織におけるリーダーシップの在り方として、行動科学者 D. M. McGregor は、組織と個人の統合という視点からY理論を提起したことはよく知られている。彼は 1960 年著作 *The Human Side of Enterprise* の中で、部下に対し上司に求められる役割が何であるかを提示した。すなわち、上司は部下の仕事に対する能動性や、仕事を通じての「自己実現(self-fulfillment; self-actualization)」(p.39; p.61)を可能とするための「援助の真なる拠所(as a genuine source of help)」(p.66)となる必要があるとするものとした。すなわち、上司は時間をかけて部下を見守り、褒め、自尊心を刺激し、信頼することによって、部下が「自分自身の潜在能力を発揮(realizing one's own potentialities)」(p.39)し、職責と真正面から取り組むような自主性を育む必要があるとする考え方である。この事例としては、1960 年著作・第 5 章に見られる上司 Evans と部下 Harrison のやりとりが有名である。しかし、これと同様の論旨は、当該著作が公表される 16 年前に彼自身によって主張されていたことはあまり知られていない。

【2. 1944年；部下の安心感醸成】 1935 年、彼は博士論文 "The Sensitivity of the Eye to the Saturation of Colors." を提出する(彼は色盲であった)。しかしその後、労使関係の研究者 I. Knickerbocker との共同論文を発表するなどして、彼の研究関心は経営学、とくに第一線監督者のリーダーシップ論へ向かっていく。"Conditions of Effective Leadership in the Industrial Organization"(1944)、"The Foreman's Responsibilities in the Industrial Organization"(1946)、"The Nature and Use of Authority"(1946)、"The Supervisor's Job"(1948)、等がその所産である。ここでは、初期 McGregor の 1944 年論文に注目し、彼のリーダーシップ論の核心を示そう。

McGregor によれば、企業組織内を観察すると、従業員は様々な人間関係によって、欲求充足が可能であったり、阻害されたりしており、とりわけ上司との関係がその主なものとして作用しているとする。部下が上司から自己の存在を認められ、自分が上司によって、「支えて(back up)」(p.59)もらっていると感じるならば、部下は自分の仕事をうまくやれると確信するに至るとする。しかし、そのような上司 - 部下関係がうまく得られなければ、部下は「不安感(insecurity)」(p.59.)に駆られ、上司から自分の存在が承認されていないとして反抗的な態度を表出させるとする。これを言い換えるなら、「部下は、上役との関係において、真の安心感が適度に満たされるのであれば、自分自身の能力や技能を十分に用いる方法…を探求し始めるのであり(When the subordinate has achieved a reasonable degree of genuine security in his relationship to his superiors, he will begin to seek ways of utilizing more fully his capacities and skills…)」(p.60)、「部下は、自分自身の潜在能力を現実化させうる(the subordinate can realize his own potentialities)」(p.63.)という Maslow の初期概念の援用というべき「自己実現(self-realization)」(p.62)が充足されるものとした。

ところで、McGregor によれば、このような上司－部下関係は、親子関係と大いに類似しているとし、その参照文献として、J. Levy と R. Munroe の共著 *The Happy Family*(1941)や、A. H. Maslow と B. Mittelmann の共著 *Abnormal Psychology*(1941)等を挙げている。以下では、McGregor の考え方に大きな影響を与えた心理学者である Maslow の当該著作(1941 年版；第 15・16 章)に焦点を当てる。

【3. 1941年；Maslowの親子関係論】 Maslow らによれば、子供は「両親からの愛情、支援(help)、評価、援助(support)、賞賛」(p.237)を得たいという欲求を明らかに有しており、そのため、これらを充足せんとする行動を繰り返すという。しかし、不幸にもそれが叶わない子供、例えば、両親から拒絶されている子供もいる。このような子供は、自己の欲求を充足させることができず、それが故、幾つもの問題(反抗、敵意、癇癪、盗癖等々)が表出してくるとする。

逆に子供が余計な不安に曝されることなく、親から積極的な評価が与えられているならば、それは子供自身の自己評価に反映されてくることが観察されるとする。例えば、Wilson (p.262)は、社会的・経済的にも満たされた家族の中で、親からの愛情を十分に受け、安心を享受している。彼はフットボールが好きで、女児の友達もおり、時にダンスも楽しんでいる。親は必要であれば家庭教師を雇い、彼を勇気づけている。学業はいま一つであるが、「両親はその男児の持つ潜在能力を最大限に活かそうと企図し(These parents, it seems to me, are attempting to make the most of this boy's potentialities,)」、「賢明な助言や励ましを十分に与えている」(p.263.)という事例である。つまり、Maslow は、「子供は年長者を尊重するようにとは教えられるが、年長者もまた子供を尊重するようにとは教えられていない」(p.253)とし、しかしながら、親は子供の欲求を考慮に入れ、「援助者(helper)」(p.254)としての役割を果たす必要があり、それにより、子供の自立が促されるとしたのである(そうしない場合、子供は「自己表現」(p.255)の面で問題を抱えるとされる)。つまり、Maslow の親子関係概念の論点は、親が子供に十分な「安心感(feeling of security)」(p.267)を抱かせることで、子供の「自立(independence)」を育むことができる、としたのである。

【4. 残された課題】 McGregor が 1960 年著作において提示したリーダーシップ論は、既に 1940 年代前半においてその原型が示されており、しかもその核心部は、当時における Maslow の欲求論および親子関係論の影響下にあったことが明らかにされた。しかし、そのような McGregor リーダーシップ論について、次のような検討課題が残されている。まず、自己実現に関する McGregor による Maslow 概念の摘み喰い的な援用についてである。Maslow 概念は 1944 年と 1960 年とでは相異していることの認識が McGregor には見られない。次に、親子関係を上司 - 部下関係へ適用することについて、親子関係がしばしば個人対個人の様相を呈するところから一定の妥当性を有するとはいえ、その限界を忘れてはならない。加えて、1980 年代から行われているメントール - プロテジェ(mentor-protégé)関係による企業内教育制度との異同についての検討も残される。(むらた しんや)

心理学研究における偏見とスティグマとステレオタイプの用語の棲み分け 米国心理学会のPsychNetによる分析

伊藤　武彦（和光大学）　　飯田 敏晴（明治学院大学大学院）

キーワード：偏見・スティグマ・ステレオタイプ

【目的】スティグマ研究が心理学関連分野で、どのように研究されているかを、米国心理学会(APA)のデータベースであるPsycNETを検索し、偏見、差別、ステレオタイプなどの研究の特徴およびキーワードとの包摂関係を見ることが本研究の目的である。

【方法】米国心理学会のデータベースであるPsycNETを2008年9月4日にキーワード検索した。論文の発表年代は1900年から2007年までとした。論文および学位論文や専門書も対象とした。

【結果】「スティグマ」をキーワードとして検索した場合で5,171件の文献が出た。Index Termで見ると、Stigma (2,337)が検索語のトップとなったのは当然の結果である。実質的な内容として多いのは、Mental Disorders (708)、Mental Illness (Attitudes Toward) (379)、Mental Health Services (287)、Schizophrenia (269)、Human Females (266)、Mental Health (236)、Major Depression (227)などの精神障害関係である。その次ぎに、HIV (567)・AIDS (432)の数が多い。論文などの分野では、精神障害関係とエイズ関係の研究がスティグマ研究の2大分野であるといえる。

「偏見」は6000件検索された。Index Termの多い順に、Prejudice (2,824)は当然として、Racial and Ethnic Attitudes (750),Stereotyped Attitudes (605)、Blacks (591)、Whites (439)、Racism (426)、Intergroup Dynamics (275)、Racial and Ethnic Differences (249)、Social Discrimination (246)、Homosexuality (Attitudes Toward) (241)が上位10語であった。人種問題が多く、次に同性愛問題が出ていた。

「ステレオタイプ」は全部で3,610件あった。上位のIndex Termは、はStereotyped Attitudes (1,741)は当然としてHuman Sex Differences (443)、Social Perception (311)、Sex Role Attitudes (302)、Human Females (251)、Stereotyped Behavior (215)、Sex Roles (210)Blacks (198)、Racial and Ethnic Attitudes (159)、Personality Traits (153)であった。性とジェンダーが第一位に来た。次に黒人と人種問題がトピックであった。

掲載雑誌名も勘案してまとめてみると、スティグマ研究は精神障害とエイズの医学研究が多く、偏見研究は人種問題と同性愛などの社会心理学研究が多く、ステレオタイプ研究は性・ジェンダーと黒人・人種問題の社会心理学研究が多い傾向にあった。またこれら3分野は図のようにいずれの単語も共起は10%以下と重なりが少なく、用語の棲み分けが行われていることが明らかとなった。

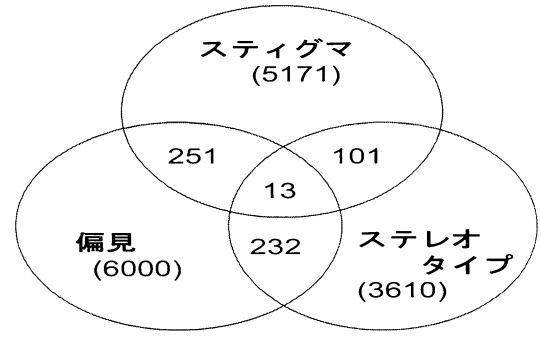


図１　AND検索した場合のヒット数

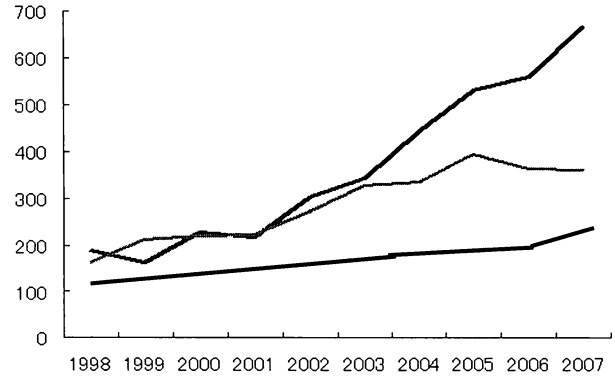


図２　上よりスティグマ・偏見・ステレオタイプの年ごとの推移

【考察】　ここ10年間の件数の推移より、スティグマ研究の増加が顕著である。今後、心理学分野におけるスティグマ研究は興隆するであろう。

その際、スティグマ研究は、従来の社会心理学研究の延長にあると言うよりも、精神障害やエイズやてんかんなど、医療分野で学際的に協働して進めていく方向が示唆された。

日本においては、伊藤（未発表）の医中誌の検索結果の研究がある。スティグマ研究は2004年より盛んになっていること、偏見研究の方がかなり多いこと等が明らかにされている。

2002年の出来事として、①「精神分裂病」を「統合失調症」と改名、②『心の扉を開く』出版、③WPA世界大会（神戸）の開催という精神医学分野での出来事があり、偏見とスティグマを克服する機運とその研究活動がが広がって来ているといえる。

エイズ研究でも感染予防にかかわる研究とともに、スティグマ・偏見・差別を低減するための研究活動が今後期待される。

（いとう　たけひこ・いいだ　としはる）

看護業務における残業時間とCFSI応答パターン

越河　六郎　　藤井　亀
（松蔭大学）　　（芝浦工業大学）
キーワード：看護　労働時間　残業　疲労自覚症状

職務の性格がからんで、看護職の勤務は残業時間を含むことが多い。規定の勤務終了時刻がきても、患者のケア・処置などが継続しているときは、すぐさま作業を中断するわけにはいかないし、また、看護記録や後片づけなども残業の形でなされることがよくある。その様子を調べた調査資料から、残業時間の長さと疲労自覚症状との関係をとらえた。

調査：岡山県看護協会（看護師職能委員会）の委託で実施したCFSI（蓄積的疲労徴候ｲﾝﾃﾞｯｸｽ）への応答結果を分析した。CFSIは、職場での仕事や生活場面における「負荷」の様子を、心身違和感等、自覚される症状から探る「疲労感評定尺度」の一つとして開発したものである。調査票は、「勤務と生活と健康に関する質問」を用いた。質問は,心身の症状・状態に関する81の項目からなっている。一定の時点での自覚症状ではなく何日間か停滞しているような症状・違和感の有無を答えてもらっている。対象者の基本事項としては生活時間（就床、起床時刻）、および調査期日の前月１ヶ月間の「残業時間」の記述を求めた。CFSI、81項目は、８特性項目群に分類されており、これらの特性について、一定の「集団」別の「平均訴え率」を算出し、それらにもとづいてレーダーチャート上に「パターン（模様）」を描き応答結果の「判定」を行う方式をとっている。

特性項目群は、F1「気力の減退」９項目、F2-1「一般的疲労感」10項目、F2-2「身体不調」７項目、F3「イライラの状態」７項目、F4「労働意欲の低下」13項目、F5-1「不安感」11項目、F5-2「抑うつ感」９項目、F6「慢性疲労徴候」８項目。計７４項目を用いている

結果：調査対象は岡山県内の大学附属病院、民間総合病院の看護職者である。病院の規模別に有効回答例数をあげると。A(500床以上)5病院2545例、B（200～500床未満）6病院846例、C(200床未満)4病院244例、合計3645例である。これらのうち、女性看護師（2772例）について結果を分析した。

１ヶ月間の残業時間の長さとCFSI応答パターンとの関係を調べた。結果は以下のとおりである。

１）「残業無し」　N=184　判定「Ⅲ—０」　不安感と気力減退がそれぞれ基準70ﾊﾟｰｾﾝﾀｲﾙ値に触れるが、「Ⅲ」の判定段階で安定している。

２）「10時間未満」　N=1035　判定「Ⅳ—０」「Ⅳ」の段階の応答であるが、パターンの歪は少ない。

３）「10時間～２０時間」　N=599　判定「Ⅳ—F6、F1, F5-1」、看護師全体（N=2772）の平均パターンに近い。

４）「２０～30時間」N=420　判定「Ⅳ—F6、F1、F5—1、f5－2」「Ⅴ」の段階に近い。抑うつ感が70ﾊﾟｰｾﾝﾀｲﾙ値をはっきりと超えている。

５）「30～40時間」N=208　判定「V-F6,F1,F5-1,ｆ５－２」「V」の段階となる。

6)「40～50時間」N=74　判定「Ⅳ—F6,F1,F5-1、F5－2」「Ⅳ」の段階としたが、F6(忙しさ)の平均訴え率は66.7%を示している。抑うつ感が目立つ。

7)「50～60時間」N=68　判定「Ⅴ—F6、F1,F5-1、f5－2」「Ⅴ」の段階である。基準70ﾊﾟｰｾﾝﾀｲﾙ値を超える。

8)「60～70時間」N=23　判定「Ⅴ—A」、8特性すべて基準の70ﾊﾟｰｾﾝﾀｲﾙ値を大きく超えている。

9)「70時間以上」N=28　判定「Ⅴ－F6,F5-1,F5-2,F3,F2-2」例数は少ないが、「Ⅴ—A」と大差ない応答である。

CFSI特性について、基準の70ﾊﾟｰｾﾝﾀｲﾙ値を目安に、１ヶ月の残業時間との関連調べた。

1)　F1(気力の減退)「10時間未満」の段階で基準値を超えている。この特性への訴えは、勤務時間の長さだけでなく、職務の忙しさなどもからむことがある。

2)　F2－1(一般的疲労感)「10～20時間」の段階から基準値を超える訴え率である。

3)　F2-2(身体不調)「10時間」の段階で基準値の70ﾊﾟｰｾﾝﾀｲﾙ値を上回っている。

4)　F3(イライラの状態)　残業「20～30時間」辺りから基準値を超えている。

5)　F4(労働意欲の低下)　では「20～30時間」の段階で基準値と交差して訴え率を高めている。

6)F5-1(不安感)は,職務の難しさや、仕事の進捗状況を反映するものと解釈しているが、「残業なし」の段階でも、すでに基準値を超える高い訴え率である。

7)　F5-2(抑うつ感)　CFSIでは、この特性への平均訴え率が70ﾊﾟｰｾﾝﾀｲﾙ値を超えるかどうかで、メンタルな負荷の度合いを評価するときの決め手としているが、残業「20～30時間」の段階で基準値を超えている。

8)(慢性疲労徴候・忙しさ)「10時間未満」の段階で70ﾊﾟｰｾﾝﾀｲﾙ値を上回り、「20～30時間」の段階になると、平均訴え率は60%を超えている。

考察：CFSIは、本来、回答者が所属している実際の職場・部署単位で用いる集団スケールであって、看護師の職場を調査しようとすれば、有機的なまとまりである「病棟」という単位を崩さないで結果が扱われること、これが前提である。部署別集団の規模はおおよそ20～30名辺りで括ると、当該職場の状況がかなり良くとらえることができる。

本報告は、１ヶ月間の「残業時間の長さ」についての自己申告（回答）に合わせて、CFSIの応答を分析した結果の一部であるが、職場の状況（改善を要する問題点の有無等）をすべて明かにしようとしているわけではない。しかし、同様の方法で、他の事業所（製造業、金融業他）を対象にした調査資料によると、CFSIの応答傾向は、１ヶ月間の残業が４０時間を超えるあたりから、かなりはっきり変容するということがわかっている。このことからすれば、残業時間の多い,少ないだけでは職場の「事情」は捉え切れないとしつつも、看護・ケアという職務の性質を究明するときの有効な手がかりは得られたと考えている。

要約：残業時間(１ヶ月)の長さと、CFSI応答傾向との関係を分析した。看護師の場合、残業「20～30時間」の段階で、CFSI訴え率上の「屈折点」があると認められた。

（こすごう ろくろう　ふじい ひさし）

看護学生がイメージする患者の日常生活動作と危険

○西土泉　所ミヨ子　宮﨑素子　今野葉月　蒲生澄美子　関口恵子　佐野　薫
（埼玉医科大学短期大学　看護学科）

キーワード：イメージ　日常生活動作　危険察知

Ⅰ．はじめに：筆者らは、平成 20 年度に学生の事故の危険察知（知識）と事故防止の行動（技術・態度）の現状を調査した。その結果、事故の原因が明確になり、患者との関わり（知識・体験）が増えることによって、事故の危険察知の内容や事故防止行動が具体的にイメージできるようになることが分かった。このことから、臨地実習前のトレーニングで患者の日常生活動作がイメージでき、その動作に伴う危険察知ができれば実習時に事故を予防する行動がとれるのではないかと考えた。そこで今回は、患者の状態に応じた日常生活動作の 1 場面をとりあげ、学生がどの程度患者の動作を分析的にイメージし、その動作に伴う危険をどの程度察知できるかを調査した。その結果、学生は患者の動作を大づかみにしかとらえることができていないことが明らかになったので報告する。

Ⅱ．研究方法：1.対象；倫理的配慮を行い口頭と紙面で同意が得られたA短期大学1年次生6名、2年次生6名。**2.研究期間；**平成 21 年 5 月～6 月 **3.調査方法；**1）患者（左完全麻痺）の日常生活行動作の1つである車椅子で洗面所へ行く場面をとりあげ患者の動作と動作に伴う危険がみられる VTR を作成する。2）自作の質問紙を用い患者の日常生活動作と動作に伴う危険の内容について半構成的面接を行う。①患者の日常生活行動の 1 場面をとりあげ、学生が患者の動作をどのようにイメージしているのかインタビューする②①の動作に伴う危険を学生がどのくらい察知しているかインタビューする 3）VTRを視聴する 4）2）①、②とVTRに示したものを学生、教員とで比較する。**4.分析方法；**1）学生は患者の動作を事前にどの程度イメージしているかを分析する（VTR に示した患者の動作と学生のイメージの内容を比較する）。2）学生は患者の動作に伴う危険を事前にどのくらい予測できたか分析する（VTRに示した患者の動作に伴う危険の内容と学生の察知した内容を比較する）。

Ⅲ．結果・考察：1．患者の日常生活動作のイメージの内容（表1）；患者の日常生活動作で最もイメージできたものは「⑤右手でベッド柵を掴み、右膝を立てて、右側に身体を傾けながら起き上がる」であった。これは 1 年次生、2 年次生ともに最もイメージできた。次いで多かった動作の内容は「⑮車椅子に乗る」であった。これは、1 年次生が 2 年次生よりイメージできていたが 2 年次生は、麻痺側を配慮して細かくイメージしていた。次いで多かった内容は「⑯看護師の援助を受けて、洗面所へ移動する」であり 1、2 年次生ともにイメージできていた。次に、全くイメージができなかった動作は「②③⑥⑩麻痺側の上下肢がどのような動きになるか」、「⑨⑫⑯健側で麻痺側を動かす動作」であった。これらのことから、学生は片麻痺の患者が車椅子へ移乗する時に「ベッドから起き上がる」、「車椅子に移動し座る」、「車椅子で移動する」のように大きな動作はイメージできる。しかし、その動作に至るまでの細かい動作はイメージできていない。さらに、1、2 年次生ともにイメージの傾向は同様であるが、「⑦ベッドサイドに足をおろす」、「⑮車椅子に落ちるように座る」などのように麻痺側を配慮したイメージができている。

表1　患者の日常生活動作（車椅子移乗時）のイメージの内容　（人数）

患者の動作	学生のイメージ 2年次生 n=6	1年次生 n=6
①右上下肢を使って掛け物を剥ぐ	(0)	右手で掛け物をはぐ (3)
②左上肢を右手で腹部に載せる	(0)	(0)
③左下肢のねじれを右下肢で真っ直ぐにする	(0)	(0)
④右手でベッド柵を掴み右膝を立てて、右側の力でベッドの右端による	右端に移動する (2)	ベッドの端へずれる (2)
⑤右手でベッド柵を掴み、右膝を立てて、右側に身体を傾けながら起き上がる	起き上がる (4)	右手で柵をつかみ起き上がる (4)
⑥右手でベッド柵をおろす	(0)	(0)
⑦右足部を、左下肢下腿部の下にすべりこませ、右足で左下肢をもちあげながら、下肢をベッド端に下ろす	足をベッドサイドへ下ろす (2)	ベッド端に座る (2)
⑧右足を床につけ、右手を床頭台に伸ばし、右に身体を傾けながら洗面用具を出す	洗面用具を出す (1)	(0)
⑨三角巾を右手で首に掛けてから、右手を使い左上肢を三角巾の中に入れる	(0)	(0)
⑩右手でナースコールを押し看護師を呼ぶ	(0)	(0)
⑪右足の靴を履いてから、右手でズボンの裾をつかみ左足を膝にのせ、左足に靴を履く	靴を履く (3)	(0)
⑫左のズボンの裾を右手でつかみ、左足を下ろす	(0)	(0)
⑬車いすが設置されたらベッドに近いアームレストを右手でつかみ身体を車いす近くまで寄せる	足元に45度の角度で車いすを置く (2)	右側に車いすを置く (2)
⑭ベッドから遠い側のアームレストを右手でつかみ、右足を車いすの近くに置き、車いすに体重をかけながら、右半身の力で立つ	車いすに移動する (4)	車いすを右足支えに立つ (2)
⑮身体の向きを変えながら、はじめはゆっくり、最後はドスンと車いすに座る	車いすに落ちるように座る (2)	車いすに乗る (5)
⑯右手でアームレストをつかみ、右足を踏ん張って車いすに深く腰掛ける	(0)	(0)
⑰前屈みになって右手で左足のズボンの裾をつかみ、左足をフットレストにぶつからないようによけて、右手でフットレストを下げ、左ズボンの裾をもって左足をフットレストに乗せてから右足を乗せる	右手で左足を持ってフットレストに乗せ右足を乗せる (1)	(0)
⑱看護師の援助を受けて洗面所に移動する	右手で車いすを操作する (3)	右手で車いすを動かす (4)

2．患者の動作に伴う危険察知（表2）；患者の動作に伴う危険察知が最もできていた内容は、1、2 年次生ともに「⑧車椅子への移乗時の転倒」であった。ついで 1、2 年次生ともに「⑨車椅子に座る際にずり落ちる」であった。2 年次生のみが察知した危険は「⑦車椅子が動き転倒」などであった。次に、全く察知できないか、ほとんど察知できなかった内容は「①②患側上下肢のねじれ、巻き込み」、「⑩患側下肢をフットレストにぶつける」などであった。これらのことから、学生は麻痺をイメージしながら大きな動作に伴う危険は察知できるが、前述したように細かい動作がイメージできないためそれに伴う危険は察知できていない。さらに、危険の察知は 1 年次生よりも 2 年次生の方が多くの危険を察知できている。このことは、患者に接した体験がイメージをアップさせ、結果として危険も察知できるようになったのではないかと推察できる。しかし、今回はデータ数が少ないため今後データ数を増やし検証していく。

表2　患者の動作に伴う危険察知の内容　（人数）

患者の動作	危険の内容	危険察知の内容 2年次生 n=6	1年次生 n=6
ベッド柵につかまり起きあがる	1 患側上肢のねじれや巻き込み、肩関節脱臼	肩関節脱臼 (1)	(0)
	2 患側下肢のねじれや巻き込み、股関節脱臼	股関節脱臼 (1)	(0)
	3 ベッド柵に頭をぶつける	ベッド柵に頭をぶつける (1)	(0)
ベッド上で座位	4 右上肢で身体を支えきれず健側へ倒れる	支え切れずに転倒 (1)	座位になると急に倒れる (2)
端座位	5 座位が保持できずベッドから転落後ろへ倒れベッド柵に頭をぶつける	座位保持できず転倒 (1)	(0)
床頭台から洗面用具をだす	6 床頭台が動きベッドから転落	洗面具をとるとき体をひねってバランスをくずし転倒 (1)	(0)
立位	7 アームレストを掴み立ち上がる時に車椅子が動き転倒	車椅子が動き転倒 (4)	(0)
	8 健側下肢に力が入らずバランスをくずし転倒	バランスをくずし転倒 (4)	健側下肢で支えきれずに転倒 (4)
車椅子座位	9 浅く腰掛けてしまいずり落ちる	姿勢が悪くずり落ちる (2)	車椅子にうまく座れない (2)
	10 フットレストに患側足を載せるときぶつける	(0)	(0)

Ⅳ．おわりに：今回の結果を基に学生が患者の動作を細かく分析的にイメージできるように、またその動作に伴う危険を察知できるようなVTRの作成を目指していきたい。

（にしど　いずみ、ところ　みよこ、みやざき　もとこ、こんの　はづき、がもう　すみこ、せきぐち　けいこ、さの　かおる）

実習直前に感じる不安感への介入

― 学生の不安と教員の介入 ―

○吉田一子[1)]　深堀美紀子[2)]　山本勝則[3)]
([1)] 日本赤十字九州国際看護大学看護学部　[2)] 広島国際大学看護学部　[3)]札幌市立大学看護学部)

キーワード：精神看護実習、不安感、アドバイス

【研究の目的】 この研究は，看護教育において知識と実践の統合として行う臨地（精神看護）実習における指導に関するものである。実習直前の不安は，介入をしなくても乗り越える学生もいるが，学生が無駄な時間や労力を費やしたりせず，より効率的な学習を支援することを意図している。

介入研究は2種類ある。ひとつは最も不安が強い実習開始直前の不安に対する介入であり，もうひとつは実習中に生じるケアに伴う不安に対する介入である。前大会では，一緒に実習する「他の学生が不安感を表出するのを聞くことの影響」と「他の学生が表出した不安感に対して教員が行うアドバイスを聞くことの影響」について報告した（山本・吉田・内海，2008)。今回も引き続き前者に関して，「実習直前に学生が持つ不安」と，「それに対する指導者のアドバイスの内容」について明らかにする。

【方法】 調査場面は，精神看護実習のオリエンテーションを受けるために，実習グループが集まった最初の場面である。指導教員が，これから始まる実習について，‘不安に思っていること’，あるいは‘自分が学びたいと思っていること’，あるいは‘計画していること’を，順番に述べてもらいます。」と告げた。その後，学生を指名して発言させ，学生が述べたことに対して，その都度，コメントを返した。(以下，これら一連の出来事をインタビューと呼ぶ。)

調査対象は，四年制大学の三年次看護学生の実習グループの中の1グループ18名である。調査時期は，2007年10月初旬である。

インタビューは録音後，逐語録としてデータ化した。データ分析は，質的記述的分析方法で以下のように行った。学生の不安の表出，教員のアドバイスについて共に，意味を考えコード化し，類似性に着目して分類し，サブカテゴリー，さらにカテゴリーを抽出した。分析のプロセスにおいては，一度分析した結果の妥当性を高めるため，質的研究の経験者のスーパービジョンを受け，修正を加えていった。

用語の定義：この調査は，学生が自分で‘不安だ’と自覚する感情について調査するものであり，心理学用語としての不安の調査ではない。そこで，以下，不安感と表記する。なお，看護学生の不安感情とスピールバーガーのＳＴＡＩとの相関は，以前の我々の調査では，0.5強であった。

【倫理的配慮】インタビュー開始前に，協力は自由意志であること，協力の有無は成績へ影響しないこと，匿名性を保持するために指名時に名前の代わりにアルファベットを用いること，テープにて録音したものは発表のみに使用すること，音声はデータ化後すぐ消去することの5点を伝え，協力を依頼した。

【結果】18名全員から研究への協力の承諾が得られた。

「実習直前に学生が持つ不安」については，以下の6つのカテゴリーが抽出された。1）患者の症状への困惑と対応の難しさを感じた経験　2）精神科は初めてで患者への接し方がわからない　3）コミュニケーションが図れて信頼関係を築けるか　4）自分の関わりで患者が悪化しないか　5）患者に拒否され混乱しないか　の6つである。

また，「それに対する指導者のアドバイスの内容」については，以下5つのカテゴリーが抽出された。1）過去の体験を意味づけ，実習へつなぐ　2）具体的対処法を示す　3）視点や捉え方の転換を促す　4）実習に関する情報を提供する　5）不安の受け止め　の5つである。

「実習直前に学生が持つ不安」と「それに対する指導者のアドバイスの内容」のサブカテゴリーは，以下の表にて提示する。

Table 1　実習直前に学生が持つ不安（サブカテゴリー）

1	患者の症状への困惑と対応の難しさを感じた経験
2	精神科患者にどう接していいかわからない
3	自らの緊張や怖さからコミュニケーションがとれないかもしれない
4	患者とコミュニケーションがとれるだろうか
5	信頼関係をうまく築けるか
6	自分の関わりで受け持ち患者が悪化するのではないか
7	情報のない受け持ち以外の患者に影響を及ぼすのではないか
8	悪影響を及ぼすことを避けようとして混乱し,言動が消極的にならないか
9	患者に拒否されたり患者が変化したときに対処できるか
10	患者の状況に影響され自分が飲み込まれ自分を見失わないか
11	精神科病棟の雰囲気に慣れていけるか

Table 2　教員のアドバイス（サブカテゴリー）

1	否定的体験の表出に共感した上で今後の学習課題にする
2	これまでの体験が、今回の実習に活用できることを示す
3	対象者への中立なイメージや実習に前向きな姿勢を認め強化する
4	コミュニケーションの不安要因を言語化し、対象者と共有し糸口とする方法を示す
5	関わりに困難を感じたら教員・スタッフに言語化し支持・助言とフォロー体制を得る
6	受け持ち以外の患者には学生である限界を自覚し、可能な範囲で交流する
7	患者の捉えかた・関わり方全般に教員・スタッフの助言が有効であると示す
8	可能性を示す患者は長期的には自立にむけて入院治療している
9	患者と関わることで影響を受ける不安を自己理解の途上と位置づけ支援する
10	視点を確認する患者の言動の分かりにくさを患者の立場に立ち理解する重要性を伝える
11	変化してきている精神科病棟の状況を伝えて見方の幅を広げる
12	実習期間に到達可能で具体的な実習目標レベルを示す
13	不安に思っていることに教員と臨床側が実習体制で対処していることを示す
14	今までの実習生も同様な不安を抱えていたことを伝える
15	コミュニケーションに関する不安を受け止める
16	教員から支援することを伝える

【考察】「実習直前に学生が持つ不安」で特徴的であったことは，看護学生として初期の段階で接した基礎実習経験が否定的なものとして位置づけられ再体験を予想しているということであった。「教員のアドバイス」はそれに対し不安感を受け止め共感し，その後精神看護学に関する関係の知識を得て活用できることで，患者理解を深めて看護ができるというアドバイスによって，今後の学習課題として提示し，学生に安心感を与えてと次につなげようとしていることが考えられる。

【引用文献】

山本勝則　吉田一子　内海滉 2008 実習直前に感じる不安感への介入 －他者の感情表出とアドバイスの影響－ 日本応用心理学会第75回発表論文集，P15

（よしだ いちこ・ふかほり みきこ・やまもと かつのり）

暗示的表現による商品推論の傾向(2)

— ゼロ表示による推論と購買への影響 —

○花尾　由香里[1)]　岡村　一成[1)]
([1)] 東京富士大学経営学部)

キーワード：商品推論、消費者行動、商品表示

【目的】

企業が提供する商品表示や広告の宣伝文句には，商品の特性や効果などを暗示的に表現したものやあいまいに表現したものが多くみられる。もともと消費者が行う商品推論には，事実と異なる認識をしたり，過剰な効果を期待するなどのあいまいな傾向がみられるが，情報自体があいまいな時，消費者がどのような推論を行うかはほとんど調べられていない。食品や飲料に含まれる成分含有量を示す場合に，「ゼロ」「無」「ノン」「フリー」などの言葉が用いられることが多いが，これらの表現は，必ずしも成分がゼロであることを示してはおらず，基準値よりも低ければ違法にはならない。一般消費者にとっては，複雑な表示内容であり，誤解を生じている可能性がある。そこで本研究では，これらの「ゼロ表示」に注目し，消費者が成分含有量についてどのような推論を行っているのかを調べることとした。同時に，消費者の表示に対する考え方と購買への影響について検討する。

【方法】

調査は，「表示に関するイメージ調査」と題し，インターネットによる質問紙調査を行った。調査会社に登録している 20 歳以上の一般消費者を対象とし，無作為に 400 名を選んだ。質問項目は，「ゼロ」「無」「フリー」「ノン」という言葉を用いた表現から成分含有量をどのように推論するのかをたずねる項目，強調表示を行う場合の基準値が定められていることを知っていたかどうかを問う項目，表示全般に対する考え方と購買への影響をたずねる項目から構成した。含有量についての推論をたずねる項目については，「カロリーゼロ」「無糖」など成分と組み合わせた表現を作成し，それらの表現と厚生労働省が定めた強調表示を行う場合の基準値「100g あたり 5kcal」などを示した成分表示を対提示して，どちらの表示の方が，含有量が低いという印象を受けるかを 5 段階尺度によってたずねた。表示に対する考え方と購買への影響についての項目は，7 段階尺度によってたずねた。調査時期は，2009 年 6 月である。

【結果】

ゼロ表示による含有量の推論　ゼロ表示と基準値による成分表示のどちらの方が，成分含有量が低いという推論を行うのかを確かめるため，「ゼロ表示の方が含有量が少ない」「ややゼロ表示の方が少ない」と回答した群，「どちらともいえない」と回答した群，「やや成分表示の方が少ない」「成分表示の方が少ない」と回答した群の 3 グループに分類し，χ^2 検定を行った。その結果，「カロリーゼロ」と「100g あたり 5kcal」では，ゼロ表示の方が含有量が低いと推論する消費者が多かった(ゼロ表示 81.8%(327 名),どちらともいえない 14.5%(58 名),成分表示 3.8%(15 名), χ^2=428.89, df=2, p<. 001)。「ノンカロリー」と「100g あたり 5kcal」では，ゼロ表示の方が含有量が低いと推論する消費者が多かった(ゼロ表示 82.5%(330 名),どちらともいえない 11.2%(45 名),成分表示 6.2%(25 名), χ^2=436.63, df=2, p<. 001)。「カロリーフリー」と「100g あたり 5kcal」では，ゼロ表示の方が含有量が低いと推論する消費者が多かった(ゼロ表示 47.8%(191 名),どちらともいえない 30.2%(121),成分表示 22.0%(88 名), χ^2=41.50, df=2, p<. 001)。「糖分」「脂肪分」「塩分」に関する表現においても同様の結果がみられ，ゼロ表示の方が基準値である成分表示よりも含有量が低いという推論を行っている人が多いことがわかった。ゼロ表示を行う場合の基準値が定められていることを知っていたかどうかについては，知っていた人は 31.5%(126 名)であり，知らなかった人は 68.5%(274 名)であった(χ^2=54.76, df=1, p<. 001)。

表示に対する考え方と購買への影響　表示に対する消費者の考え方と購買への影響を確かめるため，最小二乗法，プロマックス回転による因子分析を行った。その結果は，表 1 に示した。分析の結果，商品表示に対してあまり疑いをもたず，比較的簡単に信頼して購入の参考にする傾向を示した「安易な信頼因子」，表示を注意深く見て判断の拠りどころとする傾向を示した「購入決定因子」，表示に対して比較的強い疑いをもち事業者の意図が反映していると考える「懐疑因子」の 3 因子が抽出された。次に，これらの傾向を示す消費者がどの程度存在するのかを確かめるため，因子分析によって得られた 3 因子についての因子得点を用いて k-means クラスタ分析を行った。分析の結果，クラスタ数が 4 つの時に最も分類が顕著になり，表示に対して注目せず購入にも影響しないというタイプ(11.3%, 45 名)，表示に対して強い疑いは示しておらず安易に信頼する傾向が少しあるタイプ(51.5%, 206 名)，表示に対する疑いは強いが安易に信頼する傾向も強く購入決定にも影響しやすいタイプ(18.5%, 74 名)，表示に対する疑いが強く信頼していないタイプ(18.8%, 75 名)の 4 つのタイプの消費者が存在することがわかった。

【考察】

分析の結果，「ゼロ」「ノン」などのゼロ表示を見た時，消費者は，基準値よりも各成分の含有量が低いという推論を行う傾向があることがわかった。基準値が定められていることを知っている人は少なく，これらの表現は，消費者に誤解を生じている可能性が高い。表示に対する考え方と購買への影響についての分析結果からは，表示に対して疑いはもちつつも安易に信頼してしまう傾向がみられる消費者が半数以上おり，あいまいな情報であっても商品推論や購入決定に役立つ情報として利用されている可能性があることがわかった。

(はなお ゆかり・おかむら かずなり)

	安易な信頼因子	購入決定因子	懐疑因子
商品表示をたやすく信じる	**.756**	.096	-.356
後悔しても同じ表示を参考	**.725**	-.120	.112
とりあえず信じて買う	**.577**	.075	.109
表示が完全に信じられなくても購入することがある	**.571**	-.101	.243
表示が購入の決め手になる	.053	**.957**	-.029
表示を注意深く見て購入	-.096	**.738**	.092
表示を疑うことがある	-.100	.103	**.777**
表示は事業者の都合が反映	.112	-.055	**.601**
表示を信じて購入し買った後に後悔することがある	.336	.103	**.392**

表 1 表示の考え方と購買への影響についての因子分析結果

信号交差点における横断歩道外横断と他の歩行者行動特性の関連性

○小澤　弘希[1)]　蓮花　一己[1,2)]
([1)] 帝塚山大学人文科学研究科臨床社会心理学専攻　[2)]帝塚山大学心理福祉学部)
キーワード：横断時間、斜め横断、確認行動

【目的】

近年の事故統計によると、全体に占める歩行者事故の構成率は徐々に低下する傾向にあるが、他の先進諸国と比較すると高い。

歩行者行動は、様々の個人属性や交通状況要因との関連で研究されている。個人属性では、特に性別が走り横断に影響を与えることが明らかにされており、男性のほうが女性より走り横断が多い。また、交通状況では、車両交通量が確認や違反行動に影響を与えることが明らかにされている。具体的には、車両交通量が100台／時を超えると、横断歩道利用率はほぼ50%以上になり、確認行動も増加する（斉藤, 1982a)。

本研究では、横断歩道外横断を対象として行動観察調査を実施した。その理由は、死傷者別にみると、法令違反による死傷者が全体の約3割を占めており、その中でも横断歩道外横断での死傷者数が高いからである（平成20年度警察庁統計)。したがって、歩行者の事故防止のために横断歩道外の横断を研究することが重要であると判断した。

さて、横断歩道外横断の特徴として、基本的に横断距離が長くなることがあげられる。しかし、伊東らの研究では、横断歩道利用の程度が低い場合は、高い場合と比較して、必ずしも横断に時間がかかるとは限らないという結果を得ている（伊藤, 大口, 鹿田 2004)。その理由として、横断歩道利用の程度が低い場合には、歩行速度が速いことがあげられる。

しかしながら、従来の研究では、横断歩道外横断を考える場合、横断全体の時間を用いたものはあるが、歩道内・外で時間を分けて考えたものは少ない。そこで本研究では、歩道外横断を行った歩行者の歩道外横断時間に焦点を絞り、歩道内時間と歩道外時間とを分けて検討するとともに、他の歩行者行動指標（違反行動・確認行動）との関連を調べた。

【方法】

観察地点　観察地点は奈良県道754号木津横田線区間の大安寺交差点において実施した。調査期間の平均30分交通量は、車両370.5台、バイク16.5台であった。

調査日時　調査日は平成20年11月12日から11月15日にかけてであり、調査時間は午前10時から午後4時30分までの6時間30分であった。

調査対象者　交差点を横断した歩行者のうち、横断歩道を完全に利用している者以外を歩道外横断として調査対象者とした。最終的に調査対象となったのは1130人（男性374人、女性756人）であった。

横断歩道外横断時間の定義　横断開始から終了までの間で、横断歩道を通過していない時間を横断歩道外横断時間とした。

行動指標　行動指標として、1）横断時の左右確認比率、2）歩行速度、3）走り横断の有無、4）信号無視の有無、を設定した。

手続き　交差点から約150m離れた建物の非常階段最上部から3台のビデオカメラ（SONY DCR-VX2000 NTSC×1、DCR-VX2000×2）で撮影した。得られたビデオデータはビデオデッキ（SONY DSR-30）で再生し、2名の判定者が属性（年代、性別、同伴者の有無）を推定し、行動指標を記録した。判定の一致する場合をデータとして用いた。

【結果】

確認の程度においての横断歩道外時間

確認の程度（なし：723人、片側：305人、確認：102人）によって横断歩道外横断時間に違いが見られるか検討するために、一要因の分散分析を行った。その結果、5%水準で有意な主効果がみられた（$F(2,1127)=5.283$, $MSe=47.799$, $p<.05$)。多重比較（Games-Howel 法）の結果、確認なしと片側確認の間に5%水準で有意差が見られ、確認なしの平均値のほうが高かった。また、確認なしと片側確認の間に有意な傾向が見られ、確認なしの平均値のほうが高かった。(Fig1)。

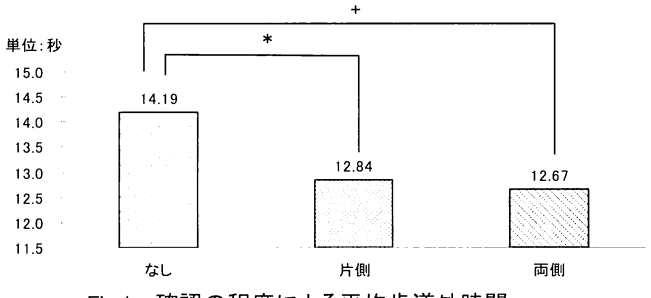


Fig.1. 確認の程度による平均歩道外時間　*p<.05　+p<.10

走り横断においての横断歩道外時間

走り横断（88人）か否か（1042人）で横断歩道外横断時間の平均に差があるかどうかを検討するために、t 検定を行った。その結果、1%水準で有意な差がみられた（$t(92)=8.083$, $p<.01$)。通常の横断と比較して走り横断の平均値のほうが高かった（図2)。

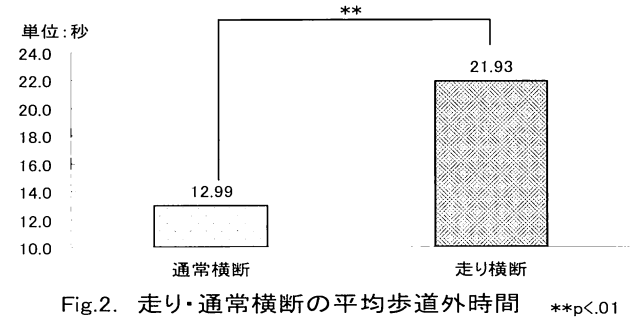


Fig.2. 走り・通常横断の平均歩道外時間　**p<.01

【考察】

確認なし横断では、横断歩道外時間が長かった。また、走り横断では、横断歩道外時間が長かった。このことから、危険な行動を取る歩行者は、危険に曝される時間も長いため、相乗して危険が増加すると考えられる。

【引用文献】

伊藤恵美子, 大口敬, 鹿田成則（2004）信号交差点における歩行者信号切り替わり時と歩行者横断挙動に関する解析　土木計画学研究・講演集(CD-ROM)

平成20年中の交通事故の発生状況　警察庁交通局

斎藤良子（1983）無信号交差点付近における子どもの歩行者及び自転車乗用車の横断行動に関する研究

（おざわ ひろき・れんげ かずみ）

建設作業の災害類型に影響を及ぼす発生要因の抽出

— 判別分析による検討 —

○落合 信寿[1)] 細田 聡[1,2)] 余村 朋樹[1)] 奥村 隆志[1)] 藤掛 和広[1)] 施 桂栄[1,3)] 井上 枝一郎[1,3)]
([1)] 財団法人労働科学研究所 [2)]関東学院大学文学部 [3)]関東学院大学人間環境学部)

キーワード：建設作業，労働災害，災害類型，発生要因，判別分析

【研究の目的】

近年，建設作業における労働災害が増加する傾向にあり，再発防止に向けて有効性のある指針・対策の立案が求められている。その方策のひとつとして，過去の災害事例から災害を引き起こした原因と推定される発生要因について検討することが重要となるであろう。

これらの発生要因は，大別すると，人的要因（作業者の生理・心理・行動に関する要因），物的要因（設備・環境に関する要因），管理的要因（作業管理，物的管理，人的管理に関する要因）の 3 種類に区分される（鈴木ら，1998）。しかしながら，従来，労働災害のデータ解析では，単純集計やクロス集計といった手法が多用されており，様々な要因間に見られる複雑な関係性を定量的に把握することが困難であった。

そこで，本研究では，建設作業において「墜落・転落」など特定の災害類型の発生に影響を及ぼす要因を明らかにする手法として，判別分析を用いて，ある特定の災害類型と他の災害類型との判別に影響力を持つ発生要因の抽出を行った。

【方法】

分析対象：2003 年から 2007 年までの 5 年間に建設作業現場で発生した労働災害のうち，休業 4 日以上の災害及び死亡災害 525 事例を分析の対象とした。

災害類型の分類：厚生労働省安全衛生部安全課（2003）による「事故の型」の分類に基づき，建設作業における災害類型を「墜落・転落」，「転倒」，「激突」，「飛来・落下」，「崩壊・倒壊」，「激突され」，「はさまれ・巻き込まれ」，「切れ・こすれ」，「踏み抜き」，「高温・低温の物との接触」，「有害物等との接触」，「火災」，「交通事故（道路）」，「動作の反動・無理な動作」の 14 種類に区分した。

発生要因の分類：人的要因については，A. 心理的要因（意識の混乱，意識の中断，判断ミス），B. 生理的要因（認知ミス，心身不調），C. 動作・行動（規律無視，危険行為，第三者行動欠陥）の 8 種類に区分した。物的要因については，D. 物自体の要因（用具・治具・材料，装置・設備），E. 安全施設の要因（防止設備，防護設備，安全施設），F. 環境要因（作業環境，作業周辺）の 7 種類に区分した。管理的要因は，G. 作業管理要因（計画時，実施時），H. 物的管理要因（持込時確認，日常点検），I. 人的管理要因（監督・指示，教育・指導，作業員配置）の 7 種類に区分した。

分析方法：災害類型と発生要因については，各事例が当該の分類項目に該当するか否かで 1 か 0 のダミー変数に数値化した。災害類型を基準変数，22 種類の発生要因を説明変数として，災害類型ごとにダミー変数を用いた判別分析を行なった。なお，基準変数の予測精度を高めるために，ステップワイズ法（変数増減法）を用いて，基準変数に対して統計的に有意な影響を及ぼす要因のみを説明変数として採用した。

【結果及び考察】

災害類型ごとに，判別分析により抽出された説明変数の標準化判別係数を算出した。このうち，「墜落・転落」，「転倒」，「飛来・落下」，「崩壊・倒壊」の 4 種類の災害類型で抽出された要因の標準化判別係数を表 1 に示す。各災害類型の正判別率については，14 類型のうち，90%以上の正判別率が 3 類型，80%以上の正判別率が 5 類型あることから，全般的に分析結果の予測精度は高いことがうかがわれる。

表 1 より，「墜落・転落」の発生には安全施設の要因（防止設備，安全施設）が強く影響していた。「転倒」については「安全施設」の他に環境要因（作業周辺）が強く影響した。「飛来・落下」は作業管理要因（実施時），「崩壊・倒壊」は物自体の要因（装置・設備）の影響が最も大きかった。これらの結果は，災害類型によって強く影響を及ぼす発生要因が異なることを示している。

また，人的要因と物的要因もしくは管理的要因の両方が関与する災害類型では，概して，物的要因や管理的要因のほうが人的要因よりも標準化判別係数が高い傾向が見られた。このことは，物的要因や管理的要因の影響が人的要因よりも大きい事を示唆しており，建設労働災害における再発防止策として，物的要因や管理的要因への対応がより重要になると考えられる。

表 1. 判別分析から得られた標準化判別係数

		墜落・転落	転倒	飛来・落下	崩壊・倒壊
A	意識の中断		.444		
B	認知ミス		.365		.475
B	心身不調				
C	規律無視	.259		.344	.409
C	危険行為			.287	
D	装置・設備			.480	.837
E	防止設備	.586			
E	防護設備	.246		.517	
E	安全施設	.444	.684		
F	作業環境	−.335			
F	作業周辺		.570		
G	計画時	.308			
G	実施時			.686	
H	持込時確認	.362			
I	監督・指示	.372			
正判別率(%)		76.0	65.9	82.7	89.9

本分析手法の適用により，特定の災害類型に強く影響を及ぼす発生要因の抽出が可能となり，各々の災害類型と発生要因との因果関係を検討する一助になると思われる。

【引用文献】

鈴木芳美・臼井伸之介・江川義之・庄治卓郎 1998 建設工事における墜落災害の人的要因に関する多変量解析 産業安全研究所研究報告 NIIS-RR-97 17-26

厚生労働省安全衛生部安全課編 2003 労働災害分類の手引− 統計処理のための原因要素分析− 中央労働災害防止協会

（おちあい のぶひさ・ほそだ さとし・よむら ともき・おくむら たかし・ふじかけ かずひろ・し けいえい・いのうえ しいちろう）

勤務条件による予期的時間評価の変動

○星　薫[1)]　大柳　昭裕[2)]　越河　六郎[3)]
[1)] 放送大学教養学部　[2)] 常盤台病院　[3)] 松蔭大学
キーワード：予期的時間評価、勤務条件、夜勤

【研究の目的】 心理的時間研究あるいは時間知覚研究は従来、研究室内での実験というスタイルで行われるのが一般的であった。職場での職務条件の違いが時間知覚に影響するか否かといった問題として問われることはない。同じ1分間の長さを評価するにしても、昼間の通常勤務を終えた状態の時と、夜勤勤務などで長時間拘束され、さらに、睡眠も充分に取れていないような状態の時とで、時間評価に違いがないのかどうかについては、これまであまり問われたことのない問題であると思われる。

老人介護専門病院で介護職として勤務する職員は、通常の日勤（9時～17時）勤務に加えて、早番（7時～15時）、遅番（11時～19時）さらに夜勤（16時30分～翌朝9時30分）勤務をローテーションで勤めている。そこで、日勤、早番および夜勤勤務を終えた職員に、一定の作業課題を与え、1分経過したと思ったところで作業を中止するという方法で、1分間の時間評価を行ってもらった。夜勤による睡眠不足、疲労などが、日勤、早番勤務後と比較して予期的時間評価結果に何らかの相違をもたらすか否か検討するためである。

時間評価の仕方には、予期的時間評価と追想的時間評価が区分されている。予期的時間評価とは、あらかじめ時間の長さを決め、そこまでの時間経過に意識を向けながら、経過時間の判断を行うものである。これに対して、追想的時間評価では、既に過ぎた時間体験についてその長さを判断する。今回は、実験参加者に予期的時間評価を行ってもらい、その結果が勤務条件により異なるか否か検討することを目的とした。

【方法】 **実験参加者**：老人介護専門病院で介護職として勤務している者、計16名。男性4名、女性12名。年齢は20代から50代であった。

手続き　作業課題として労働科学研究所作成の安全テスト2種（テスト1－2，1－5）を使用した。一つめの課題は、F (Fast)条件と名付けたもので、できるだけ多くの数の斜線を引きながら1分間の経過を評価するというものである。すなわち、8mmの間隔で2本平行に引かれた横線が参加者に与えられる。2本の直線のうち、上の線には1.5mm間隔の目盛りが付けられており、参加者はこの目盛りに従って、下の線に向かって斜めの直線をできるだけ早く、たくさん引くよう教示された。2つ目の課題は、S (Slow)条件と名付けられ、参加者は、可能な限りゆっくり線を引くように求められた。すなわち、用紙には、波型の破線が記されており、参加者はこの破線に沿って、できる限りゆっくりと線を引かなければならない。どちらの条件でも、参加者は「始め」の合図で作業を開始し、1分経ったと思ったら、作業を自発的に中止した。この時の作業開始から中止までの時間をストップウォッチで計測した。16名の参加者は全員、3種の勤務条件全ての場合について、S条件、F条件の両方の実験に参加した。いずれの場合も、実験は勤務終了時に行われた。また、1分という時間の感覚が十分身につくよう、実験に先立って毎回、参加者にはストップウォッチを持って、60数えながら、1分経ったと思ったところで、ストップウォッチを止め、実際の1分間に近づくよう、複数回訓練を行った。また、F条件、S条件での線引き課題の際にも、1分間が分からなくならないよう、60秒を数えながら作業をして構わない旨、参加者に伝えた。

各条件において、F条件、S条件はそれぞれ3試行行われた。

【結果】 勤務条件ごとに、F条件、S条件別の平均作業時間（参加者が1分経過したと感じた時間）を求めたものが表1、表2である。

表1　F条件における平均作業時間（秒）

	夜勤後	早番後	日勤後
平均	54.9	50.2	50.7
SD	14.6	11.1	10.6

表2　S条件における平均作業時間（秒）

	夜勤後	早番後	日勤後
平均	64.2	59.0	55.1
SD	19.0	15.5	9.5

表1，2で見ると、できるだけ早く線を描くことが求められたF条件と、できるだけゆっくり線を描くことが求められたS条件とで、1分の時間評価にどの条件でも相違が見られる。総体的に、早い動作を求められているF条件では、ゆっくりした動作を求められたS条件に比べて、1分間を短く評価しており、特に早番後、夜勤後の条件では、F条件とS条件とに10秒近い差が認められた。なお、S条件、F条件に、二元配置分散分析で1％水準での有意差が得られた（交互作用はなし）。

さらに、S、F条件別に、勤務条件による時間評価の相違を調べてみると、夜勤後条件では全体的に時間評価が長くなる傾向が認められた。S,F条件別に分散分析を行ったところ、S条件のみで勤務条件間に1％水準の有意差が得られた。

【考察】 今回の作業課題では、斜線をできるだけ早く引く、あるいはできるだけゆっくり、波型破線を辿ることを、参加者たちに求めた訳だが、いずれの作業でも60数えるという方略で時間の推測をすることが、むしろ奨励されていた。これらの作業と、数を数えることとは、両立しない課題ではなく、特にS条件の早番後の条件では、平均評価時間が59秒という正確な時間評価を行っているが、恐らく破線を辿りながら60を数えていたためではないかと思われる。

もし勤務条件による影響が全くないとすれば、どの勤務条件下であっても、同様の方略で時間評価が行えたはずであるが、実際にはF条件では日勤後、早番後と夜勤後との間に、S条件では3種の勤務条件間に時間評価結果の差が認められた。この差が何を意味するものであるのか、今回の結果だけからは、知ることができないが、少なくとも夜勤による疲労や、睡眠不足が、時間評価に何らかの影響をもたらしているようであると言うことはできるだろう。17時間に及ぶ長い拘束時間による肉体的疲労に加え、夜間に2，3時間程度の仮眠しか取れないことによる睡眠不足の状態で、入院患者の朝の様々なケアを終えた後に、線引き作業を行った参加者たちは、例え60数えるという方略を用いていたとしても、日勤後や早番後に比べて、正確さが減少してしまっているようである。

（ほしかおる・おおやなぎあきひろ・こすごうろくろう）

変革型リーダーシップの有効性に関する職種間の差異について

神谷恵利子
（立正大学大学院心理学研究科）

キーワード：変革型リーダーシップ，職種，組織コミットメント，チームパフォーマンス

【研究の目的】　変革型リーダーシップに関する先行研究では，変革型リーダーシップとリーダーシップ効果を示す結果変数との相関は，交流型リーダーシップのそれと比較した場合に必ずしも高いわけではない(Bass,1985)。そこで，本研究では，変革型リーダーシップは，職種が異なってもその効果には汎用性があるのか，あるいは職種が異なるとその効果性に違いが出てくるのかを明らかにするために，変革型リーダーシップがフォロアーの組織コミットメント，チームパフォーマンスに及ぼす影響について，営業・非営業間に差があるのか否かについて検討することを目的とする。

【方法】　一般企業に勤務する従業員332名（営業職213名，非営業職119名）を対象とし，調査を実施した。本研究では，以下の測定尺度を用いた。①リーダーシップ測定尺度：MLQ. From 5X. (Bass&Avolio,1999)から変革型リーダーシップに相当する20項目，交流型リーダーシップに相当する８項目。②リーダーシップの有効性測定尺度：超過の努力（リーダーがフォロアーのやる気や意欲をどれだけ引き出しているか）にあたる３項目，リーダーシップの効果（リーダーとしていかに有能であると認められているのか）にあたる４項目，リーダーへの満足（リーダーに対してどれだけ満足を抱いているのか）にあたる２項目，計９項目。③組織コミットメント尺度：情動的側面の７項目。④チームパフォーマンス尺度：Keller(2006)の研究を参考にして，チームパフォーマンスを，仕事の生産性，仕事の質，仕事の革新・創造性，変化への適応，社外からの評価，情報交換の活発さなど８項目。各評定は，よくあてはまる（５点）～まったくあてはまらない（１点）の５件法で回答を求めた。

【結果】

１．各因子得点における営業・非営業間の差異

まず，リーダーシップ測定尺度の因子分析と内的整合性の検討を行った。その結果，変革型リーダーシップは，「ビジョンの達成」「ビジョンの提示」の２因子，交流型リーダーシップは，「随伴報酬」１因子を用いる。営業・非営業ごとに，各因子得点の平均値，標準偏差をTable １に示す。ビジョンの提示以外のその他の因子において，営業・非営業間に有意な差が見出された。

Table 1 各因子得点における営業・非営業間の差異

	全体(N=332)		営業(N=213)		非営業(N=119)		
	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	*t*値
変革型リーダーシップ							
ビジョンの達成	3.67	.69	3.83	.62	3.40	.73	5.34 *
ビジョンの提示	3.64	.74	3.85	.66	3.27	.76	7.23
交流型リーダーシップ							
随伴報酬	3.83	.73	4.02	.64	3.53	.77	5.90 **
リーダーシップの有効性							
リーダーの効果	3.76	.74	3.89	.67	3.52	.79	4.38 *
リーダーへの満足	3.47	.87	3.66	.77	3.13	.95	5.22 *
超過の努力	3.54	.80	3.74	.70	3.19	.86	6.00 **
組織コミットメント	3.64	.82	3.82	.75	3.32	.84	5.41 *
チームパフォーマンス	3.73	.73	3.88	.66	3.49	.77	4.71 *

*p<.05,**p<.01.

２．因果関係の検討

各因子間の相関分析を行ったところ，全ての変数間で有意な相関が見られた。つぎに，リーダーシップの３つの下位因子がリーダーシップの有効性，組織コミットメント，チームパフォーマンスに与える影響を検討するために，営業・非営業別に重回帰分析を行った。結果をTable ２に示す。まず，すべての重決定係数(R^2)の値は.320(p<.001)以上となり，リーダーシップの各因子によって説明される割合は十分な値を示していた。

Table 2 営業・非営業別の重回帰分析結果

	リーダーの効果		リーダーへの満足		超過の努力		組織コミットメント		チームパフォーマンス	
	営業	非営業	営業	非営業	営業	非営業	営業	非営業	営業	非営業
	β	β	β	β	β	β	β	β	β	β
ビジョンの達成	.487***	.572***	.592***	.638***	.665***	.542***	.363**	.331*	.515***	.651***
ビジョンの提示	.254***	.126	.144*	.167	.152*	.178*	.204*	.239*	.319***	.053
随伴報酬	.161*	.201*	.080	.024	.002	.139	.036	.091	.118	.103
R^2	.709***	.700***	.604***	.563***	.621***	.635***	.320***	.367***	.471***	.378***

β:標準偏回帰係数　　*p<.05;**p<.01;***p<.001.

【考察】　本研究の結果では，一致点としては，営業・非営業ともに，①「ビジョンの達成」すなわち，共有されたビジョンの達成のために必要とされる行動をはっきりと示すことで，フォロアーの信頼を得ることは，リーダーとして有効であり，フォロアーのコミットメントを高め，チームパフォーマンスを引き上げる，②「随伴報酬」すなわち，フォロアーの業績に対して適切な報酬を与えることは，リーダーとして有能であるとフォロアーからは認知されるが，リーダーへの満足，フォロアーのやる気を引き出すこと，組織コミットメント，チームパフォーマンスには直接影響を及ぼさない，③「ビジョンの提示」すなわち，将来の理想的なゴールとビジョンを掲げて，それらをはっきりと伝えることは，フォロアーのやる気や意欲を引き出し，組織コミットメントを高める，ということが示された。一方，相違点としては，ビジョンの提示は，④営業では，リーダーを有能だと認め，リーダーへの満足を高め，チームパフォーマンスにも影響を及ぼすが，⑤非営業では，リーダーを有能だと認めるかどうか，リーダーへの満足，チームパフォーマンスには影響を及ぼさない，ということが示された。

本研究で得られた上記の結果は，職種を超えて汎用的に有効なリーダーシップと，その職種の違いによって異なる有効なリーダーシップを，構造的に明らかにすることができた。

【引用文献】

Avolio,B.J. & Bass,B.M. 1999 Re-examining the components of transformational and transactional leadership using the Multifactor Leadership Questionnaire. Journal of Occupational and Organizational Psychology, 72, 441-462.

Bass,B.M. 1985 *Leadership and performance beyond expectations.* New York: Free Press.

Keller,T.Robert. 2006 Transformational Leadership, Initiating Structure, and Substitutes for Leadership: A Longitudinal Study of Research and Development Project Team Performance. *Journal of Applied Psychology,* 91, 202-210.

（かみや　えりこ）

工事現場における近道・省略行動の発生要因に関する質的検討[1)]

○松本友一郎[2)]　臼井伸之介[2)]
([2)]大阪大学大学院人間科学研究科)

キーワード：近道・省略行動、事故防止、ヒアリング

【研究の目的】

厚生労働省によれば，建設工事事故における死亡者数は平成 8 年頃まで年間約 1000 名であったが，その後は徐々に減少し，平成 20 年には半数以下の 430 名となった。一方で，建設工事事故における重大災害（一時に 3 人以上の死傷者を伴う災害）の発生件数は年間 80 件から 120 件程度で減少傾向は見られない。つまり，建設工事において死者数は減ったが，依然として現場の災害対策には課題が残っていると考えられる。

建設工事現場で行われる重大災害への対策の一つとして，安全通路や安全な昇降施設の設置が挙げられる。これにより，危険な箇所において安全な手すりや足場が確保され，転落事故の防止が可能となる。なお，安全通路や昇降施設は必ず設置するように，各工事に義務付けられている。

しかし，安全通路や昇降施設が設置されていても転落事故は発生する。それらの事故事例を検討すると，設置された安全通路や昇降施設を使わなかったことによると考えられる事例も多い。そこで，本研究では，そのような安全通路を無視した近道や昇降施設使用の省略という違反行動が生じる過程を現場のヒアリングによって検討する。

【方法】

時期，場所　ヒアリングは 2007 年 1 月下旬から 3 月上旬の間及び 2008 年 1 月中旬から下旬の間に東北地方，関東地方，中部地方，近畿地方にある 17 箇所の工事現場で実施された。工事の概要は主に橋梁関連であった（12 箇所）。その他は道路工事等であった。

インフォーマント　ヒアリングの対象となったインフォーマントは全体で 90 名であった（ただし，1 箇所の現場についてインフォーマントの記録が残っていないため，実際は他数名にもヒアリングが実施された）。内訳は現場の代理人が 16 名であり，残りの 74 名が作業員であった。なお，作業員には職長が 24 名含まれていた。代理人の経験年数は 9 年から 42 年で，平均が 21 年であった（$SD = 9.56$）。作業員に関しては経験年数に関する記録が残っていない。作業員の年齢層は 20 代が 9 名，30 代が 30 名，40 代が 12 名，50 代が 16 名，60 代が 6 名，70 代が 1 名であった。また，作業員の職種は大工，鉄筋工，橋梁特殊工（鳶）等，様々であった。

ヒアリング内容　ヒアリングは基本的な質問事項を設定した半構造化面接であった。質問は，職種等の基本的な情報や自らが経験した，または見たことがあるヒヤリハット事例から始まり，近道・省略行動に関する内容へと移行した。近道・省略行動については内容をパネル等で説明した上で，そのような行動をとったこと，または見たことがあるか，ある場合にはその行動の内容及びその時の状況，行動をとった理由等を聞いた。

【結果と考察】

集められたデータは逐語録として文字に起こされ，小カテゴリーに分類された。また，それらの小カテゴリーは，さらに「内的要因」，「外的要因」，「それ以外」の 3 つの大カテゴリーに分類された。それらのカテゴリーに基づいて近道・省略行動が発生するまでの心理的過程を示すモデルが生成された（Figure 1）。

生成されたモデルより，近道・省略行動をするという判断は内的要因及び外的要因双方から影響を受けていることが示された。また，外的要因はその判断への直接的な要因となっているだけでなく，「周辺環境」が「個人の意識」に作用し，「個人の判断基準」を変化させるという社会的側面や工期，工費等による「現場の制約条件」が「焦り」を生むという認知的側面から内的要因の背景要因としても影響を及ぼしていることが示唆された。

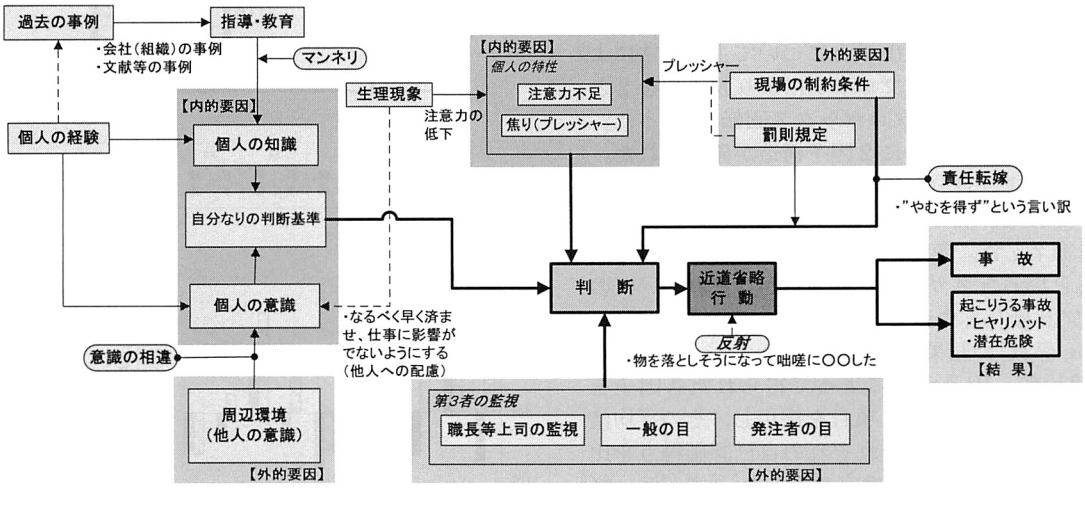


Figure 1 近道・省略行動発生の心理的過程モデル

（まつもと　ともいちろう・うすい　しんのすけ）

[1)] 本研究は、国土交通省の建設事故対策に関連する「建設工事事故対策検討委員会」の協力を基に実施したものです。現地ヒアリング調査に関しては国土交通省大臣官房技術調査課森田宏課長補佐（当時）、種蔵史典技術管理係長（当時）、国土技術研究センター研究第二部田中救人次長、山内昭彦上席主任研究員にご協力頂きました。この場を借りて深謝致します。

自己評価の日本と韓国の国際比較研究

○金成恩[1)]　荻野七重[2)]　齊藤勇[3)]　山田竜平[4)]
([1)] EKOS 韓国語教室　[2)] 白梅学園短期大学心理学科 [3)] 立正大学心理学部　[4)] 立正大学大学院心理学研究科)
キーワード：自己評価，内心発言，日韓比較

【研究の目的】自己評価については欧米だけでなく、日本においても多くの研究がなされている(星野, 1970; 黒沢, 1992; 山本・松井・山成, 1982)。社会心理学において、文化相対論が唱えられているなか、自己評価に関しては特に、日本人の自己卑下的自己評価が注目され (Heine1995~2000)、西洋と東洋の自己、および、自己を取り巻く他者や社会との違いについて研究が進められている。ただ、東洋といってもそれぞれ国が特有の異なった文化を持っている。そこで、本研究では日本と近い国、近い文化を持っているとされる韓国において、自己評価の比較を行い、両国の類同を検討することとした。さらに、自己評価は内心で思っていることと、人に話すときとでは異なると考えられるので、内心どの程度評価しているか、発言するときどの程度話すかをあわせて調査した。日韓において自己評価の自己開示の比較を行い対人関係の違いについての知見を得ることにした。

【方法】調査対象者および調査時期　調査対象者は日本人大学生 297 名，韓国人大学生 185 名で，調査は、2007 年に行った。このうち回答に不備のあった 7 名を除いた 475 名(日本人男性 151 名，女性 142 名，韓国人男性 80 名，女性 102 名)を分析対象者とした。**質問紙**　Rosenberg(1965)の自己評価尺度の項目を参考に，本研究のために作成した下記の 10 項目で構成されている。A1_自分は価値のある人間である。A2_自分は色々な良い資質を持っている。A3_自分は敗北者だと思う。A4_自分は物事を人よりうまくやれる。A5_自分には自慢できるところがない。A6_自分は自信がある。A7_自分に満足している。A8_もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。A9_自分は駄目な人間である。A10_自分は役に立たない人間だと思う。この 10 項目について荻野・齊藤(2002)の欲求行動調査表に基づいた内心と発言という 2 層の心理をそれぞれ 7 件法(まったくあてはまらない～非常によくあてはまる，絶対話さない～非常によく話す)で回答を得た。

【結果と考察】　因子分析と信頼性分析　自己評価尺度の下位構造を確認するために，全 10 項目について主因子法による因子分析を行った。スクリープロットにより因子数を 2 とし，再度因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。その結果，欲求・行動段階でともに 2 因子構造が確認された。第 1 因子は全 6 項目で，自分は物事を人よりもうまくやれるといったポジティブな評価の項目が含まれていたので，「ポジティブ評価」と命名した。第 2 因子は全 4 項目で，自分は駄目な人間であるといったネガティブな項目が含まれていたので，「ネガティブ評価」と命名した。因子分析と信頼性分析(Cronbach の α 係数)の結果は Table.1 に示す。

自己評価の日韓比較　因子分析によって得られた各因子を構成するそれぞれの項目の上位 2 項目を採用し，その平均値を下位尺度得点とした。各因子それぞれの自己評価得点を比較するため，因子ごとに日韓で t 検定を行った。「ポジティブ評価」では内心(t(450)=8.96, p<.001)と発言(t(473)=6.93, p<.001)で，「ネガティブ評価」でも，内心 (t(473)=5.76, p<.001)と発言(t(428)=5.41, p<.001)において有意な差が見られた。さらに，それぞれの項目ごとに日本と韓国の比較，および内心と発言の比較をするために，t 検定を行った。日韓の比較では，すべての項目において，内心(t(417~473)=3.87~13.31, p<.001)，発言(t(420~473)=2.07~9.75, p<.05~.001)ともに有意な差が見られた。内心と発言の比較では、日本は，A9(t(292)=1.39, n.s.)以外はすべて有意(t(292)=2.10~ 16.90, p<.05~.001)であり，韓国では A5 と A9(t(181)=0.32~1.38, n.s.)では有意な差が見られなかったが，他の項目はすべて有意な差が見られた(t(181)=2.51~12.83, p<.05~.001)。各項目の平均値は Figure.1 に示す。

この結果，日本人も韓国人も内心ではより高い自己評価を持っていることが明示された。そのことは発言において、自己評価が抑制されることを示唆しているといえる。また、日韓を比較すると、韓国人の方が日本人よりもポジティブな評価が高く、また、ネガティブな評価が低い、つまり、自分を低く評価しないことが示され、韓国人の方が、自己評価が高いことが示唆された。さらに，人に話すときの自己評価についてみると、韓国人の方が、ポジティブな評価においては、より多く発言していることが明示された。ネガティブな評価においては，韓国人も日本人も発言は抑制されているが、韓国人のほうが，より発言が少なくなっていることが明らかにされた。韓国人の方が、自己評価についてポジティブな側面はより多く，ネガティブな側面はより少なく自己開示されていることが明らかにされ、同じ東洋人でも違いがあり、日本人の自己卑下性や自己開示の抑制性が示唆された。

Tab.1　自己評価の因子分析結果(主因子法・プロマックス回転)，因子間相関および α 係数

	ポジティブ	ネガティブ	α 係数
A2	.958	.208	.84
A4	.749	.257	
A1	.706	.001	
A6	.605	−.152	
A5	−.535	.148	
A7	.347	−.291	
A9	−.205	.716	.60
A3	.016	.642	
A8	.343	.451	
A10	−.414	.438	
		−.592	.83

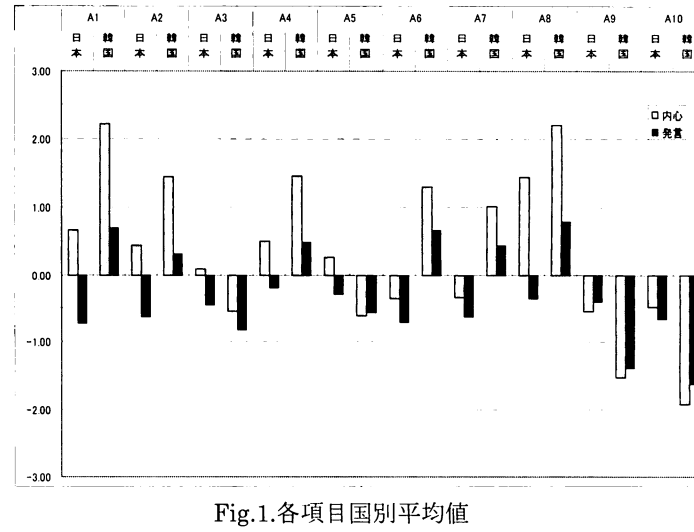


Fig.1.各項目国別平均値

(きむ　そんうん・おぎの　ななえ・さいとう　いさむ・やまだ　りゅうへい)

なぜ電車内での化粧を不快に思うのか

― 自己呈示の意図性の推測からの検討 ―

谷口　淳一
（帝塚山大学心理福祉学部）

キーワード：自己呈示、化粧、不快感情

【研究の目的】電車内で化粧をしている女性を見て、不快な気分になったという話をよく聞く。ただ、禁煙の場所で隣の男性がタバコを吸い始めたり、電車内で携帯電話で会話をしたりということに比べると、電車内で女性が化粧をしていることから直接的に被害や迷惑を被っているわけではない。それにも関わらず不快な感情を感じるのは、その女性が自分に関心を払っていないからといえる。つまり、電車内という同じ空間にいるにも関わらず、まるで自分は存在していないかのように扱われたように感じてしまうからではないのだろうか。本研究では、このことを確かめるために、電車内での化粧という迷惑行動について、自分に対して関心がある場合と、無関心が場合とで不快感情の生起が異なるのかを検討する。

【方法】[調査時期]2008年12月[調査対象者]93名（男性40名、女性53名、平均年齢19.91歳）の大学生 [調査方法]心理学関係の講義中に実施した。[調査項目]場面想定法を用いた質問紙調査を行なった。回答者に4つの場面を想定させ、その場面で感じた不快感情の程度と、登場人物に対する印象を尋ねた。場面は大きく分けて2つあり、1つは「あなたは朝、大学に行こうとして電車に乗っていました。満員電車なので、座席の前に立っていたのですが、自分の前の座席に座っていた、大学生っぽい女性が、念入りに化粧をしているのに気づきました。」という車中化粧場面、もう1つは「あなたが、禁煙と書かれた駅のホームのベンチに座っていると、隣に座っていたサラリーマン風の男性がタバコをすい始めました。」という喫煙場面である。喫煙場面は、車中化粧場面より自らに迷惑がかかる程度が高くなるように設定された。そして、それぞれの場面で、登場人物が回答者のことを気にしている関心条件と、気にしていない無関心条件をそれぞれ設定した。化粧場面の関心条件では「その女性もあなたの視線に気づいて、顔を隠しながら化粧を続けました」、無関心条件では「相手はあなたのことをまったく気にしていないようです」、喫煙場面の関心条件では「その男性はあなたの方をちらちら見てきて、あなたのことを気にしているようです」、無関心条件では「相手はあなたのことをまったく気にしていないようです」という一文を添えた。各場面の提示順序はカウンターバランスした。質問項目は以下の通りである。①不快感情：多面的感情状態尺度（寺崎ら,1982）から「敵意」（むっとした、憎らしい、気分を害した）、「倦怠」（つまらない、ばからしい、だるい）、「驚愕」（びっくりした、驚いた、動揺した）の9項目4件法を用いた。②登場人物への印象：特性形容詞尺度（林, 1978）より「個人的親しみやすさ」（親しみにくい－親しみやすい、感じのわるい－感じのよい、暗い－明るい）、「社会的望ましさ」（無責任な－責任感の強い、ふめじめな－まじめな、信頼できない－信頼できる）の6項目7件法を用いた。

【結果】不快感情、登場人物に対する印象のそれぞれについて、合計得点を求め、それらを従属変数として、場面（2：化粧場面、喫煙場面）×関心の有無（2：関心条件、無関心条件）の2要因分散分析を行った。各条件の平均値をTable 1に示す。

「敵意」については、場面（$F(1, 92)=161.56, p<.001$）の主効果と交互作用（$F(1, 92)=12.60, p<.001$）が有意になっていた。下位検定の結果、喫煙場面でのみ関心の有無の単純主効果が有意になっており（$F(1, 184)=9.41, p<.01$）、無関心条件の方が関心条件よりも敵意を感じていた。

「倦怠」については、場面（$F(1, 92)=87.96, p<.001$）の有意な主効果と、有意傾向の交互作用（$F(1, 92)=3.24, p<.10$）がみられた。下位検定の結果、化粧場面でのみ関心の有無の単純主効果が有意になっており（$F(1, 184)=5.65, p<.05$）、関心条件の方が無関心条件よりも倦怠を感じていた。

「驚愕」については、場面（$F(1, 92)=63.78, p<.001$）の主効果と交互作用（$F(1, 92)=10.16, p<.01$）が有意になっていた。下位検定の結果、化粧場面では関心の有無の有意な単純主効果（$F(1, 184)=6.52, p<.05$）、喫煙場面では有意傾向の単純主効果がみられた（$F(1, 184)=3.38, p<.10$）。化粧場面では関心条件の方が無関心条件よりも驚愕を感じており、喫煙場面では無関心条件の方が関心条件よりも驚愕を感じていた。

「親しみやすさ」については、場面（$F(1, 92)=52.35, p<.001$）と関心（$F(1, 92)=6.06, p<.05$）の有無の有意な主効果がみられ、有意傾向の交互作用がみられた（$F(1,92)=2.87, p<.10$）。下位検定の結果、喫煙場面での関心の有無の単純主効果が有意になっており（$F(1, 184)=8.63, p<.01$）、関心条件の方が無関心条件よりも親しみやすさを感じていた。

「社会的望ましさ」については、場面（$F(1, 92)=62.86, p<.001$）と関心の有無（$F(1, 92)=7.83, p<.01$）、交互作用（$F(1, 92)=4.16, p<.05$）がすべて有意になっていた。下位検定の結果、喫煙場面での関心の有無の単純主効果が有意になっており（$F(1, 184)=11.99, p<.01$）、関心条件の方が無関心条件よりも社会的望ましさを感じていた。

【考察】予想に反して電車内で化粧をしている女性が、自分のことを気にしている場合の方が気にしていない場合よりも、不快感情を感じていた。これは、電車内で化粧をするという行為自体がそのまわりの人たちの存在を無視していることを意味しており、それを見ている自分に気づいてもなおも化粧を続けたことに対して不快な感情を抱いたのではないかと考えられる。ただし、このような自分に気づいてもなおも化粧を続けたという行為は不快感情を高めたものの、その女性に対する印象を悪化させたわけではなかった。

これに対して喫煙場面では、自分のことを気にしている場面の方が不快感情が低くなり、その男性に対する印象も気にしていない場合よりも良かった。自分のことを気にしているとうことから、タバコの煙りが自分に向かないように配慮したなどが推測され、このような結果になったと考えられる。

Table 1　各場面の平均値

	化粧場面		喫煙場面	
	無関心	関心	無関心	関心
敵意	6.19	6.45	10.28	9.62
倦怠	6.29	6.80	8.61	8.60
驚愕	5.82	6.35	8.05	7.67
親しみやすさ	10.45	10.59	8.12	8.88
望ましさ	9.22	9.52	6.33	7.35

（たにぐち　じゅんいち）

マレーシア人留学生による日本人の人間関係スキーマ

内藤　哲雄
（信州大学人文学部）

キーワード：日本人の人間関係スキーマ、マレーシア人留学生、PAC 分析

【目的】外国人留学生は、日本人との交流の中で母国との人間関係のあり方の違いに直面し、日本人の人間関係の特徴に気づきやすい。本研究では、マレーシア人留学生を対象とし、日本人との交流を通じて獲得された「日本人の人間関係スキーマ」をＰＡＣ分析により検討する。

【方法】＜被検者＞マレーシア人（中国系）女子留学生で、20歳代前半。学部２年生。母国語はマレー語、母とは中国語（北京語）、父とは英語。日本語学習歴３年。日本滞在３年。

＜連想刺激と手続＞「あなたは、＜日本人の人間関係＞について、どのようなイメージが浮かんできますか？　＜日本人の人間関係＞の特徴として思い浮かぶのはどのようなことでしょうか？」と口頭で教示し、文章も提示し、連想反応を得た。次に重要順に並べ換えさせた後、各項目の直感的類似度を７段階で評定させた。ついでウォード法でクラスター分析し、各クラスターのイメージや併合理由について聴取した後、項目単独での連想イメージと＋－０イメージを質問した。

【結果】各項目の重要順位、クラスター分析及び単独＋－イメージの結果は、Fig.1 のようになった。

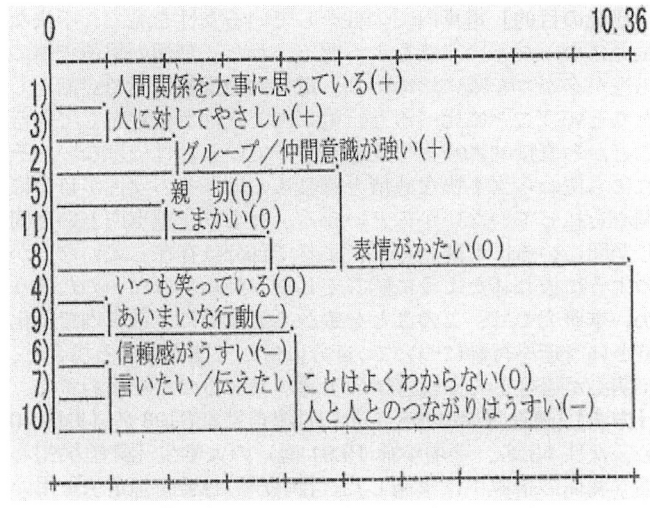


Fig.1　「日本人の人間関係」のデンドログラム
1)左の数値は重要順位
2)各項目後ろの(　)内符号は単独でのイメージ

＜被検者による解釈＞クラスター１は、「人間関係を大事に思っている」～「表情がかたい」の６項目。うーん、日本人は親切です。で、グループ意識を大事にしています。はい。人間関係を大切に思っているのは、サークル活動から思い浮かべました。人に対してやさしいは、アルバイトのときにお客さんと接していることを思い浮かべました。思い出しました。グループ意識が強いと感じるのは、花見、日本の人たちと花見をするときでした。親切に関して浮かんだイメージは、東京にいるとき（大学入学前）の日本人の母親（代わり）のことでした。こまかいと感じるのは、日本人の仲間意識に物事をこまかく要求しています。表情がかたいと思っていたことは、はじめて日本人の友達と話すときのことでした。……（Q:それではどんな内容でまとまっていると感じますか？）「恥ずかしい」と「友達がほしい」グループ。「多く作りたい」「多く友達を作りたい」グループのこと。……（Q:他にはどうですか？）表情がかたいときは冷たく感じます。これぐらいですね。

クラスター２は、「いつも笑っている」～「人と人とのつながりはうすい」の５項目。信頼関係がうすい。うーん、ちょっと真面目ではない。うーん、あんまり心を、人に対する心を開かない。閉塞という感じをします。意味、行動や意味がわからない。をわかりません。いつも笑っているから、その人の本心をわかりません！　うー、うーん、マイナスのイメージがします。うーん、…正直、人に対して正直に言いたいことを言えばいいと思います。思っています。……日本人と本当の人間関係を持ちたい。自分のことも相手によく伝えたい。ーうーん、…人と人とのつながりは、何より大切だと思っています。以上です。（Q：それではどんな内容でまとまっていると思いますか?）マイナスな人間関係、…うん、です。改善できるところはしたいと思う。こんな感じです。

クラスター１と２の比較：似ているのは人間関係のこと。でも、お互いのこと（クラスター１と２は互いに）対立しています。対等かな？　人間関係を大切に思っているけど、あいまいな行動、人と人とのつながりはうすくなると感じています。「人間関係を大切」は上（クラスター１）、「あいまいな行動、人と人とのつながりはうすくなる」は下（クラスター２）。対立は、「グループ意識が強い」は上、「言いたいこと／伝えたいことはよくわかりません」は下。

項目単独イメージの補足質問：*人間関係を大事に思っている*→友達が大切。正直。真実を追究する。*人に対してやさしい*→笑顔ありがとう。大丈夫。*グループ／仲間意識が強い*→手をつながっている。肩を揃えている。横並び。*親切*→手。日本人のおばさん。*こまかい*→仕事、アルバイト先の。レポート。*表情がかたい*→日本人真面目すぎる。つまらない。めんどくさい。*いつも笑っている*→うそ、信じられない。信用できない。*あいまいな行動*→わけがわかりません。*信頼感がうすい*→マイナスイメージ。暗い。嫌い。*言いたい／伝えたいことはよくわからない*→あいまい。何で？　つき合いたくない。*人と人とのつながりはうすい*→楽しい人生ではない。友達でもない。離れたい。

【考察】クラスター１は、仲間意識が強く、人にやさしく親切に接し、人間関係を大事にするが、仲間での行動基準がこまかく、基準を守ろうと緊張し表情がかたいというイメージである。人間関係を大事にし、人に優しく、仲間意識が強いの下位３項目はいずれも＋であるのに対して、親切、こまかい、表情がかたいの下位３項目はいずれも、受け入れがたく、距離を置いたりガラス越しのように疎隔して、感情を感じない０項目である。＜仲間意識の強さと集団基準や他者への細かい配慮＞のクラスターと命名できよう。

クラスター２は、集団の行動基準からの逸脱を避け、相手の感情を害さないようにする日本的な配慮行動を、被検者は、本心を隠して、相手に心を開かない閉塞的な関係として感じ、信頼感のうすい人間関係であるとネガティブに感じている。受け入れられず疎隔する０項目と、クラスター１とは反対のマイナス項目から構成されている。＜笑顔とあいまいな行動で本心を隠すうすい人間関係＞のクラスターと解釈できよう。

（ないとう　てつお）

大学生における自己超越傾向と自己受容が主観的幸福感に及ぼす影響

○赤嶺直子[1)]　井上孝代[2)]
([1)] 明治学院大学大学院心理学研究科　[2)] 明治学院大学)

キーワード：主観的幸福感、自己超越傾向、自己受容

【研究の目的】内閣府の調査によれば、今後の生活において、62.6%の人が心の豊かさやゆとりのある生活をすることに重きをおきたいと答えた(内閣府, 2008)。ここから、物質的な豊かさよりも心の豊かさの方を重点的に考えているという現代日本人の価値観の移行がうかがえる。「ものの豊かさ」は、われわれに物的欲求こそが幸福の条件である、という価値観を形成させた(中村, 1998)。では、物質的な豊かさは心の豊かさや幸福感と関連しているのであろうか。

主観的幸福感とは生活全般の満足感、すなわち個人が自らの「生」を全体としてどのくらい好ましいものとして見なしているかに関する概念と、さらに肯定的な情動が経験される頻度、及び強度によって表わされる概念である(Argyle, 1987; Strack, Argyle, & Schwartz, 1991; 中村 1998)。また、Elkinら(1988)は「超越的次元」を「意識的な自己が拡張されて体験される無意識的もしくはより大きな自己の領域」としており、自己超越とはこのような超越的次元を体験することであると考えられる。自己超越と主観的幸福感の関連については、自己超越傾向が高い人物ほど主観的幸福感が高いことが中村(1998)によって明らかにされている。また根建・田上(1995)は主観的幸福感の主要因のひとつに自己受容をあげており、主観的幸福感を高めるためには自己受容度を高めることも有効であると考えられる。そこで本研究では、先行研究の自己超越と主観的幸福感の関連を再検討し、主観的幸福感の主要因のひとつである自己受容を加えて自己受容と主観的幸福感の関連について検討することを主要な目的とする。また、自己超越と自己受容の関係についても検討する。

【方法】対象者と実施方法：首都圏の大学に通う男女大学生146名(男性73名、女性73名、平均年齢20.69歳、SD=1.51)を対象とし、倫理的配慮のもと、質問紙調査を実施した。

実施期間：2008年10月下旬から12月上旬

質問紙：1.自己超越傾向尺度(STS-2)

中村(1998)による18項目を使用した。5件法での評定を求めた。

2.心理的幸福感尺度

中村(1998)による人生満足感、物質的生活満足感、精神的生活満足感の3項目を使用した。5件法での評定を求めた。

3.自己受容測定尺度

沢崎(1993)による34項目を使用した。「身体的自己」「精神的自己」「社会的自己」「役割的自己」「全体的自己」の5因子構造であった。5件法での評定を求めた。

【結果】自己超越傾向尺度と心理的幸福感尺度、自己受容測定尺度それぞれの信頼性分析を行い、α係数を算出した(α=.86, α=.73, α=.92)。各変数の間において相関係数を算出したところ、自己超越傾向尺度と心理的幸福感尺度、自己受容測定尺度と主観的幸福感尺度との間に有意な正の相関が認められ(r=.350, p<.01, r=.548, p<.01)、さらに自己超越傾向尺度と自己受容測定尺度の間にも有意な正の相関がみられた(r=.306, p<.01)。また、自己超越傾向尺度と自己受容測定尺度それぞれの得点から対象者を高群(平均値以上)と低群(平均値未満)に分類したものを独立変数、心理的幸福感尺度を従属変数とした分散分析を行ったところ交互作用はみられず、自己超越傾向尺度と自己受容測定尺度それぞれの主効果において有意な差がみられた(F(1,145)=4.24, p<.05、F(1,145)=43.61, p<.01)。さらに自己超越傾向尺度と自己受容測定尺度を独立変数、心理的幸福感尺度を従属変数とした重回帰分析を行ったところ、それぞれが有意な影響を与えており(β=.202, p<.01、β=.487, p<.01)、自己受容因子ごとの重回帰分析を行ったところ(Table1)、特に「社会的自己」因子の影響が大きいことが示された(β=.569, p<.01)。また、すべての変数において男女差を検討したところ、いずれにおいても有意な差はみられなかった。

Table1 心理的幸福感尺度を従属変数とした重回帰分析における自己受容測定尺度の各因子の標準偏回帰係数

自己受容測定尺度	心理的幸福感尺度
身体的自己	-.116
精神的自己	.054
社会的自己	.569**
役割的自己	-.013
全体的自己	.268**
R^2	.492**

**p<.01

【考察】信頼性分析により、各尺度には十分な信頼性が得られたということが示唆される。

(1)自己超越および自己受容と主観的幸福感の相関

本研究より、自己超越および自己受容と主観的幸福感の間に正の相関があるということが認められた。さらに心理的幸福感尺度の項目別にみると「人生満足感」と「精神的生活満足感」においては有意な正の相関がみられたが、「物質的生活満足感」については有意な相関がみられなかった。ここから、自己超越が物質的な側面ではなく、主に精神的な側面についての主観的幸福感を高める要因となることが示唆された。本研究におけるこのような結果は、心の豊かさに重きを置くというような現代人の価値観を顕著に表しているであろう。また自己超越と自己受容にも正の相関がみられたことから、自己超越傾向が高まると、自己の良い面もそうでない面も肯定的に捉えることができ、その結果として自己受容度も高まるのではないかと考えられる。よって、自己超越的な傾向が高まるとありのままの自分を認められるようになるということが示唆される。

(2)自己受容測定尺度の因子別にみた主観的幸福感への影響

自己受容測定尺度の因子別に行った重回帰分析から、「社会的自己」因子が主観的幸福感に与える影響が大きいことが示された。大学生という青年期後期の時期の課題として、社会における自分の位置づけや居場所を明確にすることがあげられており(水野, 2000)、ここからも、社会における自分の位置づけを獲得し、それを受け入れることが大学生にとっての主観的幸福感に大きく影響しているといえる。

【主要引用文献】

中村雅彦　(1998).　自己超越と心理的幸福感に関する研究　愛媛大学教育学部紀要. 第Ⅰ部, 教育科学, 45, 59-79.

(あかみね　なおこ・いのうえ　たかよ)

依存性研究の現在

―日本における愛情的依存・利用主義的依存・服従的依存の関係と構造について―

鈴木ゆみ（明治学院大学大学院）・井上孝代（明治学院大学）

キーワード：依存性の3次元，文化，日本

【問題と目的】依存性は，発達心理学，とりわけ社会性の発達における健康で日常的な対人関係において適応的，積極的な役割を果たしており，人間の発達を考える上で欠くことのできない基本的な存在様式と発達プロセスをもつとされる。一方，臨床心理学や精神病理学の領域では，ネガティブな情動や思考，行動様式として捉えられており，1980年代のDSM - Ⅲ（APA，1984）では，2軸における人格障害の1つとしてその診断基準が示されている。

Bornstin（1993）によれば，1950年代以降，アメリカにおいて依存性に関する研究論文は延べ500論文を超え，臨床現場のみならず，発達心理学，社会心理学などさまざまな領域において今なお活発な議論が行われている一方，日本における研究は極めて少ない（90年までで9論文）。そこで本研究では，これまでさまざまな理論的立場から議論されてきた依存性の概念を，5因子モデル（BIG5）との関連から新たな依存性像を描き出ぎしたPincus & Wilson（1995）らに基づき，それらが日本においてどのような構造をもつのかを検討し，日本における依存性研究の足がかりとしたい。

【方法】調査対象は，国立大学大学生，大学院生92名，私立大学大学生227名，合計319名（男110名，女209名）。平均年齢19.8歳。調査時期は，2005年6月。使用尺度は，1）Pincus & Gurtman(1995）がサーカンプレクス構造分析により選定した「依存性」に関する3次元からなる36項目。Pincus & Wilson（2001）による27項目の英語版があるが，本研究では，日本語版作成のため，Pincus & Gurtman（1995）の36項目すべてを使用した（6件法）。

【結果と考察】ベクター依存性目録日本語版の因子分析において，最も適応感が高い依存形態である愛情的依存は，概ねPincus & Wilson（2001）と同様の因子構造が得られた。利用主義的依存は，他者からの受容や承認を獲得，維持することを求め，葛藤を避けることを特徴とするが，項目数は3因子中最も少ない7項目で構成され，項目の異動も見られた。信頼性係数も3因子中最も低く（α＝.76），日本語版における信頼性と妥当性には疑問が残る結果となった。他者からの道具的なサポートを獲得，維持することを求め，承認や支持されないことへの怒り，強迫的な世話を求めることなどの不適応的な行動との関係があるとされている「服従的依存」因子は，3因子中最も項目数が多く信頼性係数も最も高かった（α=.86）。対人関係が最重要視される日本では(間人主義)，対人関係の獲得や維持のために，議論で相手に屈したり自分を抑えてしまうことなどと関係があるかもしれない。

性差については，依存性は一般に，女性の方が男性よりも高いとされているが（Bornstein，1995b），本研究では利用主義的依存の男女差はみられなかった。このことから，利用主義的依存の因子の信頼性と妥当性に課題があり，3次元の構造そのものを日本においては検討する必要があることを示唆している。

Table 1　3ベクター依存性目録　因子パターン

	項目	因子		
		F1	F2	F3
24	私は，自分の判断にとても自信がある。(R)	.69	.11	-.15
36	私は,自分がすることはたいていうまくいくと思っている。(R)	.65	-.07	-.05
18	私は，議論の途中で簡単にあきらめてしまう。	.63	.00	-.03
30	生活の中で起こるたいていの問題には,うまく対処する自信がある。(R)	.62	.03	-.23
12	私は自信にあふれている。(R)	.61	.00	.01
9	私はまったく自信がない。	.59	-.12	.30
27	自分で何かを決めなければならないときには,とても困ってしまう。	.59	.24	-.01
3	私は,先頭に立つよりは人についていくほうがいい。	.59	-.12	.11
15	私は，議論をしてもすぐに相手に屈してしまう。	.55	.03	.14
6	私は,よいリーダーになろうとは思わない。	.49	-.16	-.07
33	人から何か言われると，自分ですでに決していたことでも容易に変えてしまう。	.44	.12	.21
28	親友がいなくなることは,私にとってとてもこわい。	.02	.84	-.08
26	私は，大切に思っている人からみとめられないと，つらい気持ちになる。	.01	.73	.01
19	親友がいなくなったら，自分の大切な一部を失ったような気になるだろう。	.01	.65	.04
25	人から孤立すると不幸になるに違いない。	.12	.64	-.07
34	人から好かれたり，認められたりすることは私にとって重要だ。	-.11	.62	.13
16	私は,人と,心と心の結びつきをしっかりと持つことができれば安心する。	-.05	.58	.08
22	私は,人との関係が続かないとしてもかまわない。(R)	.01	.56	-.04
31	私は大好きな人たちと離れてしまうことなどできない。	.00	.54	.01
10	同じ経験を分かち合うことで，その経験をもっと楽しめると思う。	-.08	.41	.11
5	友だちから頼まれたことを断ることはとても難しい。	-.04	.04	.70
33	私は,人に「いやだ」とか「できない」とはいえないたちである。	.12	-.14	.60
1	私はよく，自分のしたいことを我慢してでも，親しい人を喜ばせようとしたり，助けようとしたりする。	-.26	.06	.59
2	私は人の気持ちを傷つけはしまいかと不安である。	-.04	.11	.57
23	私は人に満足してもらいたくて自分がつまらないと思うことでもしてしまう。	.00	.02	.53
20	私は親しい人を攻撃したり傷つけてしまったりするのではないかと，とても気になる。	.01	.05	.48
8	私は必要以上に人に謝ってしまう。	.23	.01	.42

(R) は逆転項目。

【まとめ】日本における依存性研究が少ないのは，「甘え」や協調性といった長い年月をかけて育まれてきた人間関係に関わる概念が日常に埋め込まれ意識化されにくい，あるいは欧米を手本とした社会構造の変化によって自立と対立的に捉えられた依存の概念は好ましくないためであると推測することもできる。

人間は，生物学的・個人的であると同時に歴史・文化的存在であり，依存性も社会・文化によって異なる可能性がある。文化の中に生きる人間に関する心理学研究のさらなる蓄積が望まれる。

（すずきゆみ・いのうえたかよ）

大学生の心の専門家への援助要請意図規定要因の検討

―スティグマに焦点を当てて―

○山本　茉樹[1)]　飯田　敏晴[1),2)]　井上　孝代[2)]

([1)] 国立国際医療センター戸山病院第一専門外来部　[2)] 明治学院大学心理学部)

キーワード　：援助要請意図、社会的スティグマ、自己スティグマ

Ⅰ．問題と目的

今日心の問題や対人関係の問題を抱えながらも専門家に援助を求めない人は少なくないとされている(Corrigan, 2004)。こうした専門家への援助要請率の低さの背景には、心理的コストである専門家へ援助を求めることに対する社会的スティグマ・自己スティグマの2種類のスティグマが指摘されている(Corrigan, 2004)。そこで本研究では、援助要請行動生起過程モデル(高木, 1997)を基にし、問題場面に直面した際の心の専門家への援助要請意図に及ぼす影響要因の過程モデルを作成し、心理的コストとなる社会的スティグマ・自己スティグマが心の専門家への援助要請意図(以下、援助要請意図と略記)に及ぼす影響について検討することを目的とする。

Ⅱ．方法

調査対象：A大学の大学生220名（男性133名、女性82人、無記入5名)に質問紙を夏期の集中講義の授業時間に配布し、無記名式の集合調査を行った。回答に不備のあった7名を除いた213名（平均年齢：20.48歳）を分析の対象とした。調査時期：2008年8月。質問紙の構成：①フェイスシート(年齢、性別、過去の専門家への援助要請経験の有無、周囲の人で専門家への援助要請経験をした人を知っているか否か)、②Self-Stigma of Seeking Help(Vogel, Wade, & Haake, 2006)、③Stigma Scale for Receiving Psychological Help (Komiya, Good, & Sherrod, 2000)：②と③はネイティブチェックを受け日本語に翻訳したものを使用、④援助要請意図：問題場面設定のたけ Hopkins Symptom Checklist (Green, Walkey, McCormick, & Taylor, 1988)：5つの症状（身体症状・強迫症状・対人関係過敏症状・不安症状・抑うつ症状）をそれぞれ短いシナリオにし、各シナリオに対してどの程度援助を求めるかを尋ねた(4件法)、⑤：④のシナリオに対する問題の深刻さの程度(4件法)、⑥：④のシナリオに対する自身の問題対処能力の程度(4件法)、⑦専門家へ援助を求めることを他者へどの程度勧めるか(4件法)を尋ねた。

Ⅲ．結果

問題の深刻度、対処能力が、援助要請意図に及ぼす影響について、援助要請意図に及ぼす影響要因の過程モデルを構成し、パス解析を行った。モデルの適合度指標は GFI=.937、AGFI=.868、AIC=66.719 であり、適合性はあったといえる(Fig.1)。問題の深刻度から対処能力、対処能力から援助要請意図、援助要請意図から他者への勧めのパスは全て有意であった。つまり、問題を深刻と捉える程、対処能力は低く見積もられ、援助要請意図が向上していることが示された。また、援助要請意図が高い程、他者へも専門家へ援助を求めることをより勧める可能性があることが示唆された。さらに、社会的スティグマから自己スティグマ及び自己スティグマから対処能力へのパスも有意であったが、社会的スティグマから援助要請意図へのパスと自己スティグマから援助要請意図へのパスは共に有意ではなかった。以上本研究から社会的スティグマは、自己スティグマを通じて、問題対処能力の査定に影響を及ぼしていることが認められた。

援助要請意図に及ぼす影響要因の過程モデル

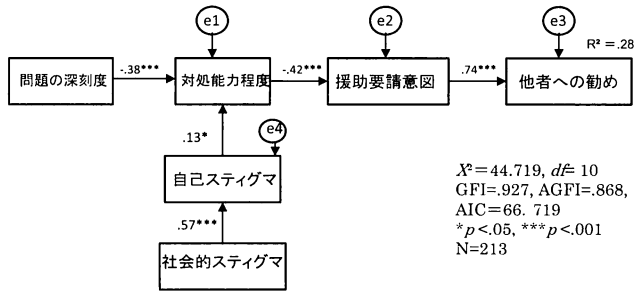


Figure 1

Ⅳ．考察

これまでスティグマは専門家へ援助を求めるか否かの意思決定過程における心理的コストとして扱われていた。しかし本研究ではスティグマは援助要請意図ではなく、その前段階である問題対処能力の査定に対し影響を及ぼしていることが明らかとなった。社会的スティグマは自己スティグマを介して問題対処能力の判断に影響を与えていた。これは社会が抱いているスティグマ的な考えを内在化してしまうことで、自己スティグマが高まり、自らに対して否定的な態度をもってしまう (Corrigan & Watson, 2002)ためと考えられる。その結果、問題の対処能力を実際よりも高く見積もることで自尊心や自己価値を低める自己スティグマを回避し、援助要請意図が低減していることが推察される。

以上本研究から、援助要請意図は自らが抱える問題を深刻であると捉え、問題への対処能力が低いと判断することで高まるという一連の援助要請の生起過程が踏まれていることが明らかとなった。また、スティグマが個人の問題対処能力を実際よりも高く評価させる働きをしている可能性が示されたことは、今後専門家への援助要請意図を向上させるための介入方法を検討するうえで意義があったといえる。今後はスティグマが個人の問題対処能力の判断に影響を及ぼしていることを考慮し、スティグマの低減を図る介入方法の検討が課題であるといえる。

主要引用参考文献

高木修 1997　援助行動の生起過程に関するモデルの提案, 関西大学, 社会学部紀要, 23(1), 1-21.

Corrigan, P.W. (2004). How stigma interferes with mental health care. *American Psychologist*, 59(7), 614-625.

(やまもと　まき・いいだ　としはる・いのうえ　たかよ)

「慰安婦」問題とレイプ神話との関連

―男女の比較に焦点を当てて―

○中野真希[1)]　伊藤武彦[2)]　井上孝代[3)]
([1)] 明治学院大学大学院心理学研究科　[2)]和光大学　[3)] 明治学院大学)

キーワード：「慰安婦」問題，レイプ神話，性差

【研究の目的】 「慰安婦」問題は，学者やNGOが被害者の代弁的な立場から発言し，旧日本軍による「慰安婦」の強制性はあったとする肯定派と，「慰安婦＝公娼」論的な主張をし，旧日本軍による強制性はなかったとする否定派の2つの対立軸がある(大沼，2007)。一方で，慰安所を必要悪だとして肯定する旧軍人の考えの背後にある，女性を「もの」として考える意識があった(吉見, 1995)など，「慰安婦」問題において，性的行為の合理化が起きていたことが示唆される。

こうした男性による性的行為の合理化意識は「レイプ神話」(Burt，1980)と呼ばれ，「加害者を免責し，被害者の責任を問うものである」と定義されている。レイプ神話が「慰安婦」問題に内在しているのなら，それにより歴史的事実の態度や知識が妨げられ，「慰安婦」問題が未だ解決されない要因となっているのではないかと予想される。

そこで，本研究では「慰安婦」問題に関する態度や知識を明らかにするとともに，レイプ神話がどれほど支持されているかを検討し，これらの関連性を明らかにする。

【方法】 東京都内の私立4年生大学の学生計150名（男性73名，女性76名，不明1名，平均年齢20.9歳，SD=1.8）を対象に，倫理的配慮のもと質問紙調査を行った。質問項目には，ⅰ)性別，年齢ⅱ）「慰安婦」問題に関する尺度(北風，2008)：知識を問うもの，4項目2件法。ⅲ）「慰安婦」問題に関する尺度(北風，2008)：態度を問うもの，4項目6件法。ⅳ)レイプ神話尺度(大渕，石毛，山入，井上，1985)：「暴力的性の容認」「女性の被強姦願望」「女性のスキ」「ねつ造」といった女性の条件に焦点が当てられている4つの神話を取り上げたもの，20項目5件法である。

【結果】

(1) レイプ神話の支持率と回答傾向

レイプ神話の支持率と回答傾向を評定法で求めたところ，暴力的性の容認の項目では，表現の仕方によって支持率に差があり，被強姦願望では，男性のほうが，無理やりセックスすることを正当化する傾向があった。女性のスキでは，女性のほうが支持する傾向があり，ねつ造では，男女とも10%弱で支持する傾向にあった。

(2)「慰安婦」問題とレイプ神話の相関関係

「慰安婦」問題とレイプ神話の相関関係を求めたところ，「慰安婦」問題に関する態度とレイプ神話の合計得点との間に負の相関が見られた(r=-.22, p<.01)。態度とねつ造との間に負の相関が見られた(r=-.19, p<.05)。また，「慰安婦」問題に関する態度と知識との間に正の相関が見られた(r=.58, p<.01)。したがって，「慰安婦」問題に関して，許されることではないと考える人はレイプ神話尺度の得点が低いことが明らかになった。また，「慰安婦」問題に関して正しい知識を身に付けている人は，「慰安婦」問題を許してはいけないと考える傾向があることが明らかになった。さらに，男女別で相関関係を求めたところ，男性は「慰安婦」問題とレイプ神話の相関が見られず，女性は「慰安婦」問題に関する認識とレイプ神話に負の相関が見られた。

【考察】

(1) レイプ神話の支持率と回答傾向

女性のスキの支持率では，男性より女性のほうが2倍以上高かった。これは，女性のほうが自ら誘いにのって無理やりセックスされても仕方がない，自分の責任だと考える傾向にあると考えられる。スキがあったと被害に遭った自分を責めることで，さらに自分を傷つけ，二次被害が起きる。この二次被害を防ぐためにも，被害者のケアと同時に，周囲の人々に対する教育的介入も必要不可欠となる。また，「強姦された女性は魅力がなくなる」の項目では，女性より男性のほうが支持する傾向にあった。抵抗できなかった可能性があるにも関わらず，強姦されたために魅力がなくなるという考えを抱くことは，被害者に対する偏見である。偏見を予防するためにも，レイプに関する教育的介入が必要不可欠となる。

(2)「慰安婦」問題とレイプ神話の相関関係

レイプ神話の支持度は慰安婦問題に関する態度に直結する可能性があるが，正確な知識を持てるか否かには影響せず，正確な知識の保有は独立した要素であると考えられる。「慰安婦」問題に関する態度と知識の関連性の分析では，これらに強い相関関係があることが明らかになった。正確な知識を有しているほど，「慰安婦」に関する理解が深まり、被害者への偏見も予防することができると考えられる。レイプ神話と「慰安婦」問題に関する知識には関連がないため，教育的介入は独立して必要であり，また効果もあると推測できる。

(3) 性差における「慰安婦」問題とレイプ神話の相関関係

男性における「慰安婦」問題とレイプ神話の相関関係を見たところ，レイプ神話の合計得点は，「慰安婦」問題に関する知識と態度に有意な関係を示さなかった(r=-01，r=-09)。そのため，男性は正常時におけるレイプと異常時におけるレイプは違ったものだと考える傾向がある。例えば，「戦争中におけるレイプは仕方ないが、日常におけるレイプは許されない」と思い，戦時中におけるレイプを容認していると考えられる。したがって，男性に対してレイプに対する教育的介入を行うと同時に，独立して「慰安婦」問題に関する教育的介入が効果的であると推測できる。女性における「慰安婦」問題とレイプ神話の相関関係を見たところ，レイプ神話の合計得点と「慰安婦」問題に関する態度との間に負の相関が見られた(r=-.36, p<.01)。レイプ神話の合計点が高い，つまり支持しているほど，「慰安婦」問題の態度の合計点が低い，つまり，「慰安婦」を許容する傾向が弱かった。したがって，女性は正常時におけるレイプと異常におけるレイプを同じことと捉え，レイプ神話が「慰安婦」問題に内在していることが考えられる。このことから，女性は正常時のレイプも異常時のレイプも同じほど辛く耐えがたいと思っていると推測できる。

【引用文献】

北風菜穂子　2008　日本の大学生のレイプ神話受容態度と変容に関する臨床心理学的研究　明治学院大学大学院心理学研究科　修士論文　未公刊

大渕憲一　石毛博　山入端津由　井上和子　1985　レイプ神話と性犯罪　犯罪心理学研究，23，2，1-12

（なかのまき・いとうたけひこ・いのうえたかよ）

白杖を用いた対象の硬さ知覚

— 指先と白杖による硬さ知覚その２・押す方法 —

布川 清彦
（東京国際大学 人間社会学部）

キーワード：白杖，硬さ知覚，視覚障害

【研究の目的】

白杖ユーザは，白杖により路面情報や障害物の有無を検知し，そして移動のための手がかりとなるランドマーク情報を収集・確認する．白杖ユーザに行った白杖利用に関するヒアリングでは，訓練期間を経て，日常生活において白杖を用いる際には，訓練以外の使用方法を用いて移動しているといった報告が得られた．また，歩行時に利用するだけではなく，白杖に触れた対象の特性を探ったり，対象の認知を行ったりといった，自分なりの利用方法を用いて環境認知を行っているという報告もあった．環境認知のための白杖利用の方法について検討するために，先行報告（布川，2008）では，利き手の人差し指の先と利き手で握った白杖のそれぞれでゴムを叩き，ゴムの硬さについてマグニチュード推定を行った．その結果，指先を用いて実際に対象に触れるよりも，白杖を用いて対象を確認した方が，硬さの違いについては感度が良い事が明らかになった．さらに本研究では，探索方法が異なる場合のゴムの硬度と白杖を用いた硬さ感覚との関係を明らかにするために，押して確認する方法で実験を行う．

【方法】

硬さを推定する対象として，一辺の長さが 300mm の正方形で，その厚さが 12mm であるゴムを用いた．ゴムの硬さは，20 度から 10 度刻みで 90 度までの 8 種類であった（単位：JIS A；デュロメーター硬度計 GS-719G タイプ A で計測，竹井機器工業株式会社）．晴眼大学生 21 名が参加し，あらかじめ木製の円盤（直径を変数とする）を用いて，マグニチュード推定の手続きについて練習を行った．参加者は，1)利き手の人差し指の先と 2)白杖のグリップの平らな面に人差し指をのばした状態で合わせ，親指と他の三指で軽く握る方法を用いて握った白杖（主体，アルミニウム合金シャフト（軽金属）．長さ 1200mm．うちゴムグリップ部 260mm，ナイロン製石突部 75mm．重さ約 200g．ジオム社）の先端で，それぞれ 1 秒間に 2 回，ゴムを押して硬さの推定値を報告した．各ゴムについてそれぞれ 1 回だけマグニチュード推定を行った．値の決まった標準刺激やモデュラスは用いなかった．参加者は耳栓をした上にイヤーマフ，そしてアイマスクを装着して推定を行った．指条件の後で白杖条件を行った．人差し指を用いた場合は，参加者の前に机を配置し，机上にゴムを置いた．白杖を用いた場合は，観察者は両足を揃えて立ち，正面にゴムを置いた．どちらの場合にも，参加者が実験に入る前に，楽な姿勢で推定ができるように位置関係を調整した．

【結果】

得られたマグニチュード推定値の幾何平均を算出し，両対数グラフの横軸にゴムの硬さ，縦軸に推定値をとってプロットし，冪関数で近似した．その結果，利き手の人差し指で押す条件での冪指数は 0.59 であり（図１），白杖で押す条件では 0.66 であった（図２）．どちらの条件においても，先行報告で行われた叩く条件と比較するために，先行報告（参加者 7 名）よりも多くの参加者から得られた叩く条件の結果を併せて表示した（参加者 21 名）．人差し指と白杖のどちらの条件でも，冪指数が 1 よりも小さいことから，ゴムが硬くなるにつれて硬さがかなり増加しても硬さの感じはそれほど増加しないことになる．

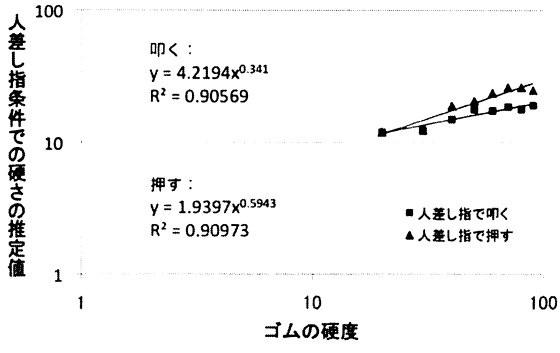


図１ 人差し指条件でのゴムの硬度と硬さの推定値の関係

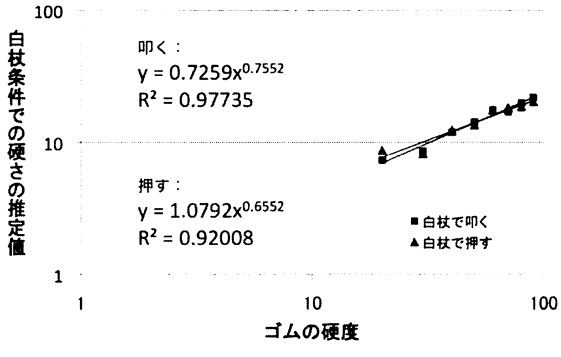


図２ 白杖条件でのゴムの硬度と硬さの推定値の関係

【考察】

押す方法を用いた本実験結果と先行報告で行った叩く方法を用いた結果を比較すると，人差し指条件では叩く方法よりも押す方法の方が相対的に硬さの変化に対する感度が良い事になる．しかし，先行報告と同様に，人差し指条件よりも白杖条件の方が大きい冪指数であり，白杖を用いて対象を確認した方が硬さの違いについては感度が良い．さらに，わずかではあるが，押す方法よりも叩く方法でより大きい冪指数が得られており，白杖を用いた場合には対象の硬さを知覚するために必要な情報が，人差し指で直接対象の硬さを知覚する条件よりも強調され，さらに，押す方法よりも叩く方法で，より強調する効果が得られている事が示唆される．これにより，対象の属性の一つである硬さを知覚する時に，白杖を用いる場合には，叩く方法がより効果的であると考えられる．

【引用文献】

布川清彦 2008 白杖を用いた対象の硬さ知覚 日本応用心理学会第 75 回大会発表論文集

【謝辞】

本研究は，科学研究費補助金（課題番号 20500487）の助成を受けて行われた．

（ぬのかわ きよひこ）

ＭＳＣ（創造的構え）テスト改訂の試み（13）

因子分析による質問項目の識別度３

○寺澤美彦　久米　稔　成田 猛　高野隆一　伊賀憲子　内藤美智子
(日本福祉教育専)(適合性評価研究所)(秋田看護福祉大学)(ノースアジア大学)(文化女子大学)(松本短期大学)

keywords：創造的構え、テスト、因子分析、

[はじめに]

創造性の発揮には創造的思考能力のほかに、それをバックアップするパーソナリティが必要不可欠であるとされている。そこで本研究者らはそのパーソナリティ変数に当たる創造的構え（ＭＳＣ）を仮定し、この創造的構えを測定するための質問紙の作成・改訂を 10 数年にわたり試みている。

2006 年には、2002 年に改訂されたＭＳＣテスト 30 項目版を用いて、プロマックス法およびバリマックス法による因子分析を行い、両結果の比較、ならびに、あらかじめ設定された尺度と因子分析結果との関係の考察がおこなわれた(2006、日本応用心理学会第 73 回発表論文集)。そこではプロマックス解では６因子が、バリマックス解では８因子が抽出され、双方の第２因子、第３因子、第４因子は、理論的に設定した挑戦性、慎重性、積極性を意味するものとして一致した結果となったものの、客観性、自己信頼性、探究性については、どちらの方法においても、ひとつの因子にまとまらないという結果を得た。

そこで 2007 年には、ＭＳＣの最終的な尺度の作成を目標に、30 項目では不安定な項目が含まれることや、実施がやや困難であることから、６因子指定のバリマックス法を用いてあらためて因子分析を行い、各因子４項目ずつの 24 項目からなるＭＳＣテストの作成を試みている（2007、日本応用心理学会第 74 回発表論文集)。

ところがこの 2007 年度の 24 項目版は因子の信頼性係数が低いとう問題があり、ここであらためて 30 項目版を主成分分析（プロマックス回転）により因子分析し、再度 24 項目版の検討を試みた。

[方法]

被験者：秋田県内公立高校生男女 756 名。

検査課題：ＭＳＣ（創造的構え）テスト。このテストにはあらかじめ理論的設定した尺度として、自己信頼性、客観性、慎重性（以上性格尺度）および挑戦性、探究性、積極性（以上動機づけ尺度）の６尺度がある。

手続き：ＭＳＣテストを「５・全くその通り」から「０・全くその反対」までの６段階の自己評定法で、集団にて実施し、主成分分析にて因子分析（プロマックス回転）を行った。

[結果と考察]

表１は得られた因子ごとの、採用された項目の番号（30 項目版での）および因子負荷量（.40 以上）である。

第１因子は前回と比べ、項目 12 が項目４の代わり入っているのみで、そのまま客観性と命名した。項目 12 は理論的には探究性であり前回は採用されなかった項目である。また削除した項目４は理論的には客観性である。

第２因子は前回と全く同一で挑戦性ということになる。

第３因子については、今回は第３因子と第４因子が逆転しており、前回第４因子となったものがそのまま該当している。名称は慎重性ということになる。

第４因子は前回の第３因子から項目 10 が抜け、項目 16（逆転項目）が加わったものとなっている。名称は積極性である。項目 16 はもともと理論的にも積極性に入れてあった項目であるが、前回は採用されていない。一方削除した項目 10 は理論的には積極性とされている項目である。

表１　主成分分析（プロマックス回転）で得られた因子負荷量（.40 以上）

第１因子・客観性		第２因子・挑戦性		第３因子・慎重性	
12	.616	5	.748	2	.545
14	.767	11	.797	21	.682
24	.555	28	.515	23	.533
29	.679	30	.743	26	.677
第４因子・積極性		**第６因子・未確定**		**第７因子・未確定**	
3	.737	9	.813Ｒ	1	.617
16	.559Ｒ	13	.614	8	.734
25	.662				
27	.583				

Ｒ＝逆転項目

第５因子は本来自己信頼性となるべきものであるが、因子負荷量が全体的に低めであったため採用を控えた。ちなみにそこに該当した項目は項目６、項目 10、項目 18 の３項目であり、それぞれ前回は、探究性、積極性、不採用である。従ってとても自己信頼性と命名することはできない。

そこで、残る自己信頼性、探究性の２尺度に関してはそれぞれ第６因子、第７因子の２項目を該当するものとして取り上げた（表中の未確定部分)。

まず第６因子の２項目は前回自己信頼性としてまとめられた２項目そのものである。

次に第７因子の２項目は前回の第６因子（探究性）から項目６と項目７が抜けたものとなっており、探究性のものである。削除された項目６は理論的には探究性である。項目７は理論的には自己信頼性である。

以上のように今回の因子分析結果は、因子の順番が一部入れ替わったのみで、大きな変動はない。前回の結果と異なったのは、積極性と慎重性の因子の順序が逆になったことと、客観性、積極性でそれぞれ１項目が変更になったこと、および第６、７番目の尺度が２項目ずつになったことなどである。ただし自己信頼性に関してはかなり不安定な部分がみられ、因子分析をするごとに項目が変動する可能性を示している。

信頼性係数は第１因子が.725 第２因子が.696 第３因子が.605 第４因子が.273 第６因子が-.975 第７因子が.351 であった。

今後この 24 項目で再度、因子分析をしてみる必要があるであろう。

（てらさわ よしひこ、くめ みのる、なりた たけし、
たかの りゅういち、いが のりこ、ないとう みちこ）

振り込め詐欺の社会心理学

一時的マインド・コントロールの検討

○西田公昭[1)]　秋山学[1,2)]
([1)]静岡県立大学看護学部　[2)]神戸学院大学人文学部)

キーワード：振り込め詐欺、被害者心理、心理操作

【研究の目的】振り込め詐欺は、昨年だけで約250億円もの被害が出た。その被害者の多くは、60歳代から70歳代の高齢者であり、息子や孫になり済ました電話による偽の送金依頼に応じてしまう「オレオレ詐欺」と呼ばれるタイプが多い。続いて、犯人は電話で税務署員や銀行員になりすまして還付金の手続きを装い、被害者にはATMを操作させて振り込んでもらう操作をしていると信じ込ませ、実際には犯人の口座に振り込ませてしまうタイプが流行った。

ところで、一般に「詐欺」とは、他人をあざむいて錯誤に陥れ、意思決定や行動を誘導することといえる（西田,2007)。その被害には、金品のような財の搾取のみならず、かなり長期にわたる不当な労働や命の献上さえも含む隷属もある。これらには、明らかな犯罪とみなせるものから悪質商法や団体への勧誘などのようにその騙しの質と程度によっては自己過失を問われ直ちに違法とみなすにむずかしい行為まである。しかも、それらには様々な内容や手口が見られ、流行のように時世とともに変化・巧妙化するといった特徴がある。

そんな特徴にもかかわらず、一般には、騙される者にはそれなりの格別な事情があっただけで、基本的に注意さえしていれば免れられるという通念がある。しかし、騙された人の心理背景はかなり一般的であり、また騙しの心理技術にかなりの共通した体系的操作が利用されていると認められる。これは、俗に「マインド・コントロール」と称されるものと類似する心理的メカニズムである（西田，1995)。この概念はカルト問題で扱われてきたが、詐欺の場合では金品搾取までの一時的な支配であるというだけで、心理操作という点では根本的な相違はない。そこで本研究では、電話の相手に心理操作されて被害を受けている振り込め詐欺の被害者心理を実証検討した。

【方法】 2008年12月に質問紙法による調査を実施した。対象者は、全国の振り込め詐欺被害者61名であった。その内訳は、オレオレ詐欺39名、還付金詐欺15名、融資保証金詐欺6名、架空請求詐欺2名の被害者であった。なお、この調査はNHK社会部との共同で実施した。

【結果】まず、被害者の「振り込め詐欺」という言葉の認知を調べた結果、55名(90.2%)が知っていたと回答した。手口別に検討すると、5段階で尋ねたところ、オレオレ詐欺については、まったく知らなかった回答者は存在せず、大体の手口またはよく知っていたと回答した者が8割を越えた。一方、融資保証詐欺については知らなかった故に被害に遭ったケースも少なくないようだが、その他は、知識の有無で被害率に大きな差は認められなかった。

また、自分が被害に遭うとは思っていなかったと回答した者は、56人（91.8%）であった。その理由をどう認知しているかを問うたところ、自分には仕掛けられないと誤認知していた者89%、この詐欺の流行を知っていたから対処できると認知していた者81%、適切に対処できる能力に過信があった者79%、相談者がいるから安全とみなしていた者61%の順となり、これらはいずれも5割を越えていた。なお、十分な対策をとっていたつもりだった者も24%いた。

次に、調査対象者数が比較的多かったオレオレ詐欺に焦点を当てて検討したところ、以下のことがわかった。まず、「いいえ」1～「とても」4で調べたところ、声が本人と似ていると思ったこと、話の辻褄があっていたことから本人と思いこんでしまった被害者が多いということである。また、焦燥感、不安や恐怖といった感情が誘導されたことが示された（Fig.1)。また、詐欺の電話で不審に思った点があったかを「事実なし」0～「疑った」4の段階で調べたところ、ほとんど疑うことなく詐欺にあっている実態も示された（Fig.2)。対処行動も、考える余裕がなかった者(64%)、然るべき方法で本人確認していない者(95%)が特徴的であった。

なお、オレオレ詐欺と還付金詐欺の被害者の日常心理を比較すると、前者の被害者の方が、意見が合わないときは相手に譲ることが多く、電車やバスが少しでも遅れるとイライラすると回答する傾向にあることが認められた。

【考察】振り込め詐欺は、実に巧妙に仕掛けられており、詐欺被害心理の実態が明らかになった。被害者は、不意に仕掛けられ、かたりの電話の声を本人と錯誤した上、情緒的に動揺させられるといった心理操作によって疑いをあまりもたないまま急ぎ指示に従ったことが示唆された。

【引用文献】西田公昭 1995 マインド・コントロールとは何か　紀伊国屋書店，西田公昭 2007 詐欺の心理，応用心理学事典　丸善

（にしだ きみあき・あきやま まなぶ）

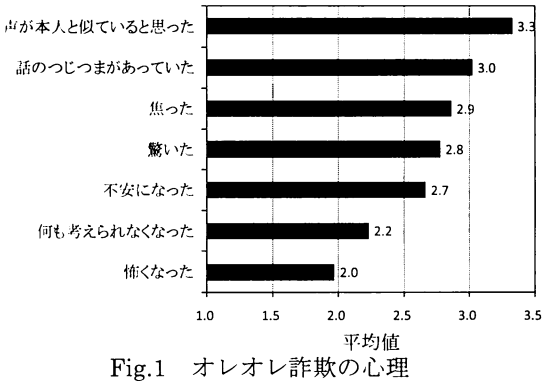


Fig.1　オレオレ詐欺の心理

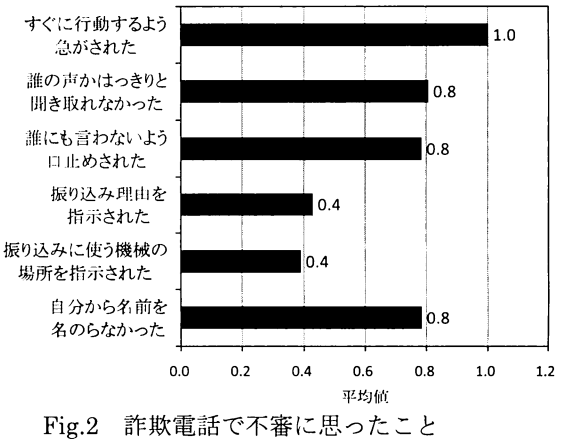


Fig.2　詐欺電話で不審に思ったこと

公共交通機関における犯罪不安の検討

― 基礎的検討を中心として ―

○松田睦代[1)]　桐生正幸[2)]
([1)] 関西国際大学大学院人間行動学研究科　[2)]関西国際大学人間科学部)

キーワード：犯罪不安、公共交通機関、報道

【研究の目的】

犯罪に関するマスメディアの過度な報道が絶えないこともあり、社会全般が犯罪に対して何らかの不安感を有しているものと考えられる。このような状況を踏まえつつ、近年では子どもや女性に対する地域防犯の研究や取り組み、犯罪の被害に遭遇するかも知れない不安感やリスク認知に関する研究などが進められている。たとえば、島田ら(2003)は都市空間における犯罪被害の実態と犯罪不安について、被害経験と伝聞が不安にもたらす影響を明らかにしている。

他方、特急列車における女性の暴行事件やタクシー強盗事件など公共交通機関における犯罪も後を絶たない。しかし、この公共交通機関などの特定の空間における犯罪不安を検討している研究は少ない。

そこで本研究では、公共交通機関における実被害経験や不快経験、報道機関からの情報見聞について、その実態を明らかにする。また、これらの要因と犯罪不安との関連についても検討を行う。

【方法】

調査対象者　K大学の学生190名（男性124名、女性66名）であった。

調査時期　平成21年5月下旬に講義時間を利用して実施した。

調査項目　先行研究を基にして作成したオリジナルである。①属性(性別・年齢)、②各公共交通機関の利用頻度(4 件法)、③各公共交通機関で不快経験の有無、④各公共交通機関と駅のホームにおける犯罪不安(4件法)、⑤実被害経験の有無、⑥近親者の被害経験の有無、⑦犯罪目撃の有無、⑧報道による見聞の有無、⑨具体的な事件事例についてどのように感じるか(日常的・自己責任・他者責任について4件法)⑩新版STAI特性不安尺度20項目(4件法)、によって構成されている。

【結果と考察】

本研究では、何らかの交通機関利用経験がある者のみを対象とした。よって11名を除き、男性115名、女性64名(平均19.7歳、SD=2.34)について分析を行った。なお、被害経験に関わる項目に一つでもあると回答した者を「被害あり群」、不快経験についても同様に「不快あり群」とした。

実被害経験　これまでに犯罪被害に遭ったことがあると回答した人は14名(男性5名、女性9名)であった。具体的な被害内容は、電車内での痴漢やスリなどがあった。

被害報道の見聞　新聞やテレビで、公共交通機関に関する報道を見たり聞いたりしたことがある人は143名(91名､52名)であった。見聞の内容は、電車やバスの痴漢やスリ、タクシー強盗などがあった。

近親者の被害見聞　身近な人が被害に遭ったことがあると回答した人は21名(男性7名、女性14名)であった。

犯罪の目撃　実際の犯罪の目撃があると回答した人は8名(男性6名、女性2名)であった。目撃の内容は、電車内での痴漢行為や暴行などであった。

不快な経験　これまでに不快な経験をしたことが「ある」と回答した人は、路線バス47名(男性24名,女性23名)、高速バス22名(男性11名、女性11名)、普通列車95名(男性54名、女性41名)、特急列車22名(男性12名、女性11名)、タクシー20名(男性11名、女性9名)であった。

クロス集計の結果　まず、被害経験と性別・不快経験についてχ^2検定を行った結果､不快経験あり群において有意差が見られた($p<.05$)。被害報道と性別・被害経験についても同様にχ^2検定を行った結果､被害報道の見聞経験のあり群なし群ともに有意差見られた($p<.05$)。また、被害報道の見聞と性別・不快経験についてもχ^2検定を行った結果、なし群において有意差が見られた($p<.05$)。

交通機関別不安得点　次に、交通機関を独立変数(6)、不安得点を従属変数とする1要因の分散分析を行った。その結果、主効果が有意であった($F(5,178)=23.104, p<.001$)。多重比較の結果、普通列車及び駅のホームが他の交通機関よりも有意に高かった(Figure1)。さらにそこで、普通列車と駅のホーム不安得点を従属変数とし､性別および不快経験､被害経験、報道見聞の有無をそれぞれ独立変数とした2要因分散分析を行った。その結果、普通列車においては不快経験と被害経験の主効果のみが有意であった。すなわち不快経験がある場合に不安は高くなり、また犯罪被害経験がある場合においても不安が高くなることが示された。

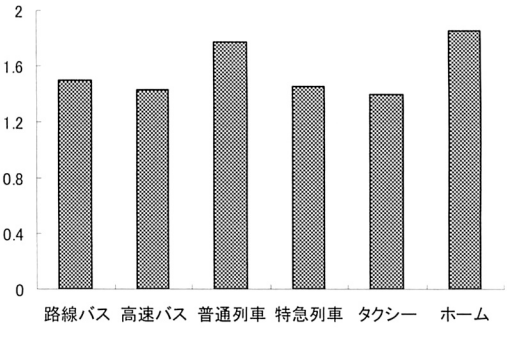


Figure1 各交通機関における犯罪不安得点

事件事例の評価　交通機関内での事件事例に関する6項目について因子分析(主成分解、バリマックス回転)を行い、3因子(日常的・自己責任・他者責任)を抽出した。そして、各々の項目平均得点について、不快経験・被害経験・報道見聞の有無をそれぞれ独立変数としたt検定を行った。その結果、全ての項目に対する不快経験と一部の項目に対する報道見聞が有意であった。

以上の結果から、不快経験の有無と被害経験の有無が交通機関における犯罪不安に影響を及ぼしていることが示唆された。被害経験の有無については、これまでの犯罪不安研究の知見と一致するものであった。また、本研究では具体的な不安状況を考慮せずに調査を行った。今後は、交通機関における空間的な特徴も踏まえた、より詳細な検討を行いたい。

【参考文献】島田貴仁・鈴木護　2003　都市空間での犯罪被害の実態と犯罪不安(2)-被害経験・伝聞が犯罪不安にもたらす影響-　日本心理学会第67回大会発表論文集

（まつだ　むつよ・きりう　まさゆき）

主観的幸福度と仕事の取り組み姿勢

○事崎由佳[1)]
([1)] 北陸先端科学技術大学院大学)
キーワード：主観的幸福度、先延ばし傾向、仕事の動機づけ

【研究目的】

先延ばし傾向と仕事の取り組み姿勢に関する項目に主観的幸福度がどのように関係するのかを調べる為、質問紙調査を行ったところ(事崎・岩崎, 2008)、先延ばし傾向については、主観的幸福度の低い群ほど自分が「やりたいこと」を優先し、「やらなければならないこと（義務としてやるべき仕事など)」を先延ばしする（手をつけるのに時間がかかる）傾向がみられ、また、仕事の取り組み姿勢では、どの群も5項目のほとんどで自分に有利な・得な仕事を先にするという選択が多かった。そこで、具体的に仕事の先延ばし傾向や仕事を引き受ける際の動機づけが主観的幸福度の違いにより影響されるかどうかについて、質問項目を再検討の上、若干の変更を行い、再度質問紙調査を行った。

【方法】

1. 調査対象者： T 大学に所属する大学生 300 名を調査対象とし、244 名から有効回答を得た(有効回答率:81.3%)。質問紙は、授業時間の一部を利用して集団で実施し、対象者に調査実施前に質問紙の趣旨を説明した後、記入時にはなるべく無記入箇所が無いよう、すべての項目について回答するようにとの教示を行い、下記にある調査を無記名方式で実施した。なお、記入に要した時間は約 20 分であった。

2. 質問紙の内容：

(1)生活の満足度（幸福度）

生まれた街・仕事以外の余暇活動・友人関係・家族関係・健康状態の 5 項目からなり、7 段階でそれぞれの満足度を評定した。5 項目の合計点を幸福度の指標とした。

(2) 仕事の先延ばし傾向

先延ばし傾向をみる 8 項目が、どの程度自分に当てはまるのかを 3 件法で評定してもらった。この 8 項目は、実行の先延ばし傾向を調べる 4 項目（決心してからもなかなか実行に移さない・締め切りの直前まで仕事に取り掛かれない・仕事に取り掛かるまでに時間がかかる・やる気が出るまでに時間がかかる）と意思決定の先延ばしを調べる 4 項目（最終的に決心するまでつまらないことにかかわらず、時間を無駄にしてしまう・意志を決めなければいけないとわかっていても、そのことについて考えるまでに長い時間を要する・決心するまでに時間がかかりすぎて間に合わなくなる・決心を先延ばしにする）から構成されており、項目ごとにその状況がどの程度自分に当てはまるかを、3 件法（1=当てはまらない、2=時々当てはまる、3=当てはまる）で評定してもらった。

(3) 仕事を引き受ける際の動機

日常の仕事場面で遭遇するであろうと想定される仕事に関するシチュエーション 16 項目それぞれについて、どのような理由からその仕事を引き受けると思うかを「自分のためになる・プラスになる」という場合に従って数字が大きくなるように（「義務感・任されたから仕方なく」と感じるほど数字が小さくなるように)、0～100 の範囲で記入してもらった。

3. 分析方法：生活の満足感に関する 5 項目から得られた総合得点から調査対象者を主観的幸福度の異なる 2 群(high、low、それぞれ 122 名ずつ)に分けて比較検討した。

【結果】

1. 仕事の先延ばし傾向

先延ばし傾向をみる 8 項目について、実行の先延ばし傾向を調べる項目群（4 項目)、意思決定の先延ばしを調べる項目群（4 項目）の合計得点を主観的幸福度群間で比較したところ、グラフ上では、実行の先延ばし傾向を調べる項目群でも意思決定の先延ばしを調べる項目群でも low 群の方で得点が高い結果となった（実行：low 群=9.42, high 群=8.68, 意志決定：low 群=9.16, high 群=8.62. Figure 1 参照)。分散分析を行ったところ、実行を先延ばしする項目では有意差が認められ（$F(1,242)=6.51$, $p<.05$)、意思決定の先延ばし傾向を調べる項目では有意傾向となった。

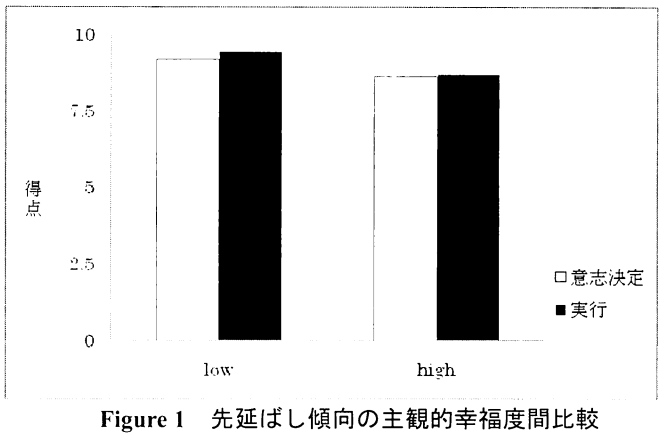


Figure 1 先延ばし傾向の主観的幸福度間比較

2. 仕事を引き受ける際の動機

仕事を引き受ける際の動機 16 項目について、自分のためになるから引き受けるのか、もしくは義務感で引き受けるのかを評価してもらい、主観的幸福度群間を比較したところ、「10. 自分の持ち味が活かせる仕事」がどちらの群においても最も「自分のためになる・プラスになる」と評価されていた（low=78.31, high=80.1)。逆に、「6.自分は携わっていないイベントの後片付け」では、どちらの群においても「義務感・任されたから仕方なく」と評価されていた（low=24.71, high=28.22)。主観的幸福度群間で大きな違いが見られたのは、「8.他に引き受け手がいないのでやってくれないかと言われた仕事」の項目であった（low=55.17, high=44.06)。分散分析を行ったところ、「3.経験者の中で自分だけ初心者という中での仕事」、「7. 新商品の開発」、「16. 自分に決定権が委ねられている仕事」の 3 項目で有意差が認められ（経験者の中で自分だけ初心者という中での仕事：$F(1,242)=4.22$, $p<.05$、新商品の開発：$F(1,242)=4.99$, $p<.05$、自分に決定権が委ねられている仕事：$F(1, 242)=8.13$, $p<.005$)、「1.グループの中心になって企画を作る仕事」は有意傾向であった。

【考察】

仕事の先延ばし傾向や仕事を引き受ける際の動機づけが主観的幸福度の違いにより影響されるかどうかについて検討を行ったところ、仕事の先延ばし傾向については、主観的幸福度の低い群は高い群と比べて、実行の先延ばし傾向の得点が有意に高い結果となり、実際行動に移すまでに余計な時間を要する傾向があると推測される。また、仕事を引き受ける際の動機について、自分のためになる・プラスになると思われているものは、新しいことへチャレンジしたり、物事を決断するというように自分のスキルを活かしつつも磨いていけるような内容の仕事を評価している傾向があることが伺える。

（ことざき・ゆか）

警告表示の認知的評価について

○法理樹里[1)]　山田健太[2)]　山村豊[3)]　山下富美代[1)]
([1)]立正大学大学院心理学研究科　[2)]株）電脳　交通安全研究所　[3)]立正大学心理学部）
キーワード：視認性、警告表示、リスク

【目的】交通事故や医療事故のみならず、一般家庭でも誤飲や誤用による事故が頻発している。その意味からも警告表示のあり方については再検討が促されている。

一般的には警告や注意喚起には警告文章による言語的表現よりも絵文字（pictorials）などの非言語的表現の方が直感的にリスクが理解されやすいとされている。またそのための要件として、視認性、誘目性、審美性、理解容易性等があげられている（海保ら、2007)。本研究では、日常生活で接触頻度の高い商品パッケージや道路標識に見られる各種警告表示を対象として得た認知的評価を通して、警告表示間における差異を比較検討し、警告表示に求められる特性等の抽出を試みた。

【方法】対象者：関東の男女大学生 140 名（平均年齢 19.63 歳、SD＝2.78）
実施時期：2009 年 1 月。
刺激材料：指示･注意･禁止の警告表示（一般 10 種ならび交通関連 4 種)。
手続き：各警告表示を提示し、SD 法(形容詞対 21 項目の 5 段階評定によって評価させた。

【結果】得られた平均評定値に基づいて因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行い警告表示における認知構造について検討した。結果、4 因子が抽出された。第 1 因子は「単純な・見やすい・受け入れやすい・役立つ・(デザインの）よい・易しい」といった評価項目であり、「視認性」と受け止められるが、ここでは視認性を各表示に共通なマクロな意味と捉え、「理解容易性」と解釈した。第 2 因子には「力強い・派手な・活動的な・動きのある・センスのある」といった活動的な項目が見られたのでこの因子を「活動性因子」とした。第 3 因子には「安全な・安心な・無害な・安定した」といった項目に代表されるのでこの因子を「安全性因子」とした。第 4 因子には「気づく・分かりやすい・目立つ・見たことのある・興味のある」等の注意喚起に関する項目が見られたのでこの因子を「誘目性因子」とした。

次いで、上記因子分析で抽出された各因子について下位尺度得点を算出し、この値を従属変数として警告表示間の認知的評価の差を検討した。一般の警告表示を指示・注意・禁止の内容別に分類し、さらに道路標識を注意・禁止の内容に別けたものを加えた計 5 カテゴリー間に差が認められるか否かを一元配置の分散分析（5 水準）によって検討した（Fig 1)。理解容易性の因子間の主効果は F (3.34, 230.47) ＝176.05, p ＜0.001 となり有意差が認められた。多重比較の結果、一般指示表示の評価が最も高く、次いで道路標識の各評価が高く、一般注意表示の評価が最も低いことが有意に示された(p ＜0.001)。活動性因子間については F (4, 276) ＝4.15, p ＜0.05 となり有意差が認められた。多重比較の結果、一般禁止表示の評価が最も低いことが有意に示された（p＜0.05)。安全性因子間については F (4, 276＝123.16, p＜0.001 となり有意差が認められた。多重比較の結果、一般指示表示の評価が最も高く、次いで道路注意標識の評価が高く、一般禁止表示と道路禁止標識の評価が同程度に低いことが有意に示された（p＜0.001)。誘目性因子間については F (3.47, 239.33) ＝54.50, p＜0.001 となり有意差が認められた。多重比較の結果、一般指示表示と道路注意標識の評価がともに高く、次いで道路禁止標識の評価が高く、一般注意・禁止表示の評価が同程度に最も低いことが有意に示された（p＜0.001)。

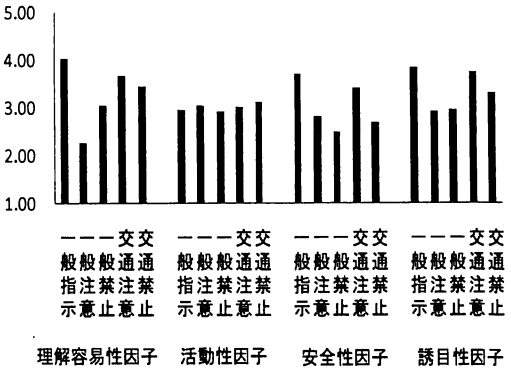


Fig 1 警告表示および道路標識の下位尺度得点

【考察】分析の結果、接触頻度の高い分別ごみの指示表示や道路標識に比べ、その他一般の注意表示や禁止表示は、理解容易性・活動性・安全性・誘目性について低い評価を示した。大学生を対象に家電製品の警告表示について、文章表示と絵表示による認知的評価の比較検討をした先行研究（山下 2005)でも絵表示の認知度・理解度が全般的に低い結果が得られた。以上のことから、どのような要因が「見易さ」や「分かりやすさ」に寄与するかについて検討していく必要がある。視認性を高めるためにはより抽象化の高い簡潔なデザインになりやすい傾向があるが、抽象化が進めば逆に表示自体の意味が分かりにくくなると考えられる。誰にでも分かりやすく、目を引くような表示にするためには、視界から入ってくる情報の符号化・表象化が容易にできることを考えなければならない。これらのことを今後の課題として検討していきたい。

【引用文献】

海保博之・宮元聡介　2007　安全・安心の心理学―リスク社会を生き抜く心の技法 48　新曜社

山下富美代　2005 広告コミュニケーションにおけるリスクメッセージの効果について―リスク表示の比較評価の検討 立正大学心理学部研究紀要 Vol .3, 57-71

（ほうり じゅり・やまだ けんた・やまむら ゆたか・やました ふみよ）

パーソナリティ特性語に対する選択反応時間

— 選択反応時間によるパーソナリティ因子抽出の可能性について —

○松田浩平[1)]　佐藤恵美[2)]
([1)] 文京学院大学　[2)]東京富士大学)

Keywords：パーソナリティ特性語、選択反応時間、因子分析

Ⅰ．序論

Eysenck,H.J.(1967)の生物学的基礎に関する神経症的傾向の研究から，自律神経系の不安定性と興奮性に個人差が存在する。反応時間など作業課題における個人差は，特に向性における個人差が大きいとされている(Brebmer&Cooper,1978)。しかし選択反応課題における実験例は少ない。そこで以下のような仮説を設定した。

1) 左右に表示された反応語に対し、自分の性格と一致すると感じた方の語への選択では反応時間が短くなる

2)) 左右に表示された反応語に対し、選択に迷って自信がない場合は、反応時間は長くなる。

この仮説に従い、バイポーラの評定尺度と同様に反応時間を用いて評定が可能か検証する必要があると考えた。

そこで、本研究では，パーソナリティ特性語を対にし、選択反応時間を測定し、その反応時間から得られたパラメータをもとに従来の質問し検査と同様の結果が得られるかどうか、外向性と情緒安定性について検討した。

Ⅱ．目的

パーソナリティ特性語に対する選択反応時間を測定し、反応時間と主要5因子性格検査との関連性を検討する。

Ⅲ．方法

【被験者】20～30 歳の大学生・大学院生(男 7 名，女 6 名)

【実験期間】2008 年 6 月 1～30 日

【刺激語】表1に示す、向性刺激語4対と、情緒安定性刺激語4対の計8対を刺激として用いた

表 1．刺激語として使用した性格評定語の対

因子	刺激語の対			
向性	無口な	軽率な	静かな	陽気な
	おしゃべりな	慎重な	騒がしい	陰気な
情緒安定性	短気な	素直な	従順な	不安な
	気長な	頑固な	勝手な	安心な

上段の語を左に、下段の語を右に提示した。

【視覚刺激】PC 画面(25×18.5cm)に刺激語の画像ファイルを作成した。選択反応試行では、横幅 4cm とし凝視距離を約 30～40cm とした。

【聴覚刺激】刺激語を 1000ms の提示時間に調節し出力した。

【使用機器】A4 サイズノート型 PC(COMPAQ:Presario-1246)上で E-prime2.0(Psychology Software Tools)を使用した。

【実験手続き】 1)インタビュー 2)練習試行(単純反応試行と同様) 3)単純反応試行: 表1の刺激語を聴覚刺激と視覚刺激にし，視覚刺激と聴覚刺激が同じである 40 試行(Hit 条件)，聴覚刺激と視覚刺激が異なる 40 試行(Unhit 条件)の計 80 試行を各個人ごとにランダムに配置した。被験者には聴覚刺激と視覚刺激が同じならば ○キー，聴覚刺激と視覚刺激が異なっているならば×キーを押すように教示を与え反応後に画面表示をマスキングした。4)休憩 5)性格評定試行:特性語を視覚刺激のみで提示し，個人ごとにランダムに 32 試行提示した。自分に当てはまると思ったら○，当てはまらないと思ったら× を押すよう教示した。1)～5)までの試行で被験者に反応時間測定に完熟させた。そのあと図1に示す手続きで実験を行った。6)選択反応試行: 表1に示す 8 対の刺激語×8回の 64 試行を行った。左右に示される語のうち少しでも自分に当てはまる方を選択し、できるだけ早くキーを押すよう教示した。

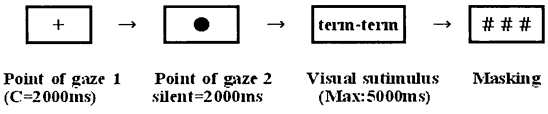


図 1．選択反応試行(1試行分

7)実験終了後、休憩と実験の感想などのインタビュー後、主要5因子性格検査(村上&村上, 1997)を実施した。

【結果の処理】 各被験者について、刺激ごとに各刺激語への平均値，標準偏差を算出し標準得点 N(0,1)に換算した。絶対値で 2 以上の場合を尚早反応および遅延反応として分析の対象から除外した。平均反応時間からの偏差を求め、左側の語に反応した場合を＋とし、右側の語に対して反応した場合を−とした。逆転項目を整理してぞれぞれの反時間から 2 を減じた値を求めた。これにより、各刺激語対において最長な南欧時間では 0 となり外向性または情緒安定性の語に反応した場合は 0～+2、内向性または情緒不安定性した場合は 0～−2 になるように換算した。これをもとに主因子解→バリマックス回転の直交因子分析を行なった。因子得点をサーストンの重回帰スコアで求めた。この因子得点と村上の主要5因子性格検査の得点と相関を求めた。

Ⅳ．結果と考察

表2に示すように、外向性との相関は認められたものの、情緒安定性との召還を見いだすことはできなかった。因子1は外向性に性の相関があり、知性に負の相関があった。しかし因子2は、主要5因子のどの尺度とも大きな相関は認められなかった。

表 2．主要 5 因子性格検査との比較

村上(1997) 主要5因子尺度	基本統計量		RT因子との相関	
	平均	SD	因子1	因子2
建前	7.7	2.34	-.181	.309
外向性	14.5	8.34	**.744**	-.235
協調性	16.9	2.91	.236	.213
誠実性	14.3	5.11	-.276	-.062
情緒安定性	6.7	5.66	.174	.120
知性	10.1	4.60	**-.539**	.291

本研究では、パーソナリティ特性語を対にし、選択反応時間を測定し、主要 5 因子性格検査との関連性を検討した。先行研究では，個人の単純反応時間において、個人差を規定するものは 2 因子であるという結果は得られた（佐藤・松田，パーソナリティ心理学会第 15 回大会論文集,2006）ものの、質問紙検査との一致までには至らなかった。今後は刺激語や反応キーなどを中心に実験計画を立て直し、さらに探求を深めてゆきたい。

【引用文献】村上宣寛，村上千恵子 1997 主要5因子性格検査の尺度構成 性格心理学研究 第 6 巻，第 1 号 29-39

(まつだ こうへい・さとう えみ)

特性語に対する反応時間と向性,情緒安定性得点との関連性

○佐藤恵美[1)]　松田浩平[2)]
([1)]東京富士大学　[2)]文京学院大学)

Keywords：パーソナリティ特性語、性格評定、主要5因子性格検査

Ⅰ．序論

Eysenck,H.J.(1967)の生物学的基礎に関する神経症的傾向の研究から，自律神経系の不安定性と興奮性に個人差が存在する。反応時間など作業課題における個人差は，特に向性における個人差が大きいとされている(Brebmer&Cooper, 1978)。

自己のイメージ・判断に要する時間と，パーソナリティ特性語を刺激として，性格評定を行う反応時間について検討した。この結果、特性語に対する反応時間は，a)刺激語に対する単純反応時間には個人差があること，b)個人内の標準的反応時間には一定の傾向があること，c)その中での相対変化であることが認められた(松田ら,日心67回大会)。

パーソナリティ特性語に対する反応時間と主要5因子性格検査との関連性を検討した結果、パーソナリティ特性語に対する性格評定の時間は、外向性得点における主効果は認められたが、情緒安定性得点における主効果は認められなかった(佐藤・松田,日本心理学会第67回大会,2003)。

本研究では，パーソナリティ特性と性格評定試行における反応時間の変化の要因について検討する。

Ⅱ．目的

単純反応試行におけるパーソナリティ特性語への反応時間の検討と、性格評定試行における反応時間と向性,情緒安定性得点における刺激語への反応時間の変化を検討する。

Ⅲ．方法

【被験者】 20～30歳の大学生(男7名，女6名，計13名)
【実験期間】2008年6月1～30日
【刺激語】向性刺激語(E)5語と、情緒安定性刺激語(N)5語の計10語を使用した(表1)。

表1．実験に使用した刺激語

練習語	正直な	単純な	気楽な		
向性	無口な	軽率な	静かな	元気な	陽気な
情緒安定性	短気な	素直な	従順な	勝手な	不安な

【視覚刺激】 PC画面(25×18.5cm)に刺激語を3文字で横幅4cmの画像ファイルを作成した。
【聴覚刺激】刺激語を1000msの提示時間に調節し出力した。
【使用機器】A4サイズノート型PC(COMPAQ:Presario-1246)上にE-prime2.0(Psychology Software Tools)をインストールして使用した。単純反応試行ではヘッドフォンを使用した。
【実験手続き】 1)インタビュー 2)練習試行(単純反応試行と同様) 3)単純反応試行(80試行): 視覚刺激と聴覚刺激が同じである40試行(Hit条件)，異なる40試行(Unhit条件)を個人ごとにランダムに配置した。被験者には聴覚刺激と視覚刺激が同じならば ○キー,異なっていたら×キーを押すように教示を与え，反応後に画面表示をマスキングした。4)休憩
5)性格評定試行(32 試行):視覚刺激(特性語)のみ個人ごとにランダムに提示した。自分に当てはまると思ったら○，当てはまらないと思ったら×を押すよう教示し、反応後に画面をマスキングした。た(Figure.1)。
6)質問紙検査 (村上&村上，1997)。

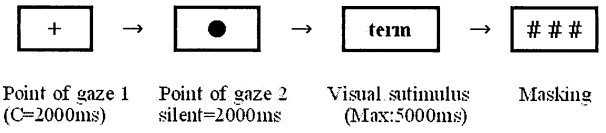


Fig.1. 性格評定試行(1試行)

Ⅳ．結果

結果1． 単純反応試行における特性語への反応時間
単純反応試行の各刺激語の平均値，標準偏差、標準誤差を算出した(表2)。視覚刺激と聴覚刺激に対する反応時間は、個人差、そして刺激語による反応時間の変化が認められた。

表2．単純反応試行における各刺激語の反応時間

	刺激語	Mean	SD	StdErr
向性刺激語	無口な	589.3	165.7	20.9
	軽率な	596.0	145.0	18.1
	静かな	560.0	134.7	17.0
	元気な	516.2	95.3	12.0
	陽気な	559.4	139.4	17.6
情緒安定性刺激語	短気な	621.3	142.7	18.3
	素直な	587.1	143.7	18.4
	従順な	595.3	251.5	32.2
	勝手な	552.7	125.9	16.3
	不安な	548.5	135.3	17.0

結果2．主要5因子性格検査と性格評定試行の反応時間
各被験者の主要5因子性格検査の外向性得点と情緒安定性得点を算出した。被験者の向性得点の中央値(μ=14.5, σ=8.6,Mdn=18)より得点が高い場合には外向的，情緒安定性得点の中央値(μ=6.7, σ=5.9,Mdn=5)より高い場合には情緒不安定として，各個人のパーソナリティ特性を基準として反応時間を検討した。この結果、外向性得点において刺激語の主効果が認められた($F(9,499)=1.91, p<.05$)。外向性得点×情緒安定性得点の交互作用は認められなかった($F(9,499)=1.83$,n.s)。情緒安定性得点では有意差が認められなかった。

Ⅴ．考察

性格評定試行における反応時間を検討した結果、外向性得点において刺激語の主効果が認められた。「陽気な」では、内向性得点の高い人の反応時間が長く、内向性得点の高い人は自分に適合しているか疑わしい語は反応時間が遅くなることが示唆された。一方、「元気な」では外向性得点の高い人の反応時間が短く、自分に比較的適合している語は反応時間が早いことが示唆された。ここから、自分が想定している特性への処理時間が反応時間に関係していることが示唆された。

【引用文献】 村上宣寛，村上千恵子 1997 主要5因子性格検査の尺度構成 性格心理学研究 第6巻，第1号29-39

（さとう えみ・まつだ こうへい）

歩行時の時間・距離の予想と評価に関する基礎研究(3)

-実際の直線経路を用いた時間と距離の評価に対する予想の効果について-

○白井清太郎[1]・折原茂樹[2]
([1]国士舘大学大学院人文科学研究科,・[2]国士舘大学文学部)

Key words: 時間評価, 距離評価, 歩行課題

先行研究では,歩行移動時の時間評価と主観的距離といわれる距離の評価とはそれぞれの領域で別々に扱われ,それらの関係についてふれられることは少なかった。その中でも, 羽生・厳島(2000)は,階段歩行を用いた実験で,歩行時間の課題推定と心的歩行時間の正確さは,異なる条件間でかなり安定しており,距離,歩行時間,心的歩行時間の三種類の推定が独立したメカニズムを持っているとしている。また,山崎・東山(2004)はトレッドミル上の歩行を用い,歩行距離の評価は視覚系の寄与が大きいのに対し,歩行速度の評価は身体運動系の寄与が大きいこと,また,歩行時間の評価は身体運動系と視覚系が相互に影響を及ぼしていることを示唆している。さらに,心理的な時間と距離と速さに関しても,速さ=距離÷時間という物理的な関係性は保持されるとしている。

白井ら(2009,日心 73 回大会発表予定)は, 歩行前に時間を予想する際には,これまでの身体運動系に基づいて蓄積された情報を用いて評価を行うが,距離の予想に関してはその場での視覚的な情報を用いている可能性があること,また,歩行後に経路を振り返ることで視覚系に寄与した時間の評価が行われることを示唆した。しかし,この実験では「時間と距離の予想→歩行→時間と距離の評価」という手続きで実施している。そのため,歩行後の評価が予想の影響を受けている可能性がある。また,試行の順序も一定であるため、後の試行は前試行の影響を受けている可能性がある。よって本実験では試行をランダムに配置した。

目 的

上記の問題を踏まえ,今回の実験では幾つかの実際の直線経路を用いて,歩行移動前に「予想時間」と「予想距離」を判断する群(予想有り群)と,判断しない群(予想無し群)とに分け,歩行後の「評価時間」と「評価距離」を群間で比較検討する。さらに「評価時間」と「評価距離」との関係についても両群で比較検討する。

方 法

参加者:都内大学生 36 名(予想有り・無し群 18 名ずつ)。

実験対象地域:参加者の在学する大学構内に 20m～52m の直線経路を 7 本設定した。

道具:ストップウォッチ,50m メジャー。

手続き:参加者に対してあらかじめ,時間と距離の関係についての実験であることを告げ,次に示す「歩行速度練習」・「練習試行」・「本試行」を順に実施した。

Table 1-1 予想有り・無し群別,1m予想距離と1m評価距離の平均値(*SD*), 予想有り・無し群ともにn=18

試行	物理距離(m)	1m予想距離		1m評価距離	
		予想有り群	予想無し群	予想有り群	予想無し群
1	20	0.96 (0.38)	. (.)	0.93 (0.46)	0.84 (0.29)
2	50	0.95 (0.28)	. (.)	1.06 (0.31)	0.80 (0.24)
3	52	1.19 (0.40)	. (.)	1.13 (0.40)	0.90 (0.26)
4	52	1.14 (0.47)	. (.)	1.08 (0.36)	0.91 (0.34)
5	22	1.10 (0.45)	. (.)	1.08 (0.44)	0.88 (0.22)
6	36	1.15 (0.40)	. (.)	1.08 (0.36)	0.84 (0.36)
7	37	1.03 (0.32)	. (.)	0.99 (0.32)	0.80 (0.38)
全体		1.07 (0.30)	. (.)	1.03 (0.29)	0.86 (0.24)

Table 1-2 予想有り・無し群別,1s予想時間と1s評価時間の平均値(*SD*), 予想有り・無し群ともにn=18

試行	物理時間(s)		1s予想時間		1s評価時間	
	予想有り群	予想無し群	予想有り群	予想無し群	予想有り群	予想無し群
1	13.61 (2.48)	13.17 (1.92)	1.14 (0.47)	. (.)	1.11 (0.63)	0.96 (0.30)
2	35.22 (4.04)	34.22 (3.93)	0.96 (0.28)	. (.)	1.06 (0.42)	0.96 (0.28)
3	37.44 (4.97)	36.00 (4.14)	1.23 (0.52)	. (.)	1.16 (0.51)	1.05 (0.33)
4	36.83 (4.81)	36.22 (4.37)	1.35 (0.68)	. (.)	1.21 (0.60)	1.08 (0.39)
5	16.78 (5.42)	15.00 (2.03)	1.06 (0.46)	. (.)	1.05 (0.43)	0.98 (0.28)
6	26.19 (3.80)	25.87 (3.66)	1.15 (0.44)	. (.)	1.07 (0.50)	0.99 (0.36)
7	26.06 (3.62)	25.28 (3.43)	1.07 (0.42)	. (.)	0.99 (0.37)	0.88 (0.34)
全体			1.07 (0.39)	. (.)	1.10 (0.43)	0.99 (0.27)

<歩行速度練習>構内にある直径 10m の円周の生け垣の周りを「出来るだけ速く」歩いて半時計回りで一周させ,その後に「出来るだけゆっくり」歩いて半周させた。最後に「丁度良い速さ」の歩行で一周させた。この歩行速度練習終了後に,「丁度良い速さ」の歩行で以降の実験を行った。ここで参加者を「予想有り群」と「予想無し群」に分けた。

<練習試行>構内にある大講堂前の 14m の直線経路を歩行移動することを参加者に告げ, 予想無し群は直ちに実験者の合図に従って実際に歩行した。予想有り群については歩行前に歩行に要すると思われる時間(予想時間)と何 m あるか(予想距離)を判断させた後に同様の歩行移動を行った。実験者の合図で停止後,進行方向を向いたまま「評価時間」と「評価距離」を判断させた。各評価法は言語評価法であった。

<本試行>各参加者でランダムに配置した 7 経路を練習試行と同様の手続きで実施した。

結果と考察

各試行で経路距離,所要時間が異なるため,比較できるように予想距離・予想時間・評価距離・評価時間をそれぞれ規準化し 1m 予想距離・1s 予想時間・1m 評価距離・1s 評価時間として算出した(Table 1-1・1-2)。なお,表中の「全体」は各参加者の 7 試行の平均値を代表値として用いたため,n=18 であった(Table 2 も同様)。

<試行間の検討>1m 評価距離・1s 評価時間それぞれにおいて 2 要因分散分析(試行×予想有り・無し群)をした結果,評価時間において試行の主効果が有意であった(F(6,204)=2.88,p<.05)。多重比較の結果,第 4 試行が第 7 試行より有意に大きく,評価距離では試行の主効果が有意傾向にあった(F(6,204)=2.13,p<.10)。空間の広がりや経路幅に着目すると,今回の結果は柳瀬・相馬(2000)や大野ら(2001)と矛盾している。これら問題については前方の遮蔽物の有無,時間評価と距離評価の差異,評価方法の差異などが考えられるが今後の課題としたい。

<予想有り・無し群の検討> 1m 評価距離において 2 要因分散分析(試行×予想有り・無し群)の結果,試行の主効果が有意傾向で(F(1,34)=3.83,p<.10),予想有り群の方がより過大に評価する傾向にあった。評価時間では同様に分析を行った結果,有意な主効果はみられなかった。また,予想有り群の 1m 予想距離と 1m 評価距離,1m 予想時間と 1m 評価時間の相関は高かった(Table 2)。さらに,1m 評価距離と 1m 評価時間の相関係数をみると(Table 2)予想有り群の方が高かった。予想する場合でもしない場合でも歩行時にフロー(Gibson,1979)の情報を用いて距離の評価を行うと考えられるが,このフローに加えて歩行前の距離推定時の奥行き知覚の情報を用いて歩行後の距離評価を行っている可能性がある。ただし,評価距離の主効果は有意傾向にとどまっているため,引き続き参加者を増やし上記について確かめる必要がある。

(○SHIRAI Seitaro, ORIHARA Shigeki)

Table 2 各変数間の相関係数(**p<.01, *p<.05)

試行	1m予想距離×1m評価距離	1s予想時間×1s評価時間	1m評価距離×1s評価時間		
	予想有り群	予想有り群	全体	予想有り群	予想無し群
1	.909**	.788**	.905**	.944**	.798**
2	.916**	.686**	.398*	.398	.336
3	.609**	.742**	.681**	.763**	.471*
4	.651**	.651**	.541**	.651**	.356
5	.930**	.813**	.351*	.377	.244
6	.965**	.877**	.524**	.607*	.415
7	.873**	.728**	.478**	.588*	.324
全体	.944**	.894**	.641**	.727**	.472*

誤情報によるイメージの修正

― 訂正情報による修正の程度とパーソナリティの関係について ―

○大貴　絵莉[1)]　内藤　哲雄[2)]
([1)] 関西大学大学院社会学研究科　[2)]信州大学人文学部)

キーワード：誤情報，印象評価の修正，パーソナリティ

【目的】他者についての印象評価を表明した後で，初期情報を訂正する情報に接したとき，訂正情報に合わせて印象評価を容易に修正できる人もいれば，できない人もいる。また修正できたとしても，わだかまり感や抵抗感などが生じて，不信感を拭えない人もいる。不信感から人間関係の葛藤やトラブルにまで発展してしまうことも少なくない。訂正・追加情報に合わせて印象評価を修正できるかどうかは，臨床でのアセスメントや企業での人事考課にも関わる問題である。そこで本研究では，誤情報によって形成されたイメージ(印象評価)が訂正情報により修正される程度とパーソナリティの関係について検討することを目的とした。

【方法】＜参加者＞大学生 117 名。そのうち欠損値のある 2 名を除いた 115 名（男性 47 名，女性 68 名）。平均年齢は男性 19.6 歳（SD＝1.53），女性 19.6 歳（SD＝1.31）。＜調査時期＞2007 年 12 月。＜質問紙＞うわさに基づく印象評価（訂正前），訂正情報による印象評価の修正度（訂正後），うわさ（誤情報）による影響を修正できたと感じる程度（修正感），印象評価修正後のわだかまり感（わだかまり感），うわさを否定する訂正情報への抵抗感（抵抗感）を測定する尺度と，13 のパーソナリティ尺度（認知的熟慮性－衝動性，曖昧さ耐性，認知的欲求，楽観性，向性，自尊感情，特性不安，抑うつ性，神経質，客観性，心の硬さ，自己関係づけ，他者受容）からなる質問紙を用意した。いずれの項目も回答は 8 段階で，「1. 全くそう感じない」～「8. 非常にそう感じる」，あるいは「1. 全くあてはまらない」～「8. 非常にあてはまる」とした。ただし，同じく 8 段階ではあるが，1 項目からなる修正感では，「1. 全く修正できなかった」～「8. 非常に修正できた」とした。

＜手続き＞場面想定法を用い，情報（うわさ）の内容は，恋人の浮気についてであった。参加者は，恋人が浮気をしていたことを確証するかのようなうわさを聞いた場面を読んだ後，恋人が浮気をしていたと感じる主観的評価（うわさの影響度）について回答した。そのあとで，うわさが間違いであった状況的事実を知人から伝えられる場面について読んだ。直後に，浮気をしていた可能性についての主観的評価，誤った情報を訂正する（浮気を否定する）新たな情報への抵抗感および印象評価修正後のわだかまり感，パーソナリティ 13 尺度への回答を求めた。

【結果】誤情報である浮気のうわさに接した直後(訂正前)とうわさを否定する訂正情報に接した直後（訂正後）での浮気可能性の評定は，訂正前が平均値 5.57（SD＝0.98）で，訂正後が平均値 3.27（SD＝1.26）であった（男女間で差が見られないので合わせて分析した)。中点 4.5 点と比較すると，訂正前は浮気可能性ありと判断したが，訂正後には可能性が小さいと判断したといえる。また t 検定の結果，訂正後の得点が訂正前の得点に比べて有意に低かった（$t(114)=18.44, p<.001$)。これにより集団全体としては，訂正情報により印象評価が修正されたといえよう。そこで今度は，浮気可能性についての訂正前，訂正後の評定，前後の間の差（修正量)，主観的修正感，わだかまり感，初期情報を否定する訂正情報への抵抗感と，13 のパーソナリティ尺度との相関係数を算出した。このうち有意な相関のみられた 7 尺度の結果を掲載したのが Table 1 である。

【考察】浮気可能性についての訂正前，訂正後の評定，前後の間の差（修正量)，主観的修正感，わだかまり感，初期情報を否定する訂正情報への抵抗感のいずれにも男女差が見られなかったことから，少なくとも本研究で用いた恋人の浮気の材料では性差がないと考えられる。一方，浮気のうわさの影響とパーソナリティの関係については，①相関が低いので可能性というべきだが，楽観性が強く，認知的欲求が低いほうが影響を受けやすい，②抑うつ，不安傾向が強いほうが修正しにくい，③抑うつ性や不安が弱く，自尊感情が高いほど，より大きく修正できる，④抑うつ，不安が弱く，自尊感情が高いほど主観的にも修正できたと感じ，⑤抑うつ性が高いほど，また曖昧さ耐性の低さと自己関係づけの高さがわだかまり感と関連し，⑥不安と初期情報を否定する情報へと抵抗感が関連する，ことを示唆するものであるといえよう。

本研究の結果は，心理臨床的援助場面においてのアセスメント，見立て，人事考課に影響するパーソナリティを明らかにしたといえよう。それとともに，抑うつ，不安，自尊感情，曖昧さ耐性，楽観主義などの抑うつに関連したパーソナリティ特性や病理が,他者評価や状況に関する訂正・追加情報を受け入れる柔軟性の弱さをもつことを示唆すると考えられる。　　（おおき　えり・ないとう　てつお）

Table 1. 印象評価の修正とパーソナリティ尺度の相関係数

	抑うつ性	特性不安	自尊感情	曖昧さ耐性	自己関係づけ	楽観主義	認知的欲求
訂正前	—	—	—	—	—	.18*	-.18*
訂正後	.26**	.23*	—	—	—	—	—
訂正前－後	-.34**	-.32**	.24*	—	—	—	—
修正感	-.27**	-.23*	.26**	—	—	—	—
わだかまり感	.25**	—	—	.19*	.19*	—	—
抵抗感	—	.18*	—	—	—	—	—

**: p<.01, *: p<.05, —: n.s.

注)「曖昧さ耐性尺度」は，曖昧さへの非耐性を測るものであり，尺度得点が高いほど，耐性が低いことを意味する。

「親性準備性」獲得への関連要因

－個人の特性、生活背景および愛着スタイルとの関連について－

先間　真奈美
（帝塚山大学大学院人文科学研究科臨床社会心理学専攻臨床心理専修）

キーワード：親性準備性　青年期　愛着スタイル

近年，児童虐待など子どもを巡る様々な問題が存在し，子どもの健康的な発達に大きな影響を与えている。その原因の一つに，「親性」の未熟さが挙げられる。そして青年期は，近い将来親になろうとしている発達段階として，「親性準備性」を獲得する重要な時期であるといわれている（井上・深谷，1983)。「親性準備性」とは「親となる心の準備や望ましい育児行動を起こすための心理準備状態（羽田野・門脇, 2004)」であり，「乳幼児への好意感情」と「育児への積極性」の 2 側面からとらえることができる。そこで，青年期を対象とした親性準備性の研究が数多く行われてきた。羽田・門脇(2004)は，幼い子どもとの接触経験や両親に対する肯定的意識が高いと，親性準備性も高いことを示した。また，木村ら(2004)は，愛着関係のあり方と子どもへの関心には関連があると示唆した。木村らの研究は，親性に関する指標として，子どもとの対応の仕方などの行動的指標を用いているが，「親性準備性」の諸側面を幅広く反映しているとは言えない。そこで，本研究では，質問紙法によって親性準備性を幅広く測定し，それと愛着スタイルの関係性について検討した。

目的　本研究では大学生を対象に，「親性準備性」の獲得に，個人の特性や生活背景，さらに愛着スタイルが影響をおよぼしているかどうか，質問紙調査を用いて検討した。

【方法】

対象　大学生 234 名(男性 61 名，女子 172 名，無回答 1 名)

質問紙　(1)「親性準備性尺度」:「母性準備性尺度」（青木・松井，1988）を一部変更して使用した。(2)「成人愛着スタイル尺度」:「RSQ（the Relationship Scales Questionnaire)」（Griffin＆Barthholomew , 1994 ; 加藤訳 , 1998）を用いた。検定の際には，「親密性の回避」と「見捨てられ不安」の 2 因子から，「安定型」「拒絶型」「とらわれ型」「恐れ型」の 4 つのタイプに分類した。(3)「個人の特性」: 幼い子どもとの過去および現在の接触経験について，子どもの頃の養育体験について，父親および母親に対する意識について，自分の性の受容について質問した。(4)「個人の生活背景」:「住まい」「家族人数」「家族構成」などについて質問した。

手続き　無記名自己記入式質問紙法で、近畿圏の大学で行われた２つの講義中に実施した。

【結果と考察】

本研究では，統計的検定の有意水準に５％を採用した。

生活背景との関連　回答に基づき，「住まい」は，下宿（一人住まい）と実家に，「家族人数」は多数家族（5 人以上）と少数家族に，「家族構成」は拡大家族と核家族にそれぞれ２分割し，親性準備性得点の群間差について検定を行った。「乳幼児への好意感情」について，「住まい」（$t(228)= 2.167$），「家族人数」（$t(226)= 2.184$），「家族構成」（$t(223)=2.488$）で群間差が有意であった。下宿，多数家族，拡大家族の者がそれぞれ乳幼児への好意感情が高かったといえる。「育児への積極性」得点では，「住まい」（$t(227)=2.255$），「家族構成」（$t(222)=2.046$）で群間差が有意であった。下宿，拡大家族の者がそれぞれ育児への積極性が高かったといえる。親性準備性の獲得には、多くの人間との関わりを持つことが必要となると考えられた。また、一人暮らしをするなど，親からの自立は，親性準備性を高める要因になるのではないかと考えられた。

個人の特性との関連　親性準備性の２尺度と個人特性の各項目との相関を算出した（n=226)。「乳幼児への好意感情」は，「過去の幼児との接触経験」（r=,427)，「自身の被養育体験への肯定的意識」(r=,343)，「自分の親の子育てへの肯定的意識」(r= ,213)が有意に相関した。また，「育児への積極性」は，「過去の幼児との接触経験」(r= ,370)，「自身の被養育体験への肯定的意識」(r = ,312)，「自分の親の子育てへの肯定的意識」(r=,296)に加え，「母親に対する好意感情」(r= ,251)とも有意に相関した。以上の結果から，過去に幼児との接触経験があり，自身の被養育体験や両親の子育てについての意識が肯定的であるほうが「親性準備性」を獲得しやすいと考えられた。育児への意識は，母親への感情と関連することから，母親の影響を受けやすいと考えられた。

愛着スタイルとの関連　愛着スタイルについて一元配置の分散分析を行い，多重比較を行った。「乳幼児への好意感情」で，群の効果がみられた（$F(3,210)=6.125$)。「安定型」「拒絶型」「とらわれ型」の 3 群は「恐れ型」より得点が有意に高かった。また，「育児への積極性」でも群の効果がみられた（$F(3,209)=8.762$)。「安定型」は，「恐れ型」よりも得点が有意に高かった。「恐れ型」の愛着スタイルを持つ者は，親性準備性が獲得されにくいことが明らかとなった。

【引用文献】

井上義朗・深谷和子（1983）．青年の親準備性をめぐって周産期医学 13, 2249-2252

羽田野花美・門脇千恵（2004）．青年期男女の親性準備性および関連要因 日本看護学会論文集 母性看護 35, 140-142

木村留美子・津田朗子・木村礼・輿水めぐみ・中出清香・竹俣由美子・棚町裕子（2004）．大学生の親性の準備に関する研究－ふれあい体験とアタッチメントスタイルからみた子ども観－ 金沢大学大学教育開放センター紀要 24, 9-18

謝辞：本研究は，発表者が関西福祉科学大学社会福祉学部に提出した卒業論文を修正したものである。本研究にあたり、ご指導いただいた関西福祉科学大学谷向みつえ先生に感謝の意を表します。　（さきま　まなみ）

青年期におけるきょうだい関係と精神的健康について

○桜井良之[1)]　神澤　創[1,2)]
([1)] 帝塚山大学大学院人文科学研究科　[2)] 帝塚山大学心理福祉学部)
キーワード：きょうだい関係、精神的健康、青年期

【研究の目的】 家族関係では愛着形成やモデリングを行う上で重要な存在である親子関係が重視され、きょうだい関係は副次的に扱われることが多い。きょうだいは、行動のモデルとしての機能や比較対象としての機能をもち、性役割や道徳性の発達に影響する。また、遊びやけんかを通じて社会的スキルを学び、その交流の中で対人感受性を磨いていく上で重要な存在であると考えられる。

きょうだい関係を構成する因子について、森下（1991）は「分離」「信頼」「親和」「養護」「対立」「畏敬」の 6 つに分類している。こうしたきょうだい関係は発達の中で形成されていくものだが、成長に伴いきょうだいと接する機会は減少し、その関係も変化していくものと思われる。

近年、我が国では少子化に伴いきょうだい数そのものが減少している。合計特殊出生率をみると、1949 年の 4.32 から 1971 年には半減し（2.16）、2007 年には 1.34 にまで低下している（厚生労働省,2007）。きょうだい数の減少とともに、きょうだい関係の希薄化が進んでいるという指摘もある（早川・依田,1983；依田,1999）。

本研究では、きょうだいとの関わりが質的・量的に変化すると思われる青年期に焦点を当て、その重要性を検討するために精神的健康との関係を調査した。近年の社会状況において、より充実した生活を送るために精神的健康は重要な指標と考えられ、きょうだい関係の違いにより精神の健康度が変化するのであれば、少子社会におけるきょうだいの重要性を確認できるのではないかと考えられる。これらについて、きょうだい関係を構成する因子、きょうだい数、年齢差、出生順位、性別を考慮した上で検討した。

仮説

・きょうだい関係が「対立」関係であれば、「親和」「信頼」関係に比べて精神的健康度は低くなる。

・きょうだい関係が「対立」関係であれば、「親和」「信頼」関係に比べて精神的疲労度は高くなる。

【方法】

調査時期　2008 年 7 月実施。

調査対象　奈良県下の四年制私立大学生 238 名（m=89, f=149, age=20.0y）であった。一人っ子である者（30 名）を除いた 208 名（m=77, f=131, age=19.9）を分析対象とした。

調査方法　きょうだい関係の分類には、森下（1991）の質問紙（81 項目）から 18 項目を抽出し、5 件法による回答を求めた。また、精神的健康については、WHO で開発された SUBI（Subjective Well-Being Inventory：40 項目、3 件法）を使用し、精神的健康度（以下、健康度）と精神的疲労度（以下、疲労度）を測定した。健康度は点数が高いほど健康であるとされ、疲労度は点数が低いほど精神的にも身体的にも疲労度が高いとされる。なお、本調査の対象が大学生であることから、配偶者と子どもに関する質問（3 項目）を除去し、残り 37 項目について回答させた。

【結果】 きょうだい関係に関する 18 項目について、主因子法による因子分析を行い、固有値 1 以上の基準を設け 5 因子を抽出後、バリマックス回転を行った。それぞれ親和因子、信頼因子、養護因子、対立因子、畏敬因子とした。各因子における項目得点を平均値で高・低群に分け、それぞれの健康度と疲労度を比較した（Figure 1、Figure 2）。

その結果、健康度については、親和および信頼因子では高群の方が高く（$t(206)=5.17, p<.05$）（$t(206)=2.19, p<.05$）、畏敬因子では低群の方が高いことが示された（$t(206)=-2.01, p<.05$）。また、対立因子では低群の方が高いことが示唆された（$t(206)=-1.86, p<.10$）。一方、疲労度については、対立および畏敬因子の高群は低群より高かった（$t(206)=-3.19, p<.05$）（$t(206)=-3.22, p<.05$）。

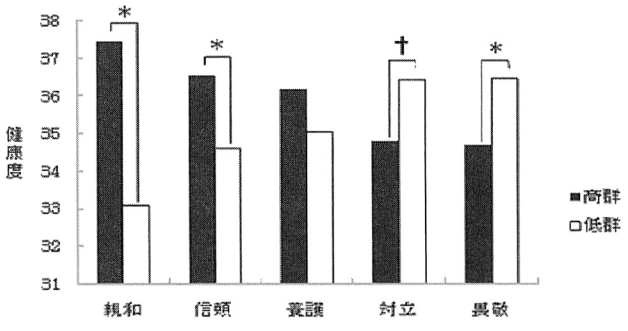


Figure 1. 各因子の高群・低群における健康度の比較

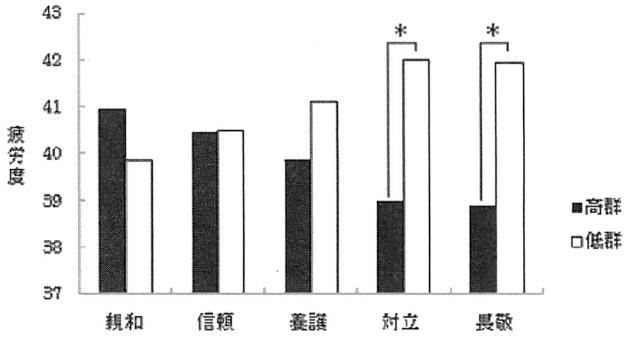


Figure 2. 各因子の高群・低群における疲労度の比較

† : $p<.10$, * : $p<.05$

【考察】 本調査の目的は、きょうだい関係の在り方が精神的健康に及ぼす影響について調べることであった。その結果、きょうだい数・年齢差・性別は精神的健康に影響しないが、きょうだい関係の在り方が、精神的健康に影響することが明らかとなった。親和や信頼のような良好なきょうだい関係であると健康度は高まり、対立や畏敬のように相手に対して気を遣ったりストレスを感じるような関係では、精神的健康度は低下し疲労度も増してしまうようである。これらのことから、青年期におけるきょうだい関係は精神的健康に少なからぬ影響を与え、きょうだいの役割は幼少期の比較対象から、精神的健康に影響を与える対人関係の相手へと変化すると考えられる。また、少子社会を迎えた現代こそ、きょうだい関係の重要性を再確認する必要があるだろう。

（さくらい　よしゆき・かみざわ　つくる）

教職課程の履修動機に関する研究

— 体育専攻学生の場合 —
○鈴木悠介[1)]　藤田主一[1)]
([1)] 日本体育大学体育学部)
キーワード：免許状、教師、動機

【研究の目的】

2009年4月より教員免許法が改正された。それにともない、教員免許に10年の有効期間を設ける更新制が導入された。以前では、教員免許を取得後何らかの問題がない限り、教員は教員免許を持ち続けていた。しかし現在は、取得後10年で失効することになる。その背景に、度重なる教員の不祥事、子どもの生活環境など、教育に関わる問題が勃発しており、このような環境下においても耐えうる教員の育成が急務であると判断された。つまり、教員を目指す学生の成長が大きい役割を果たすことになるといえる。その中で、学生たちは、あまり先行きの見えない中、どのような思いで日々学習に励んでいるか。

先行研究では、教員のイメージや教員の志望動機に関する研究が行われ、教師に対する職業感など教職課程履修者の一般的意識を明らかにしている（高島ら、1993）。しかし、教科が多数含まれており、一つの教科に絞られていない。そこで、本研究では体育専攻学生を対象に教職課程の履修動機を調査することとした。

【方法】

調査対象者は、A大学の教職課程履修者の3年生396名（男子271名、女子125名）であった。調査期日は2006年6月上旬で、本研究の教示として「あなたが『教職課程』を履修した動機（理由）は何ですか。」というものであった。設問は先行研究を参考に選定し25項目からなる質問紙で、5件法で5「非常に当てはまる」-1「全く当てはまらない」とした。なお、回答が欠損している箇所には、その項目における平均得点を代入して分析を行った。

【結果】

全25項目を対象に、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。固有値1.0以上を示した因子数は、2因子であり、第1因子の項目数は15項目、第2因子の項目数は9項目、計24項目であった。この因子数は、抽出因子の解釈の容易さと全項目数からみても妥当であろうといえる。

プロマックス回転を行った結果を寄与率の高いものから3つをTable1に示した。また、因子パターンと因子相関も同様にTable1に示した。第一因子は、「教師の仕事に関心を持っていたから」「教師になりたいので教員免許状が必要だから」「教師は一生打ち込める魅力的な職業だから」などの項目において負荷量が高く、自分の内面に関することが多くみられるため、Ⅰ「内発的動機づけ」因子と命名した。

第二因子は、「教員免許状を持っていると社会から信用されるから」「教員免許状は価値の高い資格といわれているから」「教員免許状は企業に就職するときにも有利だから」などの項目において負荷量が高く、外的な要因が多くみられることからⅡ「外発的動機づけ」と命名した。信頼性は、クローンバックのα係数を算出し、「内発的動機づけ」因子で.91、「外発的動機づけ」因子で.82であった。このことから尺度の信頼は有していることが示された。

そこで、因子分析の結果から各因子に基づいて、性差と教員採用試験の受験について検討した。

Table1　教職課程の履修動機結果（抜粋）

		α=.91 Ⅰ	α=.82 Ⅱ
A5	教師の仕事に関心を持っていたから	.82	-.17
A25	教師になりたいので教員免状が必要だから	.81	-.11
A13	教師は一生打ち込める魅力的な職業だから	.81	-.02
A15	教員免許状を持っていると社会から信用されるから	-.11	.79
A19	教員免許状は価値の高い資格といわれているから	-.01	.74
A12	教員免許状は企業に就職するときにも有利だから	-.21	.67
	因子間相関	.16	

検討1　性差

「内発的動機づけ」因子において、性差でt検定を行ったところ、有意差がみられた（両側検定：t (214.050) = 3.048, p <.01）。したがって、女性より男性のほうが内発的な動機が強いとえいえる。

「外発的動機づけ」因子において、性差でt検定を行ったところ、有意差はみられなかった。つまり、外発的な動機では、男性も女性も同じような傾向にあるとえいえる。

検討2　教員採用試験の受験の有無

フェースシートにおいて「あなたは、教職に就くために、教員採用試験（公立・私立）を受けますか？」の質問を行った。回答法は1「ぜひ就きたいので教員採用試験を受ける」-4「教員採用試験は受けるつもりはない」の4条件であった。内発的動機における教員採用試験の受験の有無について一要因の分散分析を行った結果、受験の有無が有意であった（F (3,392)=95.754, p<.001）。そして、Bonferroni法を用いた多重比較を行った結果、条件1と条件2、条件1と条件3、条件1と条件4、条件2と条件3、条件2と条件4の間に有意差がみられた（Mse =0.39, 5%水準）。

【考察】

検討1において、内発的な動機づけで、男性のほうが高い理由として、学生の人数の違いが挙げられる。A大学においても男子の人数が多く、女性の人数を約2倍上回っている。つまり、男性は中・高の場合、体育教師になりやすいと考えているのではないかと考えられる。そのため、男性教員の内発的動機が高くなったのではないかと考えられる。

検討2において、内発的な動機が高い人は教員採用試験を受験し、逆に低い人は受験をしない傾向にあるといえる。A大学の場合、体育という特殊な教科であり、自分の所属する部活動の仲間の影響に受けていることが考えられる。よって、教員になる意思が高く、受験に受かるという意識強いのではないかといえる。

【引用文献】

出川聖尚子・生熊譲二 2003 教職課程履修動機の分析(1) 湘南工科大学紀要 37(1) 91- 101
平岡清志 1993 教職課程履修への動機づけに関する調査 日本教育心理学会総会発表論文集(35)522

（すずき ゆうすけ・ふじた しゅいち）

中学生の家庭ストレスと学校ストレスが学校適応感に及ぼす影響について

○遠藤　嵩仁[1)]　井上　孝代[2)]
([1)] 明治学院大学大学院心理学研究科　[2)]明治学院大学心理学部
キーワード：家庭ストレス、学校ストレス、学校適応感

【研究の目的】近年、学校現場では指摘される問題が後を絶たない。坂野(1990)は、学校生活においてみられる様々な児童・生徒の逸脱行動を生み出す原因の１つとして、彼らが学校生活の中で感じているストレスの増大を挙げている。そこで学校場面におけるストレスを中心に児童・生徒の心理的ストレスに関する研究が数多くなされてきた。しかし、その多くは学校ストレスについて扱ったものであり、生徒の家庭ストレスについて取り扱ったものは少ない。その理由を田中・谷本(2002)は、①子供たちの生活の中心となり、生活の大半を過ごすのは学校環境であること、②子供たちが不適応行動を引き起こすきっかけとなるのは学校場面での出来事が多いこと、などとしている。しかし岡安(1998)が指摘しているように、中学生のストレス状況に影響を及ぼす要因は学校関連ストレッサーだけでなく、家庭における様々な出来事や家族のメンバーからの要求も、学校関連ストレッサーと同様かあるいはそれ以上に大きな影響を及ぼしていると考えられる。

よって本研究では、学校ストレス及び家庭ストレスに着目し、中学生の学校適応感に及ぼす影響について検討する。また、学校ストレスと家庭ストレスの関連についての研究は少ないため、この２つのストレスの関連性についても検討する。

【方法】

調査期間：　2007年　12月上旬。

手続き：T県A中学校の全学年の生徒626名(男子335名、女子291名)を対象とし、倫理的配慮のもと、各学年７クラスにおいて質問紙調査を行った。

倫理的配慮：生徒への負担を考慮し、各尺度の各因子において因子負荷量の上位３項目を用いて項目数を減らし、ネガティブな項目が多いため、よってポジティブな項目をダミーとして入れ、印象を和らげた。

調査内容：

ⅰ)中学生用学校ストレッサー尺度(岡安ら：1992)：18 項目に修正、その出来事の最近数ヶ月の経験頻度とその嫌悪性をそれぞれ４段階評定で求めた。

ⅱ)家庭ストレス尺度(岡安：1992)：12 項目に修正、その出来事の最近数ヶ月の経験頻度とその嫌悪性をそれぞれ４段階評定で求めた。

ⅲ)学校適応尺度(水野ら：2003)：15項目に修正、４件法。

【結果】各尺度間の相関係数を算出し、これらをもとに因果関係を検討するために重回帰分析を行った。学校適応感尺度の因子を従属変数とし、学校ストレッサー尺度を独立変数とした重回帰分析の結果、「心理領域」は「教師との関係」(β =-.106*)、「友人関係」(β =-.310**)、「学業」(β =-.111*)の間と、「身体領域」は「教師との関係」(β =-.129*)、「友人関係」(β =-.200**)の間に有意な負の影響がみられた。

学校適応尺度を従属変数とし、家庭ストレス尺度を独立変数とした重回帰分析の結果、「身体領域」は「家の人との関係」(β =-.143*)の間において有意な負の影響がみられた。

Table 1 学校ストレスと学校適応感の重回帰分析の結果

	心理領域	身体領域
教師との関係	-.106*	-.129**
友人関係	-.310**	-.200**
学業	-.111*	-.032
R^2	.171	.103

* p<.05　** p<.01

学校ストレッサー尺度を従属変数とし、家庭ストレス尺度を独立変数とした重回帰分析の結果、「教師との関係」は「家の人との関係」(β =.163**)、「塾」(β =.240**)の間と、「友人関係」は「家の人との関係」(β =.141*)、「きょうだい関係」(β =.140**)、「叱責」(β =.169**)の間と、「学業」は「塾」(β =.112**)、「叱責」(β =.393**)の間に有意な正の影響がみられた。

Table 2 家庭ストレスと学校ストレスの重回帰分析の結果

	教師との関係	友人関係	学業
家の人との関係	.163**	.141*	.020
きょうだい関係	.092	.140**	.045
塾	.240**	.111	.112*
叱責	.068	.169**	.393**
R^2	.154	.156	.214

* p<.05　** p<.01

【考察】結果から、学校ストレッサーが学校適応感に影響を及ぼしていることが明らかになったが、家庭ストレスが学校関連ストレッサーと同様かあるいはそれ以上に大きな影響を及ぼしているとは言えなかった。

しかしながら、家庭ストレスは学校適応感よりも、学校ストレッサーに影響を及ぼしていることが明らかとなった。家庭ストレスは学校ストレッサーを増加させ、その学校ストレッサーが学校適応感の低下を招いているということが示唆された。つまり、「塾」に通い勉強することなどの家庭ストレスが、教師による注意や指導態度の「教師との関係」から受ける学校ストレッサーなどの増加に影響を及ぼし、この「教師との関係」が不安感や激しい感情変化などの「心理領域」や、頭痛や頭が重いなどの「身体領域」に負の影響を及ぼしているということが考えられる。

このように、家庭ストレスは学校ストレッサーに直接的に影響を及ぼしてはいなかったものの、学校ストレッサーとの関連は認められたため、今後、家庭ストレスを踏まえたうえで中学生のストレス状況について検討する必要があるだろう。

【引用文献】田中宏二・谷本弘樹　2002　児童・生徒の心理的ストレスに関する研究動向　岡山大学教育学部研究集録119、p141-146

（えんどう たかひと・いのうえ たかよ）

大学生における重要な他者とその情緒的サポート認知の関連性

—DLT(Doll Location Test)によって確認された親密な他者の存在を踏まえて—

○山崎　創[1)]　井上孝代[2)]
([1)] 明治学院大学大学院心理学研究科　[2)]明治学院大学)
キーワード：親密性、Doll Location Test、情緒的サポート

【研究の目的】

他者との結びつきが希薄になりつつある現代において、親密な他者との心理的距離について調べることは、人間関係の視点から個人を取り巻く社会システムを理解するうえで有効なアプローチといえる。親密性の概念としては、発達論（Evans,1967）や家族心理学（野末,1991）、社会学（Giddens,1990）の概念を援用し、源家族から分化した個人が社会の中でつながりを模索し、やがて家族というカテゴリーを越えた独自で個々の親密な関係を築いていく過程で得られるものとした。また親密性は、情緒的サポートを提供する他者がもつ重要な要素であることが示唆されており（飯塚,1992）、親密性の模索が個々の包括的支援につながると考えられる。以上のようなことを踏まえると、青年期後期に位置し、また成人期前期を迎えつつある大学生の人間関係を親密性の観点から調査し、さらに情緒的サポートとの関係を調べることは非常に意義のあることといえる。そこで本研究の目的は以下の通りである。

第一に、大学生の家族や恋人、友人等との心理的な距離の差を調べる。第二に、性差や居住形態が心理的な距離に及ぼす違いを調べる。第三に、心理的距離の検査で明らかになった親密な他者について情緒的サポートの状態を調べ、両者の関連性を検討する。

【方法】

都内の私立大学に通う大学生 49 名が実験に参加した。まず、実験者と実験参加者は、一対一の実験室場面において八田(1974)の開発した Doll Location Test(人形配置技法を用いた人間関係テスト,以下 DLT)を実施した。DLT は、検査盤上の中心に自身を表す人形を配置し、その周りに家族や友人などを表す人形を配置していくことで、被検査者の人間関係を探るものである(Fig.1)。また、他者に見立てた人形と自身を表す人形(中心)との距離は、親密性を表す変数として扱われる（築地,2007)。

DLT 終了後、久田ら(1989)が作成した学生用ソーシャル・サポート尺度を用いて質問紙調査を行った。全実験終了後、それぞれのデータを回収し、分析を行った。

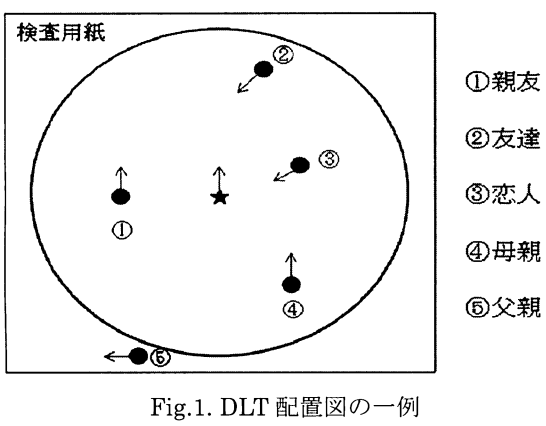


Fig.1. DLT 配置図の一例

【結果】

DLT に配置された他者のカテゴリーや位置関係から、以下のようなことが明らかになった。

中心（自分）からの配置距離が短く、異なるコミュニティに属する 3 カテゴリー（恋人、親友、母親）について分散分析を行ったところ、有意差がみられた($F(1.35,24.26)=8.68, p<.01$)。そのため Bonferroni の方法を用いてペアごとの比較を行ったところ、「母親」は、「恋人」*、「親友」$^{+}$ に比べて距離が離れていることが確認および示唆された($^{*}p<.01$, $^{+}p<.10$)。

また、「父」、「母」、「家族」カテゴリーの配置距離が、女性は男性よりも短かった($p<.05$)。さらに、居住形態による家族との配置距離の違いを比較したところ、一人暮らしの者のほうが家族との間の距離が長くなることが示唆された($t(42)=-1.85, p<.10$)。

続いて、配置距離と情緒的サポート認知の関連性について調べたところ、配置距離の短い他者上位 5 名とその情緒的サポートの認知量に相関があることが示された($r(47)=-.288, p<.05$)。そこで、配置距離の長短で情緒的サポートの認知量に差がみられるか調べたところ、最も距離の短かった者と 5 番目に距離の短かった者の認知量には、差があることが示唆された($t(46)=1.77, p<.10$)。

【考察】

「恋人」、「親友」、「母親」の配置距離の比較から、大学生が家族から離れ、社会システムの中で獲得した友人や恋人と親密な関係を築いていることが示唆され、家族とつながりつつも自発的で親密な関係を構築していると考えられる。また配置距離の比較から、女性は男性に比べて「父」、「母」、「家族」カテゴリーに対してより大きな親密性を持っており、家族からの自立よりも共生を志向することが示唆された。今後は、家族への親和性や一体感の感覚と性差との関連も含めて検討する必要がある。さらに、一人暮らしと実家暮らしという異なる生活環境が、家族との親密性に影響を与える可能性が示唆され、大学生の人間関係を考える際の重要な要素として生活環境を視野に入れることが考慮される。

親密な他者と情緒的サポートの間にはある程度の相関がみられた。従って DLT により親密な他者について探っていくことは、問題を抱えた者が情緒的サポートを得るための有効な手段となることが示唆された。ただし、その親密な他者から得られる情緒的サポートの認知量は、透明性の錯覚（武田ら,2007）など、様々な影響が考慮されるため、臨床場面での応用には複数回の検査や面接を通した慎重な見立てが必要となる。

【主要引用文献】

八田武志(編)　2001　シンボル配置技法の理論と実際　ナカニシヤ出版

（やまざき そう・いのうえ たかよ）

青年期の子どもから捉えた家族の凝集性

— 中学生、高校生、そして大学生を対象として—

○平田裕美[1] 横道友理子[2] 淵上恭江[3] 竹内宣江[2] 柴田美貴[2] 上岡美紀[4] 山田智世[4] 小川由希子[4] 田崎雅子[4] 杉山里美[4]
[1] 女子栄養大学栄養学部 [2] 女子栄養大学栄養学部実践栄養学科
[3] 女子栄養大学栄養学部保健栄養学科栄養科学専攻 [4] 女子栄養大学栄養学部保健栄養学科保健養護専攻

キーワード：青年期、家族、父親・母親

【研究の目的】

青年期の子どもの人格的発達や行動の発現と、家庭における「居心地の良さ」「雰囲気」、そして父親・母親の養育行動との関連については、この時期の子どもの精神的健康なども含めて、様々な側面から検討されている（例えば、平田、2005）。

本研究では、家族システムの視点から、青年期前期・中期・後期にあたる中学生、高校生、そして大学生を対象に、家族の凝集性に焦点をあて、それぞれの時期の子どもが持つ「家族のまとまり」に関する考えへの影響要因は何かを明らかにすることにより、青年期の子どもが、心の「落ち着き」を持てるようになるには、どのような環境整備が必要なのかについて検討する。

【方法】

調査協力者

関東に所在する私立中学・高校（一貫校）、同地域に所在する大学にて無記名式質問紙調査を行った（2009 年 1 月と 4 月）。中学生 234 名（男子 114、女子 120、平均年齢 12.2）、高校生 392 名（男子 204、女子 188、平均年齢 15.1）、大学生 150 名（男子 30、女子 120、平均年齢 19.8）。

調査手続きと内容

家族の凝集性には、Olson,Porter＆Levee(1985)『FACES-Ⅲ：Family Adaptability and Evaluation』日本語版(貞木・樋野・岡野，1992)の凝集性に関する 10 項目を用いた。同様に、家族について尋ねる項目では、平田（2004)による父親・母親の「養育行動尺度」14 項目、「配偶者との子育て協力度尺度」5 項目を、「親へのイメージ」、「親からの言葉かけ」については大学生への予備調査にて選択された「親への肯定的な形容詞」8 項目、「親からの言葉かけに対する否定的な形容詞」 5 項目を採用した。子ども自身を尋ねる項目では、中学生・高校生には、学校生活満足度尺度（河村，1999）20 項目、大学生には、自尊感情尺度(Rosenberg, 1965)日本語版(山本・松井・山成，1982)の 10 項目を用いた。各尺度項目は，「かなりそう思う／している」から「全くそう思わない／していない」の 6 件法で行われた。個々の尺度得点は、下位尺度で項目数が異なる為、断りのない限り、項目平均値を下位尺度得点とした。さらに、中学生・高校生には、「家庭では、誰と一緒に食事をすることが多いですか（一人で・きょうだいと・親と・祖父母と・その他と）を、大学生には、矢吹(2007)の『良い子』の定義を紹介し、「自分は『良い子』だと思いますか」「親から『良い子』と見られていると思いますか」について、同様に 6 件法で尋ねた。

【結果と考察】

家族の凝集性を測る Olson,Porter＆Levee(1985)による『FACES-Ⅲ：Family Adaptability and Evaluation 』日本語版(貞木・樋野・岡野、1992)の凝集性に関する 10 項目に因子分析（最尤法、*promax* 回転）を施したところ、1 因子構造であると確認された（信頼性係数 *Cronbach* のα係数＝.91）。次に、それぞれの時期の子どもが持つ家族の凝集性に影響を与える、または影響されていると考えられる要因として挙げられた Baumrind（1986）の「親の管理」「成熟への要求」「親と子どものコミュニケーション」「親の養育」の 4 次元の養育行動を参考に作成された、親の「養育行動尺度」（平田、2004）に因子分析（最尤法、*promax* 回転）を施したところ、父親、母親ともに、2 因子と認められた。親の養育，親と子どものコミュニケーションにあたる「子どもと意見が異なった時，子どもの意見に耳を傾ける」などの養育行動を有する項目に負荷量が高い「会話／表現行動因子」の 8 項目，親の管理，成熟への要求である「家庭でのルール（帰宅時間）を守らせる」などの養育行動を意味する項目に負荷量が高い「管理／成熟への要求行動因子」の 6 項目から構成されていた。前者は親の子どもへのコミュニケーション因子、後者は親の子どもをしつける因子と理解された（信頼性係数 *Cronbach* のα係数＝父親．92、．90、母親．91、．92）。父親・母親の「配偶者との子育て協力度尺度」(平田、2004)の因子分析（最尤法、*promax* 回転）でも、1 因子構造が理解された（信頼性係数 *Cronbach* のα係数＝父親．86、母親．83）。「親への肯定的な形容詞」「親からの言葉かけに対する否定的な形容詞」についても 1 因子構造が確認された（信頼性係数 *Cronbach* のα係数＝父親．89、母親．87、父親．94、母親．93）。学校生活満足度尺度（河村、1999）も原著と同じように 2 因子構造が確認された（信頼性係数 *Cronbach* のα係数＝．81、．80）。自尊感情尺度(Rosenberg、1965)日本語版(山本・松井・山成、1982)の因子分析（最尤法、*promax* 回転）でも、原著同様に 1 因子構造が認められた（信頼性係数 *Cronbach* のα係数＝．85）。

モデルの検討をするために、まず、大学生の自尊感情を基準変数、その他を説明変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を実行した。結果、自尊感情に、「自分は『良い子』である」が正の影響を（標準化β=.35，p<.01）、親からの言葉かけは冷たい(母)が負の影響を及ぼしていた(標準化β=-.19，p<.01、調整済み R2=.18，p<.01）。これについては、大学生女子のデータのみの場合でも結果は同じであった。ただし、大学生男子をデータから除外すると、分散が減り、βや R2 の値が上昇していた（「自分は『良い子』である」：標準化β=.375，p<.01、親からの言葉かけは冷たい（母）：標準化β=-.25，p<.01、調整済み R2=.22，p<.01）。

中学生・高校生の結果を含む個々の因果関係における解析の具体的な内容は、当日の発表にて行うこととする。

【引用文献】

・平田裕美 2004『父親の養育行動と高校生の子どもの精神的健康—母親の養育行動との直接比較—』お茶の水大学 21 世紀 COE プログラム「誕生から死までの人間発達科学」平成 1 5 年度公募研究成果論文集, 2, pp71-81.

・貞木隆志・樋野潤・岡田弘司 1992『家族機能と精神的健康 Olson の FACESⅢを用いての実証的検討』心理臨床学研究，10, pp 74-79.

・矢吹孝志 2007『子どもは親を選べない』pp 88．幻冬舎ルネッサンス．東京.

（ひらたひろみ・よこみちゆりこ・ふちがみゆきえ・たけうちひさえ・しばたみき・かみおかみき・やまだちよ・おがわゆきこ・たざきまさこ・すぎやまさとみ）

働く母親が考える「養育への負の効果」

—高校生の子どもから捉えた養育行動に着目し—

○平田裕美
（女子栄養大学　栄養学部）

キーワード：働く母親，高校生，養育行動

【研究の目的】

今日，子どもを育てながら働く女性，「働く母親」の増加は著しい．しかし，働く母親の多くは，仕事と家庭のどちらを選択すればいいのかという葛藤，双方を担うことによる現実的な負担を感じている（平田，2003；加藤・金井，2006）．このような働く母親を取り巻く背景には，伝統的役割分業観，そして家庭における母親の役割を強調するあまり，子どもの問題行動，例えば，不適応，精神疾患と関連して，母親を責める「mother-blaming」，さらに他者からの非難だけではなく，母親自身が自らを責める「self-blaming」傾向が認められている（Jackson&Mannix, 2004）．そこで，本研究では，母親の就労状況により，青年期の子どもの親への評価に相違があるのかどうかを明らかにすることを目的とした．

【方法】

調査対象者

東京都内にある私立高校に通う生徒1049名とその保護者．

配布・回収は，協力を依頼した高校の担任がHRで父親用，母親用，子ども用質問用紙を1セットにしたものを生徒に配布，一週間後に回収した（2003年7月）．父親・母親・子どもの回収数は，保護者 596 名（28.4%），子どもは 332 名(31.6%)であった．さらに，各尺度項目に，ひとつでも欠損値があるものは除外した．結果，母親 268 名が分析対象とされた（年齢 M=47.8, SD＝10.03）．内，仕事をもつ母親は 160 名（男子：57 名，女子 103 名），専業主婦の母親は 108 名であった（男子：40 名，女子：68 名）．

調査項目

母親の養育行動・子どもから捉えた母親の養育行動については，中学生，高校生の親の養育行動を対象とした「子どもの悩みの相談にのる」「子どもと意見が異なった時，子どもの意見に耳を傾ける」など，親と子どものコミュニケーションを担う行動を意味する会話／表現行動因子（8項目）と，「子どもが悪いことをした時，注意し，厳しく叱る」などの社会のルールを教える行動を意味する管理／成熟への要求行動因子（6項目）から成立する「親の養育行動尺度」を使用した．また，配偶者との協力については，「家族の中の問題（子どもの教育やしつけを含めて）につ *promax* 回転いては夫婦で考える」など，1因子性の高い5項目からなる「配偶者との子育て協力度尺度」を用いた（平田，2003；2004）．親の子どもへの好感・子どもの親への好感は，井上・小林（1985）による『パーソナリティ認知に用いられやすい特性形容詞』から「好きな」「頼もしい」と，予備調査にて確認された「信頼できる」「頑張っている」「協力的な」「気難しい」を採用し，「あなたのお父さま/お母さま/お子さまは，あなたにとって，な存在である」という形式で尋ねた．

【結果と考察】

因子構造の確認

母親が現在，子どもに行っている養育行動，子どもが現在，母親が自分にしてくれていると考えている養育行動について，因子分析（最尤法，*promax* 回転）を行った結果，「会話／表現行動因子」と「管理／成熟への要求行動因子」の2因子が抽出された（母親：α＝.84，α＝.80．子どもから見た母親：α＝.94，α＝.83）．配偶者との協力についても因子分析（主成分法）を施したところ，1因子性が高いことが確認された（α=.91）．さらに，母親の子どもへの好感・子どもの母親への好感に関する因子分析（主成分法）の結果では，「気難しい」という項目のみ負荷量が低いため除外した．再度因子分析を行うと，個々に固有値が急激に下がる状況が見られ（母親：第1：2.76，第2；0.78，第3；0.55，子ども：第1：3.70，第2；0.48，第3；0.33），項目の負荷量より，1因子性が高いと判断した（母親α＝.80，子どもα＝.91）．親への好感を示している内容を鑑み，親への好感尺度と命名した．各尺度の信頼性係数は，Cronbachのα係数で，.80～.91と十分な内的整合性を備えていることが示唆された．

Table1. Means, Standard Deviations and Statistical analysis

variable	Working Mother			Non-Woking Mother			*t*
	M	S.D	N	M	S.D	N	
1. mother:positive feelin	4.83	0.71	160	4.90	0.61	108	n.s
2. mother:communicatio	4.56	0.58	160	4.60	0.56	108	n.s
3. mother:control	4.72	0.58	160	4.74	0.62	108	n.s
4. child:positive feelings	4.79	1.02	160	4.81	1.01	108	n.s
5. child:communication	4.23	1.19	160	4.21	1.16	108	n.s
6. child:control	4.28	0.96	160	4.47	0.99	108	n.s
7. cooperating	4.42	0.86	160	4.57	0.00	108	n.s
8. working time	6.51	2.45	160	0.15	0.85	15	n.s
9. weight to family(%)	62.41	16.78	159	88.07	15.67	41	**

Note:Significant differences between working mother and non working mother.

** P<.01

註：専業主婦家庭においても，就労時間を申告しているデータがあった．面接調査，及びコメント欄にて，内職等であることが確認されている．

働く母親が考える「養育への負の効果」

母親の会話/表現行動（「母会話行動」と示す），母親の管理/成熟への要求行動（「母管理行動」と示す），子どもから捉えた母親の会話/表現行動（「子→母会話行動」と示す），子どもから捉えた母親の管理/成熟への要求行動（「子→母管理行動」と示す），母親の子どもへの好感，子どもの母親への好感，配偶者との協力，母親が考える家庭への比重（「家庭への比重」と示す）に，母親の就労の有無を考慮したT検定を実施した．

Table 1より，家庭への比重のみ有意であった($t(195)=9.01, p<.01$)．これより，働く母親が考える「養育への負の効果」は認められるのかという問いには，働く母親よりも専業主婦の母親の方が家庭に比重を置いていると考えてはいたが，母会話行動，母管理行動，子→母会話行動，子→母管理行動，母親の子どもへの好感，子どもの母親への好感，配偶者との協力には有意な差が見られなかった．

仕事を持つことにより，家庭に比重をかけられないと働く母親が考えていても，母親が考える，子どもに不憫な思いをさせているのではないかという，仕事を持つことによる「養育への負の効果」は見出されなかった．さらに，母親の養育行動を促進させる要因については，当日発表する．

（ひらたひろみ）

家族機能認知が大学生の精神的健康に与える影響

安原久美子

（帝塚山大学大学院人文科学研究科）

キーワード：家族機能，大学生，精神的健康

【研究の目的】家族3者の家族システムの機能と大学生の精神的健康との関連について検討した。夏野・西出(1997)は，中学生を持つ家族を対象に家族成員の家族システムの機能状態の認知が子どもの抑うつ感にどのような影響を与えるかを検討し，子どもが家族を肯定的に評価していると抑うつ感が減じられること，父親と母親は家族機能にある程度共通した認知をしていること，母親の認知が子どもの認知に対して影響力を持つことが示された。しかし，父親の認知は，子どもの認知に影響力を持たなかった。両親の家族機能に対する認知が青年の心理的自立に及ぼす影響について検討した高坂・戸田(2005)の研究では，青年が家族を肯定的に評価しているほど心理的自立が高いこと，父親と母親はある程度共通した認知をしていること，両親の家族機能に対する認知は，母親の方が強かったが，父親も影響を与えることが示された。そこで，心理的自立をする大学生において，大学生の家族機能認知が精神的健康を高めるかという問題が生じる。本研究では，先行研究と合わせ，大学生をもつ家族を対象に，構造方程式モデリングを用いて，家族システム機能の認知が大学生の精神的健康に影響を与えるか検討する。

【方法】

対象　2008年7月，京都府内の大学生193名(男性101名，女性90名，不明2名)とその両親193名に調査を実施した。

調査内容　性別，年齢などの他に，家族機能を測る項目とストレス反応を測る項目が含まれていた。家族機能を測定するために，西出(1993)が作成したFAI(Family Assessment Inventory) 30項目のうち18項目を用いた。精神的健康を測る尺度として，三浦(2002)のストレス反応尺度20項目を用いた。4件法で回答を求めた。FAIには，大学生とその両親が回答し，ストレス反応尺度には，大学生のみが回答した。

【結果】家族機能認知が大学生のストレス反応に与える影響を検討するために，因果モデルを構築した(Figure 1)。適合度は概ねほぼ満足できた(GFI=.904，AGFI=.829，AIC=156.295)。大学生の家族機能認知がストレス反応に対して負の影響を与えており，肯定的な家族機能認知がストレス反応を抑制することが示唆された。また，母親と父親の家族機能認知には正の相関が見られた。そして，大学生の家族機能認知に対して，父親の家族機能認知が正の影響を与えていた。

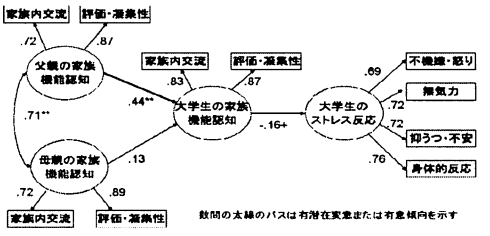


Figure 1　モデルの標準化推定値

【考察】先行研究と同様，大学生の肯定的な家族機能認知は，大学生の精神的健康を高めた。また，父親の家族システムの機能状態の認知と母親の家族システムの機能状態の認知はある程度共通した認知をしていた。特に，大学生を対象に行った本研究では，父親の家族機能認知が大学生の家族機能認知に対して，正の影響を与えていた。このことから，母親よりも父親の認知の影響が強いことがわかる。この結果は，父親の家族認知は子どもの抑うつ感に対して直接的にも間接的にも影響力を持たなかった西出・夏野(1997)の先行研究とは異なった結果となった。エリクソンが青年期における発達課題として，アイデンティティーの確立を述べているように，青年期にいる大学生は，自己統制や自分の生き方について考えるようになる。その為，大学生は自己統制や生き方を示す父親の影響を強く受けると考えられる。

【引用文献】

高坂康雅・戸田弘二 (2005). 青年期における心理的自立(Ⅲ)－青年の心理的自立に及ぼす家族機能の影響－　北海道教育大学紀要(教育科学編), 55, 77－85.

西出隆紀・夏野良司 (1997). 家族システムの機能状態の認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか 教育心理学研究, 45, 456-463.

謝辞　本研究は，発表者が同志社大学文学部に提出した卒業論文を修正したものである。本研究にあたり，ご指導いただいた長崎大学谷口弘一先生に感謝の意を表します。

（やすはら　くみこ）

大学生の抑うつ傾向と抑うつスキーマとの関連

八田ほなみ
(帝塚山大学大学院人文科学研究科)
キーワード：抑うつ，抑うつスキーマ，大学生

大学生の抑うつは社会的な問題になりつつある。白石(2005)は，質問紙（SDS）を用いて大学生の抑うつ状態を判定したところ，参加大学生の23%が治療対象とはならないまでも，多少の困難を抱えている可能性があると報告している。

一方，抑うつ傾向者の中核的問題として，Beck(1963)は自動思考(automatic thoughts)とスキーマ(schemata)によって構成される認知の歪み(cognitive disorder)を仮定している。自動思考とは，表層部のレベルにおいて様々な状況で出現してくる否定的な認知のことであり，スキーマとは，より深部のレベルにある認知構造や信念体系のことである。抑うつ傾向者には，スキーマの中でも独特の否定的な抑うつスキーマ（depressogenic schemata）があり，これが活性化されることによって自動思考が生み出されると考えられている（Beck, 1964）。

目的　本研究では，健康な大学生を対象に，現代の大学生の抑うつおよび抑うつスキーマ特性に関する基礎的な資料を得ることを目的とした。

【方法】

調査対象者　大学生456名(男性281名，女性174名，性別不明1名，平均年齢19歳)であった。

質問紙の構成　(1)抑うつ尺度:Zung(1965)が開発した自己記入式抑うつ尺度(Self Rating Depression Scale:SDS)の日本語版(福田・小林，1973)に緩衝項目を8項目加え，合計28項目とした。(2)抑うつスキーマ尺度：Weissman & Beck(1978)によって開発された非機能的態度尺度(Depressogenic Schemata Scale:DSS)の日本語版(家接・小玉, 1999)に緩衝項目を8項目加え，合計32項目とした。

【結果】

SDS の分布　SDS の分布は，Fig.1.のとおりであった。本調査の結果で「うつ傾向あり」(50以上)と判断される学生は，全体の28%であった。

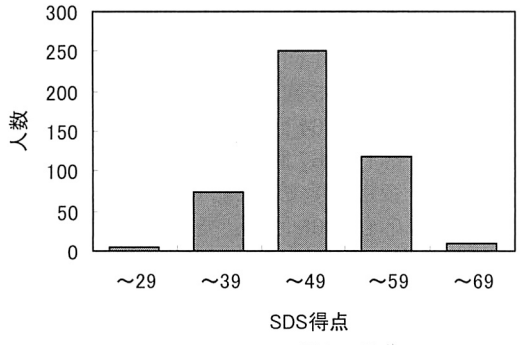


Fig.1. SDS得点の分布

DSS の分布　DSS の分布も，ほぼ正規性を示した。

SDSとDSSの関係性　一般臨床においてうつ傾向ありと判断される被験者(SDS 得点高群とする)と，そうでない被験者(SDS 得点低群とする)の DSS 得点の平均値に関して t 検定を行った。その結果，SDS 得点高群の方が SDS 得点低群よりも，DSS 得点が有意に高かった(t (454)= 5.98, p <.01)。その結果を Fig.2.に示した。

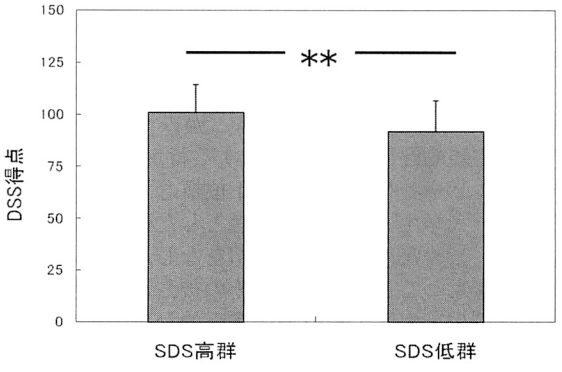


Fig.2. SDS得点高低群におけるDSS得点の比較
(** p < .01)

【考察】

Fig.1.から明らかなように，うつ傾向ありと判断される学生が全体の28%存在したことから，白石(2005)が述べたように，多少の困難を抱えている大学生は少なくないと考えられる。そして Fig.2.にも明らかなように，これらの学生の方が，抑うつスキーマ得点が有意に高かった。このことは，抑うつ傾向の高い学生の方が，物事をより否定的に捉える可能性を示唆している。大学卒業後，彼らが社会に出てより複雑な人間関係やストレスに曝されることを考えると，このような抑うつ傾向の高い学生に対して，うつ病を予防するための心理的介入を行うことが必要と思われる。

【引用文献】

Beck, A. T. (1963). Thinking and depression: I. Idiosyncratic and cognitive distortions. *Archives of General Psychiatry*, **9**, 324-333.

Beck, A. T. (1964). Thinking and depression: II. Theory and therapy. *Archives of General Psychiatry*, **10**, 561-571.

福田一彦・小林重雄 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究　精神神経学雑誌, **75**, 673-679.

家接哲次・小玉正博 (1999). 新しい抑うつスキーマ尺度の作成の試み　健康心理学研究, **12**, 37-46.

白石智子 (2005). 大学生の抑うつ傾向に対する心理的介入の実践研究―認知療法による抑うつ感軽減・予防プログラムの効果に関する一考察―　教育心理学研究, **53**, 252-262.

謝辞　本研究は，発表者が同志社大学文学部に提出した卒業論文を修正したものである。本研究にあたり，ご指導いただきました同志社大学教授，佐藤豪先生に感謝の意を表します。

(はった　ほなみ)

主観的ウェルビーイングの測度に関する研究（3）

角野 善司
（高崎健康福祉大学 健康福祉学部 社会福祉学科）
キーワード：主観的ウェルビーイング，人生に対する肯定的評価尺度

＝ 問題と目的 ＝

主観的ウェルビーイング（subjective well-being）は，幸福についての心理学的研究の鍵概念であり，“ある程度の時間的安定性・状況一貫性をもった，知覚された幸福（角野，1995a,b）”と定義される．

主観的ウェルビーイングの認知-判断的要素として挙げられてきた“人生に対する満足（life satisfaction）”は，専ら過去から現在にかけての人生の評価のみを扱ってきたのに対し，角野（1995a,b,1997,1998）は，過去－現在－未来にわたる人生の主観的評価を“人生に対する肯定的評価”という，主観的ウェルビーイングの新たな下位概念としてとらえ直した．そして，大学生・成人を被験者とした研究を行って尺度構成を図り，この尺度が一因子構造をなし，一定水準の信頼性・妥当性をもつことを示した．その後，この尺度を用いて中学生・高校生・大学生を対象に多面的な研究を実施し，本学会を中心に一連の報告を行ってきた（角野,2000a,2000b,2001a,2001b,2002,2003,2004,2005,2006,2007,2008）．

今回の報告では，大学生を対象に行った研究に基づき，信頼感・孤独感・楽観性・絶望感との相関関係から，人生に対する肯定的評価尺度の有用性・妥当性に更なる検討を加えることを目的とする．

＝ 方法 ＝

被験者　大学1年生176名（男性51名，女性125名）

質問紙

- 人生に対する肯定的評価尺度（角野,1995a,b,1997）
- 信頼感尺度（天貝，1995）
- 改訂版UCLA孤独感尺度日本語版（工藤・西川，1983）
- 改訂版楽観性尺度（LOT-R）（坂本・田中，2002）
- ベック絶望感尺度（Tanaka et al., 1998）

＝ 結果と考察 ＝

人生に対する肯定的評価尺度と諸尺度との相関を、Table 1に示した。この結果について、以下に検討を加える。

1．信頼感

信頼感尺度は、人や自分自身を安心して信じ、頼ることができるという気持ちである信頼感を測定する。「不信」「自分への信頼」「他人への信頼」の3因子構造で、3つの下位尺度得点と、信頼感全体得点が算出される。

人生に対する肯定的評価尺度は、信頼感尺度の全体得点・下位尺度得点のいずれとも有意な相関を示したが、偏相関係数を算出したところ、自分への信頼が.375、他人への信頼は.196となり、不信は無相関であった。適応的な特質や自尊心・自我同一性との関連も指摘される信頼感との間に中程度の正の相関が得られたこと、中でも自分への信頼との間に高い相関が得られたことは、人生に対する肯定的評価尺度が測定を目指すものと理論的に合致している。

2．孤独感

人生に対する肯定的評価尺度と改訂版UCLA孤独感尺度日本語版との間には、-.393の中程度の負の相関が得られた。対人関係は、主観的ウェルビーイングを規定する重要な要素とされており、この相関は妥当なものと言えよう。

3．楽観性

人生に対する肯定的評価尺度と改訂版楽観性尺度（LOT-R）との間の相関は、.487であった。楽観性は、精神的・身体的健康と関連することが多くの研究でも示されており、人生に対する肯定的評価尺度の妥当性を裏づける結果と言える。

4．絶望感

将来への否定的な期待と定義される絶望感との間に、-.689という、今回扱った他の尺度との相関よりも高い値が得られたことは、過去・現在のみならず、未来にまでわたる人生の主観的評価を扱う、人生に対する肯定的評価尺度の妥当性を支持していると解釈できるものである。

Table 1　人生に対する肯定的評価尺度と諸尺度との相関

信頼感			
全体	不信	自分への信頼	他人への信頼
.435*** 1)	-.274***	.469***	.391***
	(-.036) 2)	(.375***)	(.196**)
孤独感		楽観性	絶望感
	-.393***	.487***	-.689***

注：　1)　**$p<.01$　　***$p<.001$

2)　カッコ内の数値は、他の2つの下位尺度得点の影響を排した偏相関係数。

＝ 文献 ＝

天貝由美子　1995　高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響　教育心理学研究, 43, 364-371

工藤力・西川正之　1983　孤独感に関する研究(Ⅰ)；孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討　実験社会心理学研究, 22, 99-108.

坂本真士・田中江里子　2002　改訂版楽観性尺度(the revised Life Orientation Test)の日本語版の検討　健康心理学研究, 15, 59-63.

Tanaka, E., Sakamoto, S., Ono, Y., Fujihara, S., & Kitamura, T.　1998　Hopelessness in a community population: Factorial structure and psychosocial correlates. *Journal of Social Psychology*, 138, 581-590.

＝ 過去の関連発表 ＝

角野善司　1995a　教心第37回総会発表論文集，95.
角野善司　1995b　日心第59回大会発表論文集，23.
角野善司　1997　日心第61回大会発表論文集，83.
角野善司　1998　応心第65回大会発表論文集，149.
角野善司　2000a　日心第64回大会発表論文集，1087.
角野善司　2000b　応心第67回大会発表論文集，92.
角野善司　2001a　帝京大学文学部紀要(心理学)，6，67-81.
角野善司　2001b　応心第68回大会発表論文集，98.
角野善司　2002　応心第69回大会発表論文集，130.
角野善司　2003　応心第70回大会発表論文集，43.
角野善司　2004　応心第71回大会発表論文集，17.
角野善司　2005　応心第72回大会発表論文集，30.
角野善司　2006　応心第73回大会発表論文集，85.
角野善司　2007　応心第74回大会発表論文集，97.
角野善司　2008　応心第75回大会発表論文集，124.

（すみの　ぜんじ）

介護実習生における実習前後の抑うつ度の変化

—SDS と DAS を用いて—

○西澤　和佳[1)]　美濃　哲郎[2)]
([1)] 帝塚山大学大学院人文学研究科　[2)]関西福祉科学大学)

キーワード：介護実習生，抑うつ，ストレス脆弱性モデル

【研究の目的】近年介護職員の不足や離職が問題とされ、社会福祉の中核を担う介護職員の育成は重要事項である。厚生労働省は質の高い人材を安定して確保することが喫緊の課題であるとしている。介護福祉士養成課程はまさに人材育成の場であるが、岩田ら（2007）は介護福祉士の資格取得を目指し、専門職を希望して入学してきた学生が、次第に福祉職への就業を躊躇するようになると指摘しており、中でも「実習」が福祉職志望の気持ちに影響を与えていることを明らかにしている。就業後に介護職を継続する意識が低下するという研究結果も報告されている（木田ら,2007)。

山本ら（2007）は臨地実習前の看護実習生の抑うつ症状を測定した結果、実習前の看護学生の平均得点が一般的な学生の平均得点と比較して有意に高いことを示している。山本らが基づいた理論は、ストレス脆弱性理論である。ストレス脆弱性理論は､慢性的にストレスに対して脆弱性を有する場合、ストレスの負荷によって不適応状態になるという理論である。作業療法養成校の実習生を対象とした研究においても、実習中の学生の抑うつ感が強いことが示されている（立石ら,2006)。

しかし介護実習生を対象とした研究で、抑うつに着目した研究は少ない。そこで、本研究では介護実習生の抑うつに焦点を当てる。実習前後の変化を測定するため、実習前と実習後の２度質問紙調査を実施する。調査では、実習生の抑うつ素因を測定するために非機能的態度尺度 Dysfunctional Attitude Scale（以下 DAS）を使用し、実習前後の抑うつ症状の比較のために実習前と実習後に自己評価式抑うつ性尺度 Self-rating Depression Scale（以下 SDS）を使用する。

【仮説】仮説は以下の３つである。仮説１として実習の影響が抑うつ症状として表れるならば実習後の SDS 得点は実習前の SDS 得点と比較して有意に高くなることが考えられる。仮説２として、DAS 得点が高い実習生と DAS 得点が低い実習生の SDS 得点の変化の程度には差が認められると考えられる。仮説３として、DAS 得点と SDS 得点の実習後の得点から実習前の得点を引いた得点とは相関関係があると考えられる。

【方法】調査協力者はＡ医療系専門学校の介護福祉学科２年生 17 名（男性５名、女性 12 名）であった。調査協力者の平均年齢は 20.1 歳（SD±2.3）であった。実習前の調査を平成 20 年５月 29 日に実施し、当日欠席していた１名は平成 20 年６月２日に実施した。実習後の調査は平成 20 年９月５日に実施した。質問紙は実習前に DAS（項目数 12）と SDS（項目数 20）を実施し、実習後に SDS を実施した。分析には SPSS13.0J for Windows Student Version を使用した。

【結果】実習前と実習後の SDS 得点に繰り返しの t 検定を実施した結果、有意差は認められなかった（$t(16)=, n, s.$)。ノンパラメトリック検定のウィルコクソン検定を実施したが、有意差は認められなかった。DAS 得点の高群と低群に分けるため中央値を算出し、中央値 31 点以下を低群(n=9)、32 点以上を高群(n=8)とした。実習前後の SDS 得点の変化は、実習後の SDS 得点から実習前の SDS 得点を引いた数値（以下 SDS（後－前）得点）とした。SDS（後－前）得点を DAS 高群と低群で Mann-Whitney の U 検定を実施した結果、有意差が認められた(U=15,n=8,9,p<.05)。DAS 得点と SDS（後－前）得点との相関関係については、Speaman の相関係数を実施した。結果として、負の相関関係が認められた（Rs=－.507, p<.05)。すなわち、DAS 得点が高いほど SDS 得点の変化が少なく、本来的に SDS 得点が高い状態であると考えられる。

Table1　DAS 得点の高群と低郡における SDS 得点

	DAS 高群	DAS 低群
DAS 平均	41.5	28.6
SDS（後－前）	1.8	-3.4

【考察】介護実習生の抑うつ症状は実習前後で有意な差は認められず、仮説１は支持されなかった。仮説２の結果については、DAS 得点高群の SDS（後－前）得点が低群と比較して有意に高かったことからストレス脆弱性理論を支持する結果であったと考えられる。一方 DAS 低群の SDS 得点では、実習後の SDS 得点が低下していた。実習後の調査が夏期休暇後であったことから、DAS 得点低群と高群では実習後の過ごし方や、実習のとらえ方に違いがあると考えられる。この点については今後、自由記述やインタビュー調査による質的研究によって検証していくことを課題とする。仮説３の結果については、負の相関によって DAS 得点の高群が SDS 得点の変化が少ないということが認められた。

本研究においては介護実習生を対象として調査を行ったが、今後は介護実習生に限らず社会福祉実習生や看護実習生など隣接分野の実習生との比較が必要であると考えられる。他分野の実習生との比較によって、介護実習生における実習の影響の特徴を探索的に研究することを今後の課題とする。また、仮説３の結果から DAS 得点が高いことで SDS 得点が実習前から高くなっている慢性的な状態であるのかについての検証も今後の課題とする。

【引用文献】

岩田裕美ら 2007 –福祉系短期大学生の福祉職志望意識の変化に影響を及ぼす要因の検討－　第１報　つくば国際短期大学紀要　Vol.35　81-89.

上田智子 2005 －介護学生のリアリティショックの様相－　岡崎短期大学研究紀要 38 号　35-43.

木田文子ら 2006　学生の介護意識の変化—実習経験を通して—　静岡福祉大学紀要　第２号　59-65.

山本明弘ら 2007 —臨地実習直前における看護学生の精神的健康　日本語版 Self-rating Depression Scale を用いた検討—　和歌山県立医科大学保健看護学部紀要　第３巻　51-56.

（にしざわ　わか・みの　てつろう）

昭和期戦前の禅心理学研究の対象とアプローチ

加藤 博己
(駒澤大学文学部)
キーワード：禅心理学、対象とアプローチ、昭和期戦前

【研究の目的】 加藤（2009）の大正期の研究に引き続き，昭和期戦前の禅心理学研究が，禅のどの部分を対象とし，どのようなアプローチを用いたのかを調べることを目的とした。

【方法】 **対象**：加藤（2002，2003）の調べによる，昭和期戦前（1926-1945）における禅心理学研究に関する文献（図書，論文），計18件。

手続：対象となる文献の研究における「目的，方法，結果」に該当する部分を明確にし，研究対象とアプローチを調べた。次に，加藤（2004）による「禅の分類」，並びに「禅へのアプローチ」の分類表を簡略化して1つの表とし，対象となる研究が，表のどの部分に該当するかを検討した。

【結果】 18件中，入手可能な13件の文献を調べた結果，以下のようになった。なお，記載なき項目は省略した。

1.黒田（1933）勘の研究．**目的と方法**：『伝心法要』『臨済録』について勘の立場と照応し叙べた。**結果**：『伝心法要』にいう禅の心は，不生不滅の本体で内証可能。無心に深浅の別なく，さらに証すべきものなく，実に所得なし。時間の超越に解脱あり。『臨済録』にいう無事とは求めず平常心を証すること。主観も客観も働かない状態が禅に特有な立場。

2.安宅（1934）禅の心理．**目的**：1.道の意味，2.悟道の心理的過程，3.悟道の心理的意義を明確にすること。**結果**：1.道とは万物がそれによって存在する本体の心。禅では，“心即ち純粋主観”の意。2.根本的なるものが，彼の純粋主観に相当すると解すると，道を悟ったこととなる。3.“純粋主観に安住するものは，唯ありのままの心”で，“適応性の最良に発揮せられる状態にある”。

3.黒田（1935）禅の社会心理学的考察．**方法**：卑見を叙べた。**結果**：従来の研究が体験を欠くことや，心理学的研究が禅道者に阻害されることに言及し，禅に於ける最も特色ある実践は，禅院の生活そのもの“毎日の雑務”にある。公案で一様に律せず，求道者の機に合わせることを提案。

4.今長谷（1936）六祖大師の「心理学」．**目的と方法**：壇経中の六祖所説の心や立場とその方法を，絶対反省法により考察した。**結果**：悟による直接的理解を説いた。

5.田中（1936）禅学療法．**目的**：**方法**：“将来医薬を用いず，病因を根本的に治し得る方法の可能性を禅に求めた。**結果**：肉の往来に大悟せば，本面目を解する人となる。

6.黒田（1937）禅の心理学．**目的**：禅を民衆の共有財産とするには。**結果**：「悟り」の本態の追求が禅の心理学の任務。「禅の心理学的研究法」では，文献・質問紙的研究と，実験的研究の2種があるとした上で，入谷（初の質問紙研究）と（初の実験的研究）大塚（初の実験的研究）の研究に言及した。禅心理学問題の中核である「禅体験の内面的方面」について，井上，鈴木，入谷，近重，安宅の説を比較した。事物自体や仕事そのものを端的に直指することが，悟り，見性である。禅林において最も意義あるのは，そこに行われる厳格な禅的日常生活である。

7.佐久間（1937）黙照体験の意義．**結果**：黙坐の目的は，解脱涅槃という体験の事実である。黙照体験は，万人の到達可能な境地で，坐禅儀に書かれた発生条件と，その心的機能を明らかにする。外的（環境）条件を均一に保ち，身体的条件（調身・調息）と，心的方面（調心：心意識の運転を停め，念想観の測量を止める=刺激抜き）。今後課題：「止」と「観」，「定」と「慧」を機能的・心理力学的に解明。

8.鈴木（1937）禅と念仏の心理学的基礎．**結果**：公案制度発生前における悟の心理的先行条件-実例数項や，心理的先行条件と禅経験の内容について述べた。

9.黒田（1938）続勘の研究．**結果**：黒田（1933）についての今長谷，山口の意見に対する批判。

10.上野（1938）坐の生理心理的研究．**目的・方法**：なぜ，坐により無上菩提が得られるかを物理・生理・心理的に解明。**結果**：「心」，「命」，「力」の3つが同根で，自分が万物と同根との体験を得るために坐る。坐の物理（調身：姿勢を正し），生理（調息：呼吸を整え），心理（調心：精神を統一）により，脳脊髄の中枢神経系の司る意識活動を停止し，自律神経系の活動を促し，非思量となる。

11.秋重（1941）正法眼蔵随聞記考．**目的・方法**：随聞記を仔細検討し解決の曙光を見出す。**結果**：1-3巻と4-6巻との書出しの構造に相違あり。99回の慈誨を同一内容で集め，7個の主要項目，細分して11項目とした。吾我の為に仏法を学ばず，無常を観じて吾我を離れるのが第一の用心で，因果・善悪応報を知り，無所得無所求となり，99の慈誨に従えば，真理に到達する。

12.鈴木（1941）禅への道．**結果**：黒田（1938）への反論。ユングの禅観の肯定と神秘主義との一致。

13.黒田（1941）禅の心理．**目的**：生死の問題解決の一方法である達磨禅（初祖-六祖）の心理学的意義の科学的探究。**結果**：最も深き理解は直指（識＋覚）であり，最高次の覚は禅の第一義（人心を直指）に相当。

『信心銘』では，揀擇（取捨・物の差別相に執着すること）の相を離れれば至道を証する。

Table1 戦前における禅心理学研究の対象とアプローチ

	アプローチ	一人称		二人称	三人称
		考察	体験	解釈	質問紙/実験
対象	悟り			黒田（1933,1937,1938,1941),安宅(1934),今長谷(1936),田中(1936),佐久間(1937),鈴木(1937),上野(1938),秋重(1941),鈴木(1941)	
	生活			黒田(1935)	

※黒田1937には，大塚の実験研究（未刊）が紹介されているが，三人称的アプローチには数えないものとした。

Table1は，禅のどの部分を対象としたのかということと，研究アプローチを示したものである。戦前の禅心理学のアプローチは，元良の参禅体験や入谷の質問紙法の追試は行われず，もっぱら悟道の目的，内容，要件，方法，過程について，文献等の解釈という方法により行われた。

【考察】 その理由は，禅者の批判に耐え得る量的・質的体験が得られないことや，入谷の調査＋面接，文献，観察研究が秀逸であったからであると思われる。 （かとう ひろき）

ペット飼育と孤独感の類型との関係

― ペットへの好意・愛着の観点から―

芦村　和美
（帝塚山大学大学院人文科学研究科）

キーワード　：　ペット，孤独感類型，好意，愛着

【目的】

ペット飼育と孤独感の関係について，ペット飼育者は，孤独感が高い（金児 2006）とするものや，孤独感が低い（金子 2003）とするものがある。また，最近の研究では，ペットへの好意度（大久保 2004）や愛着の高さ（横山 1996）も関係しているといわれている。

そこで今回の研究では，飼育経験，ペットへの好意度や愛着を加味した上で孤独感との関係を検討することにした。ただし，孤独感については正負いずれの相関もあるため，孤独感の類型（表 1）を用いて，孤独感の構造とペット飼育の関係を検討することを目的とする。

ちなみに，孤独感類型はA～D型の４つのタイプに分かれ，青年期の孤独感の構造を捉えるには適しているといわれている。A 型は自己の個別性に気付いており，他者と理解共感できると感じているため，情緒的・依存的融合状態の中にいて，孤独感を感じていない型である。一方，B 型，C 型，D 型は孤独感を感じるタイプであるが孤独感の感じ方がタイプごとに異なる。B 型は自分を理解してくれるものは居ないと思い込み，時にそのような存在が現れても，些細なことで裏切られたと感じるため常に孤独感を感じるタイプである。C 型は他人と離絶しており，自分を理解してくれる人を求めることは，不可能であって無駄だとあきらめ人間不信になった者の孤独感である。最後にD型は独自性に気付いていながらも人間同士は共感を持てるとわかっており，その矛盾に孤独感を感じ，言い換えるなら成熟した孤独感の持ち主とも言える（落合 1974）。

表1　孤独感類型

		自己の個別性に気づいている	
		気づいていない	気づいている
他者と理解・共感できると思っている	できると思っている	A型	D型
	できないと思っている	B型	C型

【方法】

調査対象者：大学生 283 人に行った。そのうち有効回答数は 236 人であり，その中でペット飼育経験者は 174 人，未経験者 62 人である。

質問紙：孤独感類型判別尺度（落合，1983），ペット尺度（諸井，1984），飼い主感情尺度（大久保，2004）を用い，同時にペット経験の有無について尋ねた。

尺度構成を検討するために因子分析を行った結果，ペット尺度は，「愛好」「親和性」「保護」の 3 因子を，飼い主感情尺度は「愛情」「充実」「責任」の 3 因子を採用した。

分析方法：1)ペットの飼育経験の有無と孤独感類型の人数の差の検定（χ^2検定）を行った。２）ペットの飼育経験の有無においてそれぞれ孤独感類型におけるペットの好意度の差の検定（一要因分散分析）を行った。

３）ペット飼育者のみに孤独感類型におけるペットへの愛着の差の検定（一要因分散分析）を行った。

【結果】

１）ペット飼育経験の有無と孤独感の類型の人数に，有意な差はみられなかった。２）ペットの好意度と孤独感類型の関係を検討した結果，ペット飼育者，非飼育者とも類型ごとの好意度に有意な差はみられなかった。３）ペットへの愛着と孤独感類型への影響を検討した結果，愛情($F(2,169)=3.30$, $p<.05$)，充実($F(2,169)=4.84$ $p<.01$)，責任($F(2,169)=3.64$, $p<.05$) で有意差があり，多重比較の結果 A 型のみペットへの愛情，充実，責任が 5%水準で有意に高かった。

【考察】

ペットの飼育の有無とペットへの好意度は孤独感の類型と関係がないことが分かった。その一方でペット飼育と孤独感の類型に関しては，A 型が最もペットへの愛着が強かった。

このことから，今までの研究で孤独感とペットの関係が統一されない原因として，ペットへの愛着を考慮していなかったことを示唆すると同時に，ペットへの愛着が強いほど個別性に気付いておらず他者と共感できるという A 型が多くなると示唆される。A 型は孤独感を感じにくいタイプであるが，情緒的・依存的融合状態にいることが前提となっており，ペットの存在がその役割を果たしている可能性が示唆される。つまり，A 型の人がペットへの愛着が高い原因は情緒的な安心を得るために，ペットを必要としているからであろう。

孤独感類型が A 型の人は，ペットの存在が孤独感を感じなさせないようにするという点で有効に作用するとも言えるため，孤独感の減少にペット飼育が効果的であるという可能性をもっている。

【引用・参考文献】

諸井克英 1984 孤独感とペットに対する態度 実験心理学研究 24 93-103
金児恵 2006 コンパニオン・アニマルが飼い主の主観的幸福感と社会的ネットワークに与える影響 心理学研究 77 1-9
大久保純一郎 2004 ペット動物が家族の心身の健康に及ぼす影響　ペット動物に対する関係性・態度・感情の分析 日本健康心理学会第 14 回
金子智栄子・村上綾美 2003 ペットが及ぼす心理的効果 飼育経験の有無による検討 文京学院大学研究紀要 5 85-93
横山章光 1996 NHK ブックス アニマル・セラピーとは何か 日本放送出版協会
落合良行 1978 現代青年における孤独感の構造/教育心理学研究 22 162-169

謝辞

本研究は，発表者が久留米大学文学部心理学科に卒業論文として提出したものを修正したものである。本研究にあたり，ご指導いただいた久留米大学日高三喜夫先生に深く感謝いたします。

（あしむら　かずみ）

イルカ映像によるストレス減少効果

― 心理指標と生理指標を用いて ―

○平田　小百合[1)]　宮川　治樹[1,2)]
([1)] 帝塚山大学大学院人文研究科臨床社会心理学専攻　[2)]帝塚山大学心理福祉学部)

キーワード：イルカ介在活動、ストレス、映像

【研究の目的】 近年、イルカ介在活動は数々の施設や団体で実施されると同時に、イルカ介在による心理的・心療的効果を科学的に証明しようとする研究は増加している。うつ病患者のうつ症状を改善させる（Antonioli C, Reveley MA; 2005）といった発表などがそれに当たるだろう。しかしながら、イルカ介在活動には多くの刺激要素が関与し、かつ全てを実験的に統制し効果的な要素を明らかにするのは困難であると考えられる。そこで本研究は、イルカ介在活動において参加者が基本的に体験する「イルカを見る」という要因（イルカの映像）とそれに付随する音（波の音）によるストレス減少効果について検討することにした。また、これら要因によるストレス減少効果と被験者のイルカに対する好意や接触経験との関係も検討した。

【方法】

対象　実験は帝塚山大学の学生 31 名,M＝21.6 歳 (20~24)を対象に、2008 年 10 月 28 日~11 月 19 日の期間に実施した。

指標　ストレス度を評価するため、心理指標としてリラックス尺度(11 段階評価×4 項目：根建・上里, 1984)の評定尺度を 10 段階評価に一部修正したもの（高橋, 1994)を用いた。項目は、「気分が高ぶっている―のんびりしている」「体に力が入っている―体の力が抜けている」「不安である―安心している」「束縛的な気分である―解放的な気分である」で、評価得点が高いほど主観的に高いリラックス状態であることを表している。生理指標としては唾液アミラーゼ活性値・脈拍・血圧(平均血圧）を用いた。なお、唾液アミラーゼ活性値は酵素分析装置（唾液アミラーゼモニター/NIPRO)、血圧と脈拍数は OMRON デジタル自動血圧計　(Model No. HEM-1000／測定方式：オシロメトリック法)を用いて測定した。

刺激　イルカの映像(以下、刺激 D)はドルフィンズ・パシフィックで飼育されているイルカ（1~2 頭）が泳いでいる写真、海の映像(以下､刺激 S)はドルフィンズ・パシフィックの施設、あるいはパラオの海の写真をスライドショー形式にしたものであった。写真はそれぞれ 48 枚で、1 枚につき 5 秒間の計 4 分間であり、刺激映像提示中は外からの音を遮断するため、波の音も流した。刺激映像を映写する装置はプロジェクター（EPSON LCD POJECTER Model No. EMP-1700）を用い、縦 180×横 210 ㎝のスクリーン上に、縦 86×横 110 ㎝の大きさで映写した。その際部屋の電気は消し、プロジェクターの光のみにした。

調査用紙　被験者のイルカに対する好意度と、イルカとの関わりの経験内容(接触経験の有無)を問う調査用紙を作成し、これを用いた。イルカに対する好意度は 1~100 の点数で回答を求め、経験内容はイルカを実際に①見た、②触った,③イルカと一緒に泳いだ経験の有無について＜はい＞もしくは＜いいえ＞のどちらかで答えさせた。

手続き　刺激 D と刺激 S を 1 週間間隔で提示し,被験者 1 人ひとりに個室（縦 260×横 460×高さ 258 ㎝）で椅子に座った状態で見てもらった。時間帯は 11:30~18:00 の間で 1 人の被験者につき 30 分間であった。被験者が部屋に入り、椅子に着席している状態で教示を行った後、刺激映像を提示した。指標は刺激映像提示前後に測定し、刺激Dを提示した回のみ、刺激提示後の指標測定が終わった後に調査用紙に記入を求めた。

分析方法　①被験者全体を対象とした群、②イルカ好意度得点の高い群およびイルカ好意度得点の低い群、③接触経験あり群、接触経験なし群のそれぞれにおいて分析した。なお、イルカに対する好意度得点においては、平均(70.4)よりも高いか低いかで被験者を振り分けた。また、接触経験は調査用紙の①「見た」のみに＜はい＞と回答した被験者を接触経験なし群、残りを接触経験あり群とした。

統計的検定は、それぞれの指標において刺激提示前と刺激提示後で得られた平均の差を算出し t 検定を行った。なお有意水準は 5%とした。

【結果】 唾液アミラーゼ活性値・脈拍・血圧（平均血圧）からなる生理指標においての変化値は、どの群においても刺激間で有意な差はみられなかった。しかし、リラックス尺度による心理指標の評価得点は、どの群においても刺激 D、刺激 S 共に提示後増加しており、さらに、イルカ好意度得点の高い群における「体の力が抜けている」の 1 項目,接触経験あり群における「体の力が抜けている」、「安心している」の 2 項目で、刺激間の増加の差が有意であった。(図 1、図 2)。

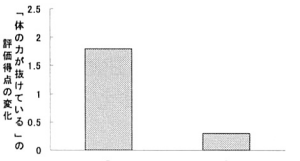


図 1. イルカ好意度得点の高い群

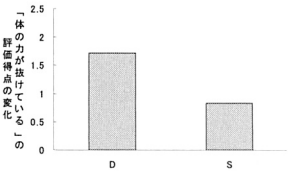


図 2. 接触経験あり群

【考察】　本実験では、刺激間における生理指標での有意な減少の差はみられなかったので、イルカの映像を見ることと海の映像を見ることに、生理的に変化が出るほど大きな効果はなかったと考えられる。しかし、心理指標においてはイルカに対する好意度が高い群とイルカとの接触経験あり群において､評価得点の値が刺激 D 提示時の方が刺激 S 提示時よりも有意に増加したことから、イルカに対してポジティブな感情を持つ被験者に対して、イルカ映像は海映像よりもリラックス促進効果が高かったといえる。このことはイルカ介在活動の効果を推測する際にもあてはまると考えられるので、イルカ介在活動の参加者がイルカに対して興味を持っていたり、すでにイルカが好きな動物であった場合、その効果はより大きくなると期待できそうである。また、どの群においてもイルカ映像の提示によってリラックス評価得点が増加していたことから、本実験では明らかにすることはできなかったが、イルカ映像はイルカを好む人のみならず、その他の人にもリラックス効果がある可能性も推測できる。

【引用文献】 Antonioli C, Reveley MA　2005　Randomised controlled trial of animal facilitated therapy with dolphins in the treatment of depression. BMJ;331:1231-4 (26 November).

（ひらた　さゆり・みやかわ　はるき）

索　　引

人名索引

ア
赤川　力 33
赤嶺　直子 99
秋山　学＃ 105
芦村　和美 125
安達　悠子 28
足達　淑子＃ 2
荒毛　将史＃ 41
安藤　詳子 8

イ
飯田　穎男 29, 30
飯田　敏晴 57, 86, 101
伊賀　憲子 104
池口　惠觀＃ 1
伊坂　裕子 11
石岡　綾香 64
伊藤　武彦 32, 38, 57, 86, 102
伊藤　典幸 51
伊波　和恵 9
井上　枝一郎 53, 92
井上　孝代 5, 11, 15, 38, 57, 99, 100, 101, 102, 116, 117
岩城　達也＃ 9
岩崎　祥一 65

ウ
上田　真由子 34
植田　有香 10
浮谷　秀一 11, 68, 69, 70
臼井　伸之介 23, 24, 28, 34, 95

エ
遠藤　嵩仁 116

オ
尾入　正哲 54
大貴　絵莉 112
大久保　純一郎＃ 74
太田　博雄 26
大村　政男 11, 13, 68, 69, 70
大柳　昭裕＃ 93
岡村　和子 52
岡村　一成 11, 90
小川　隆章 56
小川　由希子 118
荻野　七重 58, 59, 60, 96
奥井　良子 46
奥村　隆志 51, 53, 92
小澤　弘希 91
落合　信寿 51, 53, 92
小野　洋平 64
小畑　周介 25
折原　茂樹 111

カ
柿本　敏克 27
加藤　博己 124
金子　潤 42
金山　正子 5
鹿野　麗子 37
上岡　美紀 118
神澤　創 114
神谷　恵利子 94
蒲生　澄美子 88
川合　悟 84
川口　智子 48
川浪　淑子 22
川俣　幸一 61
川本　利恵子 1, 5

キ
北風　菜穂子 12, 38
金　成恩 58, 59, 60, 96
木村　貴彦＃ 21
木村　たき子 81
木村　友昭 9
桐生　正幸 106
Kirchhoff, Gerd Ferdinand＃ 42

ク
久保田　敏裕＃ 21
久米　稔 104

コ
小菅　律 52
越河　六郎 87, 93
事崎　由佳 107
小西　浩嗣 10
権藤　恭之＃ 17
今野　葉月＃ 88

サ
斉藤　勇 11, 58, 59, 60, 96
榊原　佐和子 12
先間　真奈美 113
櫻井　美由紀 65
桜井　裕子 62
桜井　良之 114
佐藤　恵美 109, 110
佐野　薫＃ 88
澤田　幸嗣 10
澤田　正康 39

シ
施　桂栄 51, 53, 92
篠原　一光 21
柴田　美貴 118
嶋田　佳織 82
白井　清太郎 111
新小田　春美 5

ス
菅原　博嗣 43
杉山　里美 118
鈴木　悠介 115
鈴木　ゆみ 12, 100
角野　善司 122

セ
関　陽子 40
関口　恵子 88

關戸　啓子 47
タ 大坊　郁夫 11, 15
高田　誠己 37
高野　隆一 104
多久島　寛孝 7
竹内　宣江 118
竹内　由則 41
武市　尚大 34
田崎　雅子 118
田中　真介 5, 15
田中　道弘 66
谷口　淳一 97
谷口　泰富 15, 64
田之内　厚三 14
玉井　寛 9, 39, 62
チ 近岡　恵子 39
樗木　晶子＃ 2
ツ 津田　葵 42
テ 寺澤　美彦 104
ト 銅直　優子 67
徳安　秀正 29, 30
所　正文 15
所　ミヨ子 88
豊村　和真 31
ナ 内藤　哲雄 98, 112
内藤　美智子 104
中　淑子 19
中井　宏 23
中尾　久子 8
長尾　史英 61
中川　拓也 36
長坂　晟 32
中地　展生 35
中島　たけし 29, 30
中田　栄 77
長塚　康弘 20
中野　真希 102
中村　歩 75
成田　猛 104
ニ 西澤　和佳 123
西田　公昭 105
西土　泉 88
西野　昌美＃ 10
ヌ 布川　清彦 103
ハ 橋本　泰子 71
橋本　昇 29, 30
橋本　秀美 79
長谷　綾子＃ 78
蜂屋　真 50
八田　純子 73
八田　武俊 73
八田　ほなみ 121
花尾　由香里 90
濱　保久 49
林　潔 80
林　幹也＃ 78
林田　りか 19
ヒ 彦野　賢＃ 51
平田　小百合 126
平田　裕美 118, 119
フ 深堀　美紀子＃ 89
福本　敏宏 74
藤井　亀 87
藤掛　和広 51, 53, 92
藤田　悟郎 52
藤田　主一 11, 13, 15, 29, 30, 68, 69, 70, 115
藤森　立男 14
淵上　恭江 118
ホ 法理　樹里 108
星　薫 93
細田　聡 51, 53, 92
細野　文雄＃ 27
本多　明生 63
マ 政本　香 78
松下　由美子 8
松田　浩平 109, 110
松田　睦代 106
松永　保子 7
松原　詩緒 55
松本　洸 9
松本　友一郎 95
ミ 三浦　公一 39, 62
三島　浩路 72, 79
三島　重顕 83
三井　利幸 43
美濃　哲郎 123
宮川　治樹 126
宮﨑　素子 88
宮島　直子 45
ム 向井　希広 26
村田　晋也 85
モ 森泉　慎吾 24
森岡　尚夫＃ 9
森下　高治 25, 36, 37, 48
森田　敏子 7
森本　克彦＃ 21
森脇　保彦 29, 30
ヤ 安原　久美子 120
山岡　淳 9
山崎　創 117
山下　富美代＃ 108
山田　健太＃ 108
山田　智世 118
山田　竜平 58, 59, 60, 96
山入端　津由 63
山村　豊＃ 108
山本　勝則 89

山本　茉樹　101
ヨ
横道　友理子　118
横山　泉　62
吉田　一子　89
米村　敬子　18
余村　朋樹　51, 53, 92
レ
蓮花　一己　26, 91
蓮花　のぞみ　17
ワ
若原　克文　43
和田　美知子　76

—日本応用心理学会第76回大会準備委員会—

大会準備委員長・大会長	川本　利恵子	（九州大学大学院医学研究院臨床看護学分野）
事務局長	中尾　久子	（九州大学大学院医学研究院臨床看護学分野）
実行委員	樗木　晶子	（九州大学大学院医学研究院臨床看護学分野）
	中尾　富士子	（九州大学大学院医学研究院臨床看護学分野）
	宮園　真美	（九州大学大学院医学研究院臨床看護学分野）
	木下 由美子	（九州大学大学院医学研究院臨床看護学分野）
	金岡　麻希	（九州大学大学院医学研究院臨床看護学分野）
	潮　みゆき	（九州大学大学院医学系学府保健学専攻）
	古野　貴臣	（九州大学大学院医学系学府保健学専攻）
企画運営委員	森田　敏子	（熊本大学医学部保健学科）
	山勢　博彰	（山口大学医学部保健学科）
	中畑　高子	（九州大学病院）
	金山　正子	（福岡大学医学部看護学科）
	川本　俊弘	（産業医科大学医学部衛生学）

（敬称略・順不同）

日本応用心理学会第76回大会発表論文集

発行日　2009年8月

発行者　日本応用心理学会第76回大会準備委員会
大会準備委員長　川本　利恵子

〒812-8582　福岡県福岡市東区馬出3－1－1
九州大学大学院医学研究院臨床看護学
tel 092-642-6738

印刷　株式会社　国際文献印刷社